

# 上沢遺跡発掘調査報告書 V

—第3・12・16・17・23・25・26・37・39・40・42・56・58・60～64次調査—

2019

神戸市教育委員会

# 上沢遺跡発掘調査報告書 V

—第3・12・16・17・23・25・26・37・39・40・42・56・58・60～64次調査—

2019

神戸市教育委員会



# 序

上沢遺跡は、神戸市兵庫区上沢通8丁目から長田区に広がる縄文時代から中世に及ぶ複合遺跡として知られています。

今回、阪神・淡路大震災以後の国庫補助事業に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査のうち、上沢通8丁目地区以外の成果について報告書を刊行することになりました。

この調査では、弥生時代の遺物、古墳時代の遺物や建物などが確認されました。また、奈良時代の二彩や瓦が出土し、北側に位置する室内遺跡との関連がうかがえるなど、この地域の歴史を知るうえで貴重な成果が得られました。

刊行にあたり、本書がこの地域の文化財保護と歴史をひも解く資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書刊行にあたりまして、ご協力いただきました事業主の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関に、心から感謝の意を表します。

平成31年3月

神戸市教育委員会

# 例 言

1. 本書は、上沢遺跡（兵庫区松本通8丁目地区・長田区五番町1丁目～3丁目・同六番町1丁目・同七番町）における国庫補助事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 各調査の担当者氏名・調査期間・調査面積等は、第1章第3節に記載した。
3. 発掘調査での遺構等の撮影は各調査担当者が行い、遺物写真撮影は内田真紀子（写房楠華堂）が行った。
4. 調査で出土した遺物および図面・写真等の記録類は神戸市埋蔵文化財センターで保管している。
5. 調査回数については、平成13年度に見直しをかけており、それ以前の調査は新回数での記載とした。したがって、既発行の「神戸市埋蔵文化財年報」等と異なる場合がある。調査時の旧回数と新回数の対照については、第1章第3節を参照されたい。
6. 本書に用いた座標は平面直角座標系第V系（世界測地系）である。調査当初は日本測地系であった座標については、Web版TKY2JGD Ver.1.3.80を用いて変換した。標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示している。
7. 調査地位置図は、国土地理院発行の25,000分の1「神戸首部」「神戸南部」、および神戸市発行2,500分の1の地形図「長田」「夢野」（平成22年）を使用した。
8. 遺物の断面の色は、須恵器・陶器・青磁を黒塗り、瓦器を20%・白磁を70%のグレートーン、その他を白抜きにより区別を行っている。
9. 本書の調査にかかる部分の執筆は各調査担当者が行い、遺物実測の一部は各調査担当者及び田島靖大が行った。その他の執筆・加筆・修正・遺物実測および編集は佐伯二郎・山口英正・小野寺洋介が担当した。また、第3章は中村大介が担当した。
10. 発掘調査および報告書作成事業は、神戸市文化財保護審議会の指導の下、本文（第1章第4節）に記した組織で実施された。  
第3次調査・第16次調査の藤井整氏（京都府）、横田明氏（大阪府）、家塚英詞氏（鳥取県）には、阪神・淡路大震災の復興調査にかかる派遣職員として発掘調査を担当していただきました。3氏と支援いただきました派遣元の自治体に、記して感謝いたします。

# 目 次

## 例言

|      |                      |    |
|------|----------------------|----|
| 第1章  | はじめに                 | 1  |
| 第1節  | 地理的環境                | 1  |
| 第2節  | 歴史的環境                | 1  |
| 第3節  | 既往の調査成果              | 3  |
| 第4節  | 調査に至る経緯と経過           | 8  |
| 1.   | 調査に至る経緯              | 8  |
| 2.   | 阪神・淡路大震災と復興事業に伴う発掘調査 | 8  |
| 3.   | 発掘調査の経過              | 8  |
| 4.   | 調査体制                 | 9  |
| 第2章  | 発掘調査の成果              | 10 |
| 第1節  | 第3次調査                | 10 |
| 第2節  | 第12次調査               | 13 |
| 第3節  | 第16次調査               | 17 |
| 第4節  | 第17次調査               | 18 |
| 第5節  | 第23次調査               | 23 |
| 第6節  | 第25次調査               | 26 |
| 第7節  | 第26次調査               | 36 |
| 第8節  | 第37次調査               | 40 |
| 第9節  | 第39次調査               | 46 |
| 第10節 | 第40次調査               | 51 |
| 第11節 | 第42次調査               | 54 |
| 第12節 | 第56次調査               | 60 |
| 第13節 | 第58次調査               | 80 |
| 第14節 | 第60次調査               | 83 |
| 第15節 | 第61次調査               | 85 |
| 第16節 | 第62次調査               | 87 |
| 第17節 | 第63次調査               | 89 |
| 第18節 | 第64次調査               | 91 |
| 第3章  | 木製品                  | 95 |
| 第4章  | まとめ                  | 97 |

# 挿図・写真図版目次

## 図版

|      |                   |    |      |                                |    |
|------|-------------------|----|------|--------------------------------|----|
| 図 1  | 上沢遺跡と周辺の遺跡        | 2  | 図 46 | 第26次調査範囲図                      | 36 |
| 図 2  | 上沢遺跡調査地位置図        | 5  | 図 47 | 東・南壁断面図                        | 36 |
| 図 3  | 第3次調査範囲図          | 10 | 図 48 | 暗茶褐色シルト質礫細砂出土遺物実測図             | 36 |
| 図 4  | 南西壁断面図            | 10 | 図 49 | 遺構面平面図                         | 37 |
| 図 5  | 淡灰褐色細砂出土遺物実測図     | 11 | 図 50 | SB02平・断面図                      | 38 |
| 図 6  | 暗茶褐色粘質土出土遺物実測図    | 11 | 図 51 | 遺構断面図                          | 38 |
| 図 7  | その他の出土遺物実測図       | 12 | 図 52 | SK01・02出土遺物実測図                 | 39 |
| 図 8  | 調査地全景(東から)[写真]    | 12 | 図 53 | 第37次調査範囲図                      | 40 |
| 図 9  | 第12次調査範囲図         | 13 | 図 54 | 第1面検出中出土遺物実測図                  | 40 |
| 図 10 | 北東壁断面図            | 13 | 図 55 | I区東壁断面図                        | 41 |
| 図 11 | 第1遺構面平面図          | 14 | 図 56 | I区第1遺構面平面図                     | 42 |
| 図 12 | 第2遺構面平面図          | 14 | 図 57 | NR01断面図                        | 42 |
| 図 13 | SD01断面図           | 15 | 図 58 | 木樋出土状況平・断面図                    | 43 |
| 図 14 | 出土遺物実測図           | 16 | 図 59 | 木樋出土状況[写真]                     | 43 |
| 図 15 | 第16次調査範囲図         | 17 | 図 60 | I区第2遺構面平面図                     | 44 |
| 図 16 | 調査地全景(北西から)[写真]   | 17 | 図 61 | II区遺構面平面図                      | 45 |
| 図 17 | 南西壁断面図            | 17 | 図 62 | 出土遺物実測図                        | 45 |
| 図 18 | 出土遺物実測図           | 17 | 図 63 | 第39次調査範囲図                      | 46 |
| 図 19 | 第17次調査平面図         | 18 | 図 64 | 北東壁断面図                         | 46 |
| 図 20 | 南西壁断面図            | 19 | 図 65 | 第1遺構面平面図                       | 47 |
| 図 21 | 調査地全景(北西から)[写真]   | 19 | 図 66 | 第2遺構面平面図                       | 47 |
| 図 22 | 流路出土遺物実測図①        | 20 | 図 67 | 第1遺構面、SP02出土遺物実測図              | 48 |
| 図 23 | 流路出土遺物実測図②        | 21 | 図 68 | 第2遺構面、SK02～04、SP13、SX02出土遺物実測図 | 49 |
| 図 24 | 流路出土遺物実測図③        | 22 | 図 69 | 第3遺構面出土遺物実測図                   | 49 |
| 図 25 | 第23次調査範囲図         | 23 | 図 70 | 第3遺構面平面図                       | 50 |
| 図 26 | 南西壁断面図            | 23 | 図 71 | 出土縄文土器実測図                      | 50 |
| 図 27 | 第1遺構面平面図          | 24 | 図 72 | 第40次調査範囲図                      | 51 |
| 図 28 | 第2遺構面平面図          | 24 | 図 73 | 土層断面図                          | 51 |
| 図 29 | 灰色細砂出土遺物実測図       | 24 | 図 74 | 遺構面平面図                         | 52 |
| 図 30 | SB01平・断面図         | 25 | 図 75 | 暗褐色灰色砂質土出土遺物実測図                | 53 |
| 図 31 | 第2遺構面出土遺物実測図      | 25 | 図 76 | 第42次調査範囲図                      | 54 |
| 図 32 | 第25次調査範囲図         | 26 | 図 77 | 第1・2遺構面平面図                     | 54 |
| 図 33 | 東・南壁断面図           | 26 | 図 78 | 土層断面図                          | 55 |
| 図 34 | 表土～褐色灰色砂質土出土遺物実測図 | 26 | 図 79 | SB01柱穴断面図                      | 56 |
| 図 35 | 第1遺構面平面図          | 27 | 図 80 | SB01、NR01、黒色砂質粘土出土遺物実測図        | 57 |
| 図 36 | SD01出土遺物実測図       | 27 | 図 81 | 第2遺構面-2平面図                     | 57 |
| 図 37 | SD01平・断面図         | 28 | 図 82 | 第4遺構面平面図                       | 58 |
| 図 38 | 灰褐色粘性砂質土出土遺物実測図   | 28 | 図 83 | SX03出土遺物実測図                    | 59 |
| 図 39 | 第2遺構面平面図          | 29 | 図 84 | 第56次調査範囲図                      | 60 |
| 図 40 | SK01出土遺物実測図       | 29 | 図 85 | 第1遺構面平面図                       | 60 |
| 図 41 | 黒褐色砂質土出土遺物実測図①    | 31 | 図 86 | 北・東半西・南壁断面図                    | 61 |
| 図 42 | 黒褐色砂質土出土遺物実測図②    | 32 | 図 87 | 第1面遺構、灰色砂まじりシルト出土遺物実測図         | 62 |
| 図 43 | 第3遺構面平面図          | 33 | 図 88 | 第2遺構面平面図                       | 63 |
| 図 44 | SB01出土遺物実測図       | 34 | 図 89 | 黒褐色砂まじり粘土出土遺物実測図               | 64 |
| 図 45 | 第3遺構面土器群平面図       | 34 | 図 90 | 第3遺構面平面図                       | 66 |

|      |                   |    |      |                                |    |
|------|-------------------|----|------|--------------------------------|----|
| 図 91 | SB01平・断面図         | 67 | 図113 | 調査地全景(北西から)[写真]                | 82 |
| 図 92 | SB01出土遺物実測図       | 68 | 図114 | 第60次調査範囲図                      | 83 |
| 図 93 | SB02平・断面図         | 69 | 図115 | 北西・北東・南西壁断面図・遺構面平面図            | 83 |
| 図 94 | SB03平・断面図         | 70 | 図116 | 出土遺物実測図                        | 84 |
| 図 95 | SB04-06平・断面図      | 71 | 図117 | 北半全景(南東から)[写真]                 | 84 |
| 図 96 | SK15平・断面図         | 72 | 図118 | 南半全景(東から)[写真]                  | 84 |
| 図 97 | SD13平・断面図         | 73 | 図119 | 第61次～第64次調査範囲図                 | 85 |
| 図 98 | SD11・12・14平・断面図   | 73 | 図120 | 第61次調査Iトレンチ東・南、IIトレンチ東・南壁断面図   | 85 |
| 図 99 | 第3面遺構出土遺物実測図①     | 73 | 図121 | 第61次調査平面図                      | 86 |
| 図100 | 第3面遺構出土遺物実測図②     | 74 | 図122 | IIトレンチ全景(北西から)[写真]             | 86 |
| 図101 | 第4遺構面出土土鎮実測図      | 74 | 図123 | 第62次調査Iトレンチ南・西、IIトレンチ南・北壁断面図   | 87 |
| 図102 | 第4遺構面出土石器実測図      | 74 | 図124 | 第62次調査平面図                      | 88 |
| 図103 | 第4遺構面平面図          | 75 | 図125 | Iトレンチ溝(北から)[写真]                | 88 |
| 図104 | 出土瓦当実測図           | 75 | 図126 | Iトレンチ全景(南東から)[写真]              | 88 |
| 図105 | 出土瓦実測図①           | 77 | 図127 | 第63次調査IIトレンチ北・東、Iトレンチ北壁断面図     | 89 |
| 図106 | 出土瓦実測図②           | 78 | 図128 | 第63次調査平面図                      | 90 |
| 図107 | 出土瓦実測図③           | 79 | 図129 | Iトレンチ全景(南東から)[写真]              | 90 |
| 図108 | 第58次調査範囲図         | 80 | 図130 | IIトレンチ全景(南西から)[写真]             | 90 |
| 図109 | 東壁断面図・遺構面平面図      | 80 | 図131 | 第64次調査Iトレンチ断面図、II・IIIトレンチ平・断面図 | 91 |
| 図110 | 黒褐色礫まじり泥砂出土遺物実測図① | 81 | 図132 | 第64次調査平面図                      | 92 |
| 図111 | 黒褐色礫まじり泥砂出土遺物実測図② | 81 | 図133 | IIIトレンチ全景(北東から)[写真]            | 92 |
| 図112 | 黒褐色礫まじり泥砂出土遺物実測図③ | 82 | 図134 | 第37次調査出土木製品実測図                 | 96 |

表

|     |         |    |     |        |    |
|-----|---------|----|-----|--------|----|
| 表 1 | 既往の調査一覧 | 6  | 表 4 | 遺物法量表② | 94 |
| 表 2 | 調査体制一覧  | 9  | 表 5 | 遺物法量表③ | 94 |
| 表 3 | 遺物法量表①  | 93 |     |        |    |

カラー図版

カラー図版 1

1. 第58次調査 二彩多口壺
2. 第56次調査 瓦当

カラー図版 2

1. 第17次調査 出土土器集合写真
2. 第25次調査 出土土器集合写真

写真図版

写真図版 1

1. 第12次調査 第1遺構面全景(南東から)
2. 第12次調査 第2遺構面全景(南東から)

写真図版 2

1. 第23次調査 第1遺構面全景(北西から)
2. 第23次調査 第2遺構面全景(北西から)
3. 第23次調査 SP01断面(南西から)
4. 第23次調査 SP02断面(北西から)
5. 第23次調査 SP05断面(北西から)
6. 第23次調査 SP06断面(東から)

写真図版 3

1. 第25次調査 第1遺構面全景(北東から)
2. 第25次調査 第2遺構面全景(北東から)

写真図版 4

1. 第25次調査 第3遺構面全景(北東から)
2. 第25次調査 SB01・02(東から)
3. 第25次調査 第3遺構面出土土器群(南東から)

写真図版 5

1. 第26次調査 全景(北東から)
2. 第26次調査 SK01(東から)
3. 第26次調査 SP01断面(北西から)
4. 第26次調査 SP02断面(北西から)

写真図版 6

1. 第37次調査 第2遺構面全景(南東から)
2. 第37次調査 第3遺構面全景(南東から)

写真図版 7

1. 第37次調査 II区全景(北西から)
2. 第37次調査 NR01断面(北から)
3. 第37次調査 北東壁断面(北西から)

写真図版 8

1. 第39次調査 第1遺構面(南東から)
2. 第39次調査 第2遺構面(南東から)
3. 第39次調査 第3遺構面(南東から)

写真図版9

1. 第42次調査 SB01(南西から)
2. 第42次調査 第4遺構面(南西から)
3. 第42次調査 P3断面(南東から)
4. 第42次調査 P5断面(南東から)
5. 第42次調査 P6断面(南東から)
6. 第42次調査 P8断面(南東から)

写真図版10

1. 第56次調査 第1遺構面(南東から)
2. 第56次調査 SD14(西から)

写真図版11

1. 第56次調査 SD04断面(北西から)
2. 第56次調査 第2遺構面(南西から)

写真図版12

1. 第56次調査 SB01(南西から)
2. 第56次調査 SB02・03(南東から)
3. 第56次調査 南端柱穴(南西から)

写真図版13

1. 第56次調査 SB01-P1断面(南西から)
2. 第56次調査 SB01-P3断面(南西から)
3. 第56次調査 SB01-P10断面(南西から)
4. 第56次調査 SB02-P3断面(北東から)
5. 第56次調査 第4遺構面(南から)

写真図版14

第3次調査 淡灰褐色細砂出土土器

写真図版15

1. 第12次調査 第1遺構面出土土器
2. 第12次調査 遺構出土土器

写真図版16

1. 第12次調査 SK01出土土器
2. 第12次調査 SK02出土土器
3. 第16次調査 出土遺物

写真図版17

第17次調査 流路出土土器①

写真図版18

第17次調査 流路出土土器②

写真図版19

1. 第23次調査 出土土器
2. 第25次調査 表土～褐灰色砂質土出土遺物

写真図版20

第25次調査 黒褐色砂質土出土土器①

写真図版21

第25次調査 黒褐色砂質土出土土器②

写真図版22

1. 第25次調査 黒褐色砂質土出土土器③
2. 第25次調査 遺構出土土器

写真図版23

第26次調査 出土遺物

写真図版24

1. 第37次調査 第1遺構面出土土器
2. 第37次調査 NR01-1出土土器
3. 第37次調査 灰褐色～茶褐色砂質土出土土器
4. 第37次調査 出土木製品

写真図版25

1. 第39次調査 第2遺構面出土土器
2. 第39次調査 第2包含層出土土器
3. 第39次調査 出土韓式系土器
4. 第39次調査 出土縄文土器

写真図版26

1. 第39次調査 第1・2遺構面出土土器
2. 第39次調査 黒褐色砂質土～第3遺構面出土土器

写真図版27

1. 第40次調査 暗褐色砂質土出土遺物
2. 第42次調査 黒色砂質粘土出土土器
3. 第42次調査 NR01出土土器
4. 第42次調査 SX03出土縄文土器
5. 第42次調査 NR01出土土器

写真図版28

1. 第56次調査 SB01出土土器①
2. 第56次調査 SB01出土土器②
3. 第56次調査 黒褐色砂まじり粘土出土土器①
4. 第56次調査 黒褐色砂まじり粘土出土土器②

写真図版29

第56次調査 黒褐色砂まじり粘土出土土器③

写真図版30

1. 第56次調査 灰色砂まじりシルト出土土器①
2. 第56次調査 灰色砂まじりシルト出土土器②
3. 第56次調査 SK01出土土器
4. 第56次調査 第3遺構面SK・SP出土土器
5. 第56次調査 SK15出土土器
6. 第56次調査 SD11出土土器
7. 第56次調査 SP99出土土器
8. 第56次調査 SP54出土土器
9. 第56次調査 SP102出土土器

写真図版31

1. 第56次調査 第3遺構面遺構出土土器
2. 第56次調査 SD22出土土器
3. 第56次調査 SD13出土土器
4. 第56次調査 出土土鐘
5. 第56次調査 出土サヌカイト製石鏝

写真図版32

1. 第56次調査 出土瓦①(表)
2. 第56次調査 出土瓦①(裏)

写真図版33

1. 第56次調査 出土瓦②(表)
2. 第56次調査 出土瓦②(裏)

写真図版34

1. 第56次調査 出土瓦③(表)
2. 第56次調査 出土瓦③(裏)

写真図版35

第58次調査 出土土器

写真図版36

1. 第58次調査 出土瓦(表)
2. 第58次調査 出土瓦(裏)

# 第1章 はじめに

## 第1節 地理的環境

上沢遺跡は、六甲山系の南麓部に位置し、兵庫県神戸市兵庫区上沢通8丁目から長田区五番町3丁目付近までの、およそ106,000㎡の広がりを持つ遺跡である。遺跡は、六甲山系から派生した会下山からつづく小丘陵の裾部に位置し、荊藻川と旧湊川の中間に位置する小扇状地上に立地する。地形は、北西側から南東側へと傾斜しており、現況の標高は7～19mを測る。明治18年測量の仮製地形図によると、当時は水田であったものの、現在は市街地化が進み往時の姿は留めていない。また、遺跡の東方を南側へと流れていた旧湊川を新湊川（荊藻川）へと付け替えた際に、旧地形は大きく影響を受けている。

## 第2節 歴史的環境

神戸市内において旧石器時代における人々の活動痕跡は見出すことはできていない。そのようななかで、上沢遺跡の北側に位置する会下山遺跡において、ナイフ形石器が採集されたことは特筆される。

縄文時代の早期には、宇治川南遺跡で黄鳥式の押型文土器、祇園遺跡では前期の羽鳥下層Ⅱ式土器が出土している。中期には大開遺跡、名倉遺跡で土器の出土が報告されるものの、長期にわたって遺跡が営まれつづけたのは宇治川南遺跡のみであり、ここでは晩期まで継続する。後期の遺跡には楠・荒田町遺跡、上沢遺跡、大開遺跡、五番町遺跡があり、晩期に至るとこれらに加えて、兵庫松本遺跡、塚本遺跡、長田神社境内遺跡、大橋町遺跡、二葉町遺跡、戎町遺跡、松野遺跡などで突帯文土器が出土している。

弥生時代前期には、大開遺跡で環濠集落が営まれ、多数の竪穴建物、貯蔵穴がみついている。前期後半には、戎町遺跡、楠・荒田町遺跡といった拠点集落と目される遺跡が出現する。戎町遺跡では、前期後半以前の小区画水田が検出されており、六甲山系の南麓部における稲作開始時期を推定するうえで重要な手がかりを得ている。この他、塚本遺跡、兵庫松本遺跡、上沢遺跡、神楽遺跡、松野遺跡などが同時期の遺跡として知られる。

中期前葉には一旦遺跡数が減少するものの、中期中葉から後葉にかけて遺跡数は増加する。後期に入ると平野部に形成された遺跡数が増え、兵庫松本遺跡、戎町遺跡、長田神社境内遺跡などでは竪穴建物が、御蔵遺跡では同時期の水田がみついている。また、後期に営まれた遺跡はそのまま庄内期まで継続するようであるが、一方でそれまでの拠点集落であった楠・荒田町遺跡の集落は継続しない。

古墳時代の前期には、夢野丸山古墳（前方後円墳：墳丘長約40m）、会下山二本松古墳（前方後円墳：墳丘長約53m）、念仏山古墳（円墳もしくは前方後円墳：規模不明）などが築かれた。夢野丸山古墳、会下山二本松古墳では発掘調査が行われており、両者とも三角縁神獣鏡を副葬品に含まない点は、西求女塚古墳や東求女塚古墳といった六甲山系の南麓部の東側に築かれた古墳とは異なる特徴としてあげられている。4世紀後半の築造と考えられる会下山二本松古墳は、上沢遺跡より北側0.5kmの地点に所在しており、立地や副葬品の内容などから地域に密着した首長を被葬者とする考えがある。周囲には古墳時代集落が知られておらず、被葬者の生前の居住地として上沢遺跡を候補としてあげることができよう。

つづく古墳時代後期には、六甲山系南麓部で横穴式石室を主体部とした群集墳を含む中

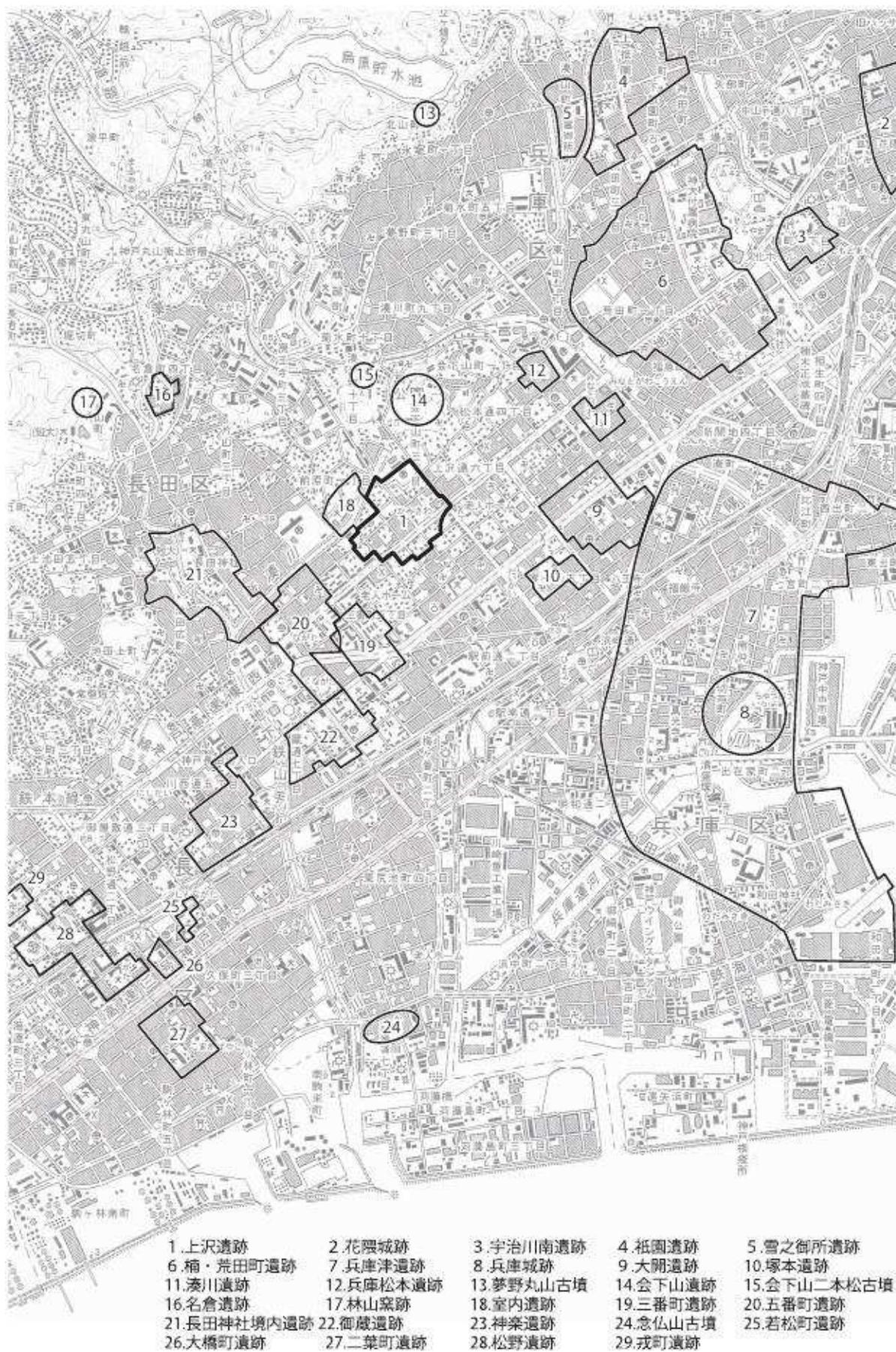


図1 上沢遺跡と周辺の遺跡 S=1/25,000

小の古墳が存在したことが記録されるが、近代以降の急速な市街地化によって失われており、その具体的様相は判然としない部分が多い。

一方集落遺跡では、前期に鷹取町遺跡、若松町遺跡、三番町遺跡、戎町遺跡が、中期から後期にかけて鷹取町遺跡、神楽遺跡、三番町遺跡、湊川遺跡などが営まれる。このうち、神楽遺跡では韓式系土器が出土しており、上沢遺跡と同様に渡来人が居住した集落であったと考えられる。中期の特筆される遺構としては、松野遺跡で発見された居館がある。本遺跡では、柵列に囲まれた掘立柱建物群のほか、滑石製品が大量に出土するなど首長居館遺跡として著名な群馬県高崎市三ツ寺Ⅰ遺跡との共通性がみえる点は興味深い。後期には林山窯跡が営まれ、出合窯跡をのぞくと神戸市内では最も古い須恵器の窯跡に位置づけることができる。

飛鳥・奈良時代には、古代山陽道の整備や寺院設立に伴うと考えられる遺跡がみられる。上沢遺跡の北西側に位置する室内遺跡は、礎石や瓦・塑像の台座の破片がみつまっていることから伝房王寺との関わりが指摘されているが、これまでに明確な遺構は発見されていない。御蔵遺跡では掘立柱建物・井戸・帯金具・墨書土器などがみつかっており、官衙の様相を持つ遺跡といえる。このほか、須磨驛家と比定される大田町遺跡や神楽遺跡が推定山陽道に接する。

平安時代末期には、平安京から一時遷都した福原京の存在が知られる地域である。現在までに考古学的見地から京城や各施設の所在地が確定されていないものの、楠・荒田町遺跡内から検出された2条の溝を関連遺構とする考えも提示されている。楠・荒田町遺跡の北側に所在する祇園遺跡では、多量の土師器皿が廃棄された園池状遺構や吉州窯系琥珀天目小碗などが発見され、貴族の邸宅に関連する遺跡と考えられている。隣接する雪御所遺跡でも平安時代の瓦や土師器が出土したことや地名から福原京に関わる遺跡と考えられるが、この時期に伴う遺構は発見されていない。兵庫津遺跡は、平清盛が修築した大輪田泊に関連する遺跡と考えられている。

中世には、二葉町遺跡で掘立柱建物や井戸・墓などが検出されており、11世紀中頃～13世紀中頃まで営まれた遺跡と考えられている。16世紀には花隈城や兵庫城が築かれ、とくに兵庫津遺跡内に所在する後者では瓦や陶磁器をはじめとして多種多様の遺物が出土しており、城郭や周辺の町屋の構造やその形成過程を知る上で極めて重要な成果が得られている。

江戸時代に入っても兵庫津では商業面を中心とした活発な活動が行われ、その往時の様子をうかがい知ることのできる調査成果も集積されつつある。

江戸時代末期には神戸港が開港し、明治年間には楠町周辺では燐寸工場が設立され、神戸の基幹産業であった燐寸生産を支えた。その後は、神戸大空襲や阪神・淡路大震災による戦火・災禍に遭うものの、復興・復旧に努め、現在に至る。

### 第3節 既往の調査成果

上沢遺跡は、昭和63年（1988）の第1次調査以来、これまでに64次もの調査が行われている。その結果、縄文時代晩期から中世までに及ぶ複合遺跡であることが判明しているが、以下にその概要をまとめる。なお、それぞれの調査地点については図2、主な調査成果については表1を参照されたい。

縄文時代後期から晩期の遺構・遺物は散在的にみつまっている。ある程度まとまりのあ

る資料としては、遺跡北西側の自然流路内（第1次・第2次）で、突帯文土器と弥生前期の土器とが共伴して出土したことが特筆される。なお、自然科学的分析によってイネのプラント・オパールが微量検出されたものの、花粉自体の残存状態が悪く、当時の植生を復元するには至らなかった。

弥生時代前期の土坑・ピット・河道などは主に遺跡の南東部でみつかり、竪穴建物の可能性がある土坑も確認されている（第33次）。中期は竪穴建物が1棟検出されている（第34次）。その後、後期後半には土器の出土が散見され、弥生時代後期末から庄内期では遺跡の東側で竪穴建物・土坑・溝が検出されている。とくに、土器が多量に出土した溝が3条検出されており、いずれも竪穴建物をめぐるような状態で確認されたことは注目される（第4次・第28次・第51次・第55次）。この時期は全時期を通じて最も遺構数が多く、上沢遺跡の最盛期であったものと考えられる。また、第55次調査で出土した鉄滓・炉壁がこの時期に伴うものとして報告されており、注目される。

古墳時代前期中頃から中期にかけての遺構が希薄であるが、中期の所産と考えられる遺物は遺跡の西側から多数出土する。中期後葉になると、集落内で須恵器が普及するようで、この時期に比定されるものが急増する。そのほか、滑石製品（第10次・第30次）・ガラス玉・韓式系土器・製塩土器等も出土している。後期には竪穴建物が1棟検出されている（第54次）。古墳時代中期から後期は、遺構の検出数が少ないため具体相が不明であるが、渡来系文物との関わりがみられる点は留意される。

飛鳥時代の遺構としては、遺跡の南西部と北東部において掘立柱建物が検出されている。

奈良時代～平安時代では、掘立柱建物が遺跡内の各所で検出されている。建物の規模は、2間×3～4間が大半であり、方位には規則性がみられないようである。これまでに出土している瓦は、北西隣に位置する室内遺跡から出土した瓦と同様のものであり、深い関連性が想定される。特筆される出土品としては、第31次調査で検出された井籠組井戸内より出土した銅鏡があげられる。本資料は正倉院御物の佐波理鏡との類似が指摘されるものである。このほか、墨書土器・緑釉陶器・円面硯・重圈文軒丸瓦（第9-2次）・土馬・石帯・銅製帯金具（第5次）が出土しており、鉄滓や鞆羽口もこの時期の所産である可能性がある。これらの存在から、上沢遺跡付近に所在したとされる伝房王寺、あるいは官衙との関わりが考えられる。

鎌倉時代の遺構としては、掘立柱建物・井戸・木棺墓・鋤溝が確認されており、室町時代の遺構としては土坑と柱穴が確認されている。中世に属する遺構は遺跡全域に広がるが、密度は低い。また、河道の痕跡が多くみられ、小河川がたびたび氾濫していたと考えられる。

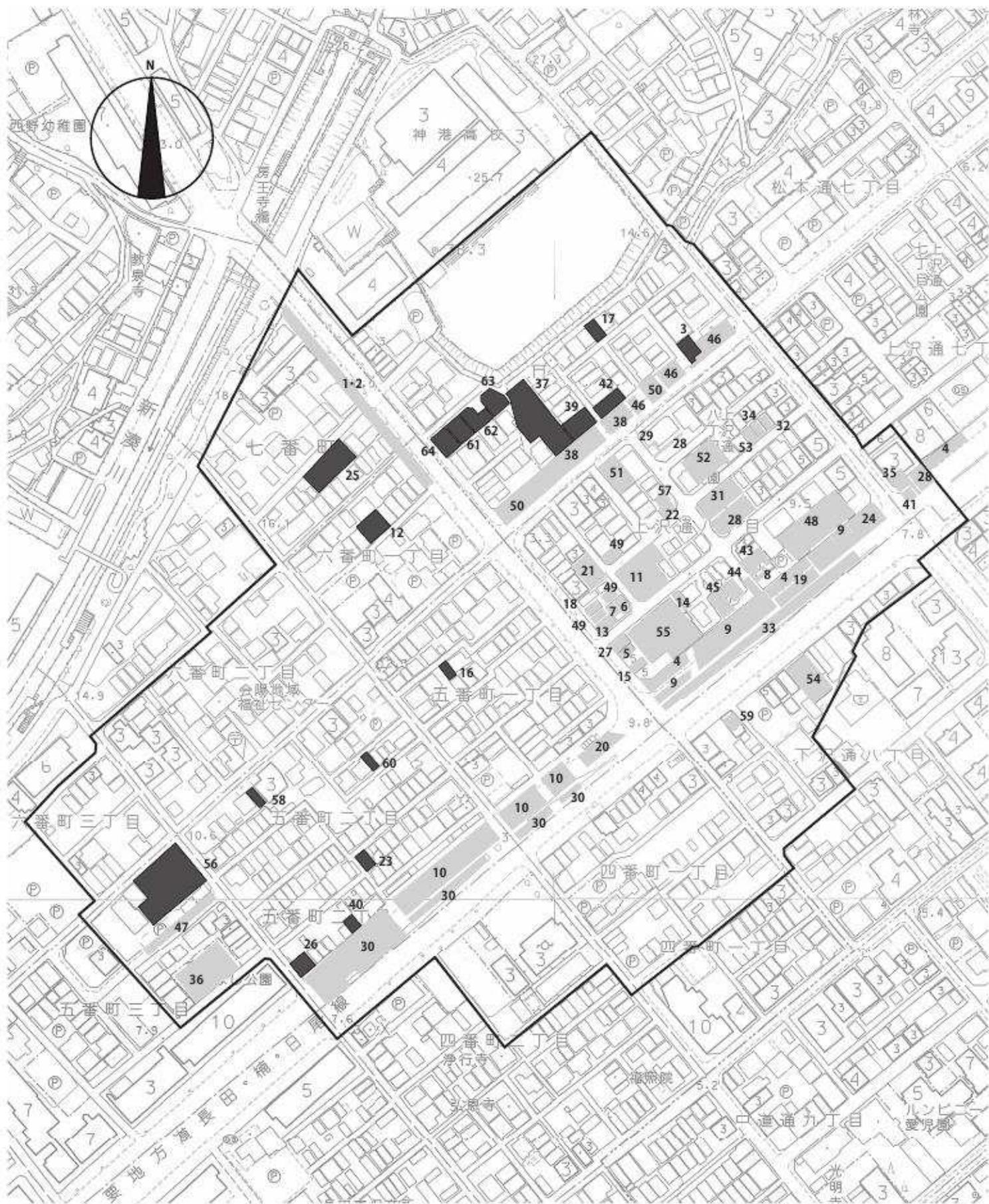


図2 上沢遺跡調査地位位置図（濃い網掛け部分が今回掲載報告地点） S=1/2,500

表1 既往の調査一覧(網掛けは今回報告調査分)

| 調査回数 |      | 調査開始日      | 調査終了日      | 調査機関        | 調査担当者         | 調査面積<br>㎡ | 参考文献 |
|------|------|------------|------------|-------------|---------------|-----------|------|
| 新回数  | 旧回数  |            |            |             |               |           |      |
| 1-1  | 1-1  | 1989/3/13  | 1989/3/28  | 神戸市教育委員会    | 西岡誠司          | 120       | 1    |
| 1-2  | 1-2  | 1989/4/17  | 1989/4/21  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 33        | 1    |
| 1-3  | 1-2  | 1989/8/18  | 1989/10/24 | 神戸市教育委員会    | 山本雅和・阿部敬生     | 600       | 1    |
| 2    | 1-2  | 1989/8/1   | 1989/10/24 | 神戸市スポーツ教育公社 | 口野博史・富山直人     | 560       | 1    |
| 3    | 2    | 1995/11/21 | 1995/12/6  | 神戸市教育委員会    | 藤井整           | 76        | 5    |
| 4    | 3    | 1996/11/13 | 1997/2/25  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖・兼康保明・弘田和司 | 340       | 6    |
| 5    | 4    | 1997/2/24  | 1997/3/8   | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 31        | 6    |
| 6    | 5    | 1997/3/10  | 1997/3/15  | 神戸市教育委員会    | 富山直人          | 29        | 6    |
| 7    | 6    | 1997/3/10  | 1997/3/14  | 神戸市教育委員会    | 富山直人          | 27        | 6    |
| 8    | 7    | 1997/3/11  | 1997/3/12  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 25        | 6    |
| 9-1  | 8    | 1997/3/24  | 1997/7/14  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖・三輪晃三      | 340       | 7    |
| 9-2  | 16   | 1997/11/18 | 1998/3/31  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖・奈良康正      | 405       | 7    |
| 10   | 9    | 1997/6/16  | 1998/2/12  | 神戸市スポーツ教育公社 | 池田毅・井尻格       | 1400      | 7    |
| 11   | 10   | 1997/8/18  | 1997/10/4  | 神戸市教育委員会    | 富山直人          | 400       | 7    |
| 12   | 11   | 1997/8/25  | 1997/9/5   | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 60        | 7    |
| 13   | 12   | 1997/9/4   | 1997/9/16  | 神戸市教育委員会    | 横田明・家塚英詞      | 37        | 7    |
| 14   | 13   | 1997/9/8   | 1997/9/18  | 神戸市教育委員会    | 西岡巧次          | 28        | 7    |
| 15   | 14   | 1997/9/24  | 1997/10/9  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 20        | 7    |
| 16   | 15   | 1997/10/1  | 1997/10/2  | 神戸市教育委員会    | 横田明・家塚英詞      | 30        | 7    |
| 17   | 17   | 1997/12/11 | 1997/12/18 | 神戸市教育委員会    | 松林宏典          | 40        | 7    |
| 18   | 18   | 1997/12/17 | 1997/12/25 | 神戸市教育委員会    | 阿部敬生          | 50        | 7    |
| 19   | 19   | 1998/4/1   | 1998/6/9   | 神戸市教育委員会    | 斎木巖・浅谷誠吾      | 170       | 8    |
| 20   | 20   | 1998/5/19  | 1998/6/26  | 神戸市スポーツ教育公社 | 橋詰清孝          | 110       | 8    |
| 21   | 21   | 1998/6/15  | 1998/7/20  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖・浅谷誠吾      | 100       | 8    |
| 22   | 22   | 1998/7/21  | 1998/8/6   | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 35        | 8    |
| 23   | 23   | 1998/7/29  | 1998/8/13  | 神戸市教育委員会    | 中村大介          | 45        | 8    |
| 24   | 24   | 1998/8/20  | 1998/10/20 | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 360       | 8    |
| 25   | 25   | 1998/9/30  | 1998/10/23 | 神戸市教育委員会    | 佐伯二郎          | 81        | 8    |
| 26   | 26   | 1998/10/26 | 1998/11/5  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 60        | 8    |
| 27   | 27   | 1998/11/9  | 1998/11/30 | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 40        | 8    |
| 28-1 | 28   | 1998/12/4  | 1999/3/26  | 神戸市体育協会     | 斎木巖・中居さやか     | 220       | 8    |
| 28-2 | 29   | 1999/2/8   | 1999/2/25  | 神戸市体育協会     | 中居さやか         | 80        | 8    |
| 28-3 | 30   | 1999/3/9   | 1999/3/26  | 神戸市体育協会     | 斎木巖           | 30        | 8    |
| 29   | 31   | 1999/3/23  | 1999/3/25  | 神戸市教育委員会    | 斎木巖           | 8         | 8    |
| 30   | 32-1 | 1999/4/6   | 1999/8/17  | 神戸市体育協会     | 橋詰清孝・石島三和・中谷正 | 655       | 9    |
| 31   | 33   | 1999/4/19  | 1999/8/9   | 神戸市体育協会     | 口野博史・関野豊      | 200       | 9    |
| 32   | 34   | 1999/7/9   | 1999/7/26  | 神戸市教育委員会    | 関野豊           | 40        | 9    |
| 33   | 32-2 | 1999/8/18  | 1999/10/25 | 神戸市体育協会     | 橋詰清孝・石島三和     | 169       | 9    |
| 34   | 36-1 | 1999/10/12 | 1999/10/21 | 神戸市教育委員会    | 川上厚志          | 40        | 9    |
| 35   | 36-2 | 2000/1/11  | 2000/1/19  | 神戸市教育委員会    | 石島三和          | 85        | 9    |
| 36   | 37   | 2000/2/2   | 2000/3/7   | 神戸市体育協会     | 佐伯二郎・石島三和     | 600       | 2    |
| 37   | 36   | 2000/4/17  | 2000/6/2   | 神戸市体育協会     | 平田朋子          | 360       | 10   |
| 38-1 | 37-1 | 2000/4/24  | 2000/6/5   | 神戸市体育協会     | 富山直人          | 162       | 3    |
| 38-2 | 37-2 | 2000/6/13  | 2000/7/14  | 神戸市体育協会     | 富山直人          | 126       | 3    |
| 38-3 | 37-3 | 2001/1/9   | 2001/1/23  | 神戸市体育協会     | 富山直人          | 110       | 3    |
| 39   | 38   | 2000/4/27  | 2000/6/1   | 神戸市体育協会     | 佐伯二郎          | 117       | 10   |
| 40   | 39   | 2000/5/23  | 2000/5/30  | 神戸市教育委員会    | 関野豊           | 20        | 10   |
| 41   | 40   | 2000/9/4   | 2000/9/19  | 神戸市体育協会     | 関野豊           | 100       | 10   |
| 42   | 41   | 2000/9/5   | 2000/9/29  | 神戸市体育協会     | 須藤宏           | 75        | 10   |
| 43   | 43   | 2000/10/19 | 2000/11/8  | 神戸市教育委員会    | 中谷正           | 81        | 10   |
| 44   | 44   | 2001/2/20  | 2001/3/21  | 神戸市教育委員会    | 池田毅           | 83        | 10   |
| 45   | 45   | 2001/7/24  | 2001/8/31  | 神戸市体育協会     | 佐伯二郎          | 110       | 11   |

| 調査回数 |     | 調査開始日      | 調査終了日      | 調査機関     | 調査担当者     | 調査面積<br>㎡ | 参考文献 |
|------|-----|------------|------------|----------|-----------|-----------|------|
| 新回数  | 旧回数 |            |            |          |           |           |      |
| 46-1 | 46  | 2001/9/14  | 2001/10/26 | 神戸市体育協会  | 富山直人      | 204       | 3    |
| 46-2 | 46  | 2001/10/23 | 2002/11/12 | 神戸市体育協会  | 富山直人      | 56        | 3    |
| 46-3 | 46  | 2001/11/13 | 2002/1/15  | 神戸市体育協会  | 富山直人      | 100       | 3    |
| 47   |     | 2002/2/28  | 2002/3/20  | 神戸市体育協会  | 山本雅和      | 110       | 11   |
| 48   |     | 2002/5/30  | 2002/6/28  | 神戸市教育委員会 | 川上厚志      | 330       | 12   |
| 49-1 |     | 2002/7/9   | 2002/8/7   | 神戸市教育委員会 | 川上厚志      | 30        | 12   |
| 49-2 |     | 2002/7/9   | 2002/8/7   | 神戸市教育委員会 | 川上厚志      | 30        | 12   |
| 49-3 |     | 2002/7/9   | 2002/8/7   | 神戸市教育委員会 | 川上厚志      | 27        | 12   |
| 50-1 |     | 2002/10/9  | 2002/11/20 | 神戸市教育委員会 | 谷正俊・阿部功   | 80        | 3    |
| 50-2 |     | 2002/10/15 | 2002/12/6  | 神戸市教育委員会 | 谷正俊・阿部功   | 290       | 3    |
| 51   |     | 2003/1/14  | 2003/3/26  | 神戸市教育委員会 | 黒田恭正      | 150       | 12   |
| 52   |     | 2004/11/26 | 2004/12/9  | 神戸市教育委員会 | 浅谷誠吾      | 40        | 13   |
| 53   |     | 2006/8/2   | 2006/8/24  | 神戸市教育委員会 | 浅谷誠吾      | 40        | 14   |
| 54   |     | 2006/12/4  | 2006/12/5  | 神戸市教育委員会 | 浅谷誠吾      | 200       | 14   |
| 55   |     | 2008/1/7   | 2008/3/26  | 神戸市教育委員会 | 富山直人      | 500       | 4    |
| 56   |     | 2008/9/30  | 2009/1/14  | 神戸市教育委員会 | 須藤宏       | 400       | 15   |
| 57   |     | 2009/7/15  | 2009/8/5   | 神戸市教育委員会 | 口野博史      | 22        | 16   |
| 58   |     | 2009/10/13 | 2009/10/26 | 神戸市教育委員会 | 口野博史      | 28        | 16   |
| 59   |     | 2012/2/7   | 2012/2/27  | 神戸市教育委員会 | 西岡巧次      | 40        | 17   |
| 60   |     | 2014/5/7   | 2014/5/20  | 神戸市教育委員会 | 川上厚志      | 24        | 18   |
| 61   |     | 2017/4/17  | 2017/4/19  | 神戸市教育委員会 | 阿部敬生・藤井太郎 | 16        |      |
| 62   |     | 2017/4/18  | 2017/4/19  | 神戸市教育委員会 | 阿部敬生・藤井太郎 | 10        |      |
| 63   |     | 2017/4/19  | 2017/4/20  | 神戸市教育委員会 | 阿部敬生・藤井太郎 | 6.5       |      |
| 64   |     | 2017/4/24  | 2017/4/28  | 神戸市教育委員会 | 藤井太郎      | 16        |      |

## 参考文献

1. 阿部敬生 1995『上沢遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
2. 石島三和 2000『上沢遺跡発掘調査報告書-第35次調査-』神戸市教育委員会
3. 谷 正俊・富山直人 2004『上沢遺跡Ⅲ 第38・46・50次調査』都市計画道路松本線拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 神戸市教育委員会
4. 小林さやか・中村大介 2009『上沢遺跡 第55次調査 発掘調査報告書』神戸市教育委員会
5. 菅本宏明・佐伯二郎編 1998『神戸市埋蔵文化財年報』平成7年度 神戸市教育委員会
6. 橋詰清孝・浅谷誠吾編 1999『神戸市埋蔵文化財年報』平成8年度 神戸市教育委員会
7. 内藤俊哉編 2000『神戸市埋蔵文化財年報』平成9年度 神戸市教育委員会
8. 内藤俊哉編 2001『神戸市埋蔵文化財年報』平成10年度 神戸市教育委員会
9. 阿部敬生編 2002『神戸市埋蔵文化財年報』平成11年度 神戸市教育委員会
10. 阿部 功編 2003『神戸市埋蔵文化財年報』平成12年度 神戸市教育委員会
11. 中居さやか編 2004『神戸市埋蔵文化財年報』平成13年度 神戸市教育委員会
12. 内藤俊哉編 2005『神戸市埋蔵文化財年報』平成14年度 神戸市教育委員会
13. 内藤俊哉編 2007『神戸市埋蔵文化財年報』平成16年度 神戸市教育委員会
14. 川上厚志編 2009『神戸市埋蔵文化財年報』平成18年度 神戸市教育委員会
15. 千種 浩・池田 毅編 2011『神戸市埋蔵文化財年報』平成20年度 神戸市教育委員会
16. 阿部敬生編 2012『神戸市埋蔵文化財年報』平成21年度 神戸市教育委員会
17. 阿部敬生編 2014『神戸市埋蔵文化財年報』平成23年度 神戸市教育委員会
18. 井尻 格編 2017『神戸市埋蔵文化財年報』平成26年度 神戸市教育委員会

## 第4節 調査に至る経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

上沢遺跡は、都市計画道路房王寺線街路築造工事に伴う試掘調査によって、弥生時代および中世の土器を伴う遺物包含層が確認されたこと、また伝房王寺との関連も考慮されることからその存在が周知された。昭和63年度・平成元年度に第1次発掘調査が実施されて以降、平成29年度までの間で64次を数える発掘調査が行われてきた。

### 2. 阪神・淡路大震災と復興事業に伴う発掘調査

平成7年1月17日午前5時46分、淡路島北部の北緯34度36分、東経135度02分、深さ16kmを震源とする兵庫県南部地震が発生した。マグニチュードは7.3、淡路島から阪神地域で震度7が記録された。

神戸市も市街地を中心に、家屋の倒壊や火災など被害は甚大であった。被災地は埋蔵文化財包蔵地に重なる地域も多く、住宅や工場・店舗等の再建、土地区画整理事業など復興事業に伴う遺跡の発掘調査事業量は膨大で、かつ早期の復旧・復興を目指すため迅速な発掘調査が要求された。

そこで、文化庁から基本方針が出され、復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の整合が図られるとともに、全国の都道府県から専門職員の支援を得て、発掘調査事業に対応することになった。

上沢遺跡では、平成7年11月から復興に伴う調査が開始され、個人住宅建設や区画整理事業、道路拡幅工事など、震災復興事業に伴う調査は平成14年度(2002)まで行われた。その後も、個人住宅建設など国庫補助事業での発掘調査が継続して行われた。今回の報告では、兵庫区松本通8丁目・長田区五番町1丁目～3丁目・同六番町1丁目・2丁目・同七番町地区で実施された国庫補助事業に伴う発掘調査成果を掲載する。

### 3. 発掘調査の経過

個人住宅や事務所などそれぞれの事業ごとに発掘調査を実施し、次数を付与した。調査は、表土・盛土等を重機で掘削し、以下の遺物包含層・遺構面検出・遺構掘削等は人力で行った。一部の調査では、工事影響深度までの調査に留めたため、それより下層については、埋蔵文化財が保護されている調査も存在する。

記録は平板測量のほか、遺構平面や断面を20分の1などの縮尺で行った。また、フィルムカメラを用いて写真撮影を行った。調査後は順次遺物整理作業に入った。

なお、神戸市では平成13年度より、新しい規定による次数付与の方式を採用したため、平成12年度以前の発掘調査にかかる遺物の注記、図面・写真等の記録類については、旧次数で収蔵している。新旧の対応については表1を参照されたい。

4. 調査体制

発掘調査および報告書作成事業は、神戸市文化財保護審議会の指導のもと、以下の組織で実施された。

表2 調査体制一覧

|                             | 平成7年度  | 平成9年度  | 平成10年度  | 平成12年度   | 平成20年度  | 平成21年度                                     | 平成26年度                                      | 平成29年度                                     | 平成30年度                                     |
|-----------------------------|--|--|---|--|---|--|---|--|--|
| 神戸市文化財保護審議委員<br>(史跡・考古資料担当) | 榎上重光<br>神戸女子短期大学教授<br>和田晴吾<br>立命館大学文学部教授<br>山岸啓人<br>奈良国立文化財研究所遺構調査室長 | 榎上重光<br>神戸女子短期大学教授<br>工藤善通<br>奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長<br>和田晴吾<br>立命館大学文学部教授 | 榎上重光<br>前神戸女子短期大学教授<br>工藤善通<br>奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長<br>和田晴吾<br>立命館大学文学部教授 | 榎上重光<br>前神戸女子短期大学教授<br>工藤善通<br>エクスゴ・アジア文化遺産保護強化事務所棟修部長<br>和田晴吾<br>立命館大学文学部教授 | 榎上重光<br>前神戸女子短期大学教授<br>工藤善通<br>大阪府立狭山池博物館館長<br>和田晴吾<br>立命館大学文学部教授 | 工藤善通<br>大阪府立狭山池博物館館長<br>和田晴吾<br>立命館大学文学部教授 | 工藤善通<br>大阪府立狭山池博物館館長<br>和田晴吾<br>京都府立大学文学部教授 | 黒崎直<br>大阪府立狭山池博物館館長<br>和田晴吾<br>京都府立大学文学部教授 | 黒崎直<br>大阪府立狭山池博物館館長<br>和田晴吾<br>京都府立大学文学部教授 |

教育委員会事務局

|                              |                         |                        |                        |                                  |  |                                |                                |                         |                                 |
|------------------------------|-------------------------|------------------------|------------------------|----------------------------------|--|--------------------------------|--------------------------------|-------------------------|---------------------------------|
| 教育長                          | 小野 雄示                   | 萩本 昌男                  | 萩本 昌男                  | 木村 良一                            | 橋口 秀志  | 橋口 秀志                          | 雪村新之助                          | 雪村新之助                   | 長田 淳                            |
| 総務部長                         | 金芳外城雄                   | 小川 雄三                  | 小川 雄三                  | 小川 雄三                            | 井上 博   | 井上 博                           | 清水 龍哉                          | 浜本 泰幸                   | 浜本 泰幸                           |
| 社会教育部長                       | 西川 和機                   | 矢野栄一郎                  | 矢野栄一郎                  | 木田 裕次                            | 黒住 章久  | 大寺 直秀                          | 東野 展也                          | 日下 健                    | -                               |
| 教育施策推進担当部長                   | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | -                              | -                              | -                       | 寛枝 重孝                           |
| 文化財担当部長<br>(文化財課長事務取扱)       | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | -                              | 安達 空二                          | -                       | -                               |
| 参事(文化財課長事務取扱)                | -                       | -                      | -                      | -                                | 柏木 一孝  | 柏木 一孝                          | -                              | -                       | -                               |
| 文化財課長                        | 杉田 年章                   | 杉田 年章                  | 大勝 俊一                  | 大勝 俊一                            | -  | -                              | -                              | 千種 浩                    | 千種 浩                            |
| 埋蔵文化財担当課長<br>(埋蔵文化財係長事務取扱)   | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | -                              | 千種 浩                           | -                       | -                               |
| 社会教育部主幹                      | -                       | 奥田 晋通                  | 奥田 晋通                  | -                                | -  | -                              | -                              | -                       | -                               |
| 社会教育部主幹<br>(埋蔵文化財指導係長事務取扱)   | -                       | -                      | -                      | 渡辺 伸行                            | 丸山 潔   | 丸山 潔                           | -                              | -                       | -                               |
| 社会教育部主幹<br>(埋蔵文化財センター所長事務取扱) | -                       | -                      | -                      | -                                | 渡辺 伸行  | 渡辺 伸行                          | -                              | -                       | -                               |
| 埋蔵文化財センター担当課長                | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | -                              | 安田 滋                           | 安田 滋                    | -                               |
| 文化財専門校                       | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | 丸山 潔                           | -                              | -                       | -                               |
| 指導係事務担当学委員                   | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | -                              | -                              | -                       | -                               |
| 埋蔵文化財係長                      | 奥田 晋通                   | 渡辺 伸行                  | 渡辺 伸行                  | -                                | -  | -                              | -                              | 前田 佳久                   | 前田 佳久                           |
| 埋蔵文化財調査係長                    | -                       | -                      | -                      | 丹治 康明                            | 千種 浩   | 千種 浩<br>丹治 康明                  | -                              | -                       | -                               |
| 文化財課主査                       | 中村 善明<br>渡辺 伸行          | 丸山 潔<br>丹治 康明<br>菅本 宏明 | 丸山 潔<br>丹治 康明<br>菅本 宏明 | 宮本 郁雄<br>丸山 潔<br>菅本 宏明           | 丹治 康明<br>安田 滋                                  | 安田 滋<br>齋木 巖                   | -                              | -                       | -                               |
| 文化財課担当係長                     | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | -                              | 前田 佳久<br>齋木 巖                  | 松林 宏典<br>中村 大介          | 東 喜代秀<br>齋木 巖<br>松林 宏典<br>中村 大介 |
| 埋蔵文化財センター担当係長                | -                       | -                      | -                      | -                                | -  | -                              | 安田 滋                           | -                       | -                               |
| 事務担当学委員                      | 菅本 宏明<br>松林 宏典<br>川上 厚志 | 安田 滋<br>橋詰 清孝<br>阿部 功  | 安田 滋<br>東 喜代秀<br>井尻 格  | 西岡 誠司<br>山口 英正<br>東 喜代秀<br>橋詰 清孝 | 谷 正俊<br>齋木 巖<br>松林 宏典<br>井尻 格<br>阿部 敬生<br>中谷 正 | 谷 正俊<br>東 喜代秀<br>松林 宏典<br>中谷 正 | 山口 英正<br>池田 巖<br>井尻 格<br>中村 大介 | 山口 英正<br>井上 麻子<br>山田 脩生 | 池田 巖<br>阿部 敬生<br>井上 麻子          |
| 担当学委員                        | 丸山 潔                    | 佐伯 二郎                  | 黒田 恭正                  | 谷 正俊                             | 黒田 恭正  | 佐伯 二郎                          | 黒田 恭正                          | 谷 正俊<br>佐伯 二郎           | 阿部 功                            |
| 保存科学担当                       | 千種 浩                    | 千種 浩                   | 千種 浩                   | 千種 浩<br>中村 大介                    | 中村 大介  | 中村 大介                          | -                              | 中村 大介                   | 中村 大介<br>山田 脩生                  |

財団法人神戸市体育協会

|               |       |
|---------------|-------|
| 会長            | 徳山 幸徳 |
| 副会長           | 木村 良一 |
| 副会長(専務理事事務取扱) | 萩本 昌男 |
| 副会長           | 山田 隆  |
| 副会長           | 家治川 豊 |
| 相談役           | 加茂川 守 |
| 常務理事          | 藤野 圭一 |
| 参事            | 財田 英樹 |
| 総務課長          | 前田 春晴 |
| 事業係長          | 瀬田 吉樹 |
| 事業係主査(兼務)     | 丸山 潔  |
| 事業係主査(兼務)     | 菅本 宏明 |
| 事務担当学委員       | 齋木 巖  |

## 第2章 発掘調査の成果

### 第1節 第3次調査

#### 1. 調査の概要

調査地は松本通8丁目地区に位置し、第46次調査地に隣接する。標高約12.7mで遺跡の北東端に近い。

#### 2. 基本層序

表土の直下に旧耕土、大規模な洪水堆積層である黄灰色粗砂～暗灰色砂礫が、小規模な洪水堆積層である淡灰褐色細砂を削っている。暗灰褐色砂質土は土壌化した層であり、水田の可能性もあるが積極的な根拠を欠く。淡灰色粗砂～明灰色粗砂は洪水層で、水田（暗灰褐色粘質土）を覆っている。この水田以前にはほとんど流力のないよどみ堆積（暗茶褐色粘質土）があり、その下層は洪水砂層の堆積がある。暗灰褐色砂礫から灰色細砂でも縄文土器（突帯文土器）片が出土している。

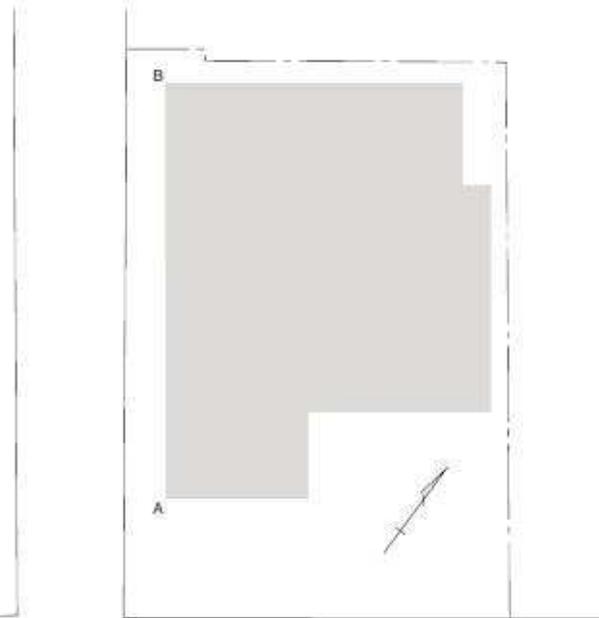


図3 第3次調査範囲図

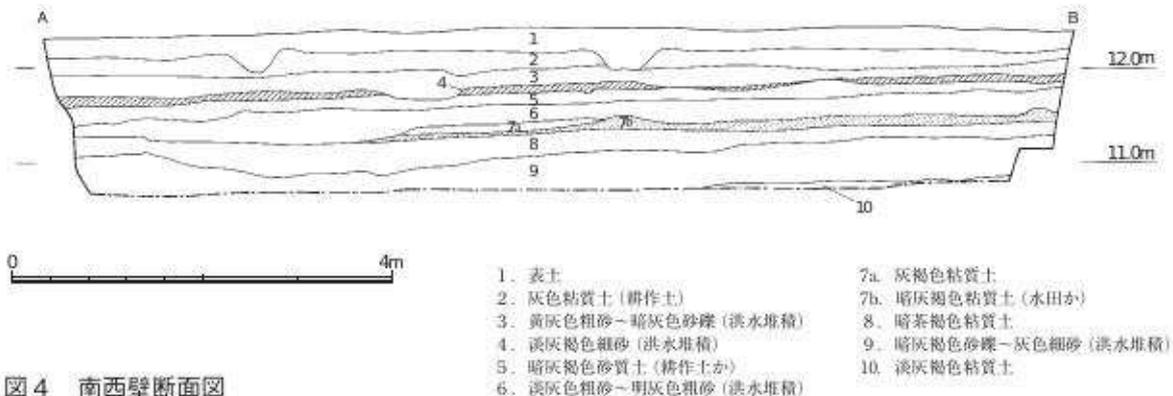


図4 南西壁断面図

#### 3. 遺物

第4層から弥生時代後期の土器、第8層から縄文時代晩期～弥生時代前期とみられる土器片数点と、さらに下層の第9層からも縄文土器と考えられる破片が出土している。淡灰褐色細砂（第4層） 弥生時代後期の土器が出土している。

1～5・7は弥生土器壺である。1は胴部中位に最大径をもち、扁球状を呈する。体部内面に板ナデを施すが、他は表面剥離のため調整は不明瞭である。2は内外面ともに板ナデを施し、とくに頸部外側に強く痕跡を残す。3は口唇部の外側をヨコナデして端部の外側に面を作り出す。内面に板ナデを施す。4は頸部が内湾しながらちあがる。頸部外面にタテ方向のミガキを施す。5は頸部が「く」字状に屈曲し、口縁部は短くちあ

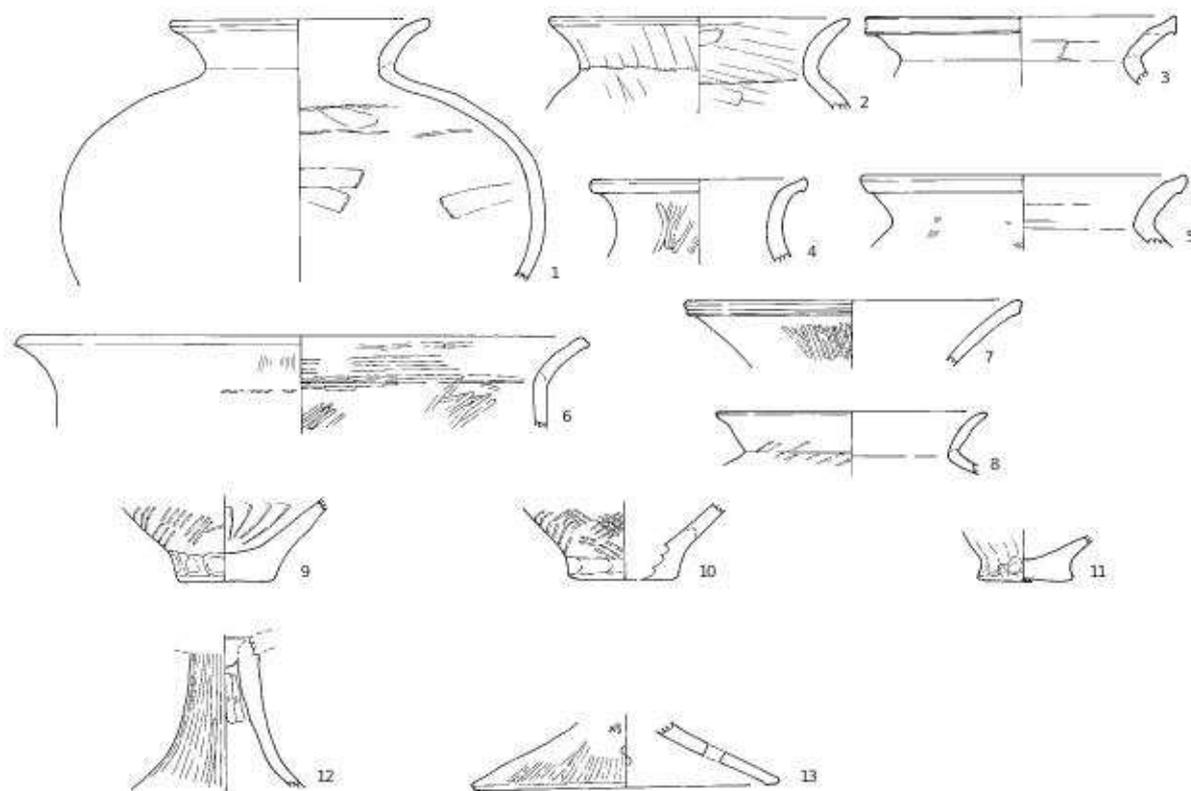


図5 淡灰褐色細砂出土遺物実測図

0 20cm

がる。外面にタテ方向の板ナデ、内面にヨコ方向の板ナデを施す。7はやや外反してたちあがる口縁部をもち、口縁端部は凹む。外面にタテ方向のハケを施す。

6・8～11は弥生土器甕である。6は直立した体部をもち、口縁部は外反する。内外面ともにミガキを施す。8は「く」字状に屈曲して頸部がたちあがり、口縁部は丸くおさめる。9は外面にタタキ、底部内面に放射状の板ナデを施す。10は外面にタタキを施すが、タタキ方向を交差させ、格子状となる部分がみられる。内面は表面剥離のため調整は不明瞭である。11は指オサエとナデによって底部を作り出した痕跡がみえる。12と13は弥生土器高坏である。12はラッパ状に広がる脚部をもつ。坏部と脚部は粘土を充填して接合を行う。外面にはタテ方向のミガキが良好に残る。13は強く広がる裾部であり、外面はタテ方向のミガキが良好に残る。透孔が1つ確認できるが、穿孔数は不明である。以上の資料はいずれも弥生時代後期後半から末の資料と考えられる。

暗茶褐色粘質土(第8層) 縄文時代晩期の土器が出土している。

14は縄文時代晩期の突帯文土器である。内外面ともに表面剥離のため調整は不明瞭である。突帯部には刻み目などは確認できない。

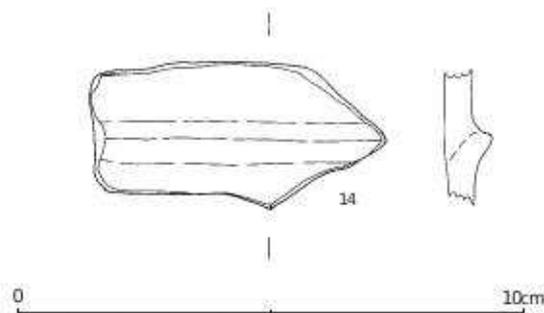


図6 暗茶褐色粘質土出土遺物実測図

## その他

15は北東壁沿いに設けたサブトレンチ内から出土した須恵器坏である。接地部は高台の内側にあり、高台底面はやや凹む。体部のたちあがりは高台に近い位置にある。表面調整は粗く、高台との接合も粗雑である。8世紀代の資料と考えられる。16は土師器壺である。体部は球状で、頸部は直立してたちあがり、口縁端部で短く外反する。体部内面は下部に放射状の板ナデ、中部に指ナデ、上部に粘土紐の輪積みの痕跡と指頭圧痕がみえる。古墳時代前期の資料と推測される。

## 4. まとめ

今回の調査地は、洪水と洪水後の低湿地となった所に水田が営まれるということが繰り返されていたようである。洪水堆積層の弥生時代後期の土器はローリングを受けていないことから、この調査地からほど遠くない位置に集落がある可能性が強い。

第1次調査で出土していた縄文時代晩期から弥生時代前期の遺物は破片が数点確認できたのみで、当時期の集落は今回の調査区からは多少離れているようである。

また、今回の調査では地表面から1.8mまでしか調査できなかったため地山を確認していない。最下層の第9層から縄文土器と考えられる土器片が出土しており、さらに下層に遺構がある可能性を残している。

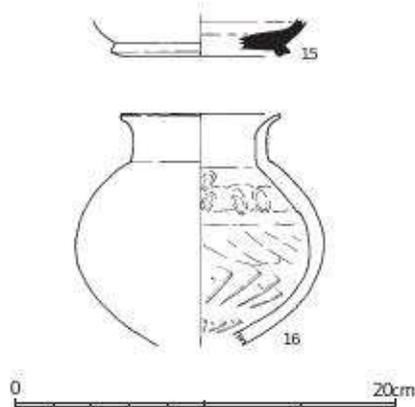


図7 その他の出土遺物実測図



図8 調査地全景（東から）

## 第2節 第12次調査

### 1. 調査の概要

調査地は六番町1丁目地区に位置し、第2次調査地の南西約40m、標高約15mを測る南西方向への緩斜面地に立地する。調査の結果、平安時代と中世の遺構面を検出した。

### 2. 基本層序

盛土の下に、茶褐色極細砂（遺物包含層）が部分的に薄く堆積し、その下が茶褐色極細砂（上面が第1遺構面）、灰褐色～黄褐色極細砂（上面が第2遺構面）となる。遺構面は南側への緩やかな傾斜となっている。

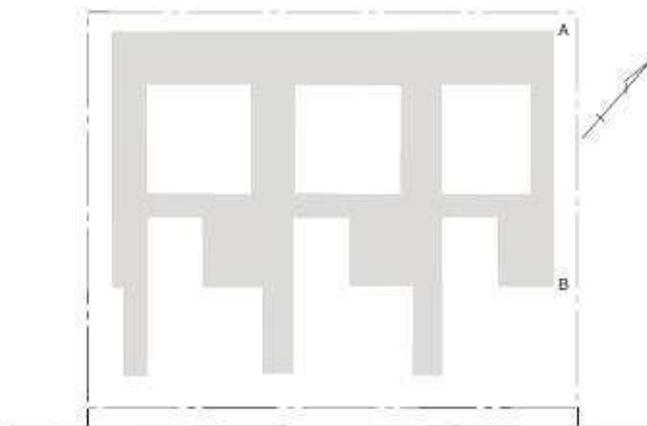


図9 第12次調査範囲図



図10 北東壁断面図



### 3. 第1遺構面

盛土下の茶褐色極細砂の遺物包含層からは、古墳時代後期～中世の遺物が出土している。17は土師器鍋である。口縁部は内湾し、端部は面を持つ。14世紀前半の資料と考えられる。

遺物包含層を除去した後、現地表下10～15cmで第1遺構面が検出された。遺構は調査区の東側に集中して検出され、南西側は攪乱が著しく遺構・遺物は確認できなかった。確認した遺構は土坑4基・ビット11基である。出土遺物から中世の遺構面であると考えられる。

SK01 幅1.2m、長さ2m以上で深さは15cmを測り、断面は浅い皿形で底部は平坦である。SK02・03に切られる。

21は須恵器坏蓋で、端部は断面三角形である。8世紀前半の資料と考えられる。23は須恵器坏で、ほぼ垂直にのびるたちあがりを持つ。TK208型式の特徴を持つが、調整はあまい。その他、古墳時代～奈良時代の土師器・須恵器が出土している。

SK02 北東側が調査区外になる。直径90cm、深さ12cmを測り、断面は浅い皿形で底部は平坦である。

24は須恵器蓋である。形状は半球状で、天井部の大半をヘラケズリで整形する。1条のカキメと1条以上の沈線またはカキメで区画し、同一原体による刺突文で装飾している。

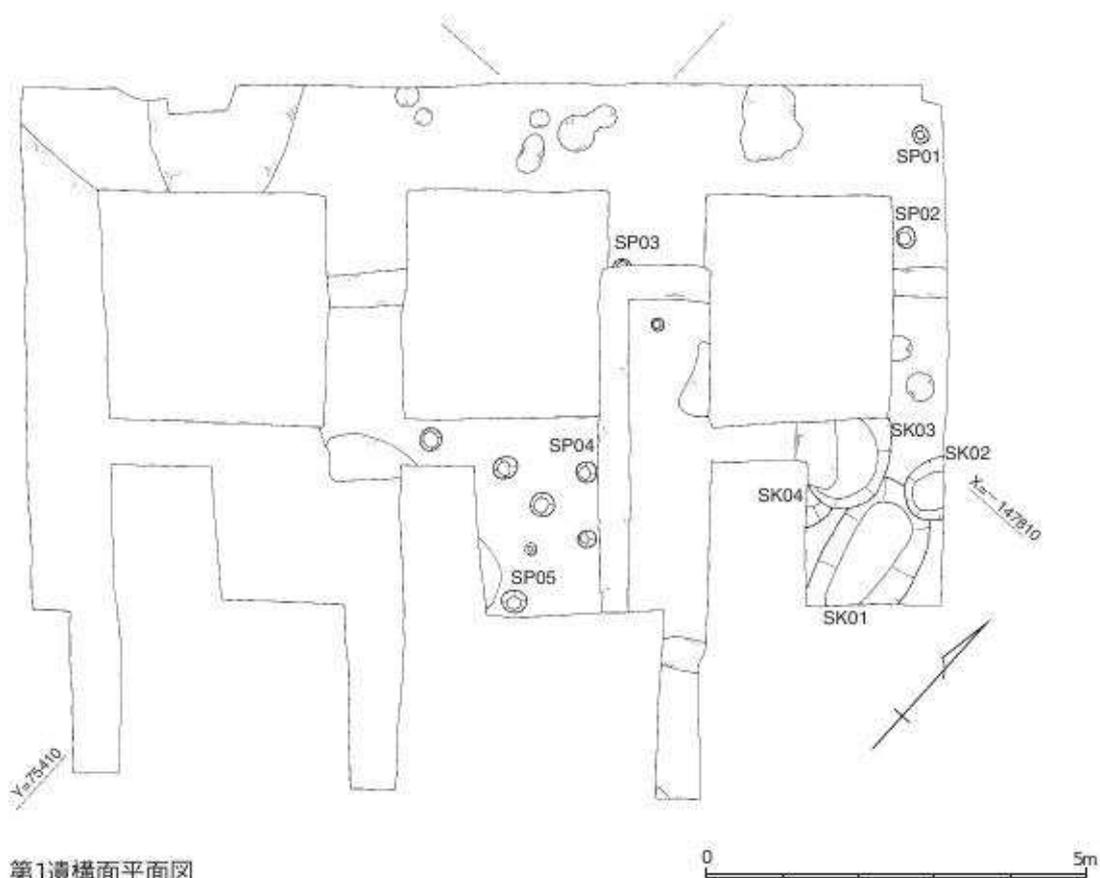


図11 第1遺構面平面図

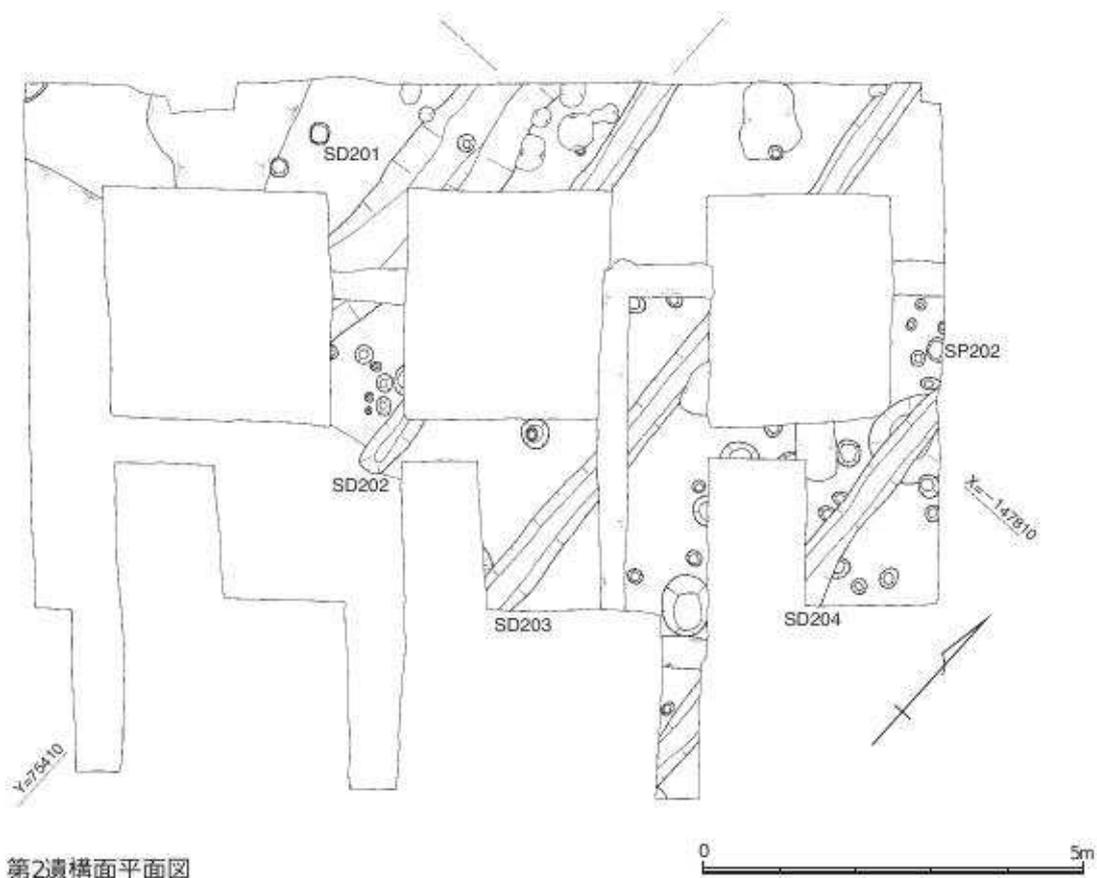


図12 第2遺構面平面図

須恵器定型化以前の特徴を示しており、TK73型式に並行する資料と考えられる。その他、土師器・須恵器が出土している。

SK03 長さ1.3m以上、深さ12cmで、東側のみ残存する。形状は西側が調査区外・攪乱のため不明である。断面は浅い皿形で底部は平坦である。古墳時代の土師器・須恵器が出土している。

SK04 SK03に切られ、また大半が調査区外になるため詳細は不明である。

26は須恵器高坏脚部で、台形の透孔を有し、脚端部は内屈する。TK23・47型式に並行する資料と考えられる。

ピット SP01は直径25cm、深さ12cmを測る。SP02は直径25cm、深さ10cmを測る。SP03は北半分のみ残存しており、直径は22cm、深さ20cmを測る。SP04は直径28cm、深さ25cmを測る。SP05は直径30～35cm、深さ10cmを測る。SP01～05からは、土師器が出土している。

#### 4. 第2遺構面

第2遺構面は、第1遺構面の基盤層である茶褐色極細砂の遺物包含層を除去した後に検出された遺構面で、確認した遺構は土坑2基、溝4条、ピット40基である。平安時代の遺構面と考えられる。

SP202 直径32cm、深さ18cmを測る。

SD201 幅1.4m、深さ40cmの溝である。断面は逆台形で、最下層には淡黒色シルト質極細砂が堆積する。埋土は下層を除きほぼ水平堆積である。

30は土師器台付鉢で、斜め下方に張り出す台部を持つ。10世紀中葉の資料と考えられる。31は須恵器壺の下半部であり、扁平な体部を持つ。肩部から口頸部の形状は不明であるが、底部は方形の高台を持ち、7世紀末以降の資料と考えられる。

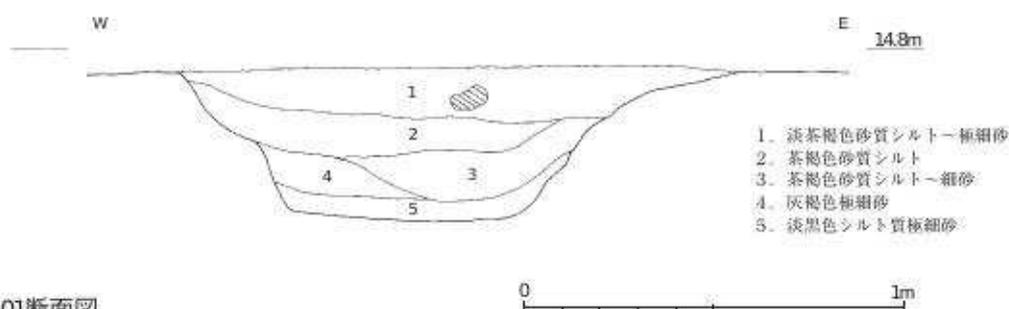


図13 SD01断面図

SD202～204 幅45cm、深さ25～30cmの溝である。断面「U」字形で、埋土は上層が茶灰褐色～茶灰色極細砂、下層が茶褐色砂質シルトである。SD202・203はさらに下層に淡黒色砂質シルトが堆積する。

SD201を含めたこれら4条の溝は、南北方向に並行している。SD201-202-203-204のそれぞれの間隔は1.5m-2.5m-2.8mで、SD202・203・204の3条についてはほぼ同一規模である。

SD201とSD204からは、須恵器、土師器とともに瓦片が出土している。SD201からは平安時代の須恵器坏が出土しており、これらの溝は平安時代頃のものと考えられる。

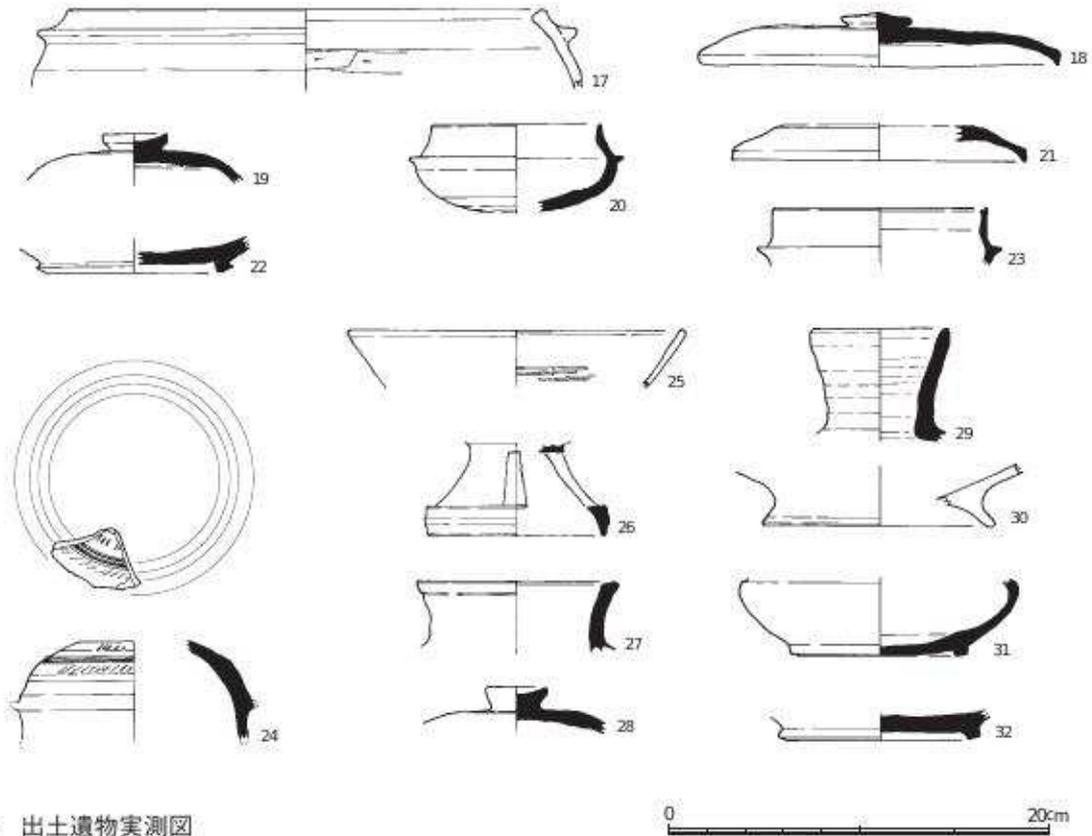


図14 出土遺物実測図

## 5. まとめ

今回の調査で特筆すべきは、並行して確認された溝であろう。これらは、いわゆる水の流れる溝としての機能を持ったものではなく、建物を区画するために掘削されたものである可能性が考えられる。SD202~204は、塀などの構造物があった可能性も否定できない。その方向が南北方向で揃っていることも上記のようなことを考える上で重要であろう。

遺物としては、土師器・須恵器・瓦の他に、図化には至らなかったが製塩土器や土錘がわずかながらも出土した。また、SK01や遺物包含層から布留式甕の小片が出土したが、本調査地の北西側に位置する第25次調査地でも布留式期の遺物が出土しており、その関連性がうかがえる。

### 第3節 第16次調査

#### 1. 調査の概要

調査地は五番町1丁目地区に位置し、第12次調査地の南東約140mで標高約12mの緩斜面地に立地する。工事影響深度までの調査を行った。

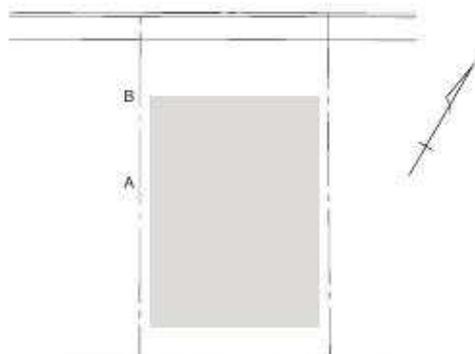


図15 第16次調査範囲図



図16 調査地全景（北西から）

#### 2. 基本層序

盛土・旧耕土の下層は、淡灰色砂質土などの流路状堆積となる。

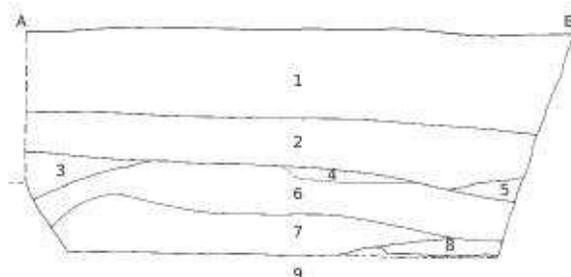


図17 南西壁断面図

1. 盛土
2. 淡灰色砂質土
3. 淡黄褐色砂質シルト
4. 淡灰色砂質土+黒灰色粘質土
5. 淡褐色砂質土
6. 黒灰色粘質土
7. 淡灰色礫まじり砂
8. 黒褐色シルト
9. 淡灰色砂



#### 3. 遺物

33は土師器碗である。体部はやや内湾気味にたちあがる。口縁端部は強くつまみあげられ、外面に低い稜が確認できる。9世紀中頃の資料と考えられる。34は須恵器坏である。断面方形の高台を持つ。35は土人形である。磨滅しており詳細は不明瞭である。

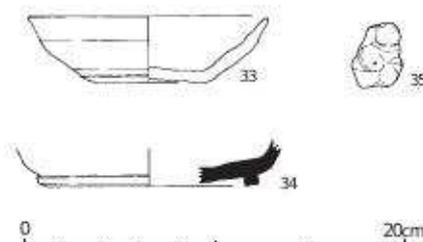


図18 出土遺物実測図

#### 4. まとめ

現地表面から60cmまでは盛土および耕作土であり、土師器・近世陶磁器などとともに現代の遺物が混入しており、遺構・遺物は確認できなかった。その下層については流路状の堆積状況を示しており、一部深掘りしたが顕著な遺物は発見できなかった。しかし、周囲の調査の知見では、流路から縄文時代晚期や弥生時代の土器が出土しており、本調査区でも下層では古い時期の遺物が検出される可能性がある。

## 第4節 第17次調査

### 1. 調査の概要

調査地は、松本8丁目地区で、標高約16mの遺跡北端に位置する。調査は構造物の違いにより現地表面から40cmまでは全体を掘削し、以下は半地下式の駐車場となる東側約25mについてさらに1m調査をおこなった。

なお、西側約15mについては、中世の遺物包含層の半ばまでが工事影響深度となっており、その深さまで掘削したのち精査を行ったが遺構は検出されていない。

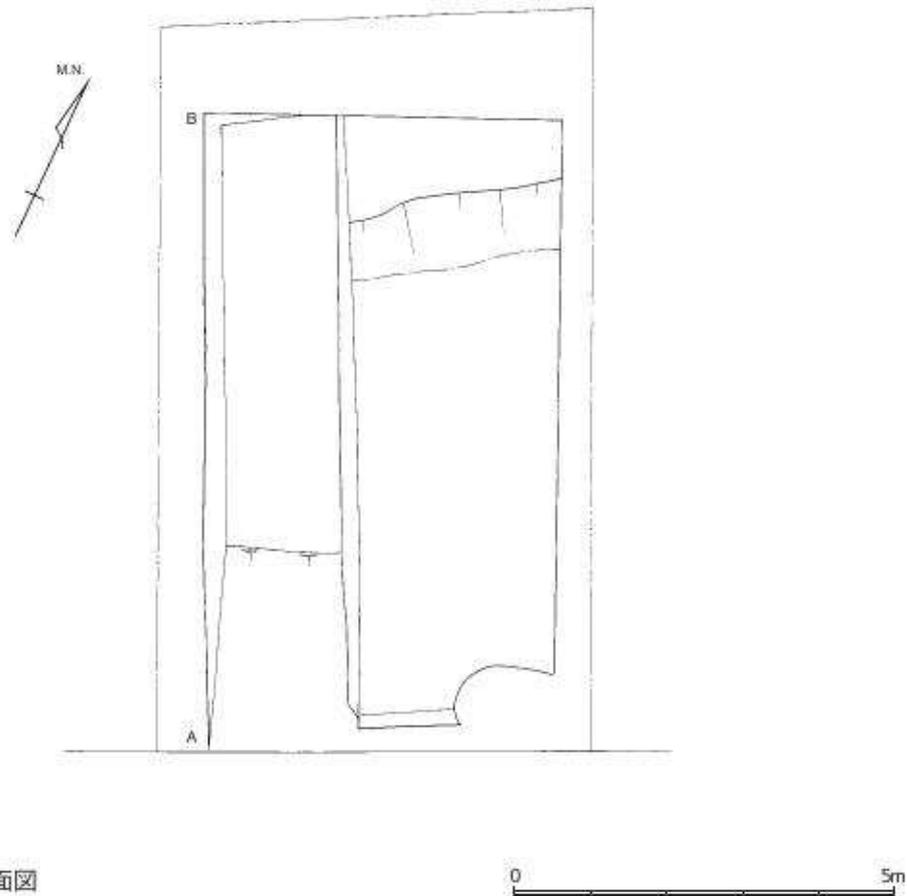


図19 第17次調査平面図

### 2. 基本層序

盛土、黄褐色砂質シルト、灰褐色シルトまじり砂（古墳時代～中世遺物包含層）（T. P. 14.1m）、暗灰色砂まじりシルト（古墳時代～中世の遺物包含層）（T. P. 13.6m）、暗灰褐色シルト（古墳時代の遺物包含層）（T. P. 13.4m）、青灰色シルト（古墳時代の遺物を包含する流路埋土）（T. P. 13.2m）、青灰色砂礫（上層同様）となっている。駐車場部分の調査の工事影響深度は、この層までである。

### 3. 遺構

検出された遺構は、北東から南西へ流れる流路1条のみである。規模については調査面積がわずか25mであったことと、工事影響深度の関係で掘削限界があったため、北側の肩部が検出できただけで、幅や深さは不明である。

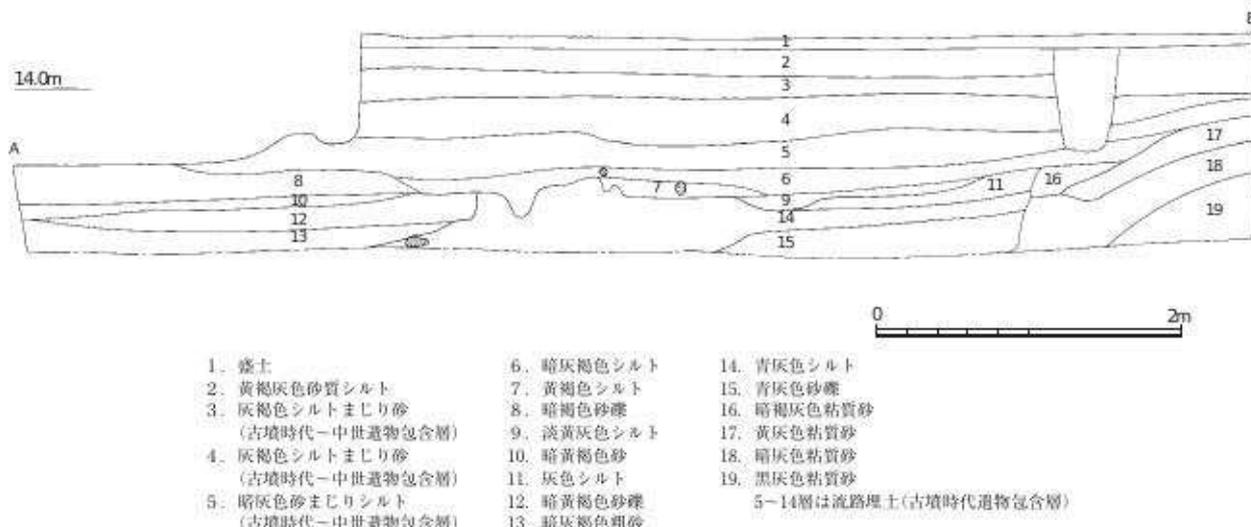


図20 南西壁断面図

#### 4. 遺物

流路からは、古墳時代後期～中世の資料が出土した。遺構の性格上、一括資料として扱い難いが、上層（灰褐色シルトまじり砂～暗灰色砂まじりシルト）からは中世、下層（青灰色シルト層）からは、古墳時代後期の資料の出土が多い。また、布留式土器は比較的まとまって出土しており、全体的にあまりローリングを受けておらず、比較的近処から投棄されたか、流れ込んだものであると考えられる。

36～39は土師器羽釜である。36～38は口縁部が内傾気味にたちあがり、わずかに下方にのびる齔部をもつ。体部は直線的に深い形状である。39は強く内湾する口縁部の外面に、強いナデによる段を6段施す。齔は水平に張り出す。40は土師器脚付鍋で、口縁部は「く」字状に強く屈曲する。これらは、12世紀末～13世紀初頭の資料と考えられる。

41は須恵器坏蓋で、天井部外面のヘラ削りの範囲が約3/4であり、TK23型式の古相を示すと考えられる。42は須恵器広口壺の口縁部で、端部は面を持ち明瞭な沈線を巡らす。下方の稜は丸く、43より新相を示す。43は須恵器広口壺で、口縁端部下部にシャープな稜を付し、頸部とのほぼ中間に沈線を巡らす。44は須恵器甕で口縁端部は丸い。胴部外面はタタキ後、上方2/3はカキメを施す。

45は鉢で、内面に板ナデの痕跡が残る。46は小型の土師器甕で、底部に複数の孔を穿孔する。外面下半はタタキの方向を直交させ、格子状の整形痕が残る。47は小型丸底壺で、口縁部は「く」字状に強く外反し、直線的にのびる。体部内面のヘラケズリの痕跡はなく、器壁は厚い。48は土師器高坏で、坏体部内面は平坦である。脚部は柱部から強く外方に屈曲する。庄内式新段階から布留式古段階の資料と考えられる。



図21 調査地全景（北西から）

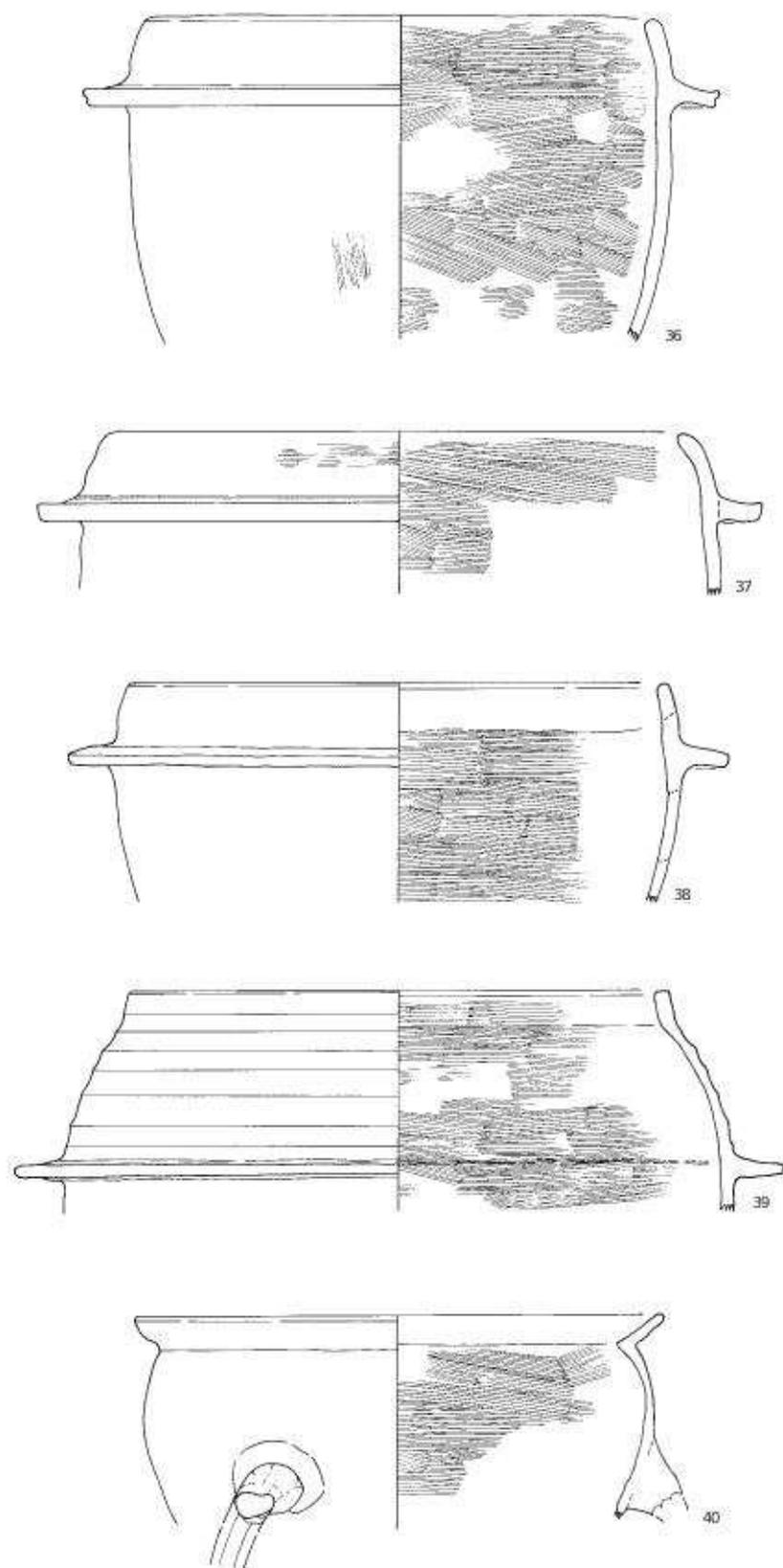


图22 流路出土遺物実測図①

0 20cm

49～55は土師器甕である。器表面の残存状況が悪いものが多い。頸部内面の屈曲は、単純に「く」字状を呈すタイプ以外に、強いユビオサエにより2段に屈曲するタイプ(49・52・55)を含む。口縁部は、わずかに内湾してたちあがり、口縁端部を丸くおさめるタイプ(49・50)と、上部に面を持つタイプ(51～55)がある。体部外面はハケ(49・52・53)、体部内面は板ナデの痕跡が残る資料を含む。布留式古段階に収まる資料と考えられる。56は広口壺である。短い口縁部が外反し、口縁端部はわずかに凹む面を持ち、斜め下方向に張り出す。胎土は粗く、胴部内面にはヘラケズリを施す。吉備からの搬入土器と考えられ、弥生時代後期前半の資料と考えられる。

## 5. まとめ

今回の調査地では流路1条が検出されたにすぎないが、埋土から出土した土器の状態から、ごく近くに古墳時代の集落の存在をうかがうことができる。

その他、図化にはいたらなかったが、奈良時代～平安時代の高台を持つ須恵器や「て」の字状口縁土師器皿等が出土している。

中世の遺物は、煮炊具が目立つ出土状況となった。

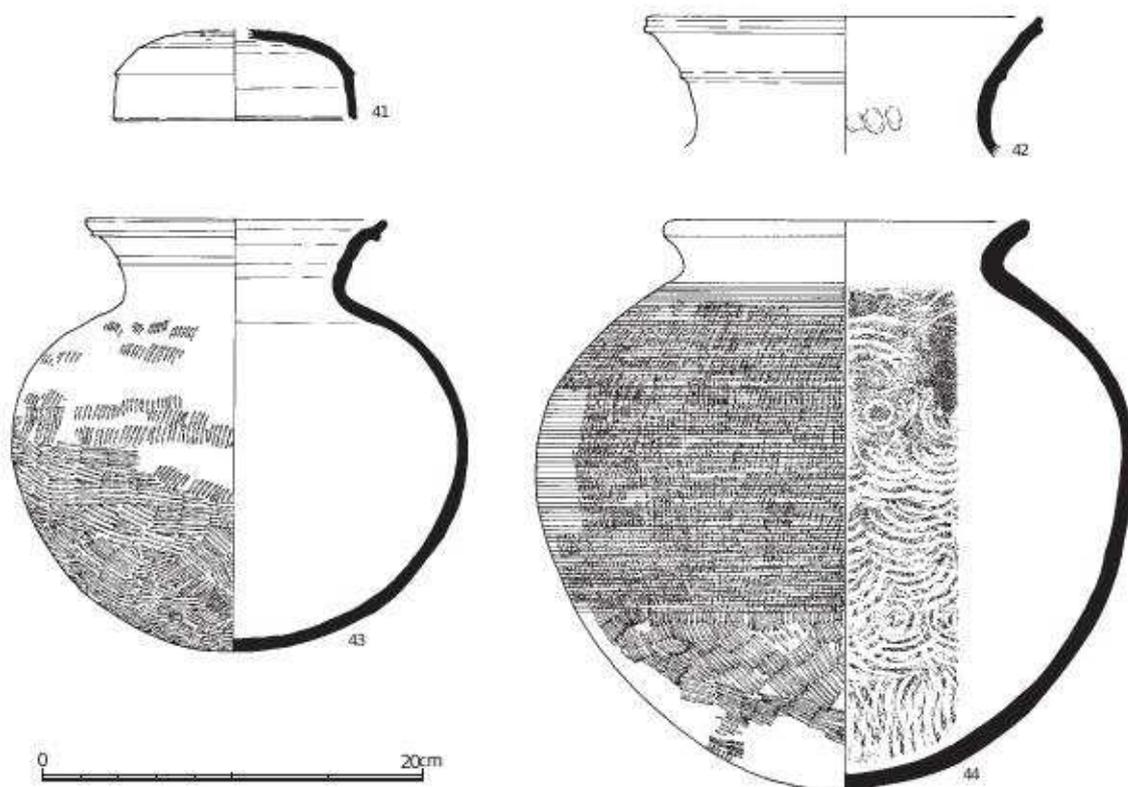


図23 流路出土遺物実測図②

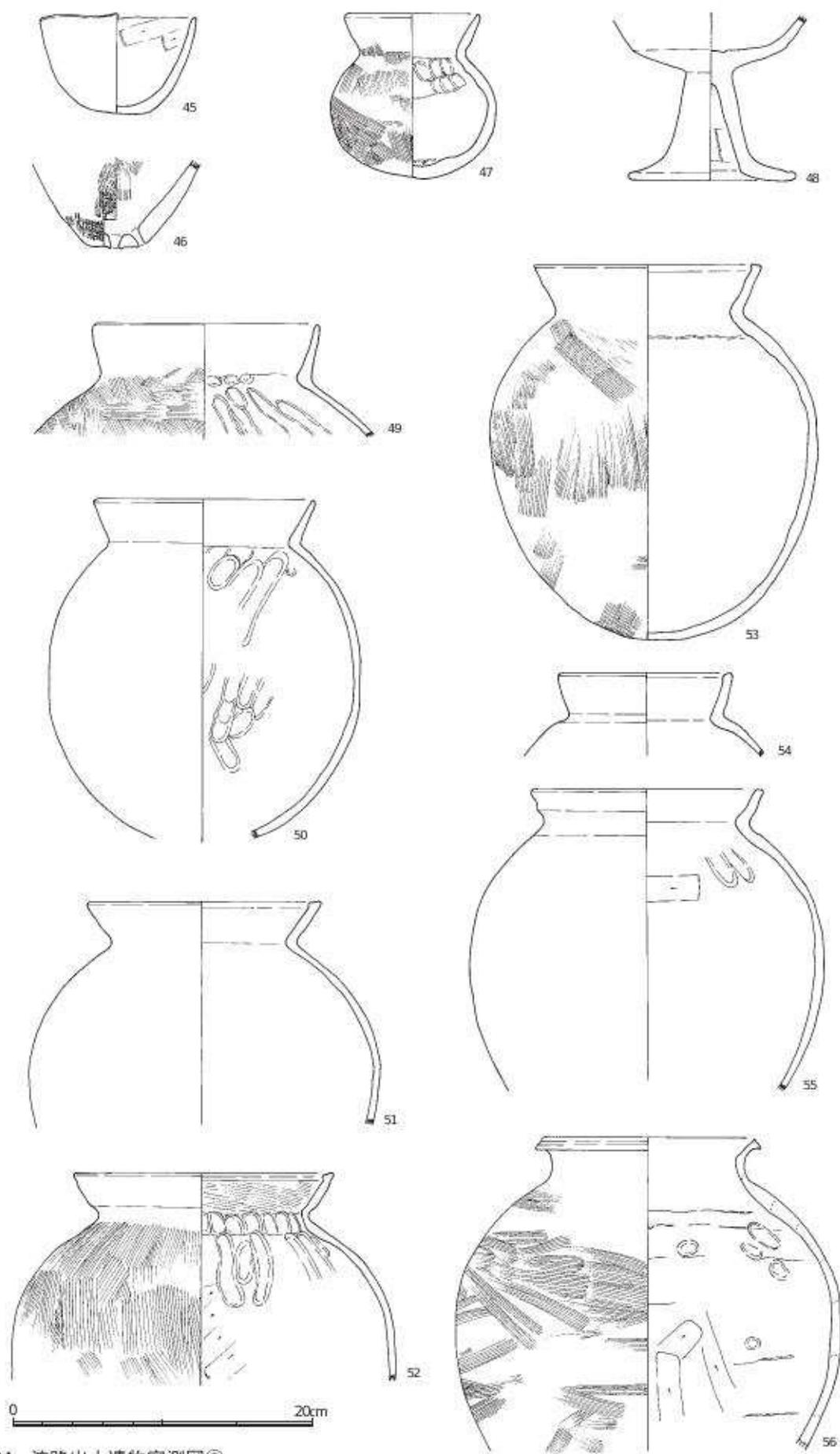


图24 流路出土遺物実測図③

## 第5節 第23次調査

### 1. 調査の概要

調査地は五番町2丁目地区で、標高約9.6mの緩斜面地に位置する。調査は個人住宅の建設に伴うもので、工事影響深度である現地地表下1.1mまで調査を行った。

### 2. 基本層序

現代の盛土および耕作土の下は、中世の遺物包含層である灰色細砂、古墳時代後期の遺物包含層である黒褐色粘土質シルト（上面が第1遺構面）、褐灰色極細砂（上面が第2遺構面）となる。中世と古墳時代後期の2面の遺構面を確認した。

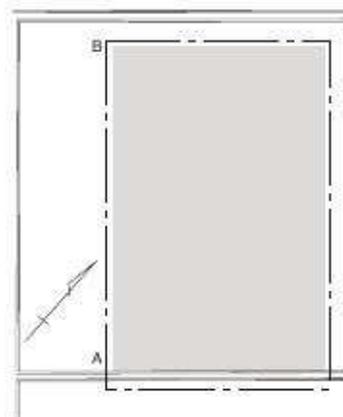


図25 第23次調査範囲図

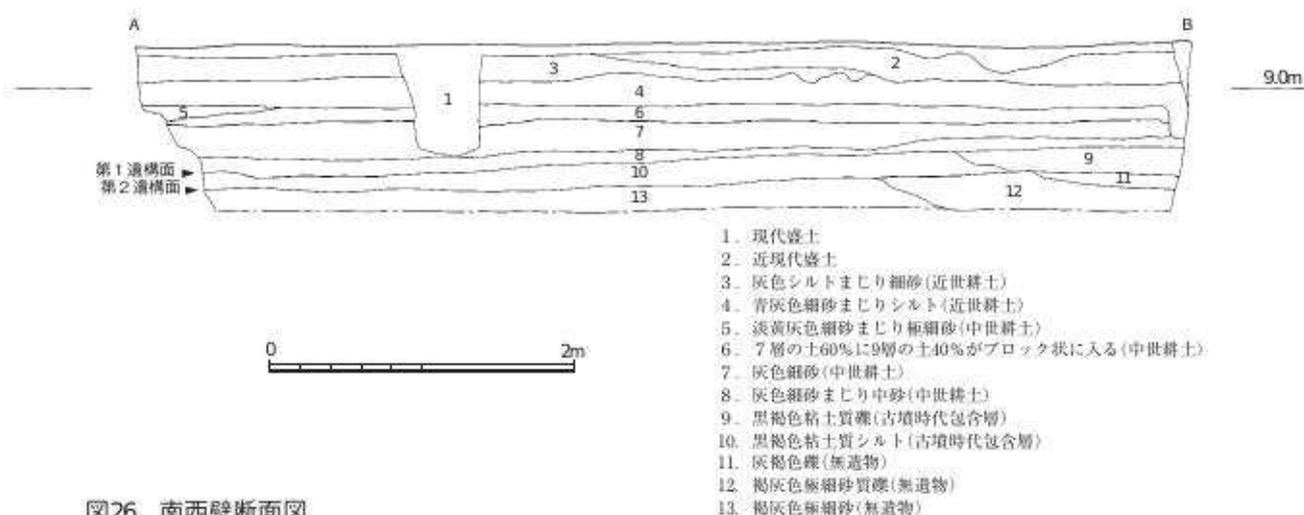


図26 南西壁断面図

### 3. 灰色細砂

中世の資料が出土した。57は白磁碗である。口縁端部が肥厚し、体部はゆるく内湾する。58は白磁皿である。内面には文様を刻む。59は須恵器壺である。底部は回転糸切りの痕跡が残る。見込み部にゆるい凹みをもつ。57～59はいずれも、11世紀後半～12世紀前半の資料と考えられる。60は東播系の須恵器鉢である。口縁端部は逆三角形状を呈す。体部は内外面ともにロクロ目をよく残す。12世紀～13世紀の資料と考えられる。61と62は土師器羽釜である。61は鏝部が欠損する。外面の調整は不明瞭であるが、内面はハケとナデを施す。外面にコゲの付着が確認できる。62は口縁部周辺の表面が剥離する。口縁端部は面取りを行う。内面にハケを施す。61と62はいずれも12世紀末～13世紀初頭の資料と考えられる。

### 4. 第1遺構面

ほぼ円形のピットを2基検出した。SP01は直径18cmで深さ5cm、SP02は直径65cmである。いずれのピットからも中世の遺物が出土している。

### 5. 黒褐色粘質土シルト

飛鳥時代の資料が出土した。63は須恵器坏である。底部外面は時計方向の回転ヘラケズリ、その他は回転ナデを施す。飛鳥I～II型式に並行する資料と考えられる。

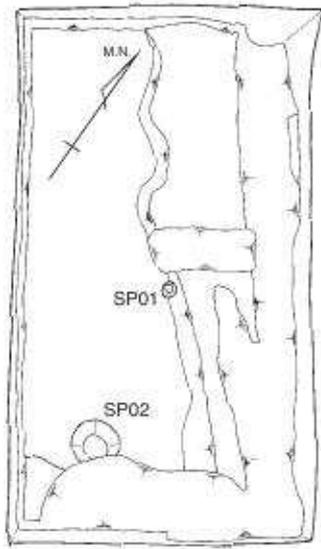


図27 第1遺構面平面図

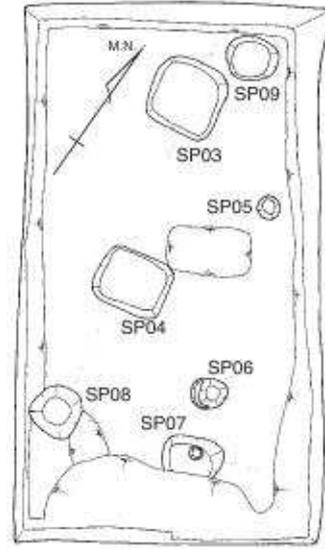


図28 第2遺構面平面図

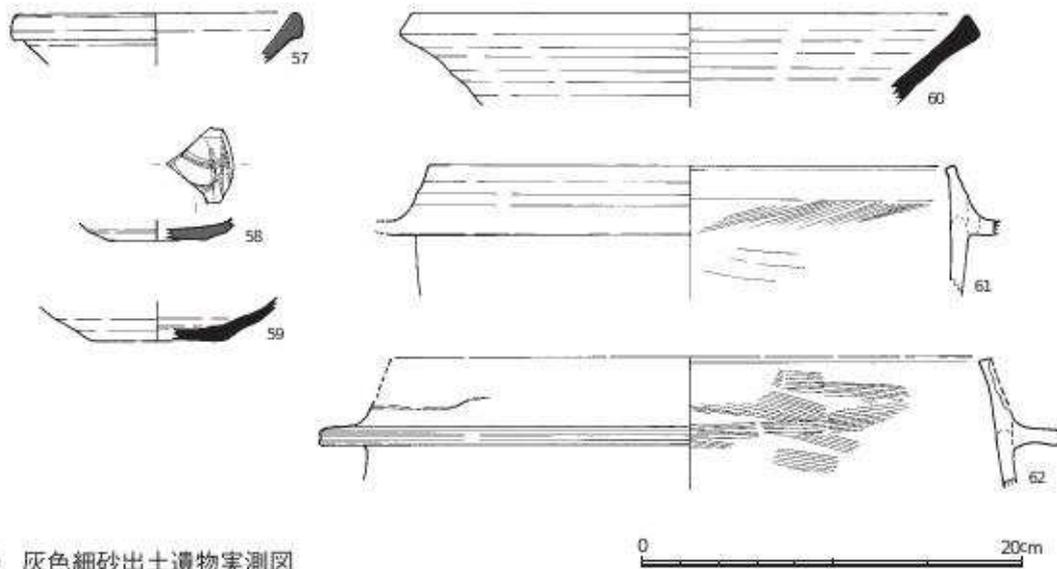


図29 灰色細砂出土遺物実測図

## 6. 第2遺構面

掘立柱建物が1棟、ピットを3基検出した。

**SB01** 南北2間(4.5m)以上×東西1間(1.9m)以上の、側柱のみの掘立柱建物である。柱掘形は方形で大型のものとやや小ぶりのものがあり、小型の柱穴が隅になる。柱穴埋土出土の土器より、古墳時代後期に位置づけられる。

**SP03** 平面形が98×95cmの方形で、深さ24cmを測る。柱痕の直径は34cmである。

64は土師器甕である。口縁部断面形がS字状を呈した弥生時代～古墳時代における東海系台付甕の可能性があるが、柱穴の時期とは異なる。65は土師器壺である。頸部はやや外傾しながら直線的にひらく。内外面ともに表面剥離のため調整は不明瞭である。体部外面に被熱の痕跡を残す。

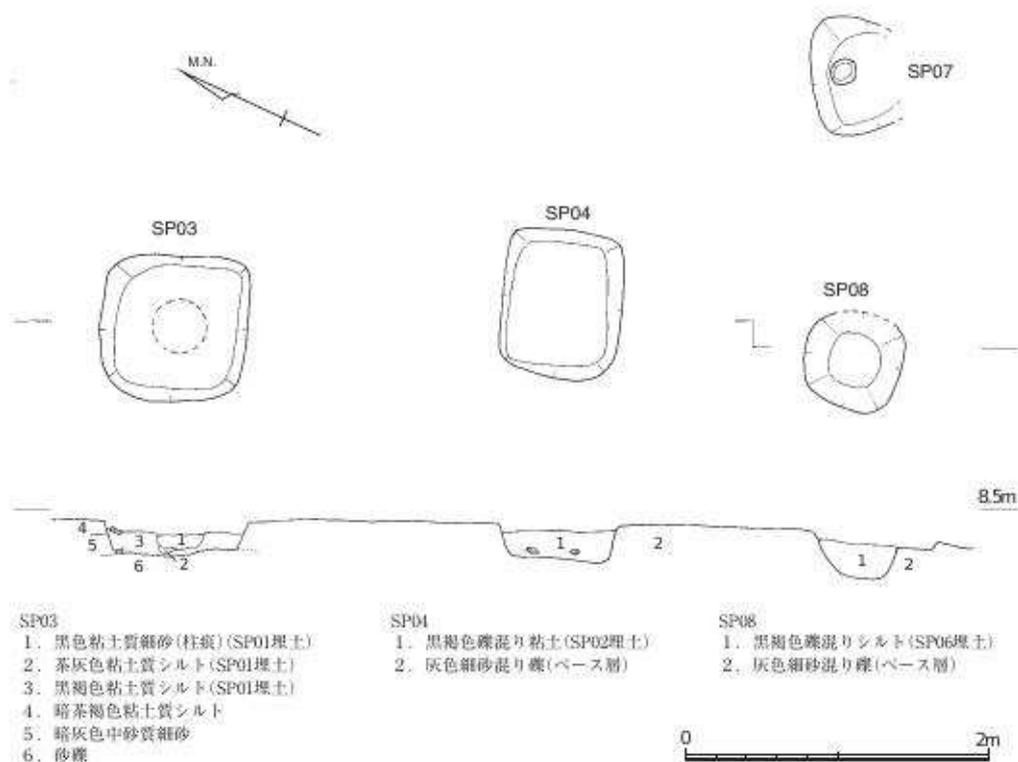


図30 SB01平・断面図

SP04 平面形は97×78cmの長方形で、深さ25cmを測る。

SP05 直径30cm、深さ23cmを測る。

SP06 直径42～47cmで、深さ46cmを測る。

SP07 長軸80cm、深さ28cmを測る。柱痕は直径18cm、深さ45cmを測る。

SP08 平面形は丸みを帯びた方形で、一辺64cm、深さ32cmを測る。

#### 7. まとめ

今回の調査では、古墳時代～中世の土師器・須恵器等が出土したが、実測可能な資料はわずかであった。時期的には古墳時代後期（5世紀末～6世紀初頭）の土器が、ほとんどを占めていた。

今回の調査地は、平成9年度に実施された第10次調査の調査区の北側に隣接した場所である。第10次調査では、古墳時代後期の建物、滑石製品、韓式系土器等の特徴的な遺構、遺物が出土している。今回の調査でも、そのような古墳時代後期の遺構の広がりと考えられた。調査面積は広くなかったが、建物遺構が検出されたことから、周辺に集落が広がることが確認できた。

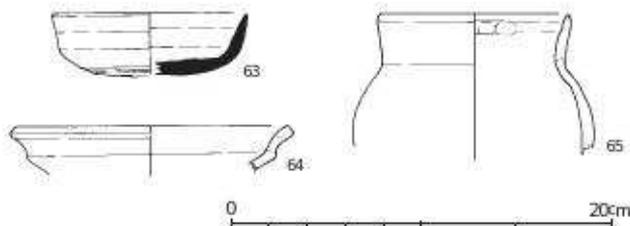


図31 第2遺構面出土遺物実測図

## 第6節 第25次調査

### 1. 調査の概要

今回の調査地は、上沢遺跡の北西部にあたり、第1次調査地Ⅱ区の西方約40mの地点である。現地表面の標高は約17mで、北から南に向かって緩やかに傾斜する地形である。

古墳時代と中世の3面の遺構面を確認した。

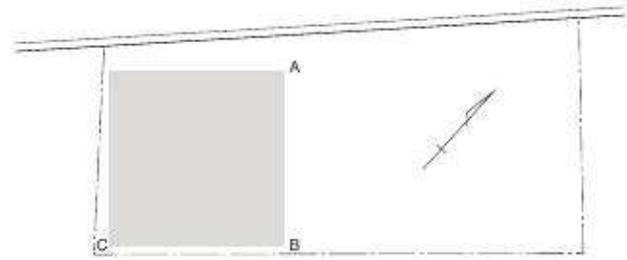
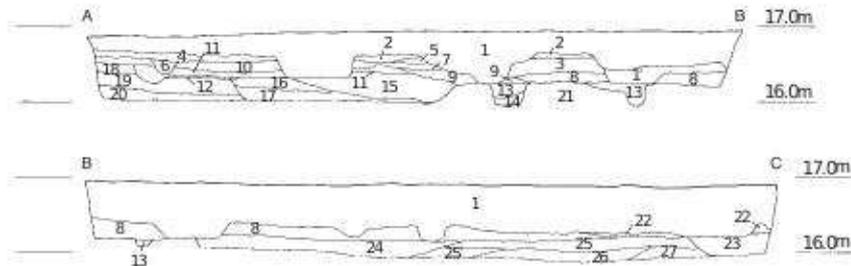


図32 第25次調査範囲図

### 2. 基本層序

基本層序は、盛土、旧耕土、灰黄色砂質土、褐色粘性砂質土から淡褐色砂質土（上面が第1遺構面）、淡黒褐色砂質土～黒褐色粘性砂質土（上面が第2遺構面）、淡灰黄色細砂質土から暗褐色粘質土（上面が第3遺構面）である。3面の遺構面のうち、第2面は部分的に存在し、第2面と第3面を同時に検出している箇所がある。



- |                   |                       |                     |               |
|-------------------|-----------------------|---------------------|---------------|
| 1. 盛土             | 7. 暗灰褐色砂質土 小礫まじり      | 14. 黒褐色粘性砂質土(ビット埋土) | 21. 淡灰黄色細砂質土  |
| 1. 盛土・攪乱          | 8. 淡黒褐色砂質土            | 15. 暗灰色砂利           | 22. 暗灰褐色粘性砂質土 |
| 2. 暗青灰色粘性砂質土(旧耕土) | 9. 暗灰褐色砂質土            | 16. 暗褐色砂            | 23. 淡黒褐色粘性砂質土 |
| 3. 灰黄色砂質土         | 10. 黒褐色砂質土            | 17. 茶褐色粗砂           | 24. 黒褐色砂質土    |
| 4. 褐色粘性砂質土        | 11. 暗黒褐色粘性砂質土(SB01埋土) | 18. 暗黄褐色粘性砂質土       | 25. 黒褐色粘性砂質土  |
| 5. 淡褐色砂質土         | 12. 暗黄褐色細砂質土(SB01埋土)  | 19. 黒褐色粘質土          | 26. 黒色粘質土     |
| 6. 灰褐色粘性砂質土       | 13. 淡黒褐色細砂質土(ビット埋土)   | 20. 明褐色砂質土          | 27. 暗褐色粘質土    |

図33 東・南壁断面図



### 3. 表土～灰黄色砂質土出土の遺物

中世以前の資料が出土した。66と67は表土から出土した。66は土師器坏である。内面に暗文を2段めぐらす。飛鳥Ⅳ～Ⅴ型式に並行する資料と考えられる。67は土師器羽釜である。体部は内湾してたちあがり、水平方向に短くのびる鋳部を持つ。内面にヨコハケを施す。12世紀末～13世紀前半の資料と考えられる。68は灰黄色砂質土から出土した棒状土錘である。欠損のため孔は1つ残るのみである。

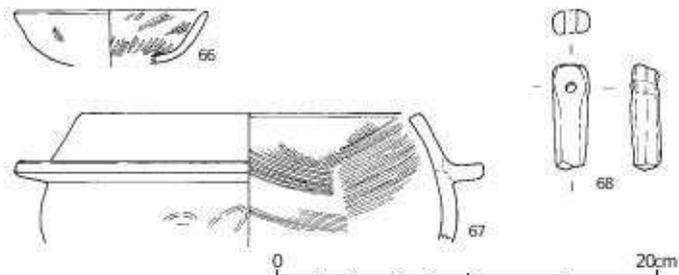


図34 表土～褐灰色砂質土出土遺物実測図

## 4. 第1遺構面

盛土、旧耕土、灰黄色砂質土直下で検出した遺構面である。南東部では盛土直下で第1遺構面を検出した。暗渠・建物基礎などの攪乱があり、遺構面は良好ではなかったが、旧耕作地に伴うであろう段落ちと、溝、ピットを検出した。遺物は、土師器・須恵器・瓦器・瓦などが出土している。時期は、中世と考えられる。

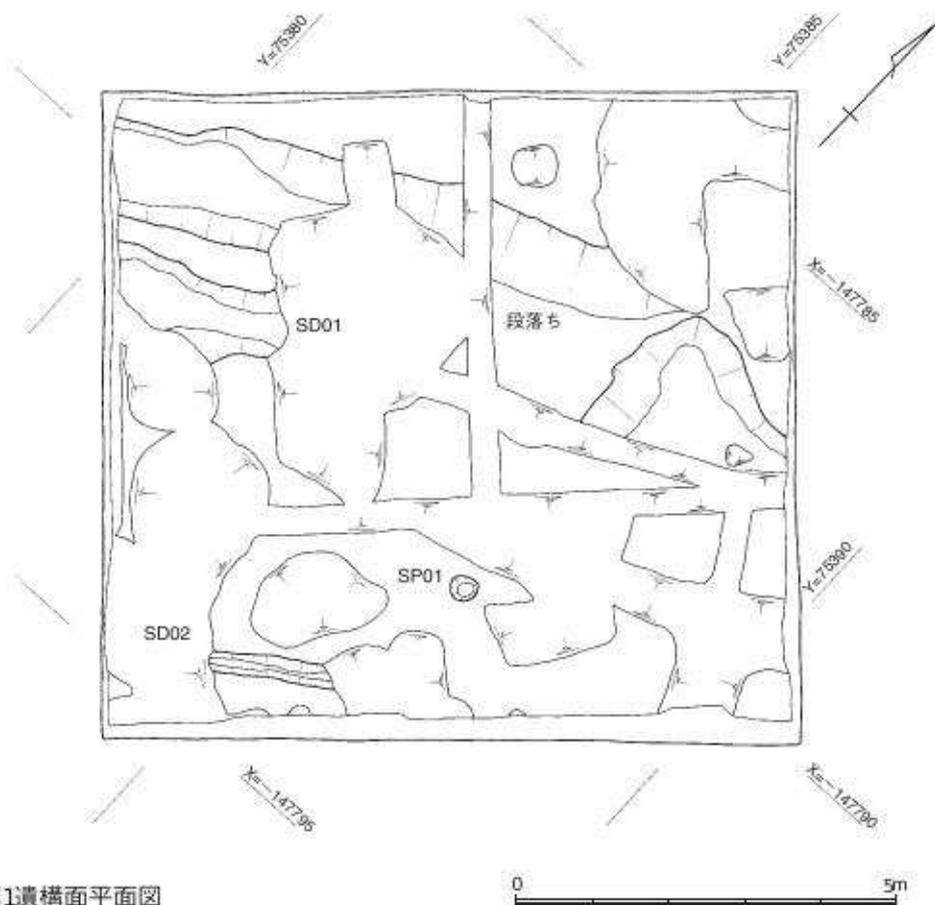


図35 第1遺構面平面図

SD01 幅約1m、深さ10~15cmの北東~南西方向の溝である。この方向は段落ちと平行する。西側は調査区外のため、また東側および南西側は削平されているため全体は不明である。北肩は段落ちの埋土である暗灰色砂質土上面から切り込む。埋土上層はにぶい黄色砂質土で、下層は暗褐色粘性砂質土である。土師器・須恵器(古墳時代坏小片・甕体部など)が出土している。

本遺構からは、奈良~平安時代の資料が出土した。69は須恵器坏である。底部外面には回転ヘラ切りの痕跡を残す。体部はやや内湾気味に短くたちあがる。8世紀の前半の資料と考えられる。70は須恵器長頸瓶である。肩部に沈線を2条巡らせるが、シャープさを欠く。全体的に自然釉がかかり、焼成時は正位に設置されたと

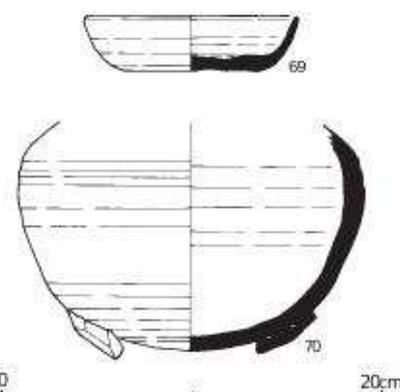


図36 SD01出土遺物実測図

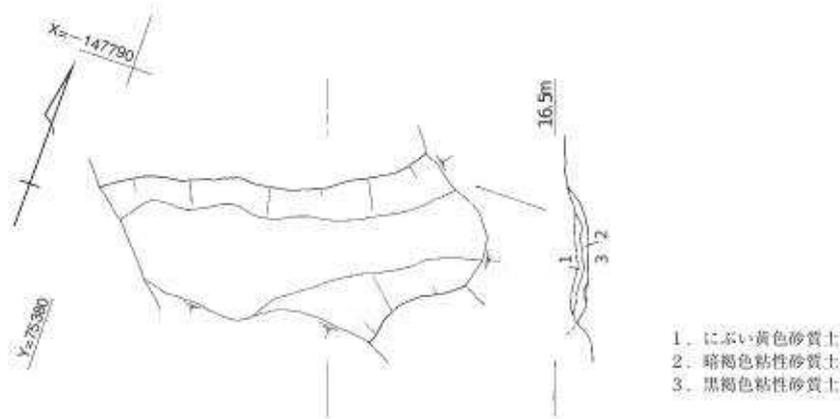


図37 SD01平・断面図



考えられる。底部外面には融着した土器片が2点みられるが、焼成時にトチンのかわりに使用されたと推測される。底面内部には回転ナデののち指ナデを施す。

SD02 南西部で検出した溝である。幅約25cm、深さ約8cmで、断面が浅い塊形の溝である。SD01と方向をほぼ同じにする。約1.5m分を検出したが、東西両側とも攪乱のため全体は不明である。土師器・須恵器・瓦器が出土している。

SP01 南東部で検出した直径約30cm、深さ約20cmのピットである。埋土上層はにぶい黄褐色細砂質土で下層は黒褐色粘性砂質土である。土師器（小皿小片含む）、須恵器塊底部（12世紀後半）が出土している。

### 5. 灰褐色粘性砂質土

古墳時代後期～古代までの遺物が出土した。71は須恵器甕である。頸部はラッパ状に大きく広がり、口縁部で斜めにたちあがる。口縁から頸部にハケを施す。TK10～TK43型式に並行する資料と考えられる。73は丸瓦片である。内面に布目痕と模骨痕を残す。

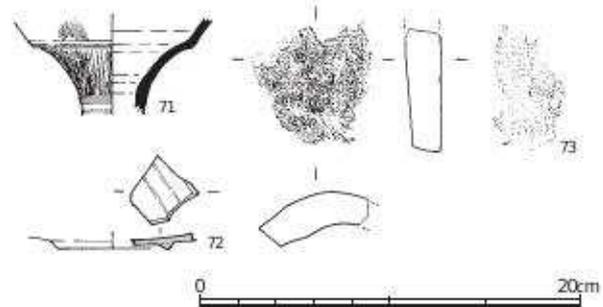


図38 灰褐色粘性砂質土出土遺物実測図

### 6. 第2遺構面

灰褐色粘性砂質土を掘削して、黒褐色砂質土上面で検出した。時期は古墳時代～中世と考えられる。概して遺構は少なく北西部を中心に土坑4基、ピット13基を検出した。北西部でピットを数基検出したが、建物としてのまとまりは確認できない。調査地の北東部では遺物包含層の厚みが薄く、一部すでに第3遺構面を検出した箇所がある。一方、南東部では削平されているため第2遺構面が存在しない。

なお、南東部のSP26・27は調査時は第3遺構面で検出したが、遺構の時期から第2遺構面に含めて報告する。

SK01 幅63cm、長さ75cm以上の土坑である。北側は調査区外のため不明である。古墳時代前期の土師器甕・高坏が出土しているが、後述の第3遺構面上で検出した土器群の上層部分にあたる。

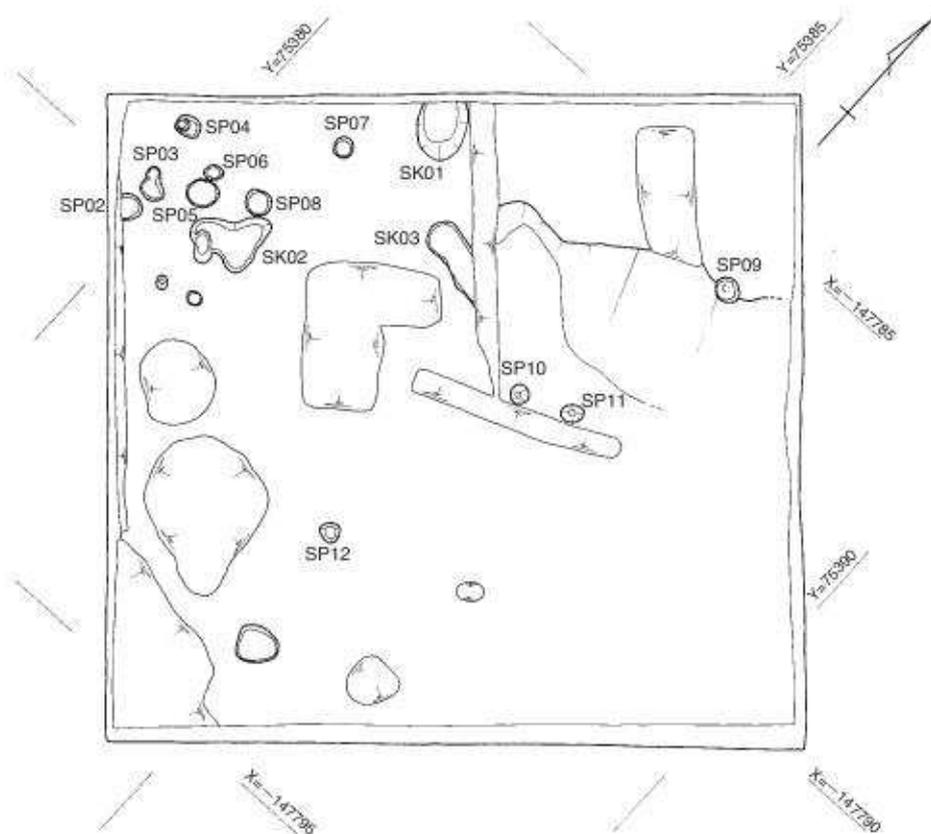


図39 第2遺構面平面図

74と75は土師器高坏である。ともに底部と体部との境は明瞭な稜を作り出し、口縁部は丸くおさめる。74は坏底部の中央がやや凹むのに対し、75は坏底部が平坦である。脚裾部で強く広がり、内面に絞り痕がみえる。76は土師器壺である。体部は肩部より最大径をもつ扁球状を呈す。外面に

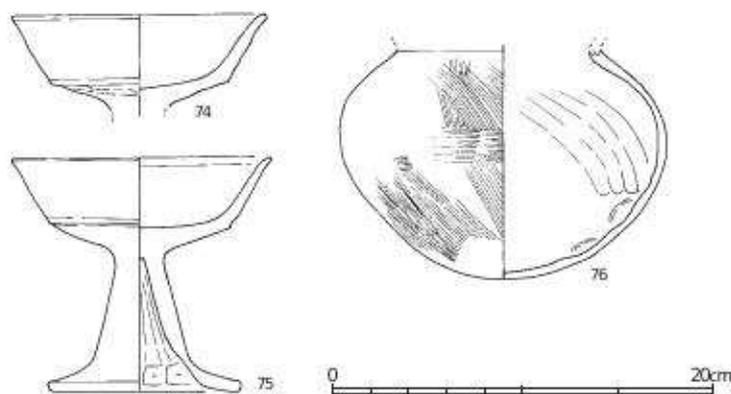


図40 SK01出土遺物実測図

ハケ、内面下部に指オサエ、中央部から上部に指ナデを施す。体部外面に黒斑が確認できる。いずれも布留式後半段階の資料と考えられる。

SK02・03 土師器片・須恵器片が出土している。

SP02 北西部で検出した。径35cm、深さ10cmを測る。ハケ目のある甕体部を含む土師器片が出土している。

SP03 北西部で検出。非常に浅く不整形であり、ピットの可能性は低い。暗灰色砂質土を埋土とする。ハケ目のある甕体部片ほか土師器片と須恵器極小片が出土している。

SP04 北西部で検出した。直径34×27cmの方形に近い楕円形で、深さ22cmを測る。直径約15cmの柱痕を検出した。埋土は黒褐色細砂質土である。土師器・須恵器・瓦器の小片が出土した。出土遺物の所属時期から、検出は第2遺構面であるが、遺構の帰属としては第1遺構面が妥当かと思われる。

72は瓦器塚である。高台は逆三角形状を呈し、内面に暗文を施す。12世紀後葉から13世紀前半の資料と考えられる。

SP05 北西部で検出し、直径約40cm、深さ3cm、暗灰色砂質土を埋土とする。土師器小片が出土している。

SP06 北西部で検出し、径25×20cm、深さ18cmの楕円形のピットである。灰黄褐色粘性砂質土を埋土とする。ハケ目のある体部片ほか土師器の小片が出土している。

SP07 北西部で検出し、直径26cm、深さ18cmを測る。直径約10cmの柱痕を確認した。埋土は黒褐色細砂質土で、遺物は出土していない。

SP08 北西部で検出し、直径35cm、深さ6cmで、暗灰色砂質土を埋土とする。土師器小片が出土している。

SP09 北東部で検出し、直径34cm、深さ25cm、灰黄褐色細砂質土を埋土とする。直径約10cmの柱痕が確認された。土師器が出土しているが時期は不明である。

SP10 北東部で検出し、直径25cm、深さ25cm、黄灰色粘性砂質土を埋土とする。斜め方向に刺さる直径約10cmの柱痕が確認された。遺物は出土していない。

SP11 北東部で検出し、直径30×25cmの楕円形で、深さ30cmを測る。黄灰色粘性砂質土を埋土とする。直径約10cmの柱根が確認された。遺物は出土していない。

SP12 南西部で検出し、直径25cm、深さ24cmを測る。直径約10cmの柱痕を検出した。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は土師器小片や羽釜片が出土しているが詳細な時期は不明である。

SP26・27 南東部の暗褐色粘質土上面で検出した柱穴である。南北方向の溝状遺構からさらに掘りくほめられた状態で検出した。平面は40×50cmの隅丸方形で、深さは約20cmである。埋土は、上層が淡黒褐色細砂質土、下層が黒褐色粘性砂質土である。SP26からは土師器片が比較的多く出土し、SP27からは土師器・須恵器（古墳時代か）の小片が出土している。

ピットからの出土遺物はいずれも小片で時期を確定しがたい。

## 7. 黒褐色砂質土

弥生時代後期～中世までの資料が出土した。77は土師器丸底小鉢である。体部は強く内湾し、丸味をもって立ちあがる。口縁端部は外面に強いナデを施す。外面は表面剥離のため調整は不明瞭であるが、内面にナデを施す。中世の資料と考えられるが、具体的な時期は不明である。78は土師器皿である。口縁部は水平方向にのびたのち、端部付近で短く直立する。外面に指オサエ、内面にハケナデを施す。10世紀中ごろから後半の資料と考えられる。79は土師器坏である。体部は内湾してたちあがり、口縁部外面に強いナデを施す。8世紀後半の資料と考えられる。80と81は弥生土器鉢である。80は体部が半球状で、口縁部内面に平坦面を作る。81は体部が内湾してたちあがる。口縁部は外面が凸面、内面に浅い凹面を作り出す。内外面ともに表面剥離のため調整は不明瞭である弥生時代後期の資料と考えられる。82と83は土師器高坏である。82は坏底部と体部との境にゆるい稜を作り出す。坏底部は水平で、体部は斜め上方にまっすぐにのびる。弥生

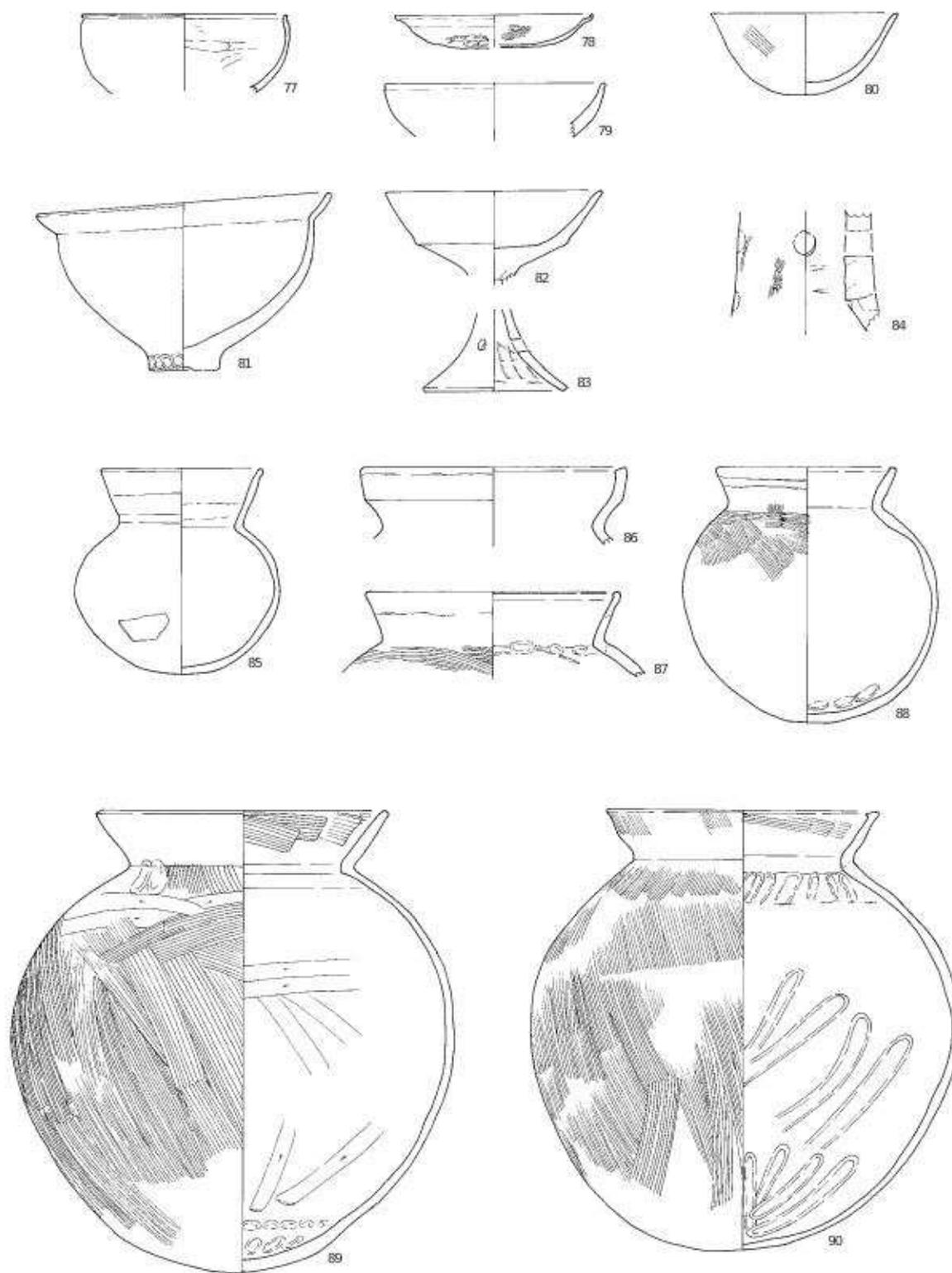


図41 黒褐色砂質土出土遺物実測図①

0 20cm

時代後期末～古墳時代前期前半の資料と考えられる。83はラッパ状に開く脚部で、裾端部は四角くおさめる。円形の透孔を3方向に穿ったものと考えられる。内面には粘土接合の痕跡が残り、板状の粘土を巻いたのち成形を行ったものと推測できる。古墳時代前期後半の資料と考えられる。84は弥生土器器台である。脚柱部厚は最大で2cm近くを測

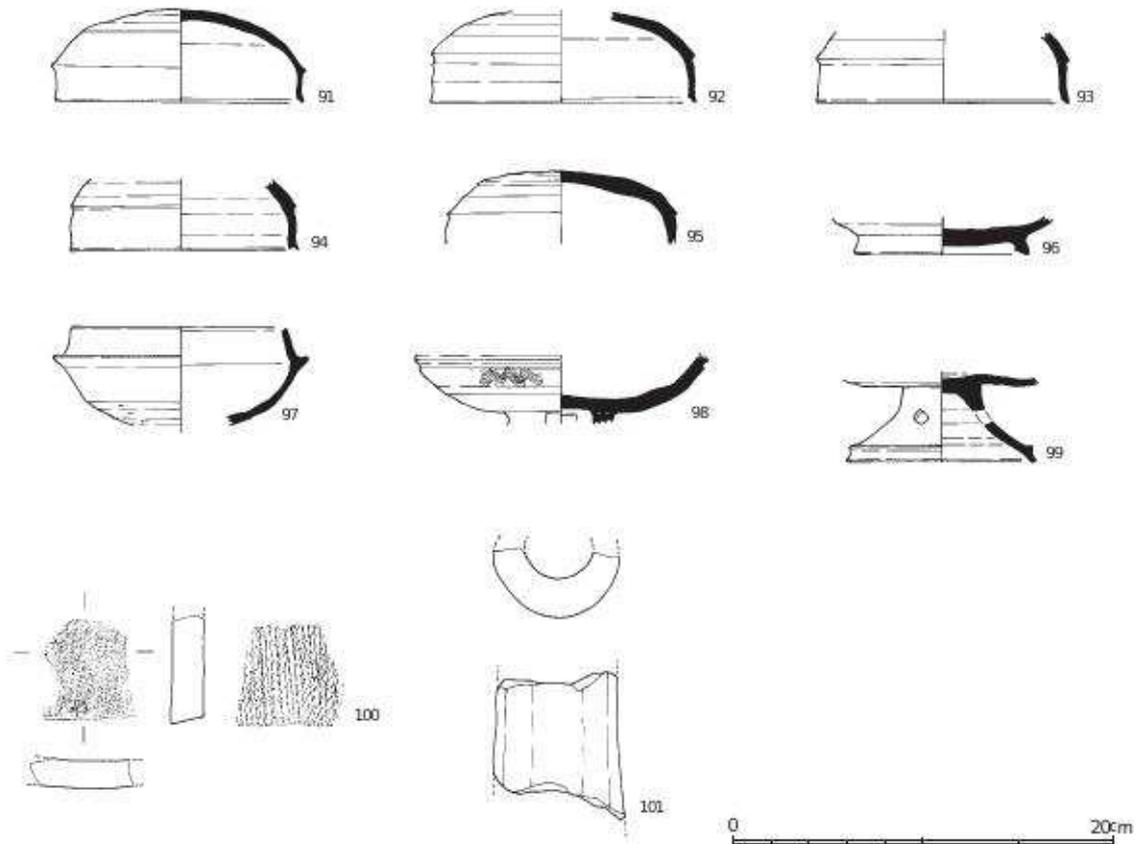


図42 黒褐色砂質土出土遺物実測図②

る。円形の透孔を少なくとも2段穿つが、穿孔時に使用した工具を抜くときに付着した粘土が孔を塞いでいる箇所があるなど、作りに粗雑さがみられる。外面にはミガキを施したものと考えられる。西播地域に由来する資料と考えられ、弥生時代後期後半～末の資料と考えられる。

85は土師器小壺である。体部はやや潰れた扁球状を呈す。頸部からまっすぐにたちあがり、口縁部外側に凹線がめぐる。体部下半に欠損がみられ、人為的な打ち欠きによるものと推測される。布留式前半段階に相当する資料と考えられる。86～90は土師器甕である。いずれも頸部は「く」字状に屈曲するが、口縁端部は四角くおさめるもの(86・89)と、内側に肥厚するもの(87・88・90)とがある。86は頸部の中ほどで直立し、明瞭な稜を作り出す。87は口縁端部を丸くおさめ、内側に形成された段の稜はさほど明瞭ではない。88は体部が球状を呈す。89は体部が球状を呈し、外面にハケ、内面に板ナデを施す。肩部付近に黒斑、体下半部にススが付着する。90は肩部がやや張った球状を呈する。外面にハケ、内面に指ナデを施す。89と90は布留式後半段階に並行する資料と考えられ、その後も同様の時期の資料と考えられる。

91～95は須恵器坏蓋である。91～94はいずれも、体部の稜はシャープで、口縁端部に段を設ける。94は他の資料に比して口径は小さい。91～95はいずれもTK23・47型式に並行する資料と考えられる。96と97は須恵器坏である。96は外側が接地する高台をもつ。8世紀代の資料と考えられる。97は受部から内傾しながらまっすぐにのび、口縁端

部に段をつくる。TK23・47型式に並行する資料と考えられる。98は須恵器無蓋高坏である。体部の稜とその下部にめぐる凹線は鋭く、全体的にシャープなつくりである。凹線の下部に9条の波状文を施す。脚部には方形の透孔が4方向穿たれたと考えられる。TK208～TK23・47型式の資料と考えられる。99は須恵器有蓋高坏である。脚部は強く広がり、脚端部は下方に屈曲して明瞭な稜を作る。菱形透孔が3方向穿たれたと推測される。TK23・47型式の資料と考えられる。100は平瓦である。外面に縄目タタキを施し、内面に布目痕を残す。101は鞆羽口である。被熱による色調の変化がみられ、使用されたものと考えられる。

### 8. 第3遺構面

黒褐色砂質土を掘削し、淡灰黄色細砂質土～暗褐色粘質土上面で検出した。古墳時代前期と後期の土師器・須恵器や弥生土器など、遺物が比較的多く出土している。遺構としては、竪穴建物、溝、ピット26基、落ち込み(流路)などを検出した。

南西部は遺物包含層が厚く、黒色土は上下2層に細分可能である。遺物は上層部からが多く、下層部からの出土は少ない。ベースの暗茶褐色土を検出してはいるが、遺構は不明瞭である。

SB01 北東部で検出した。方形竪穴建物の北西部分にあたる。南北長約3.5m、東西長約1.5mを検出したが、南側は削平されているため、また東側は調査区外のため不明である。深さは状態の良いところで約20cmである。支柱穴は1基検出した。直径約20cm、深さ約15cmである。また、コーナー部分で途切れる周壁溝が存在する。埋土は暗黒褐色粘性砂

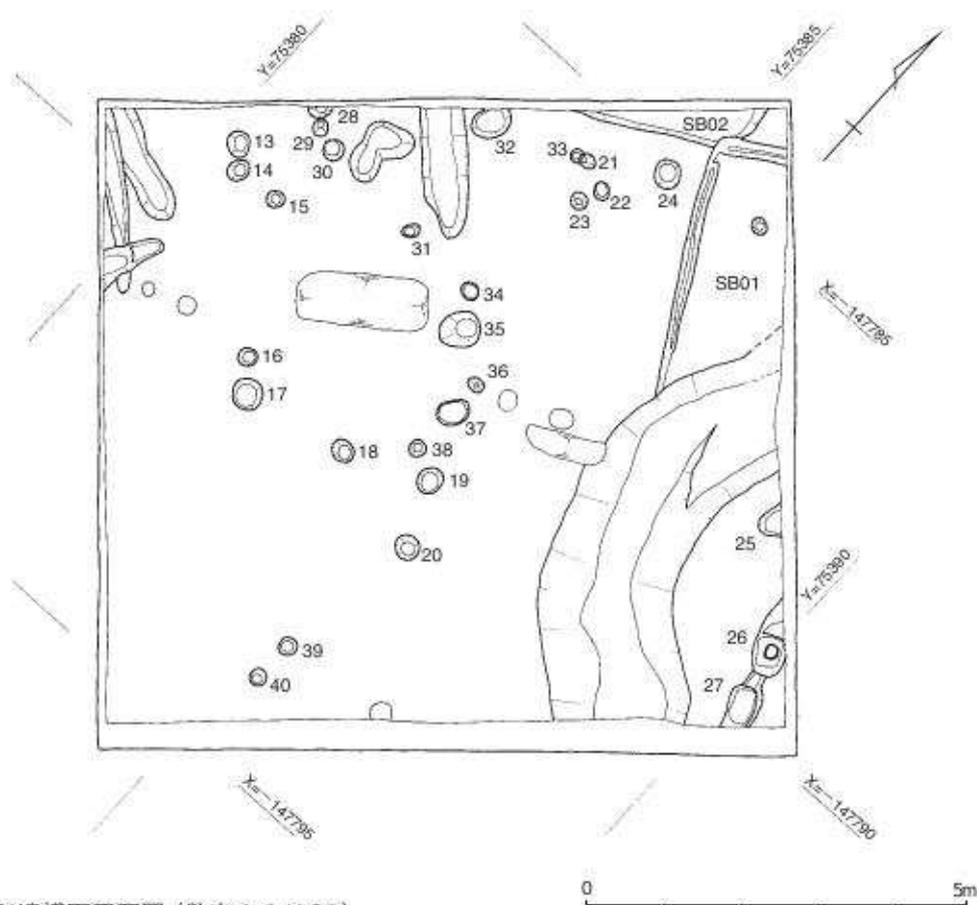


図43 第3遺構面平面図(数字のみはSP)

質土で、古墳時代の甕・高坏脚部など土師器の小片が出土している。その他、弥生時代後期の甕底部が出土している。

103は弥生土器甕底部である。内面に放射状ハケを施す。外面は表面剥離のため調整は不明瞭である。弥生時代後期後半～古墳時代前期の資料と考えられる。

SB02 北東部北東隅で検出した。方形竪穴建物の南東部コーナーを検出したが、そのほとんどは北側調査区外のため不明である。東西長2.4m、南北長70cm分を検出。深さは約10cmである。コーナー部分で、SB01に切られる。古墳時代と考えられる土師器小片が出土している。

土器群 調査区北側で検出した。1.8×0.9mの範囲に土師器甕・小型丸底壺・高坏が約7個体集中して出土した。検出レベルはT.P.16.3m～16.5mである。一部は第2遺構面のSK01で検出しているが、他の個体も本来は第2遺構面で検出すべき遺構内に存在したかもしれない。土器は甕口縁や高坏脚部が下向き・倒置状態で出土している。古墳時代前期の布留式の資料と考えられる。

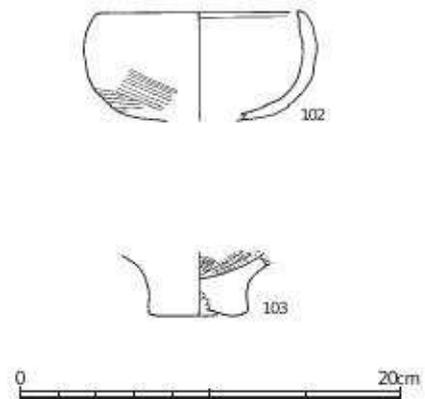


図44 SB01出土遺物実測図

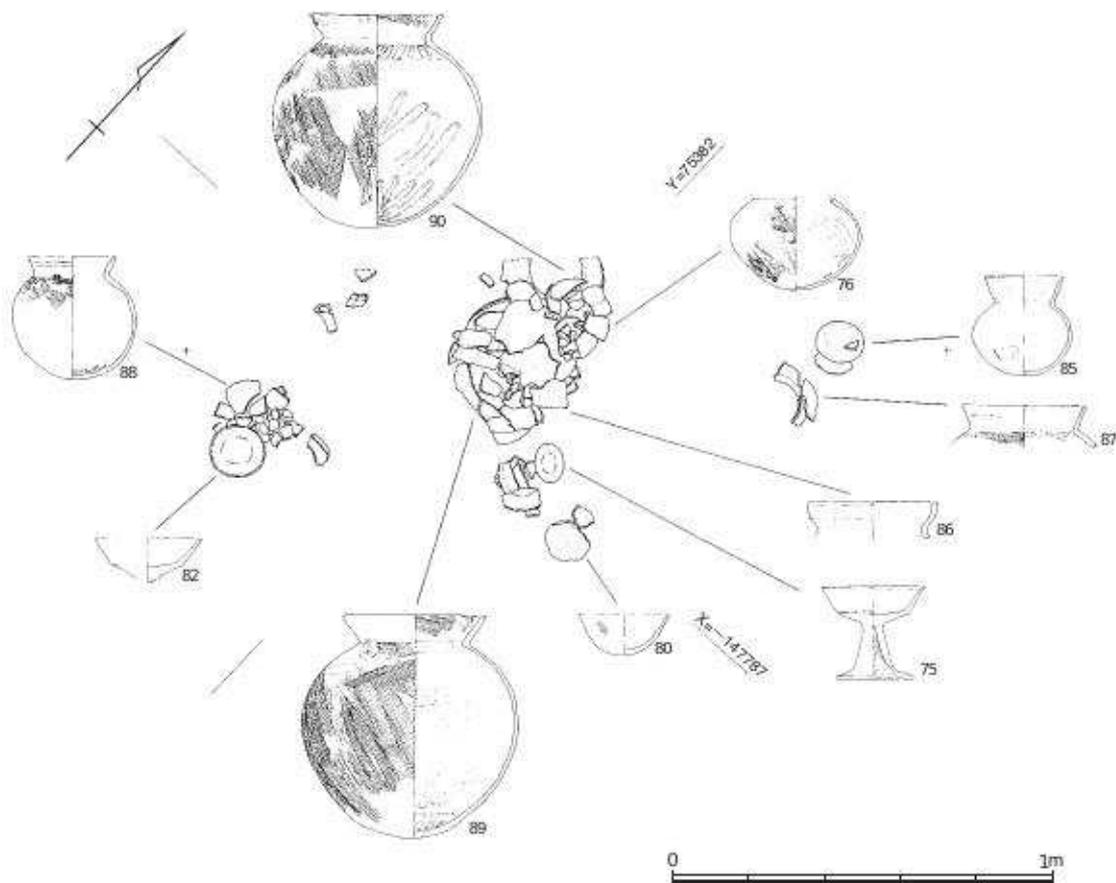


図45 第3遺構面土器群平面図

- SP13～17 西部で検出し、直径22～42cm、深さ10～16cmを測る。遺物は出土していない。
- SP18 中央部で検出し、直径30cm、深さ12cmを測る。遺物は出土していない。
- SP19 中央部で検出し、直径36～32cm、深さ5cmを測る。土師器小片が出土している。
- SP20 中央部で検出し、直径34cm、深さ12cmを測る。土師器小片が数点出土している。
- SP21 北西部で検出し、直径20×16cm、深さ14cmを測る。土師器小片が出土している。
- SP22 北西部で検出し、直径24×20cm、深さ18cmを測る。土師器小片が出土している。
- SP23 北西部で検出し、直径22cm、深さ12cmを測る。遺物は出土していない。
- SP24 北西部で検出し、直径35cm、深さ40cmを測る。土師器小片が出土している。タタキ痕のある土器片もあり、弥生土器の甕も含まれていると考えられる。
- SP25 北東部で検出。北東側は調査区外になる。径約45cm、深さは30cmを測る。土師器小片が比較的多く出土した。
- SP28 北西部で検出。北は調査区外になる。径30cm、深さ5cmを測る。土師器高坏坏部(82)のほか土師器小片が出土している。
- 102は土師器坏である。体部は大きく内湾しながらちあがり、口縁端部で内側に短く屈曲する。外面にハケ、内面にナデを施す。古墳時代中期の資料と考えられる。
- SP29～31 西部で検出し、直径16～25cm、深さ5～12cmを測る。遺物は出土していない。
- SP32～36 北西部で検出し、直径18～55cm、深さ5～30cmを測る。遺物は出土していない。
- SP37・38 中央部で検出し、直径22～45cm、深さ14～15cmを測る。遺物は出土していない。
- SP39・40 南部で検出し、直径25cm、深さ10～14cmを測る。遺物は出土していない。
- 落ち込み 東部で、SB01を切る状況で弧状の砂礫層の堆積を確認した。遺物はほとんど出土していない。流路の一部と考えられる。

## 9. まとめ

今回の調査では、古墳時代と中世の遺構面を確認することができた。第1遺構面は中世、第2遺構面は古墳時代後期、第3遺構面は古墳時代前期の遺構面と考えられる。

遺構に関しては、調査区の南半では明瞭でなかったものの、北半で古墳時代の竪穴建物や土坑を検出した。竪穴建物は、出土遺物中に須恵器を含まないため、古墳時代前期の可能性はある。

遺物には、土師器・須恵器・弥生土器・瓦器などがあったが、その多くは細片であった。一部土器群から出土した遺物には、土師器甕や小型丸底壺などがあり、完形品になるものが存在する。その他、サヌカイト片もごくわずかながら出土している。製塩土器は遺物包含層を中心に出土し、一部SB01とSP02からも出土している。瓦は、第3遺構面検出までの遺物包含層中から出土したが、数も少なく、ローリングを受けている。青磁・白磁は第1遺構面検出までの層位からごくわずかに出土している。土鍾は1点段落ちの埋土から出土している。

東側の第1次調査Ⅱ区では弥生から中世のピット、近世の溝、弥生土器が出土した落ち込み、縄文時代晩期の長原式並行期から弥生時代前期前半の流路が確認されている。今回の調査では、古墳時代前期の遺物が主体であり、第1次調査の様相とは大きく異なるものである。

今回の調査地近辺は、第1次調査以来調査が希薄な部分であったが、このたびの調査で、集落の広がりをつかえるうえで貴重な資料をえることができた。

### 第7節 第26次調査

#### 1. 調査の概要

調査地は、五番町2丁目地区の遺跡南端に位置する。現地表の標高は約8.5mで、第30次調査地に隣接する。

#### 2. 基本層序

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、茶褐色シルト質極細砂、その下層に暗茶褐色シルト質極細砂の遺物包含層が存在する。

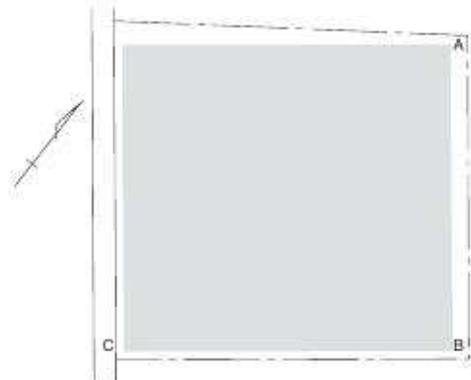


図46 第26次調査範囲図

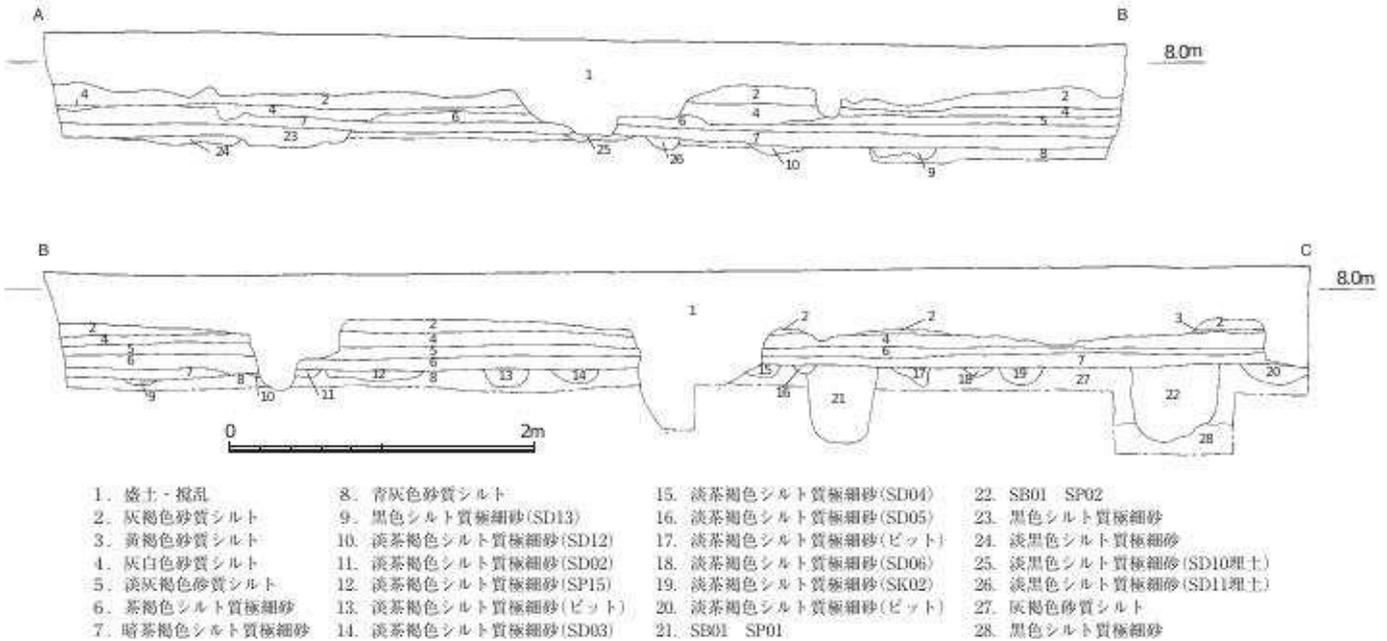


図47 東・南壁断面図

#### 3. 暗茶褐色シルト質極細砂

弥生時代末ないし古墳時代初頭～奈良時代以降の資料が出土した。104は土師器甕である。口縁部端面は面取りのため、やや凹む。外面にハケ、内面にナデを施す。布留式並行期の資料と考えられる。105は須恵器坏蓋である。天井部は丸く、身と合わせると球状を呈するものと推測される。年代は飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に並行すると考えられる。106は須恵器甕もしくは壺の口縁部である。頸部に波状文がみられるが、欠損のため条数な

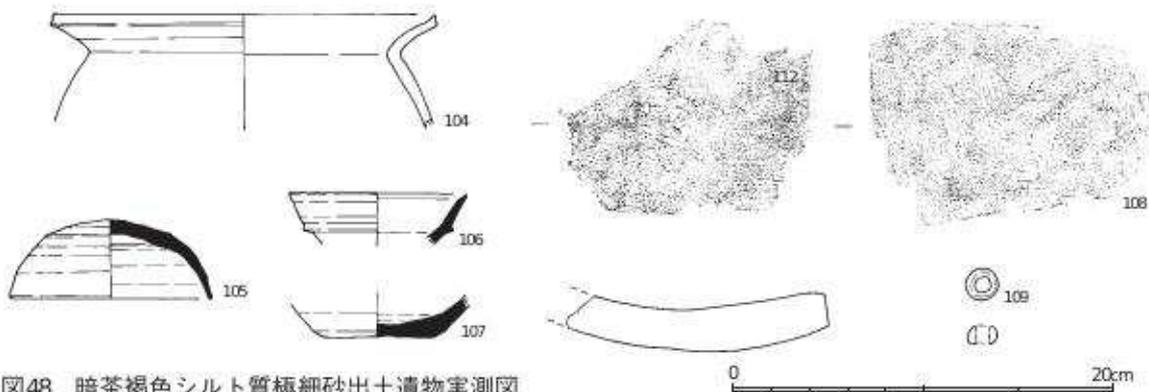


図48 暗茶褐色シルト質極細砂出土遺物実測図

どは不明である。TK208～23・47型式に並行すると考えられる。107は須恵器坏である。底部外面は回転ヘラ切りの痕跡を残す。焼成は堅緻で重量感がある。108は平瓦である。内面に布目痕を残す。110は移動式竈である。竈口端部は平坦で、外面側の直下で大きく凹む。外面には粗いハケを施す。粘土紐の積み方から、倒立して製作したものと考えられる。109は滑石製白玉である。直径4.10mm、高さ2.29mm、重さ0.04gを測る。中位に弱い稜が入り、断面は算盤球状を呈する。片面穿孔と考えられる。

#### 4. 遺構

遺構は遺物包含層下の青灰色砂質シルト上面で検出した。検出した遺構は掘立柱建物が2棟、土坑4基、溝13条、ピット数十基である。

SB01 調査区の南端で検出した掘立柱建物で、そのほとんどが調査区の南側にのびるものと考えられる。確認された柱穴は2基のみであるが、その規模から掘立柱建物を構成するものと判断される。柱間は2mで、柱穴の規模はSP01・02共に同一で、直径55cm、深さ50cm、柱痕直径は20cmである。出土遺物から奈良時代のものと考えられる。SP01はSD05に切られる。

SB02 調査区の南東で検出した掘立柱建物で、南北1間以上、東西2間以上の建物で、柱穴は4基見つかった。柱穴の規模はほぼ同一で、直径25cm、深さ35～40cmである。柱間は南北が2.2m、東西が1.6mとなる。出土遺物から6世紀末頃と考えられる。SP03はSD03に、SP04はSD02に、SP05はSD13に切られる。

SP03 直径26cm、深さ38cm、柱痕は上端で径14cmを測る。掘形埋土は上層が黒褐色シルト質極細砂、下層が淡黒色シルト質極細砂、柱痕部は暗灰褐色シルト質極細砂である。

SP05 直径30cm、深さ35cm、柱痕径15cmを測り、掘形埋土は淡黒色シルト質極細砂で、柱痕部は黒色シルト質極細砂である。

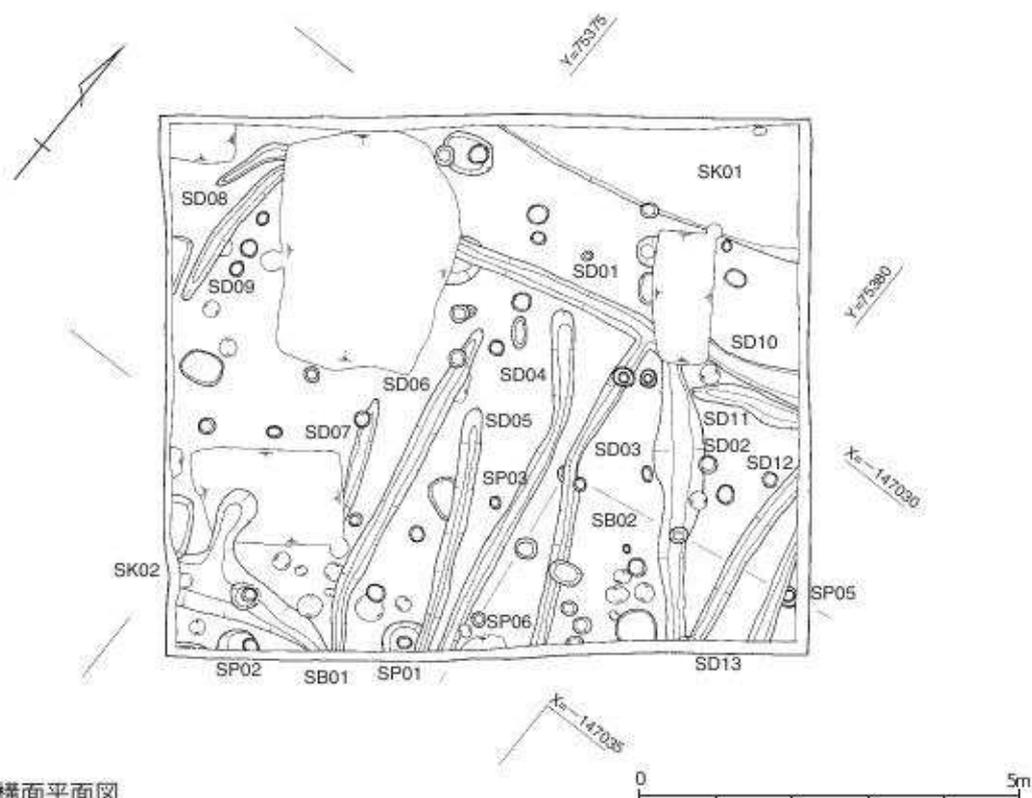


図49 遺構面平面図

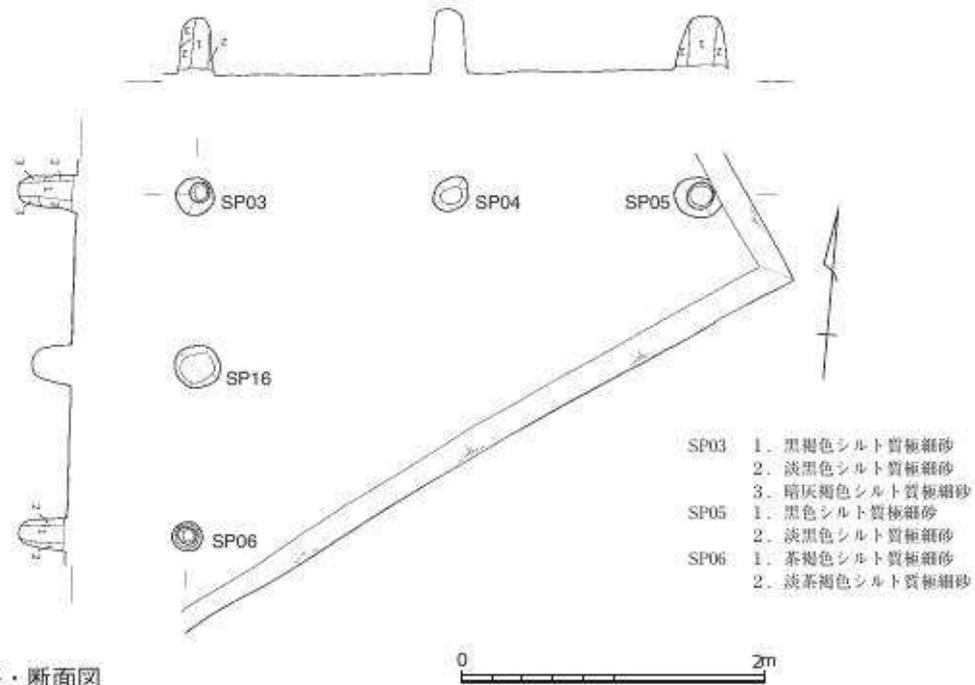


図50 SB02平・断面図

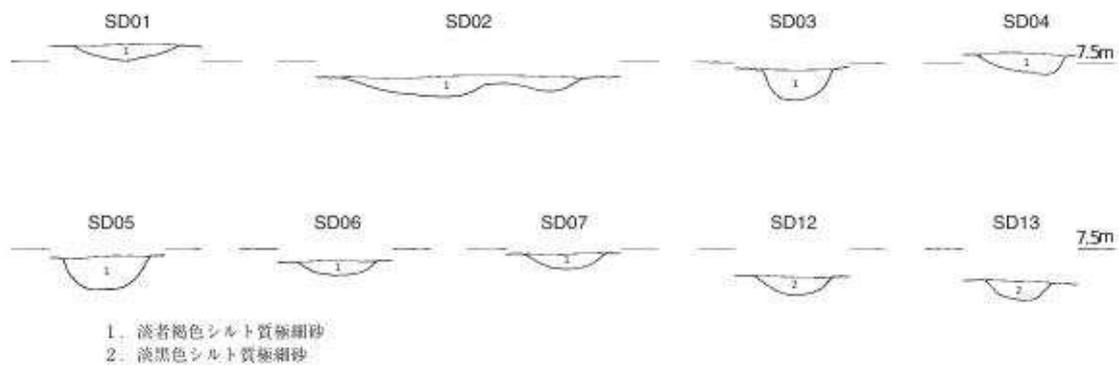


図51 遺構断面図

SP06 直径20cm、深さ32cm、柱痕径9cmを測り、掘形埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。

柱痕部は茶褐色シルト質極細砂で炭化物を含む。

SK01 調査区の北東端で一部が確認された土坑で、全体の規模は不明であるが、一辺が直線状にのび、深さ10cmの土坑である。埋土は淡黒色シルト質極細砂である。土坑の底はほぼ平らであることや、その形状から、竪穴建物の可能性が考えられる。出土遺物から6世紀のものと考えられる。

111は移動式竈である。外面に粗いハケを施す。背面側の破片と推測される。

SK02 南端で検出した不整形の土坑である。幅25~70cm、最大の深さは21cmで、西側に向かって徐々に深くなる。埋土は淡茶褐色シルト質極細砂で、上層から土師器・須恵器が出土した。

112から114は土師器高坏である。112は体部と底部との境に弱い稜を作り、その上部側に弱い凹みがめぐる。113は坏部内底面が平坦であり、脚部は緩やかに広がる。坏部と

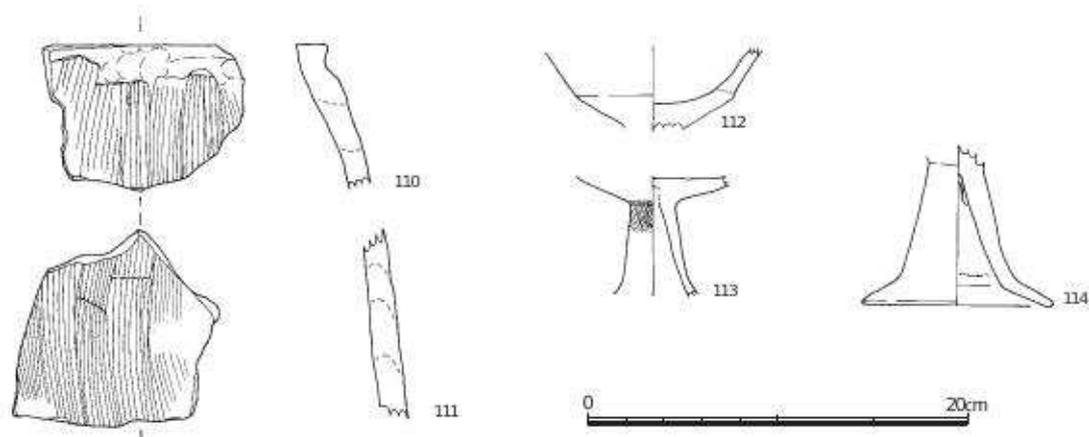


図52 SK01・02出土遺物実測図

脚部の接合時にハケ状工具で調整した痕跡を残す。114は裾部で強く広がる脚部である。表面の残存状況が悪く、調整は不明瞭である。いずれの資料も庄内式から布留式に並行する資料と考えられる。

SK04 幅64cm、深さ15cmを測る。上層は淡黒色シルト質極細砂、下層は暗灰褐色シルト質極細砂が堆積する。

溝 溝は13条みつけたが、いずれも残りが悪く、残存深度は10cm以下である。溝の幅は30cm内外である。SD04・12については、掘削痕として溝底に凹凸が残っていた。埋土はいずれも淡茶褐色シルト質極細砂である。溝はその方向によって3種（東西方向、南北方向、北西-南東方向）に分類できる。

東西方向溝は、SD01・10・11が該当する。

SD01 幅27cm、深さ5cmを測り、埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。

南北方向溝は、SD03北半、SD04南半、SD06・08・09・12・13が該当する。

SD03 幅18cm、深さ8cmを測り、埋土は淡茶褐色シルト質極細砂で炭化物がまじる。SD01にT字状に接続する。

SD04 幅23cm、深さ5cmを測り、埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。

SD06 幅20cm、深さ4cmを測り、埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。

SD12 幅20cm、深さ5cmを測り、埋土は淡黒色シルト質極細砂である。

SD13 幅17cm、深さ5cmを測り、埋土は淡黒色シルト質極細砂である。

北西-南東方向溝は、SD02・05・07、SD04北半、SD03南半が該当する。

SD02 幅62cm、深さ5cmを測り、埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。

SD05 幅22cm、深さ9cmを測り、埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。

SD07 幅20cm、深さ4cmを測り、埋土は淡茶褐色シルト質極細砂である。

## 5. まとめ

今回の調査は小規模ではあったが、遺構の密度は高く、周辺の調査成果を追従するものであった。特殊遺物として、滑石製白玉が遺構面で1点出土している。また、製塩土器の細片も出土している。これらの遺物は今回の調査区の東側で行われた第10次調査でも出土しているものであり、滑石製白玉については大量に出土しており、祭祀の場が近隣に存在していたことを示唆するものである。

## 第8節 第37次調査

### 1. 調査の概要

調査地は、松本通8丁目地区の標高約15mに位置し、北西から南東方向の緩斜面地に立地する。第38次調査地の北西側に隣接する。

建物建設部分をⅠ区、駐車場設置部分をⅡ区に分割して調査を行った。なおⅡ区については、工事影響深度の関係で、南側の約半分は第2遺構面までの調査で終了している。

### 2. 基本層序

上層から盛土・攪乱、旧耕土、黒褐色砂質土（中世遺物包含層）、暗茶褐色砂質土（上面が第1遺構面、弥生時代終末期遺物包含層）、灰黄色から茶灰色砂質土（弥生時代後期後半～終末期遺物包含層）、灰褐色～茶褐色細砂～粗砂（上面が第2遺構面、弥生時代後期後半期遺物包含層）、暗青灰色シルト（上面が第3遺構面）となる。

Ⅰ区については、削平を受けており、旧耕土の下層が暗青灰色シルト（第3遺構面）になっている。そのため人為的な遺構はほとんど確認されなかった。Ⅱ区でも、調査区の北側についてはⅠ区と同じような状況が確認されたが、南側では暗青灰色シルト（第3遺構面）の傾斜変換点あたりから、弥生時代後期から庄内式期の遺物を含む暗褐色粗砂の遺物包含層の堆積が確認できた。

### 3. Ⅰ区

#### (1) 第1遺構面

調査区西半で南北方向の流路を検出した。

第1遺構面検出中に、須恵器のコップ形小型埴115が出土した。全体に薄く精巧に仕上げられている。平底で、体部はわずかに内湾し上外方にのび、2条の低い突帯で区画している。口縁端部はわずかに外反し、上方に鋭くつまみ上げているが、残存部の約半分は端部をわずかに打ち欠いている。

NR01-1 検出当初は1本の流路であると考えていたが、流路の南北の土層断面より、灰色シルト～暗茶褐色粗砂混細砂層がほぼ水平に堆積している南側の流路（NR01-2）を切る流れであることが確認できた。

NR01-1の埋土の大半は細砂層であるが、下層では薄いシルト層と細砂層が互層に堆積している。検出長11m、検出幅約から4.0～6.5m、深さは最深で1.3mを測り、西肩は調査区外のため検出できていない。調査区のほぼ中央で大きく西に向きを変えていて、それより南側にNR01-2が確認できる。この向きを変えた先の調査区壁面で、木樋の一部分

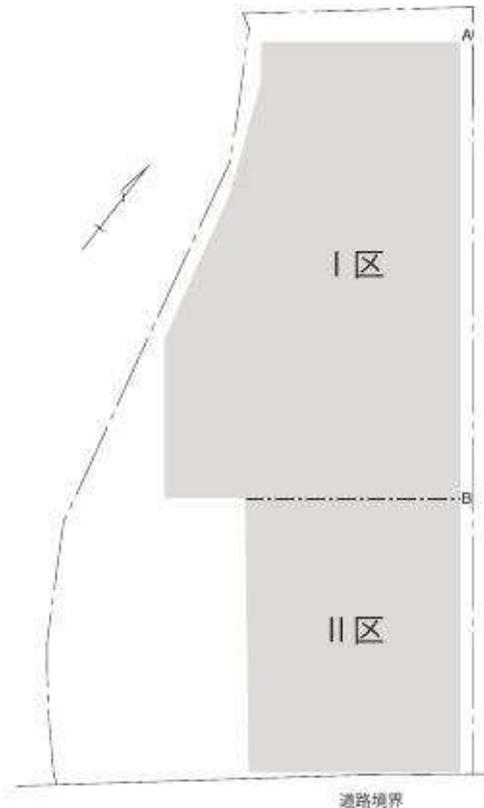


図53 第37次調査範囲図

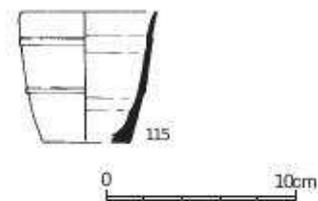


図54 第1面検出中出土遺物実測図

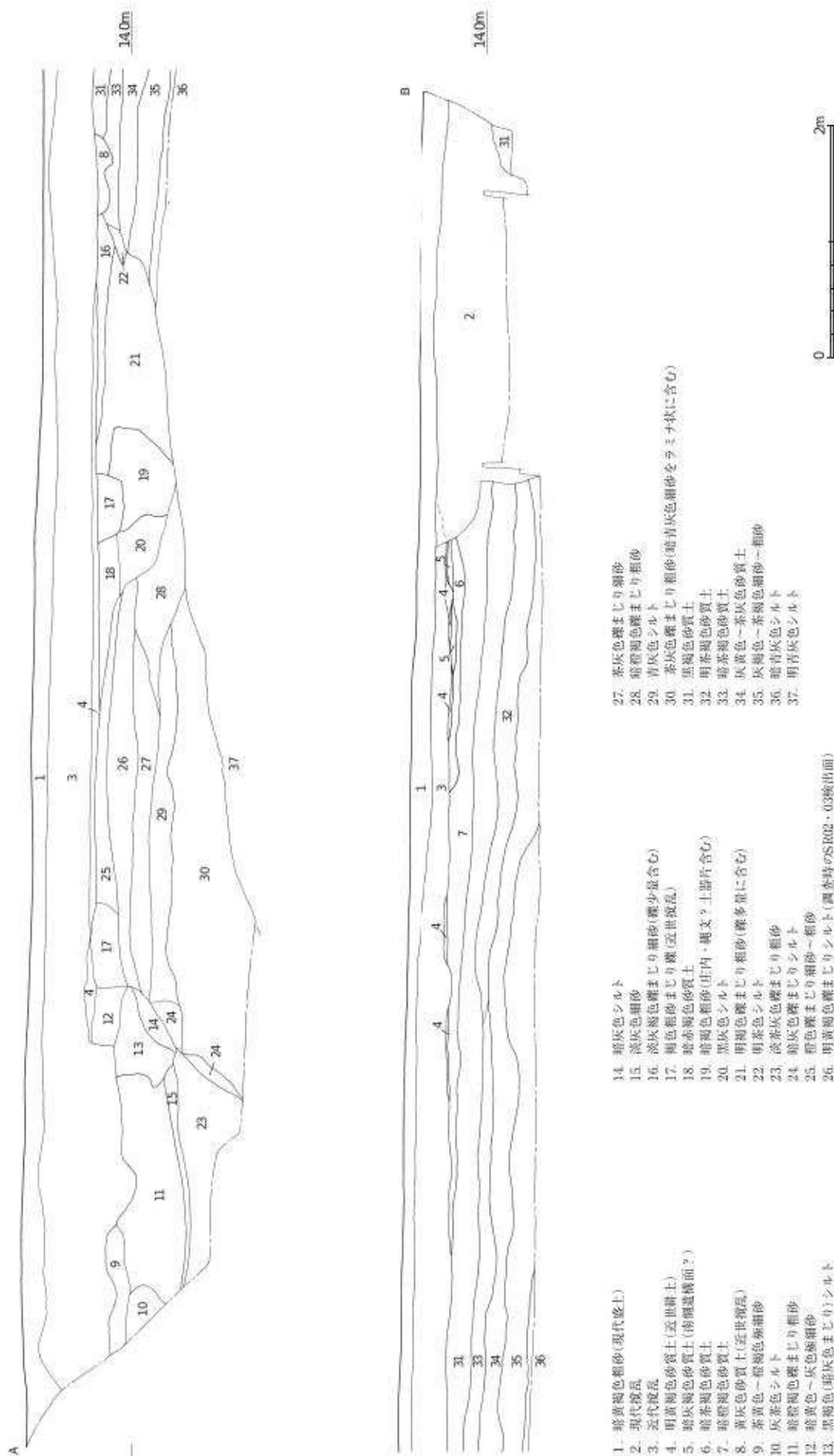


図55 I区東壁断面図

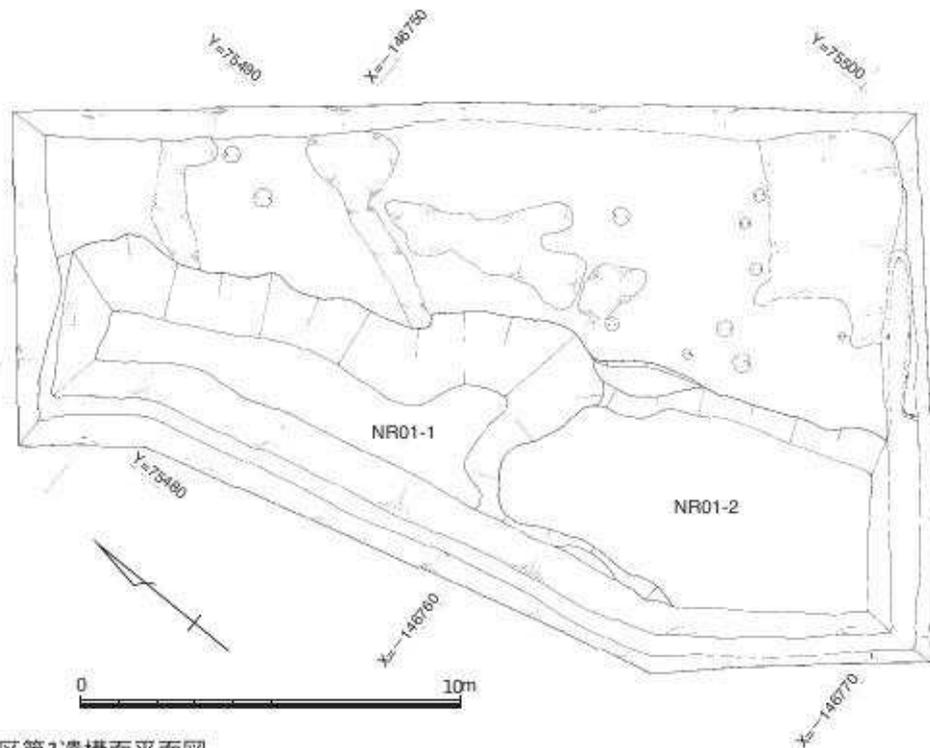
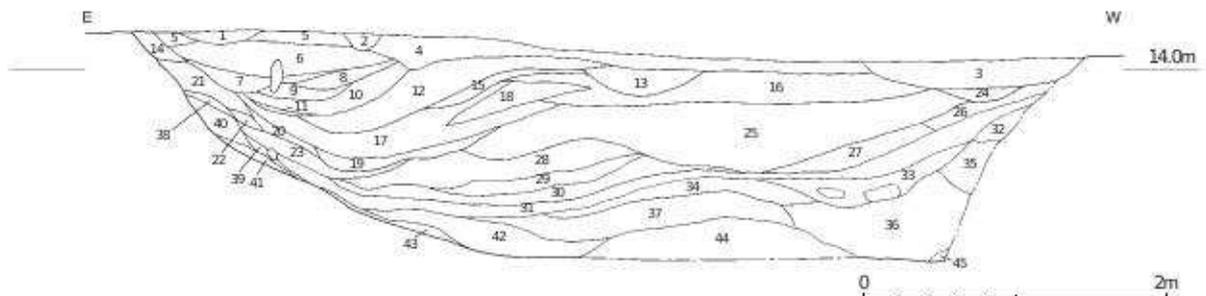


図56 I区第1遺構面平面図



- |   |  |  |
|---|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>1. 暗灰色砂質土</li> <li>2. 淡灰色砂質土</li> <li>3. 暗灰色(橙色まじり)砂質土</li> <li>4. 灰褐色砂まじり礫砂質土</li> <li>5. 淡灰褐色砂質土</li> <li>6. 灰茶色砂質土</li> <li>7. 暗灰茶色砂質土</li> <li>8. 灰黄色細砂-シルト</li> <li>9. 淡灰黄色(青灰色まじり)細砂-シルト</li> <li>10. 明青灰色礫まじりシルト</li> <li>11. 暗灰褐色シルト</li> <li>12. 淡橙褐色細砂</li> <li>13. 暗灰色(橙色まじり)礫まじり砂質土</li> <li>14. 淡灰茶黄色砂質土</li> <li>15. 淡灰橙色細砂-極細砂</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>16. 青灰色(橙色まじり)極細砂</li> <li>17. 暗青灰色極細砂-シルト(木まじる)</li> <li>18. 白棕色細砂(礫まじり)</li> <li>19. 暗灰色シルト(上層に植物遺体含む)</li> <li>20. 淡灰青色極細砂</li> <li>21. 灰黒褐色砂質土(14-15c土師器埋包含)</li> <li>22. 暗灰色礫まじり細砂-シルト</li> <li>23. 淡灰褐色極細砂</li> <li>24. 灰青色砂礫砂質土</li> <li>25. 黄褐色-灰褐色礫まじり細砂-粗砂</li> <li>26. 黄褐色(茶褐色まじり)礫まじり粗砂</li> <li>27. 明灰色細砂</li> <li>28. 淡灰色細砂</li> <li>29. 暗灰紫色極細砂-シルト(植物遺体含む)</li> <li>30. 明灰黄色細砂</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>31. 暗灰黄色粘土</li> <li>32. 青灰白色細砂まじりシルト</li> <li>33. 褐灰青色礫まじり粗砂まじりシルト</li> <li>34. 暗灰白色礫まじり粗砂</li> <li>35. 灰色礫まじり粗砂</li> <li>36. 暗青灰白色(黒褐色まじり)粗砂まじりシルト</li> <li>37. 暗灰褐色(黒褐色まじり)粗砂まじりシルト</li> <li>38. 暗灰色シルト</li> <li>39. 暗青灰褐色細砂-シルト</li> <li>40. 黒色シルト</li> <li>41. 淡灰色(黒色まじり)細砂</li> <li>42. 褐灰色粗砂まじりシルト</li> <li>43. 淡青灰黄色細砂</li> <li>44. 灰色-青灰色礫まじり粗砂</li> <li>45. 灰青色細砂</li> </ul> |
|---|--|--|

図57 NR01断面図

が傾いた状態で出土した。前後の樋はなく、原位置は保っていない。

埋土より、14世紀後半～15世紀前半の土師器皿(116・117)などが出土している。堆積状況より、急激な流れであったことが推定できる。

NR01-2 検出長10m、検出幅5m、深さは約90cm、西肩は調査区外へのびている。13世紀～14世紀前半に最終的に埋まった緩やかな流れで、埋土からは土師器や須恵器、青磁などの磁器や陶器類の他、漆塗椀が出土している。また、東肩の裾部分には、等間隔で木杭が打ち込まれていた。

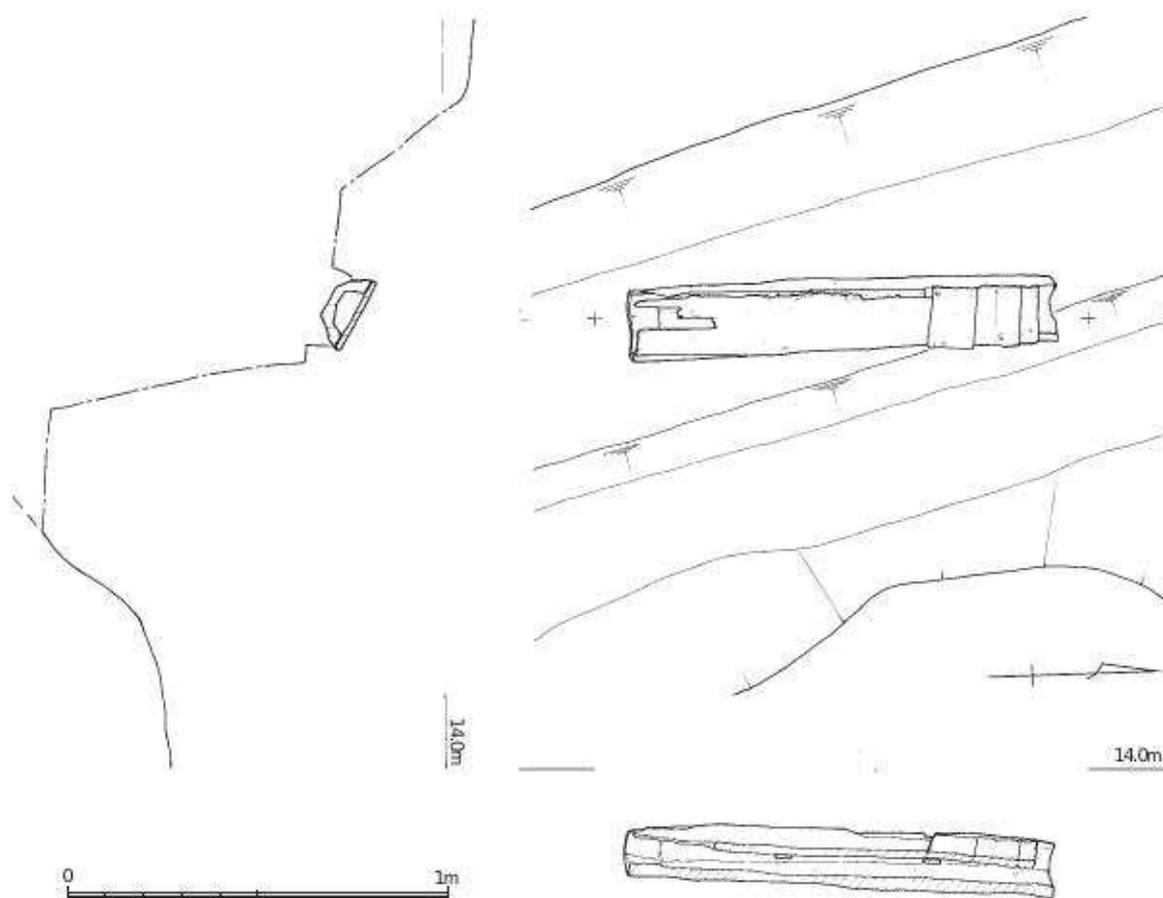


図58 木樋出土状況平・断面図

### 第2遺構面

NR02・NR03 調査区の東半に位置する東西方向に流れる流路で、西半はNR01により削られている。近世耕土層直下からの切り込みである。

埋土は褐色の礫まじりの粗砂層で、流路の肩部分には、黒色シルトが堆積している。NR02は幅約3m、深さ約50cmで、埋土より弥生時代終末期の土器が少量出土している。NR03は検出幅3m以上で、北側は調査区外にのびている。深さは最深で90cmである。



図59 木樋出土状況

NR02とNR03は、1本の大きな流れの埋没時の最終堆積であることが後の断割り調査で確認できた。

### 第3遺構面

平坦部分では遺構は確認されていない。

### Ⅱ区

調査区のほぼ全域で堆積が確認できる暗青灰色シルト層（第3遺構面）の状況から、

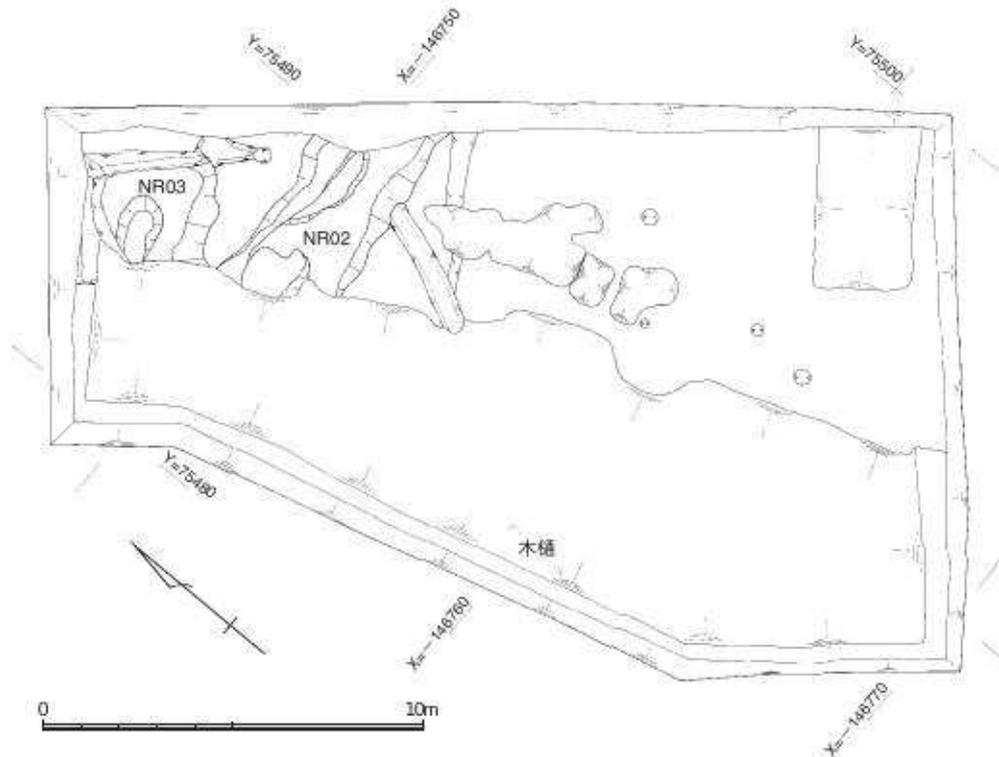


図60 I区第2遺構面平面図

この調査区は北から南へ、東から西へと傾斜していることが分かる。そして高い部分にあたる北側および東側は旧耕土の下が暗青灰色シルト層（第3遺構面）になっており、I区同様上層の遺構面は削平を受けており、中世以前の遺構面が残っていたのは、調査区の南西部分ということになる。

鎌倉時代の土器を含む遺物包含層（黒褐色礫まじり粗砂）の下層、暗茶褐色砂質土（第1遺構面）の上面で遺構検出を行ったが、はっきりと確認できなかったため、灰褐色～淡褐色の細砂～粗砂上面（第2遺構面）まで掘り下げて再度遺構検出を行った。10基ほどのピットを確認したが、掘り込みは浅く、第1遺構面で確認すべきピットの残存部であると考えられる。また、北側で検出したピットも同様のものと考えられる。

SP16 攪乱底で検出した。直径25cm、深さ9cm、上層に薄く茶灰色シルトが堆積し、下層は暗灰褐色砂質土である。

SP05 直径35cm、深さ13cmを測り、埋土は暗茶灰色粗砂まじり粘質土である。

SP09 直径36cm、深さ8cmを測り、埋土は茶灰色シルトである。

SP04 直径42cm、深さ12cmを測り、埋土は暗灰褐色シルトである。

SP06 直径36cm、深さ18cmを測り、埋土は上層は褐灰色礫まじり粗砂、下層は茶灰褐色シルトである。

SP07 直径30cm、深さ10cmを測り、埋土は茶灰色シルトである。

SP08 直径28cm、深さ10cmを測り、埋土は茶灰色シルトである。

SP11 直径25cm、深さ13cmを測り、埋土は茶灰色粗砂まじり砂質土である。

SP12 直径25cm、深さ10cmを測り、埋土は茶灰色粗砂まじり砂質土である。

なお、南半については、第3遺構面を検出するまでに工事影響深度に達したため、遺物包含層を掘削した段階で調査を終了した。

遺物 暗茶褐色砂質土から甕底部118が出土した。体部外面にラセン状連続タタキを施す。底部外面は中央部がわずかに凹む。弥生時代末～古墳時代初頭の資料と考えられる。

灰黄色～茶灰色砂質土からは甕底部119・120が出土した。体部外面にラセン状連続タタキを施す。底部外面は中央部がわずかに凹む。弥生時代末～古墳時代初頭の資料と考えられる。

第3遺構面包含層からは弥生土器甕121が出土した。口縁部は体部から緩やかに外反してのび、口縁端部外側は、ヨコナデにより面を持つ。体部外面は粗いタタキを施す。弥生時代後期後半の資料と考えられる。

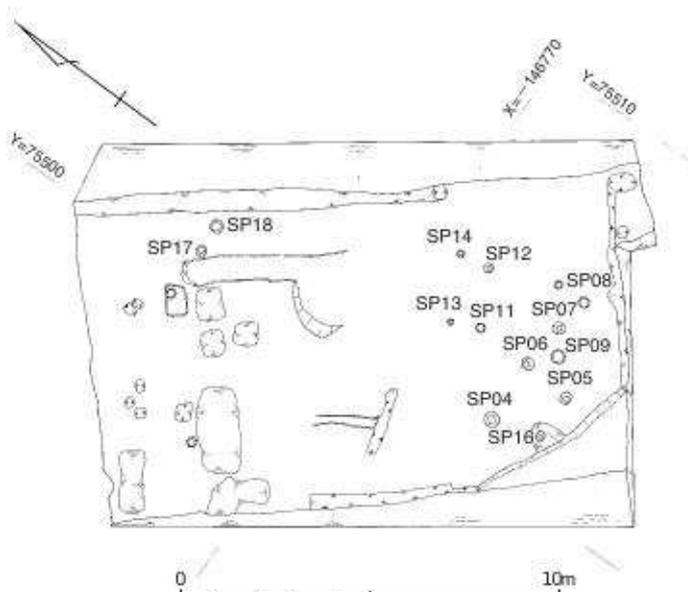


図61 II区遺構面平面図

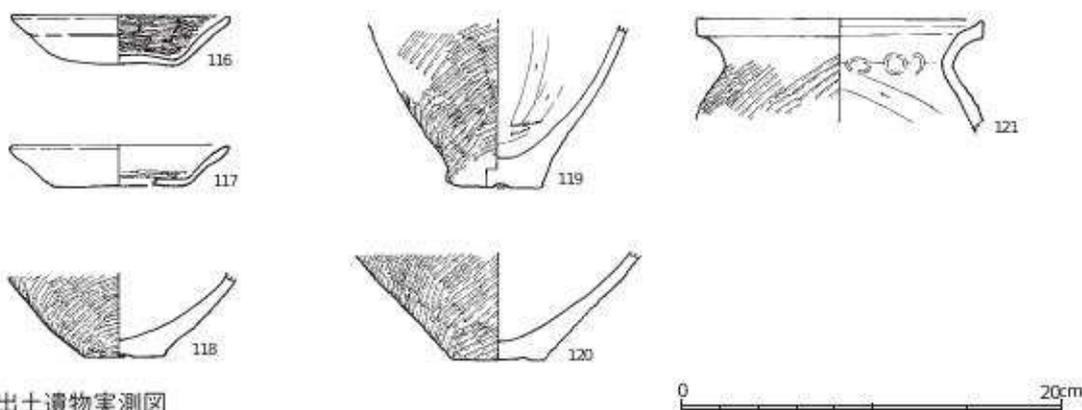


図62 出土遺物実測図

#### 4. まとめ

今回の調査地は、現地形では平坦になっているが、急な斜面の裾部に位置していることから、ある時期に水田の開墾による削平の影響を大きく受けていると考えられる。そのため調査地の北側ではほとんど人為的な遺構は確認できなかった。しかし南側では中世以前の遺構面が残っており、今回は遺構を確認できなかったものの、弥生時代後期後半～終末期にかけての遺物も出土している。隣接する南東側の第38次調査地では、弥生時代後期後半～終末期、古墳時代、中世にわたる遺構が検出されており、本調査地より南側には、従前の調査成果と同様の遺構の広がり確認できるものと考えられる。

I区で確認された流路は、南側の第50-2次調査地の西端で確認された近世頃の流路、あるいは平安時代後半の遺物が含まれていた落ち込みにつながる流路と考えられる。

### 第9節 第39次調査

#### 1. 調査の概要

調査地は第37次調査地の東側隣接地で、標高約14mを測る南東方向への緩斜面地に立地する。弥生時代後期～平安時代の3面の遺構面を検出した。

#### 2. 基本層序

盛土・攪乱、灰色砂、灰黄色粘質土、灰色砂質土、淡茶灰色細砂、褐灰色シルト質土、黒褐色砂質土、茶灰色砂質土、茶灰色粘質土である。

#### 3. 第1遺構面

旧耕土掘削後、平安時代の土師器を含む灰色砂を検出した。この層を除去後の面では遺構を検出することができず、さらに下層の灰黄色粘質土を掘削して第1遺構面を検出した。灰色砂質土からは縄文時代晩期～平安時代の資料が出土したが、古墳時代の土師器が多い。また、韓式系土器も出土している。123は製塩土器である。器壁の厚さは最厚部で4.5mmを測る。124～132は韓式系土器の長胴甕で、外面に格子タタキ、内面にナデを施す。

SP01 直径45～50cm、深さ18cmで、埋土は灰褐色粗砂質土である。

SP02 直径20cm、深さ22cmで、埋土は茶灰色粗砂質土である。SP01同様、SX01を切っている。須恵器塚底部や瓦、土師器が出土している。122は須恵器塚である。体部は内湾してたちあがる。底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。9世紀後半～10世紀前半の資料と考えられる。

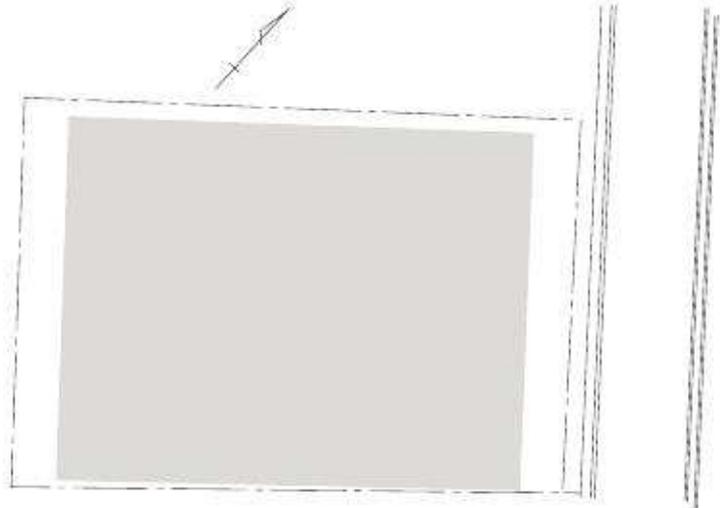


図63 第39次調査範囲図

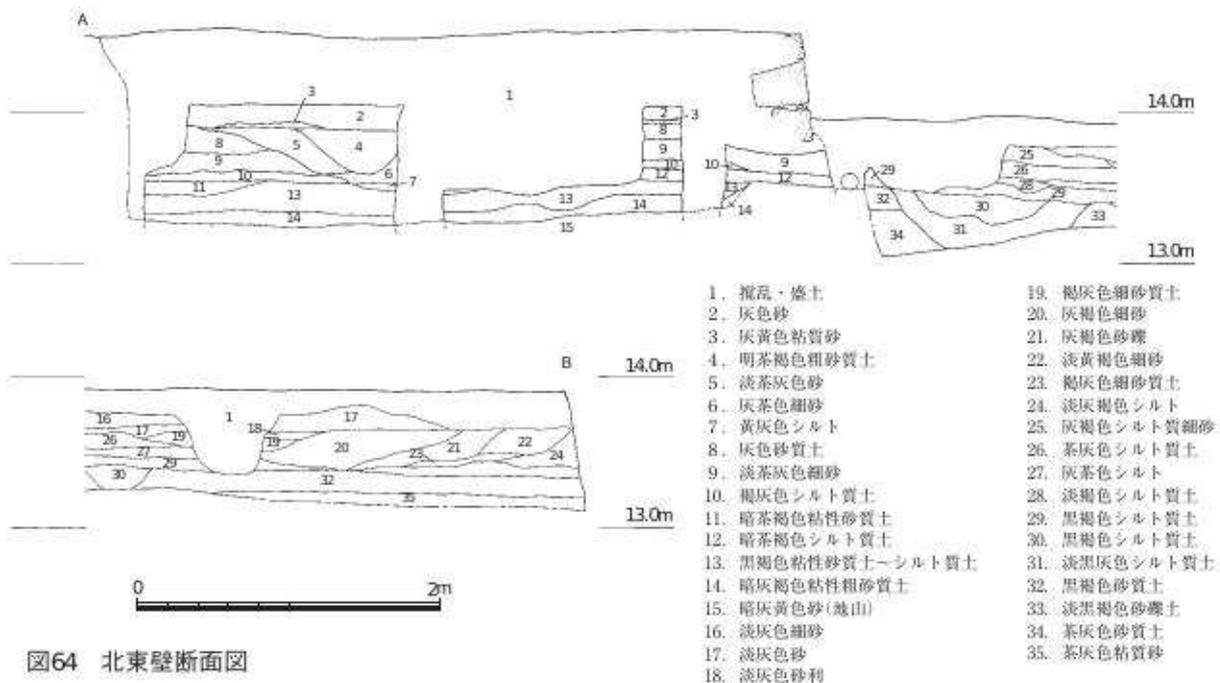


図64 北東壁断面図

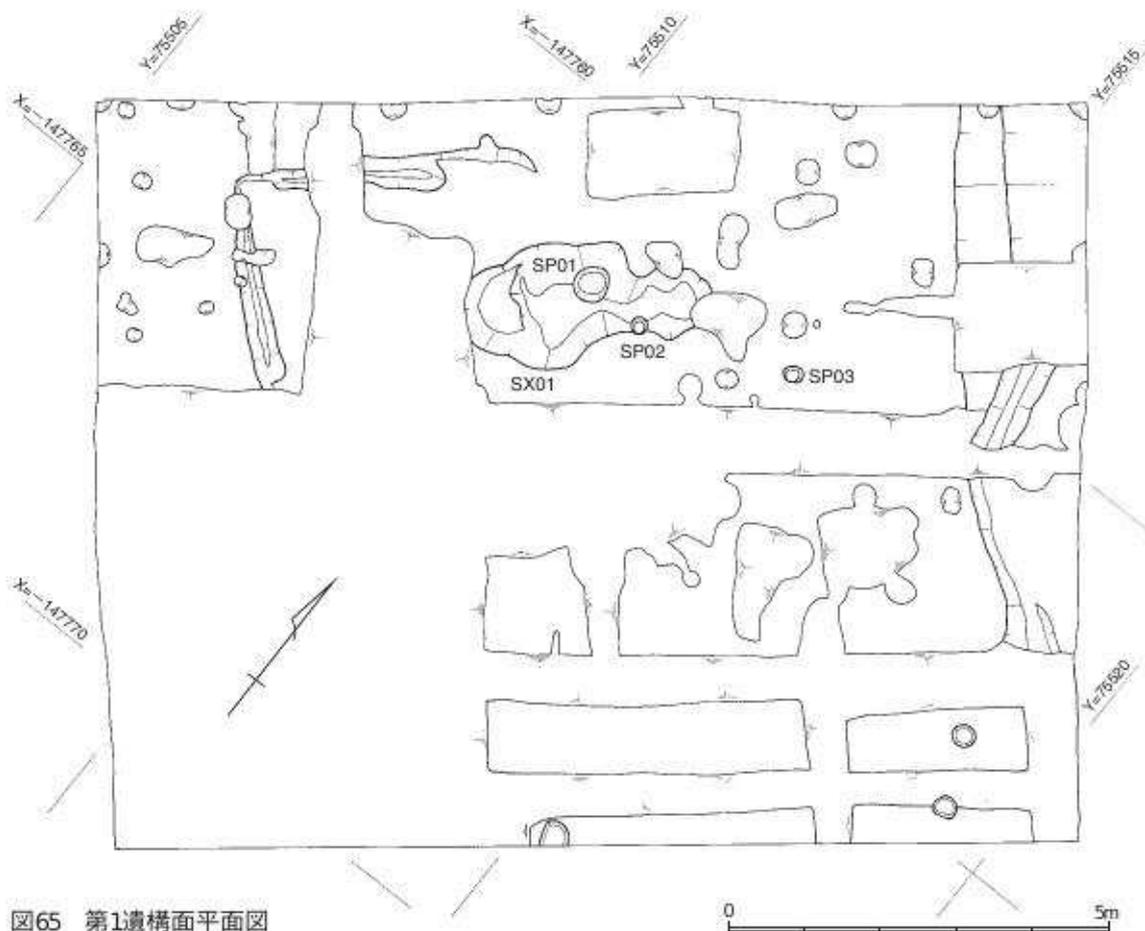


図65 第1遺構面平面図

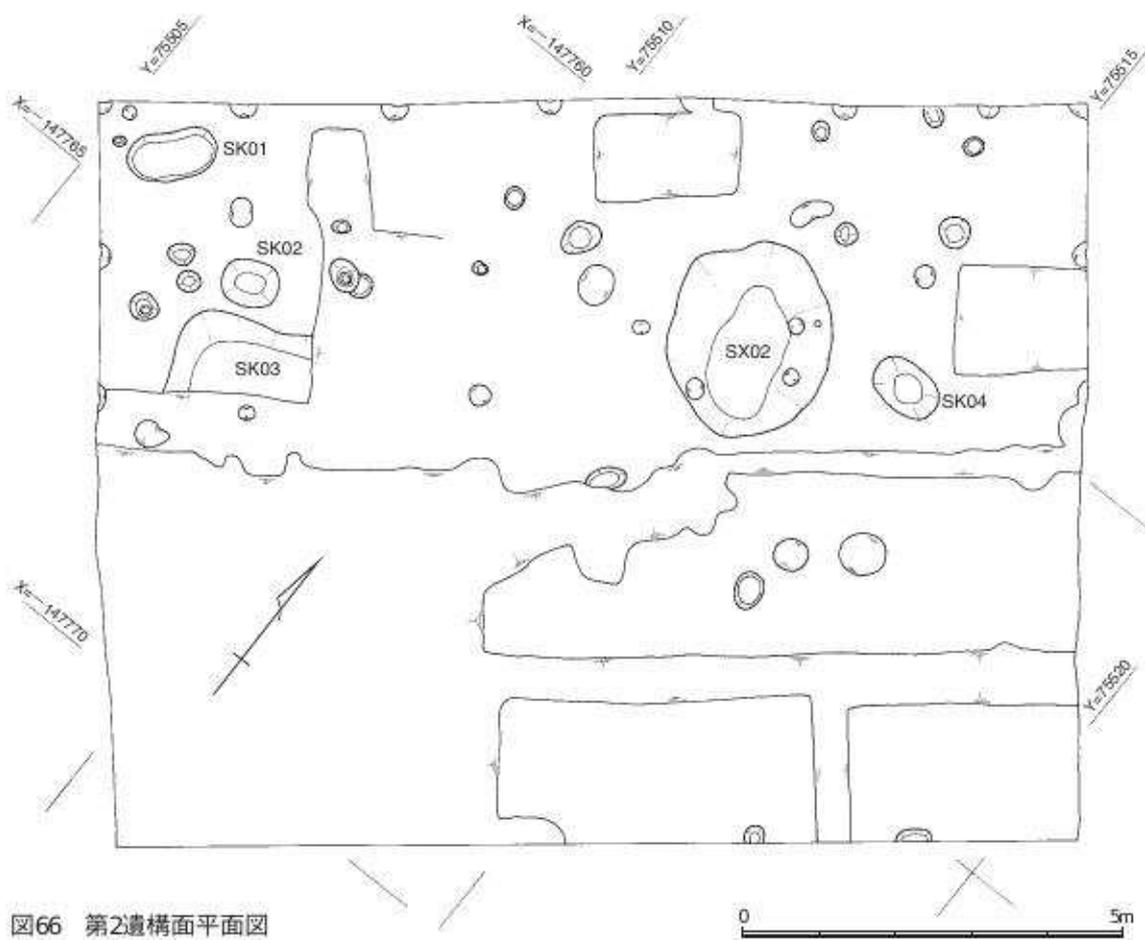


図66 第2遺構面平面図

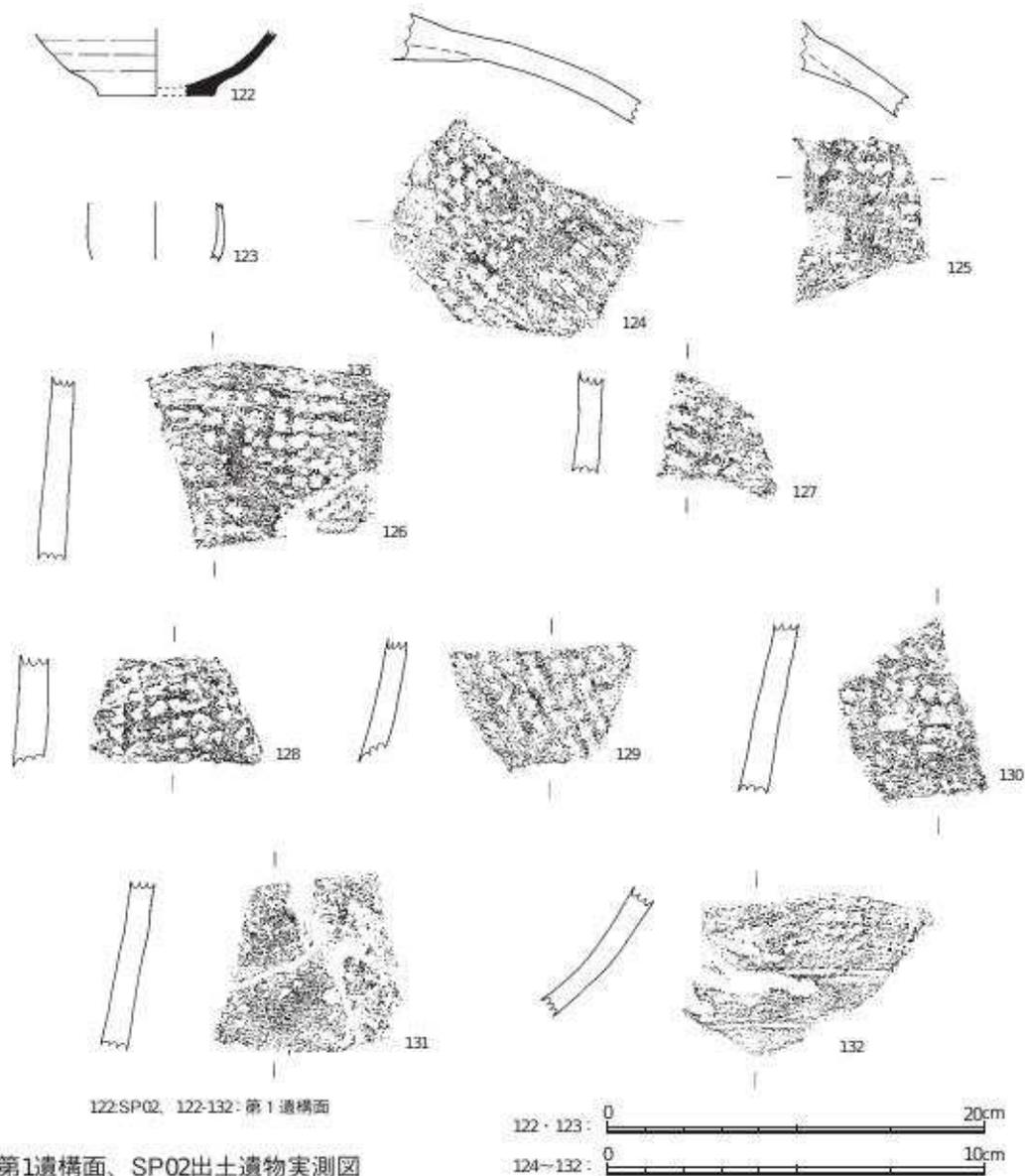


図67 第1遺構面、SP02出土遺物実測図

SP03 直径22~26cm、深さ25cmで、埋土は茶灰色砂質土である。土師器片が出土している。その他、中央部で不整形の落ち込みSX01や、北端で落ち込みを検出した。

#### 4. 第2遺構面

第2遺構面までの包含層からは弥生時代後期の土器が出土した。133と134は弥生土器鉢である。133は外面にタタキ、内面にハケを施す。134は表面剥離のため調整は不明瞭である。ともに弥生時代後期後半から末の資料と考えられる。

第2遺構面では、土坑とピットを検出した。

SK02 西側で検出した75×62cmの土坑で、埋土は茶灰色シルト質土である。138は弥生土器高坏である。上部は欠損するが、坏部は脚部が完成した後に作り足したものと考えられる。内面に絞り痕がみられる。

SK03 西側で検出した方形と考えられる土坑である。南側・東側は削平のため不明である。埋土は茶灰色シルト質土で、弥生時代末期~古墳時代初頭の遺物が出土した。136は弥生土器甕で、頸部は「く」字状に屈曲してたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。内面に板ナデを施し、外面にタタキ後板状工具でナデたような痕跡がみえる箇所がある。

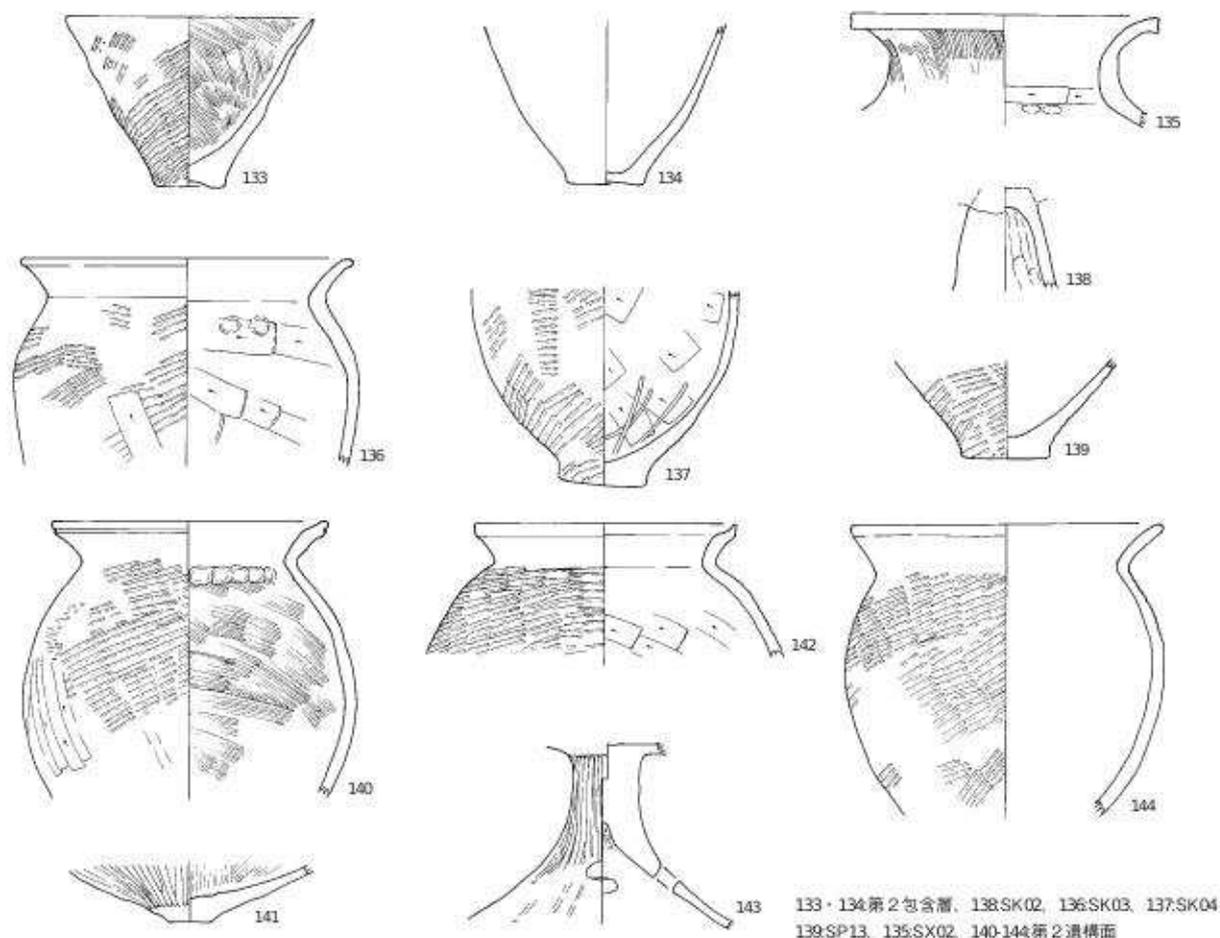


図68 第2遺構面、SK02~04、SP13、SX02出土遺物実測図

0 20cm

SK04 東半で検出した96×62cm、深さ8cmの塊形の土坑である。137は弥生土器甕で体部は長胴型を呈する。外面にタタキ、内面に板ナデを施す。外面に黒斑が確認できる。  
 SP13 中央で検出した53×42cmの楕円形のピットで、深さは35cmを測る。埋土は茶灰色シルト質土～細砂質土である。139は弥生土器甕で、外面にタタキ、内面に指ナデを施す。  
 SX02 中央北寄りで検出した265×215cmの楕円形の浅い落ち込みで、埋土は淡灰褐色細砂質シルトである。135は弥生土器壺である。口縁部外面にヨコナデによって面を作り出す。外面にハケを施す。

5. 第3遺構面

黒褐色砂質土を掘削して、第3遺構面を検出した。土器は主に上層部からの出土が多く、弥生時代後期のものと考えられる。北側は礫層で、南側はシルト系の土壌になる。遺構は、土坑とピット、溝を検出した。

SK05 中央北寄りで検出した108×90cm、深さ8cmの不整形な土

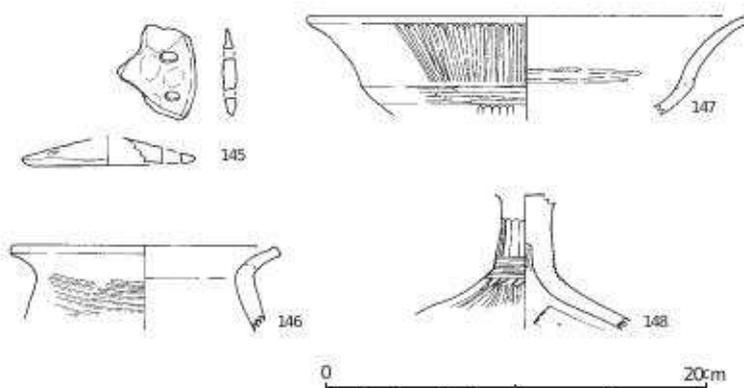


図69 第3遺構面出土遺物実測図

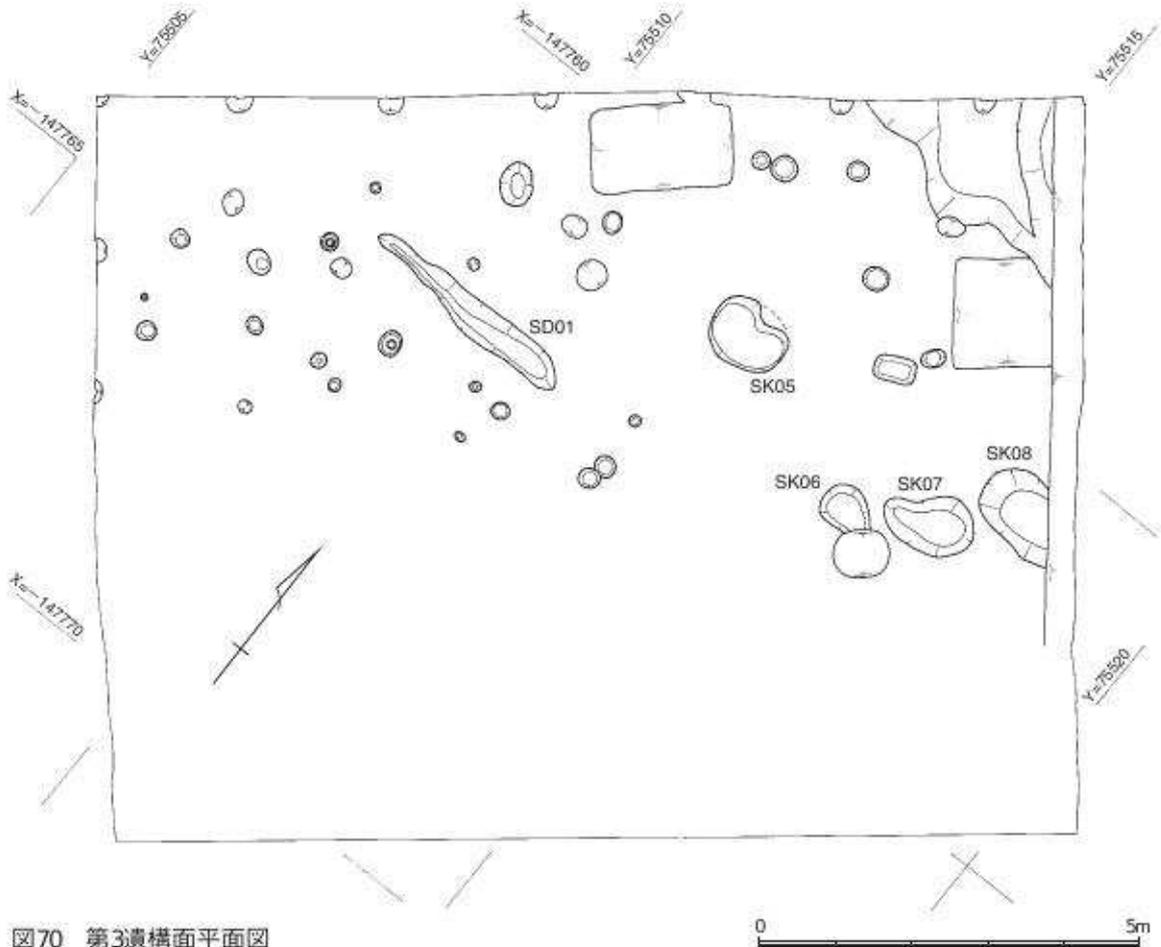


図70 第3遺構面平面図

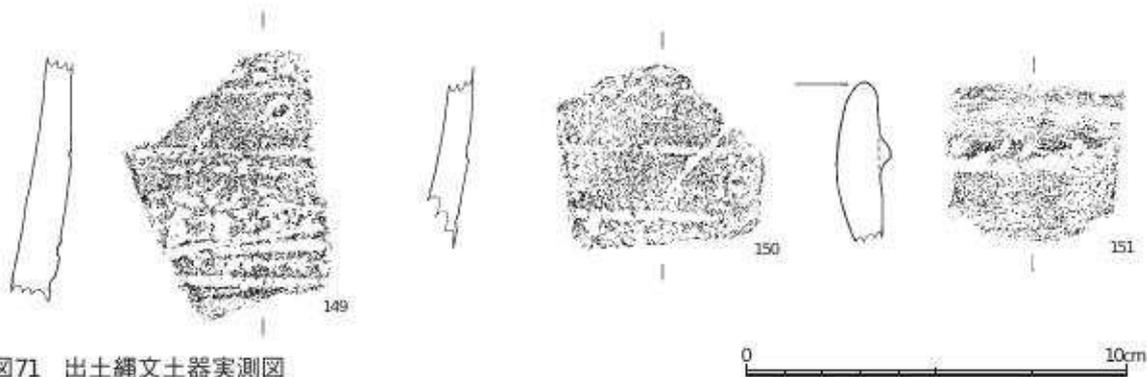


図71 出土縄文土器実測図

坑である。埋土は黒褐色砂質土である。

SK07 東半で検出した125×80cm、深さ14cmの土坑である。埋土は黒褐色シルト質土である。

SD01 西半で検出した長さ3m、幅45cmの西から東へ傾斜する溝で、埋土は淡黒褐色粘性細砂質土である。また西半で東西方向のピット列を検出したが、建物とは確認できなかった。

## 6. まとめ

調査区南半部は削平のため、良好な状態ではなかった。一方、北半部は遺物包含層が比較的良好に残存し、弥生時代後期、弥生時代末～古墳時代初頭、古墳時代～平安時代の3面の遺構面を確認することができ、周辺の調査成果とも整合するものであった。

## 第10節 第40次調査

### 1. 調査の概要

調査地は五番町2丁目地区で、第30次調査地の北側に位置する。標高は約9mである。飛鳥時代～奈良時代の遺構面を検出した。

### 2. 基本層序

近現代の整地土、宅地化直前の耕作土、旧耕作土である淡灰黄色土、淡黄灰色砂まじりシルト、遺物包含層である暗褐灰色粘質土、黒灰色粘質土と続く。

山手幹線拡幅に伴う発掘調査では、遺物包含層の暗褐灰色粘質土相当層の上面から切り込まれた遺構を検出しているが、今回の調査では遺構は検出されなかった。

黒灰色粘質土の上面以下は、工事影響深度以下となるため、面的には未調査であるが、攪乱壁面の観察によると、さらに下層には遺物包含層である黒灰色砂まじり粘質土、基盤層である淡灰黄色砂質土とつづく。山手幹線拡幅時の調査成果を考慮すると、第2遺構面は淡灰黄色砂質土の上面と考えられる。

調査はトレンチ状に2箇所設定し、北側を1トレンチ、南側を2トレンチとして調査した。

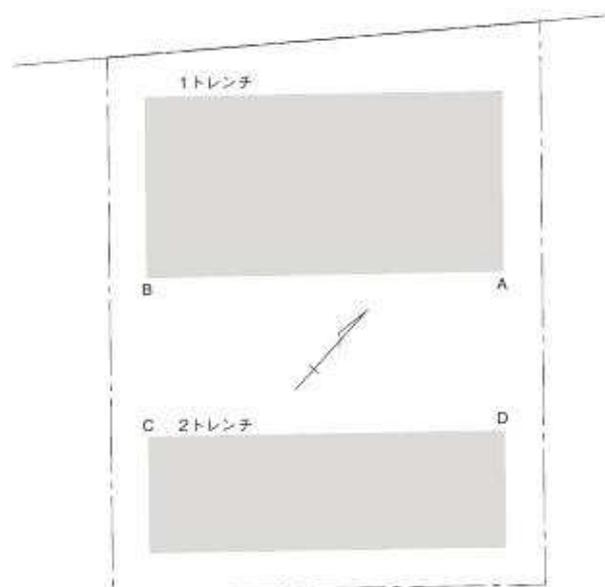


図72 第40次調査範囲図

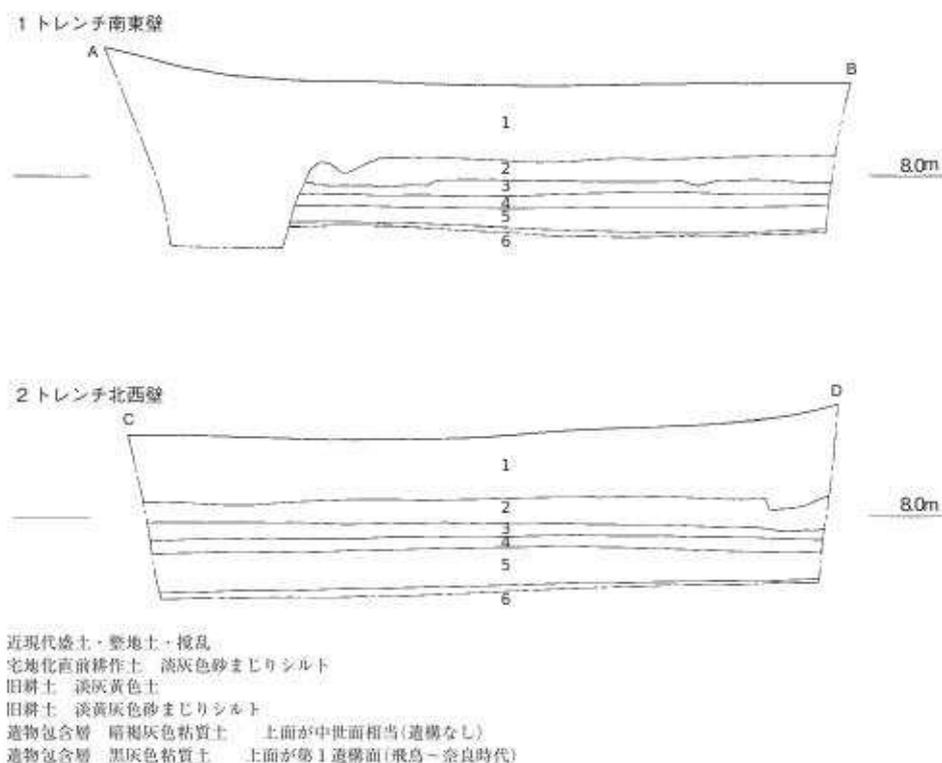


図73 土層断面図



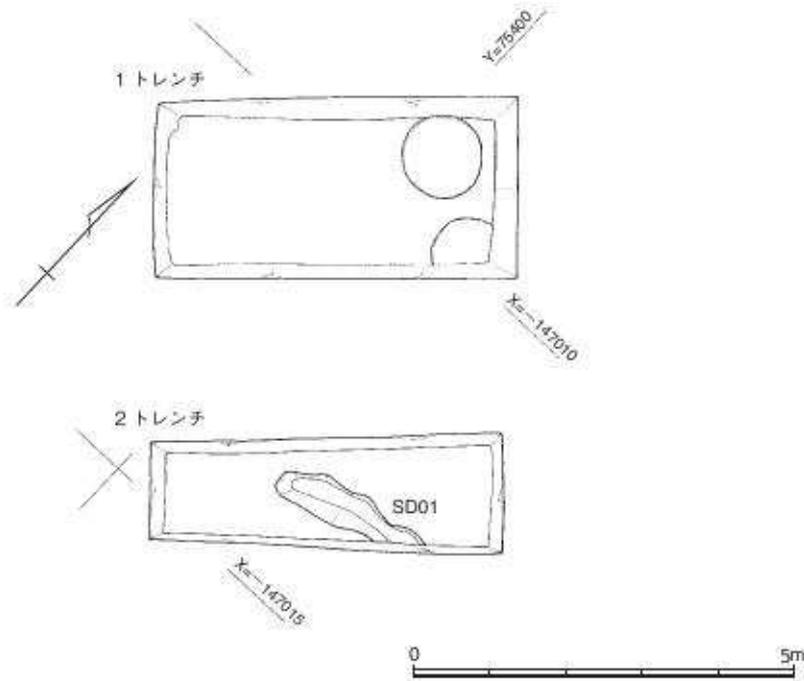


図74 遺構面平面図

### 3. 遺構

黒灰色粘質土の上面で検出した飛鳥時代～奈良時代の遺構面で、2トレンチで溝1条を検出した。1トレンチは攪乱のみであった。

**SD01** 2トレンチの中央で検出した東西方向の溝である。東側は調査区外に続くため全長は不明である。幅30～50cm、深さ約45cmで、断面は底が北側に片寄った「U」字状、埋土は黒色砂まじり粘土である。遺物は土師器片が少量出土した。

### 4. 遺物

暗褐色砂質土より古墳時代中期～中世の遺物が出土した。

152は須恵器壺である。体部は内湾してたちあがり、口縁端部は丸くおさめ、見込み部の凹みは弱い。口縁部外面には重ね焼きの痕跡が残る。低い平高台がつき、底面には回転糸切りの痕跡を残す。11世紀末～12世紀前半の資料と考えられる。153と156は須恵器つまみ付蓋である。153はつまみ部をナデによって凹ませるものの、中央がわずかに凸状となる。156は金属器模倣の坏蓋である。外面には幅の異なる沈線が2条めぐる。7世紀以降の資料と考えられる。154は須恵器坏である。底部外面に粘土紐巻き上げの痕跡残り、調整は粗い。内面に焼きぶくれがみられる。器形と口径から7世紀代の資料とも考えられるが、調整が粗いことからさらに下った資料とも考えられる。155は須恵器坏蓋である。天井部外面には自然釉がみられる。還元不良のため断面はやや赤味を帯びる。古墳時代中期後半の資料と考えられる。157は須恵器坏である。高台の断面は台形であり、底部はたちあがりに至るまで水平方向にややのびる。9世紀後半の資料と考えられる。158は須恵器高坏の脚部である。透孔は2方向であるが、段数は不明である。復元できる脚柱部径から無蓋高坏と推測される。TK209型式に並行すると考えられる。

159から160は土錘である。159と160は中型の棒状土錘で、両端に横方向の孔を穿つ。161は小型の棒状土錘で、横方向の孔を1つ穿つが、欠損のため元々の孔数は不明である。162は小型の管状土錘である。

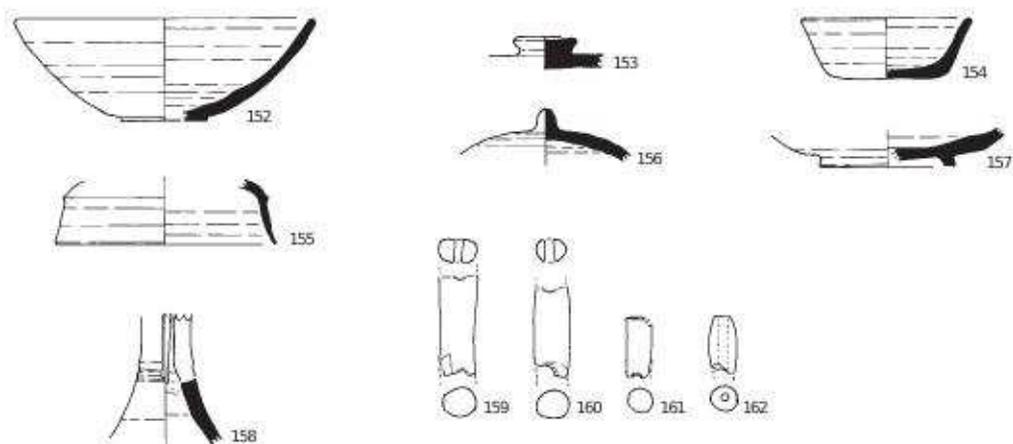


図75 暗褐灰色砂質土出土遺物実測図

0 20m

## 5. まとめ

今回の調査地点は上沢遺跡の範囲内でも南西端付近にあたり、微地形的にみると現在の地形も南西方向へ緩やかに傾斜している。今回は調査面積が狭いため遺構は溝を1条検出したのみで、遺構密度が低い状況である。山手幹線拡幅の発掘調査でも、調査地点のまさに南隣の部分は微高地から低湿地へと変化する位置で、同様に遺構密度が低くなっていく状況が確認されている。当地一帯の土地の利用状態が推察されよう。

## 第11節 第42次調査

### 1. 調査の概要

調査地は松本通8丁目地区に位置し、標高約13.9mの北西から南東方向の緩斜面地に立地する。調査の結果、遺構面が4面確認された。

### 2. 基本層序

表土・攪乱土・盛土、旧耕土、灰黄褐色砂、黄褐色シルト質砂、灰色砂（洪水砂）、黒色砂質粘土、灰黄褐色砂質粘土、黒褐色砂質粘土となる。調査地の地表の標高はT.P.13.9mである。

### 3. 第1遺構面

表土直下の黄褐色シルト質砂上面で確認できる遺構面で、標高はT.P.13.7mを測る。この面の遺構は下層の第2遺構面で検出することになったが、調査区壁面の土層断面の観察により、第2遺構面とは別の遺構面があることを確認した。土層断面によって確認できる第1遺構面の遺構は調査区南隅にあるNR02のみである。第2遺構面よりも新しい時代、古代末～中世の遺構面と考えられる。

NR02 幅1.7m以上、深さは約90cmを測り、北西から南東に流下する自然流路である。埋土はほとんど砂で、弥生土器のみが出土している。洪水等により上流部の弥生土器を含む遺物包含層を削りこんだものと考えられる。

### 4. 第2遺構面

黄褐色シルト質砂下面で確認した。標高はT.P.13.3～13.5mである。弥生時代末の土器を含む洪水砂の堆積NR01と掘立柱建物SB01、土坑等が確認されている。

SB01 NR01との切り合い関係から、SB01の方が新しい。主屋部分は東西3間分、南北1間分が検出されたが、北および東は調査区外となる。柱間は芯々間で約2.0～2.2mである。

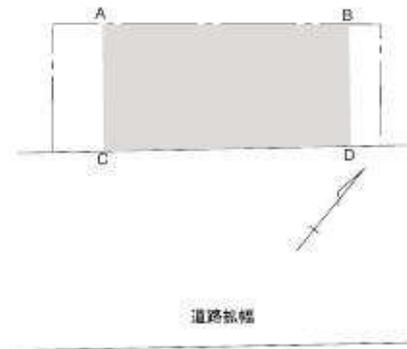


図76 第42次調査範囲図

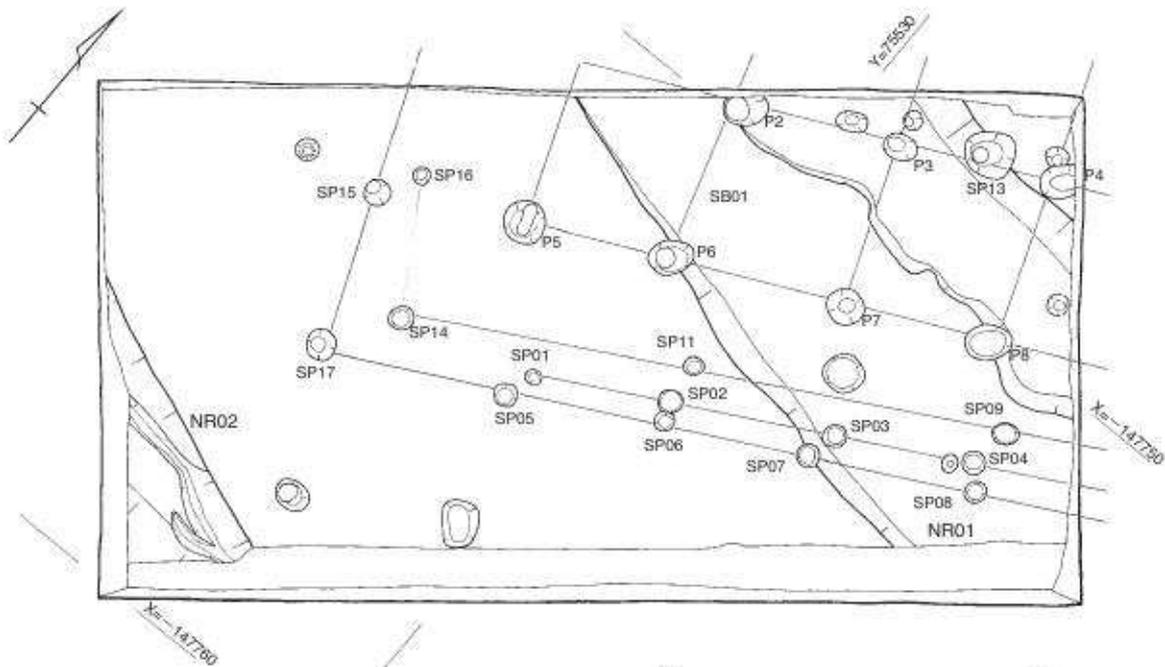
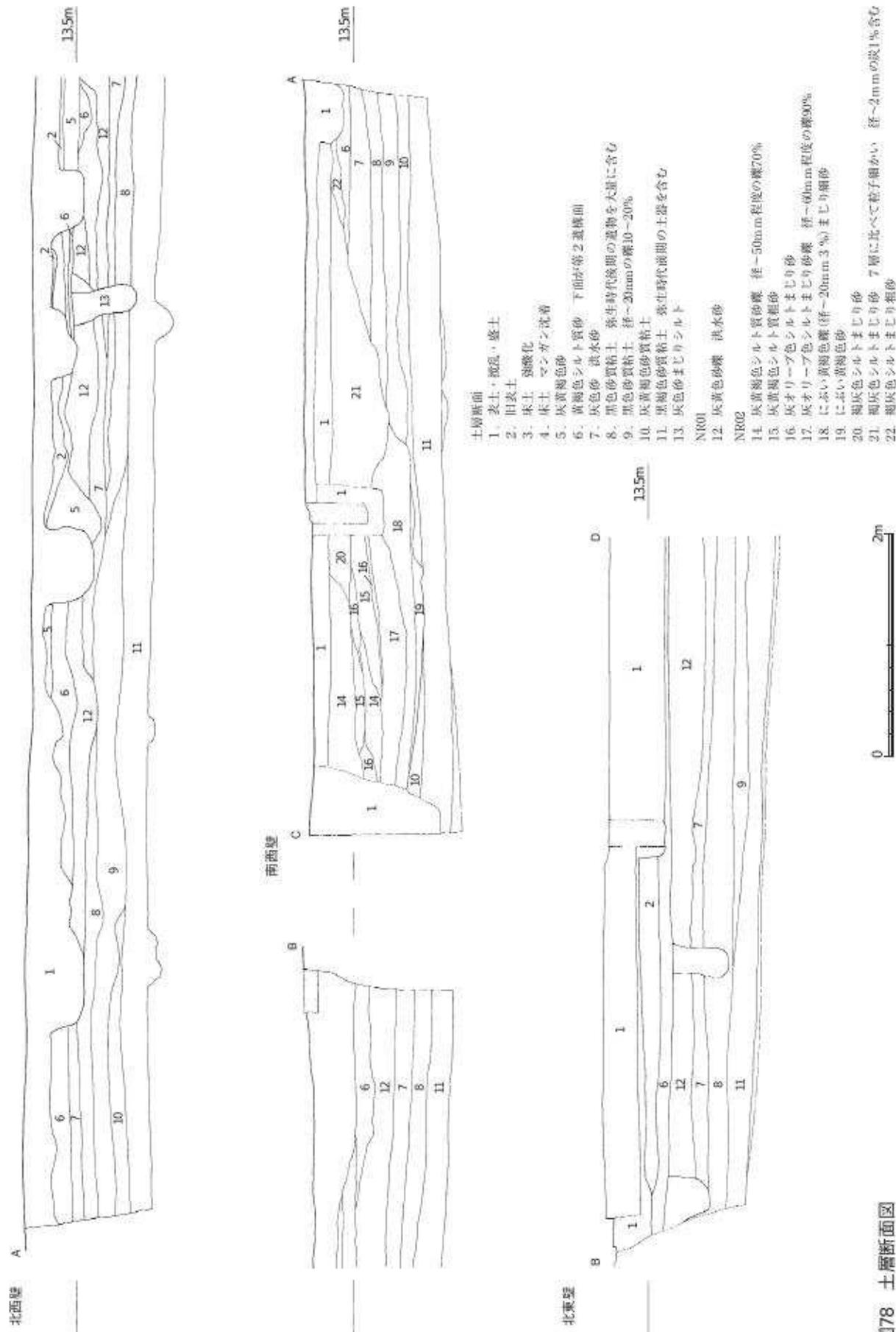


図77 第1・2遺構面平面図



- P2 1. 灰黄褐色シルト質砂
- 2. 灰色砂まじりシルト
- 3. 灰色砂質シルト
- 4. 灰色シルト質砂
- 5. 灰色シルトまじり砂
- 6. 黒褐色シルトまじり粘土

- P3 1. 灰色シルト
- 2. 灰色シルト質砂
- 3. 黄灰色シルト質砂
- 4. 黒色シルト質粘土

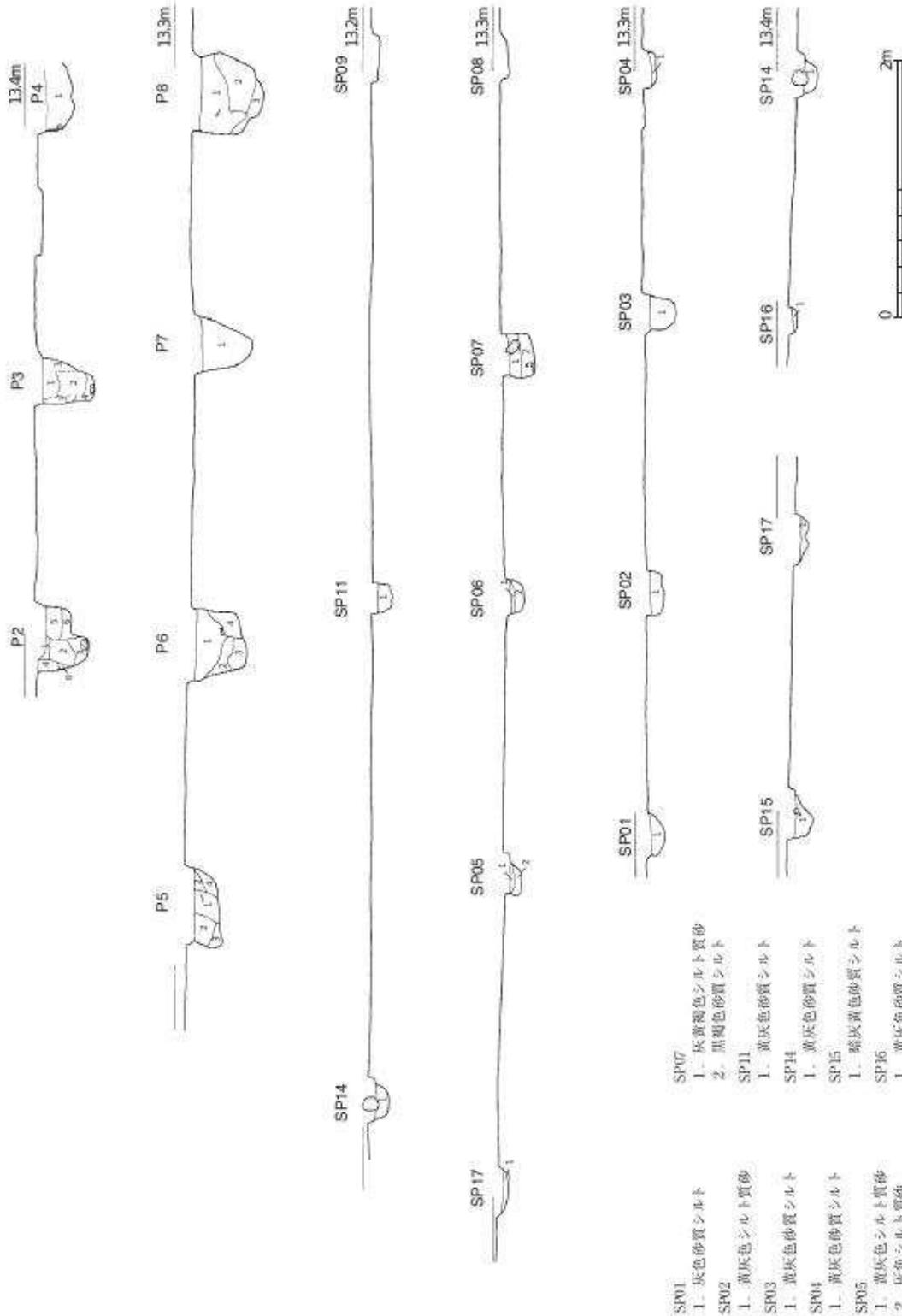
- P4 1. 灰色砂質シルト

- P5 1. 褐灰色シルト質砂
- 2. 黄灰色砂質シルト
- 3. 黄灰色シルト質砂
- 4. 黒褐色砂まじり粘土

- P6 1. 黄灰色シルト質砂
- 2. 黒褐色シルト質粘土
- 3. 褐灰色細砂
- 4. 2層+3層

- P7 1. 灰色砂質シルト

- P8 1. 黄灰色砂質シルト
- 2. 灰色砂質シルト
- 3. オリーブ黒色砂質シルト



- SP01 1. 灰色砂質シルト

- SP02 1. 黄灰色シルト質砂

- SP03 1. 黄灰色砂質シルト

- SP04 1. 黄灰色砂質シルト

- SP05 1. 黄灰色シルト質砂
- 2. 灰色シルト質砂

- SP06 1. 黄灰色シルト質砂

- SP07 1. 灰黄褐色シルト質砂
- 2. 黒褐色砂質シルト

- SP11 1. 黄灰色砂質シルト

- SP14 1. 黄灰色砂質シルト

- SP15 1. 黄灰色砂質シルト

- SP16 1. 暗灰色砂質シルト

- SP17 1. 黄灰色砂質シルト

- SP18 1. 褐灰色砂質シルト

図79 SB01柱穴断面図

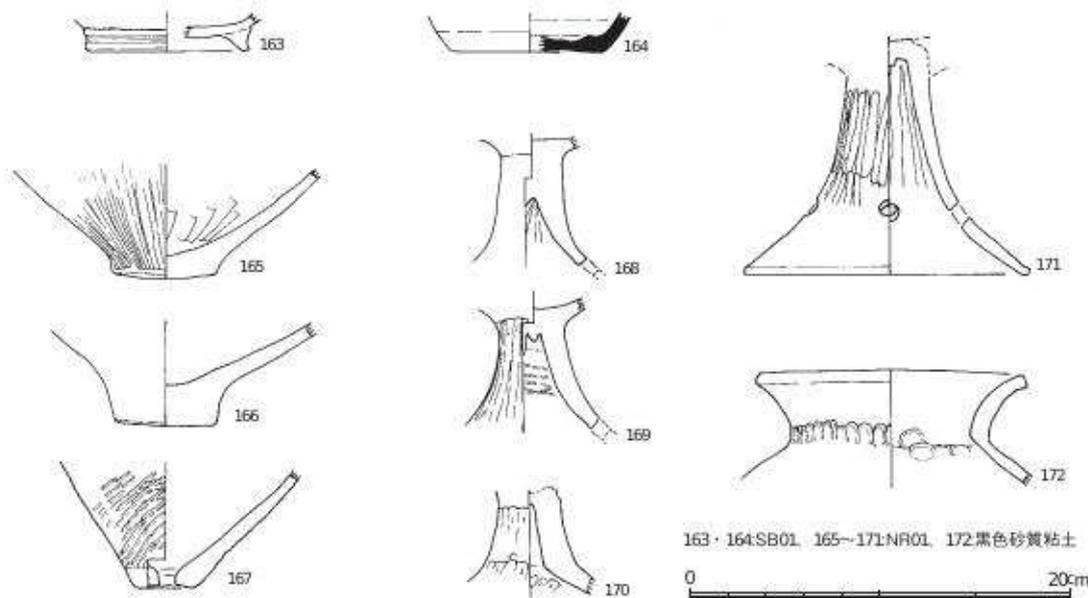


図80 SB01、NR01、黒色砂質粘土出土遺物実測図

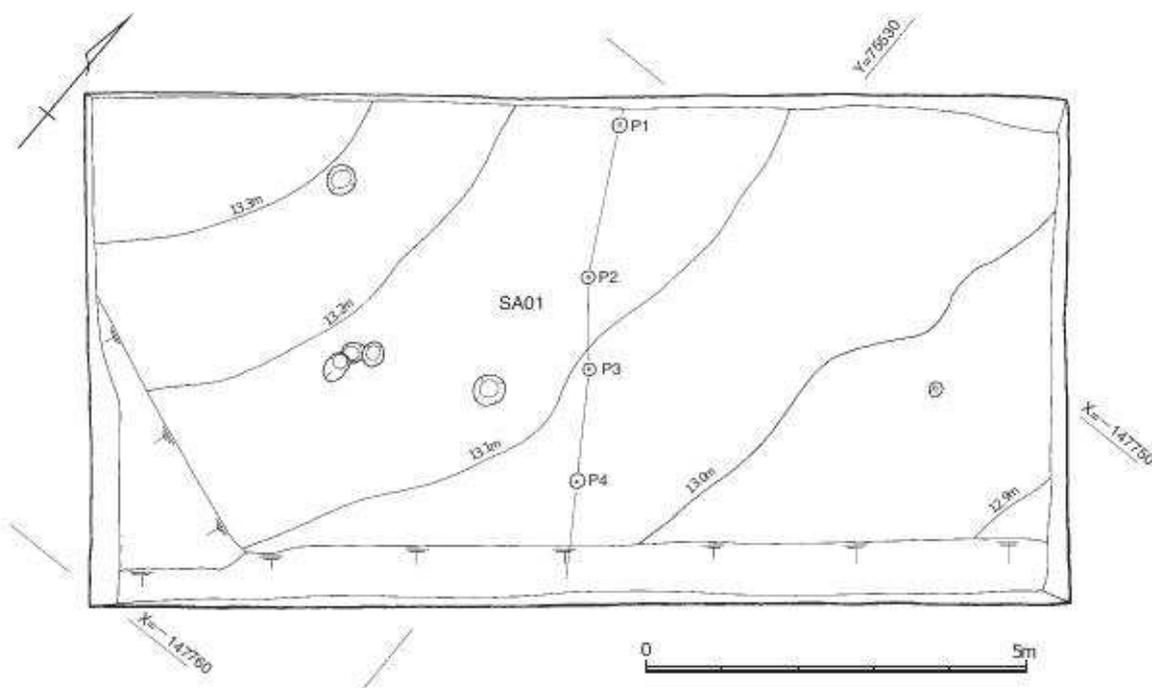


図81 第2遺構面-2平面図

柱穴は直径50cm程度の円形の掘形で、柱の直径が約20cm、深さは25～55cmを測る。P2・P5などは柱を抜いた痕跡が残り、P2は柱の抜き痕に一辺10数cmのチャート2個と石英1個が納められていた。また、南辺および西辺に縁を支える柱穴が確認されている。南辺のものは柱穴が2個対になっており、縁部分の改築があったことをうかがわせる。建物の規模は確定できなかったが、縁を持つことや柱の状況から、比較的格式の高い建物であったことが推測できる。

163はP8から出土した土師器碗の底部である。9世紀中頃の資料と考えられる。164はSP15から出土した須恵器壺の底部である。平坦な底部から、胴部が外方へ内湾気味にた

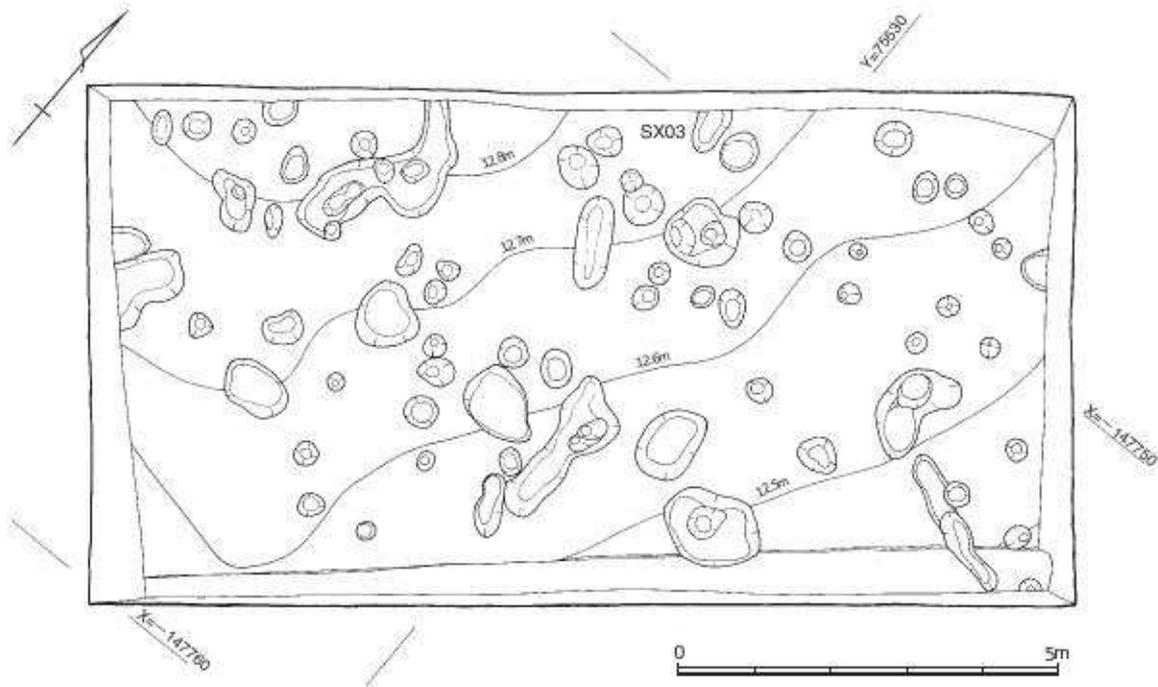


図82 第4遺構面平面図

ちあがる。底部は回転ヘラ切りの後、ナデを施す。時期は不明である。

柱穴から出土した遺物は小片である。平安時代の建物と考えてよいだろう。

SP13 調査区の北隅で検出された柱穴である。直径60cm程度の円形の掘形で、柱の直径は30cmを越える。SB01の柱よりも大きなもので、掘立柱建物等の一部の可能性がある。瓦片・土師器片・須恵器片が出土している。

NR01 北西から南東方向の洪水砂の堆積である。幅約5m、深さ30cmを測る。

弥生時代末～古墳時代初頭の遺物が出土した。165・166は壺の底部である。内面は板ナデ、165の外面はヘラナデを施す。167は甌で、体部外面は右上がりのラセン状連続タタキを施し、底部に穿孔を持つ。168～171は高坏脚部である。171の坏内面底部は平坦で、庄内式新段階に並行する資料と考えられる。

## 5. 第2遺構面-2

弥生時代末の遺物包含層である黒色砂質粘土上面で確認した。標高はT.P.13.3～13.5mである。第2遺構面で検出しきれなかった遺構もあるが、両遺構面について検討した結果、杭列SA01など黒色砂質粘土上面に至って検出される遺構も存在する。あるいは黒色砂質粘土が埋没した段階の遺構面として別に把握すべきものかもしれない。SA01のほか柱穴状ピットが若干検出されている。

SA01 北西～南東方向(=条里方向)の杭列である。調査区内で4本確認された。杭自体は腐朽してやせているが、すべて遺存していた。残存状況の良好なP1は先を削って尖らせた径4cmほどの棒杭である。杭の周囲は土壌が青っぽく変色し、柱穴状に見える。杭の間隔は芯々間でP1-208cm-P2-121cm-P3-153cm-P4である。

## 6. 第3遺構面

黒色砂質粘土の下面で、標高はT.P.13.2～13.3mである。黒色砂質粘土は弥生時代末の遺物を多量に含む表土層であり、その下面で遺構が検出されると推測されたが、全く遺

構は検出されなかった。

172は黒色砂質粘土から出土した弥生土器壺である。口縁部は外反し、端部は面を持つ。器表面は剥離しており、調整は不明である。弥生時代末の資料と考えられる。

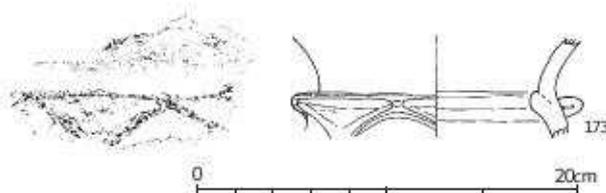


図83 SX03出土遺物実測図

## 7. 第4遺構面

無遺物層である黒色砂質粘土・灰黄褐色砂質粘土下の黒褐色砂質粘土には遺物が含まれ、この層下面で検出した。標高はT.P.12.5～12.8mである。黒褐色砂質粘土出土の遺物から弥生時代前期の遺構面と判断される。ただし検出された遺構は不整形の溝状・土坑状の落ち込みで人為によるものではない可能性もある。落ち込み内からの出土遺物もごくわずかである。遺物包含層は土壌化がすすんだ安定した基盤層であり、この地点では遺構が確認されなかったが、近辺に弥生時代前期の遺構が存在するものと考えられる。

SX03 北端で検出した用途不明の落ち込みである。

173は縄文土器深鉢の頸部である。頸部外面に粘土紐を貼り付け、連続する三角形の模様を構成している。体部は頸部で内傾し、口縁部は体部端部の若干外側から、外反気味にたちあがる。口縁部及び粘土紐の接合後のナデは弱く、接合痕は明瞭である。時期は不明である。

## 8. まとめ

平安時代の大型建物が確認されたことが注目される。出土遺物から、平安時代前半のものである可能性が高い。第31次調査で確認された奈良時代後半の井戸や、伝房王寺の存続期間と考えあわせると、調査地周辺には寺関係の施設ないしは富裕層の屋敷地が奈良時代～平安時代にかけて存在していたものと考えられる。

弥生時代の遺構については第3遺構面の弥生時代後期、第4遺構面の弥生時代前期ともに遺構は検出されなかった。しかし第3遺構面では大量に土器が投棄されたかのような状態で出土しており、ごく近辺に遺構が存在するものと推測される。

## 第12節 第56次調査

### 1. 調査の概要

調査地は五番町3丁目地区で、標高約10.6mの遺跡西端に位置する。調査の結果、弥生時代～奈良時代の4面の遺構面が確認された。

### 2. 基本層序

表土・盛土、旧耕土（下面が第1遺構面）、灰オリーブ色砂まじりシルト（下面が第2遺構面）、黒褐色砂まじり粘土（下面が第3遺構面）、黒褐色礫まじり粘土（下面が第4遺構面）となる。第1遺構面・第2遺構面は中世もしくは中世以降、第3遺構面は古墳時代後期～奈良時代、第4遺構面は弥生時代頃の生活面と考えられる。

### 3. 第1遺構面

旧耕土下面で検出した遺構面である。中世以降に作られ近代に宅地造成により埋め立てられた耕作地で、北東部は削平を受けて遺構面が残らないが、そのほかの部分で水田3面が確認された。遺構の多くは鋤溝で、他に土坑・溝がある。

SK01 北西部で検出した直径1.7～1.8m、深さ28cmの土坑である。埋土は灰色粘土まじり砂である。

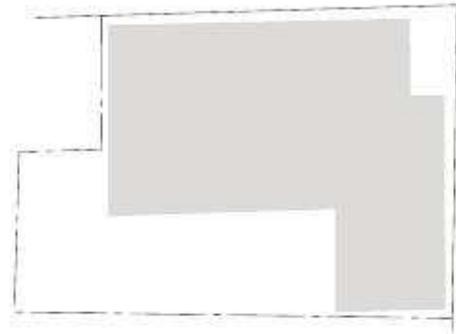


図84 第56次調査範囲図

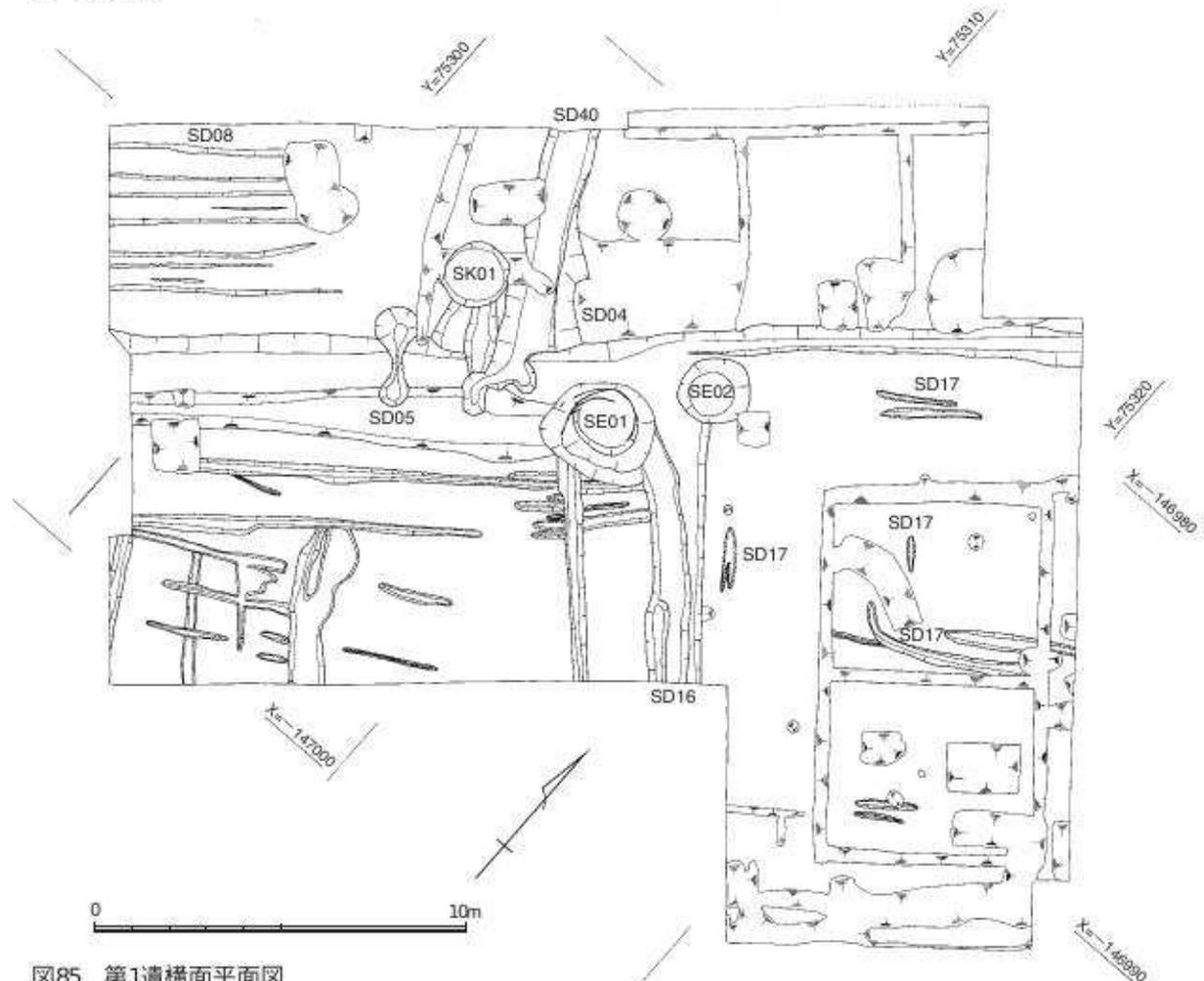


図85 第1遺構面平面図

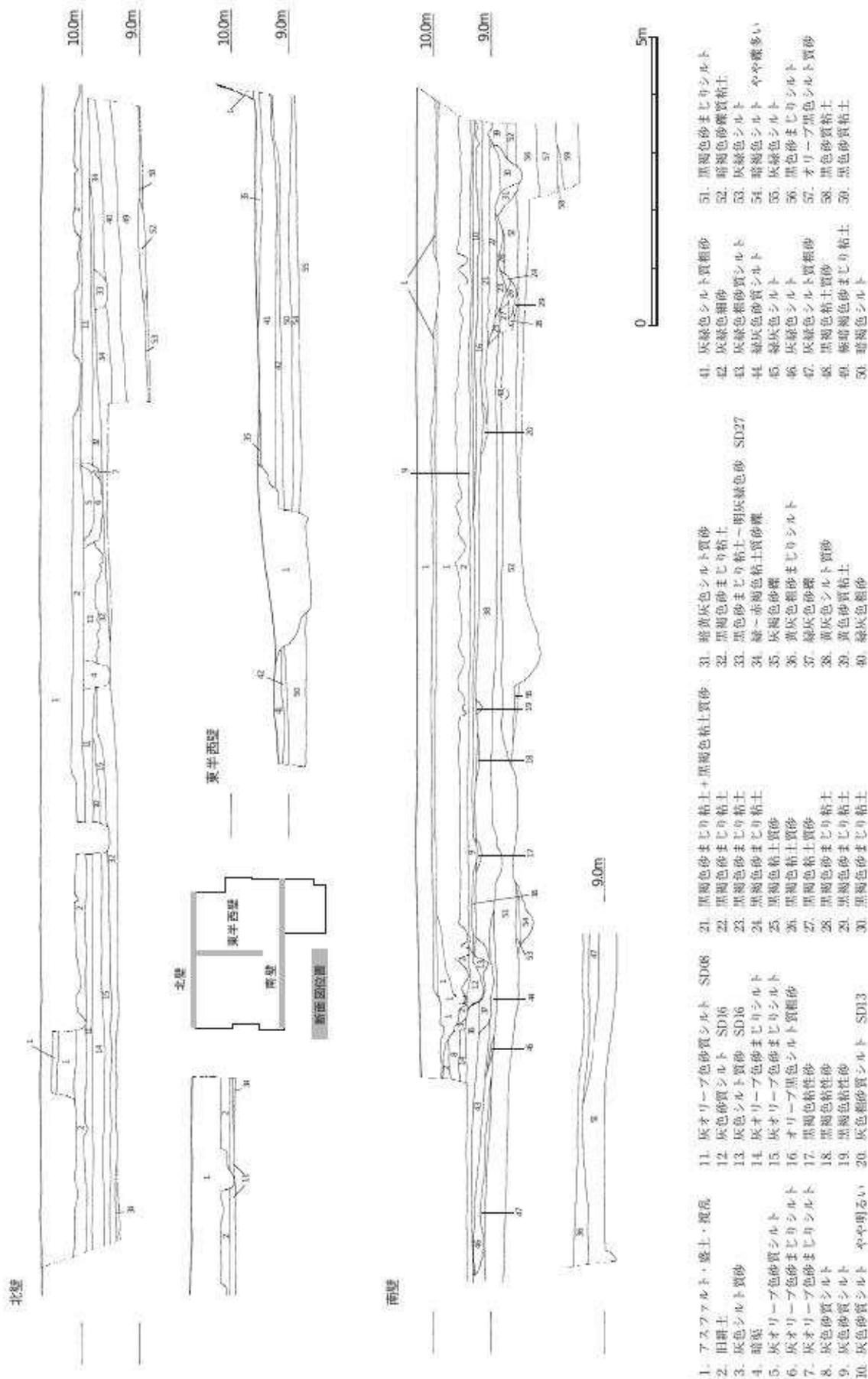


図86 北・東半西・南壁断面図

174は丹波焼の壺である。外面に黒釉を施し、釉葉の垂れがみえる。175は須恵器坏蓋である。稜は弱く、口縁部は丸くおさめる。TK10~43型式に並行する資料と考えられる。176は土師器脚付鍋の脚部である。断面は円形を呈す。

SD01 南西部の鋤溝である。178は須恵器坏である。器高は低く、受部が発達し、たちあがりは受部よりもわずかに高い程度である。飛鳥Ⅱ型式に並行する資料と考えられる。

SD02 南西部の鋤溝である。177は須恵器壺である。やや外反しつつのびる口頸部をもつ。

SD04・40 北西部で検出した。SD04は、幅1.3~4.0m、深さ35cmの断面逆台形をした溝である。約6m分を検出した。SD40は近世の遺物が入る石積みの側壁を持つ溝であるが、その裏込め部に奈良時代を中心とする古代の瓦片が多く含まれていた。これはこの遺構とほぼ同じ位置に存在するSD04に包含されていた瓦がSD40の掘削の際に混入したものと考えられる。大きく攪乱を受けるためSD04については第1遺構面の遺構なのか第2遺構面のものなのかについて確認することはできなかった。

1997年の兵庫県教育委員会による室内遺跡の発掘調査の際に瓦が多く出土した溝は、古代の遺構面ではなくより新しい堆積土を切り込む遺構であったと報告されており、この遺構はSD04の北側にあたる位置に存在する。遺物の出土状況は類似している。

SD04及び周辺の攪乱土から出土した瓦は土石流で流されているため、ほとんどの表面が磨滅しているが、量的には28リットルコンテナ3箱ほどと多い。二次的な火を受け、赤変したり、他の瓦が融着しているものも認められる。

なお、水田の段部分の盛り土中にも瓦片が比較的多く含まれていた。

SD04からは以下の遺物が出土している。182は丹波焼の播鉢である。183は須恵器壺である。口縁部が「コ」字状を呈し、端部は丸くおさめる。184は土師器の把手部である。たちあがりは短く、断面は横方に潰れた楕円状を呈す。器種は不明である。185と186は須恵器坏蓋である。185は体部が平坦で、口縁部で屈曲し、垂直方向に短くのびる。9世紀代の資料と考えられる。186は稜を作るものの弱く、口縁部は丸くおさめる。6世紀中葉~後半の資料と考えられる。187は須恵器坏である。底部と体部との境に稜を作り出

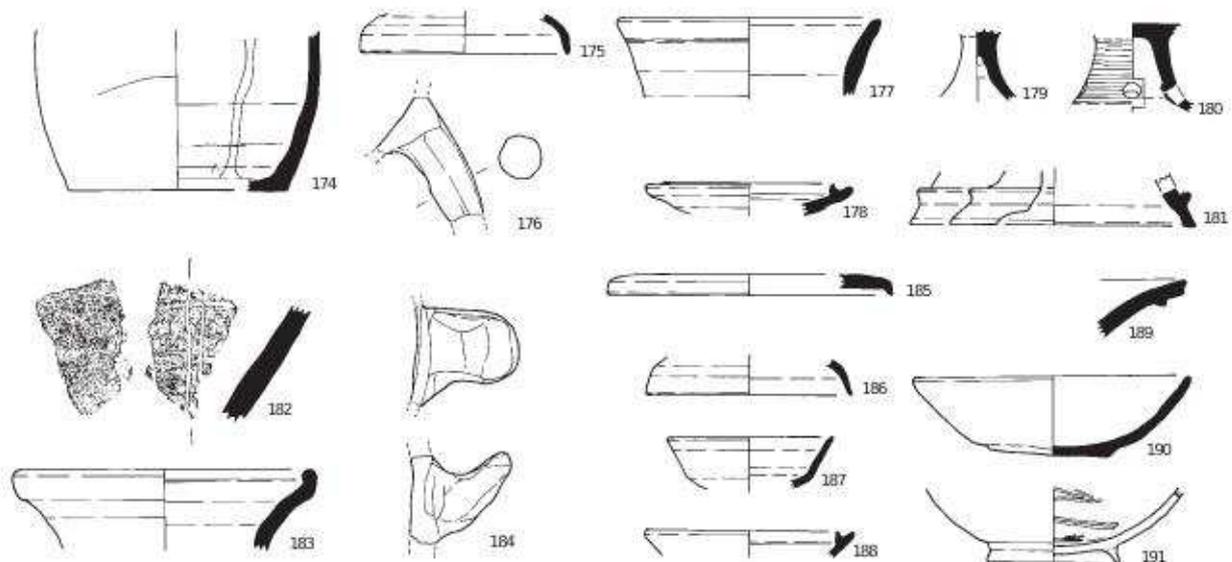


図87 第1面遺構・灰色砂まじりシルト出土遺物実測図

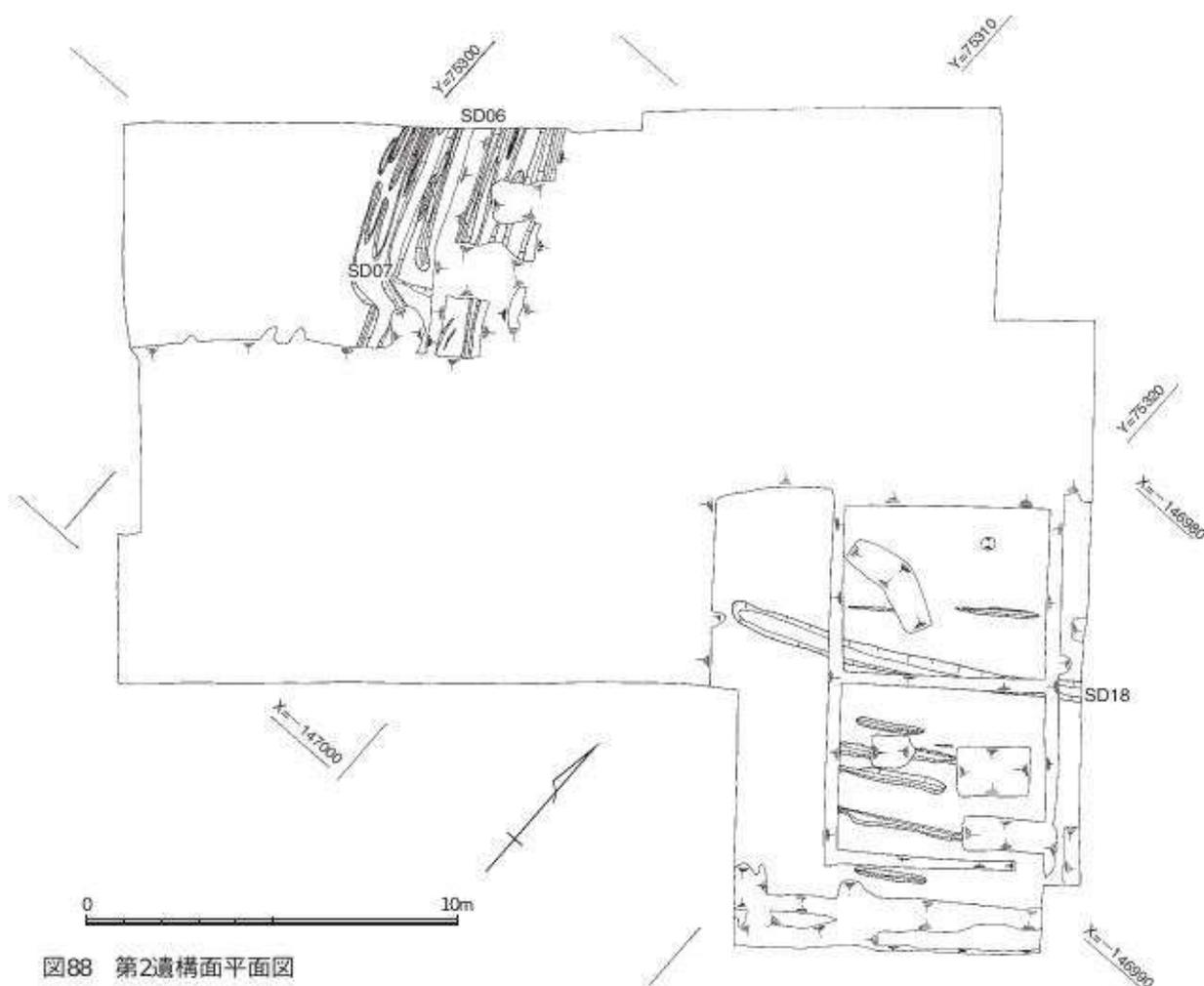


図88 第2遺構面平面図

す。飛鳥Ⅱ型式に並行する資料と考えられる。188は坏である。受部が発達し、たちあがりは受部よりもわずかに高い程度である。飛鳥Ⅱ型式に並行する資料と考えられる。  
SD05 北西部で検出した。長さ2.7mの北西から南東方向の溝である。

179は須恵器高坏の脚柱部である。

SD08 西端で検出した南西-北東方向の溝である。幅約80cmで、鋤溝と考えられる。

189は須恵器甕である。小破片のため、口径の復元は困難である。口縁端部はやや凹み、口縁部下部外面に断面三角形の突帯をつける。

#### 4. 第2遺構面

灰オリーブ色砂まじりシルト層下面で検出した中世の遺構面である。北東部および南西部は削平を受け遺構面が残らない。遺構は鋤溝がほとんどで、耕作地と考えられる。耕土の下層から平安時代末～鎌倉時代と思われる須恵器坏などが出土しており、中世の遺構面と推定される。

SD06 SD07の東側で検出した暗渠である。幅50cm、深さ26cmを測る。180は須恵器高坏である。脚部にカキ目を施し、円形の透孔を2方向に穿つ。TK23・47型式に並行する資料と考えられる。

SD07 北西部で検出した南北方向の鋤溝である。深さは数cmを測る。181は須恵器壺の脚端部である。底面は平坦に成形し、外面に上向きで断面台形の突帯を巡らす。方形の透孔を穿ったと考えられるが、穿孔数は不明である。

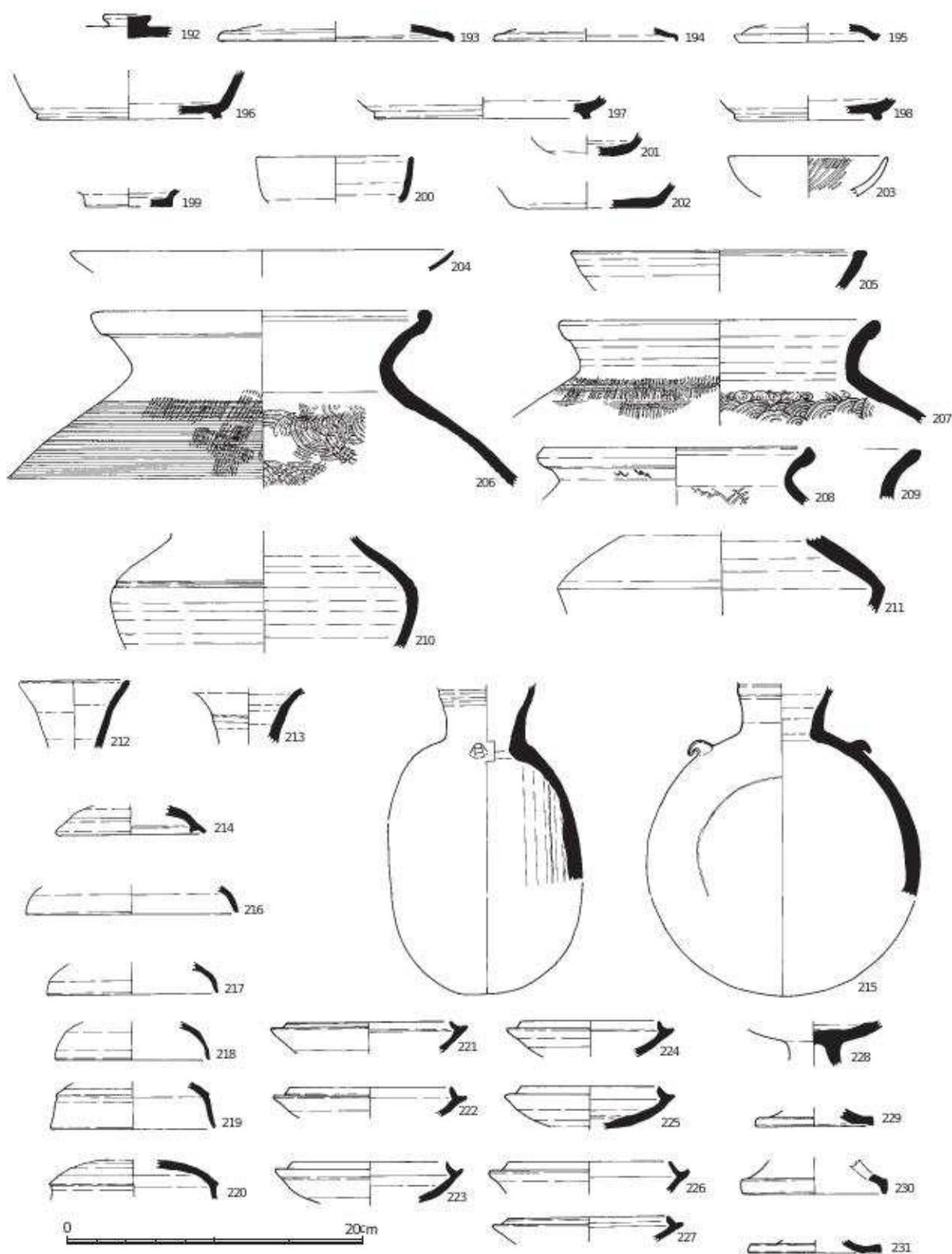


図89 黒褐色砂まじり粘土出土遺物実測図

### 5. 灰色砂まじりシルト出土遺物

中世の土器が出土した。190は須恵器塚である。内面底部に見込み部はなく、やや凹む程度である。12世紀中葉～後半の資料と考えられる。191は黒色土器である。体部は内湾してちががる。内面にミガキを施す。高台は断面長三角形を呈し、外傾する。11世

紀前半～中葉の資料と考えられる。

## 6. 黒褐色砂まじり粘土出土遺物

192～195は須恵器坏蓋である。192のつまみは中心が凹む。193と194は口縁部で垂直方向に短く屈曲する。195は口縁端部で屈曲し、内側が接地する。これらはいずれも8世紀後半～9世紀前半の資料と考えられる。

196～202は須恵器坏である。196～198は断面方形の高台を持ち、体部は高台周辺でたちあがる。8世紀後半～9世紀前葉の資料と考えられる。199は高台付近で1段落ちる底部を持つ。200は体部が直線的にひらく。201は底部が平底である。202は底部が丸みをやや帯びる。

203は黒色土器坏である。体部は内湾気味にたちあがり、口縁部は丸くおさめる。内面にミガキを施す。

204は須恵器皿である。205は須恵器鉢である。口縁部がやや肥厚し、端部を平坦に整える。206～209は須恵器甕である。206は口縁部が「コ」字状を呈する。外面に縦方向の平行タタキのちカキ目を施し、内面に同心円文を残す。207は頸部が外反してたちあがった後、口縁部がやや肥厚して端部を丸くおさめる。外面に縦方向の平行タタキの後カキ目を施し、内面に同心円文を残す。208は頸部が短くのび、口縁部外側が肥厚する。口縁部内面に強い凹みを施す。内面に同心円文を残す。209は小破片であり、口径の復元は困難である。頸部が外反してのび、口縁端部は丸くおさめる。

210と211は須恵器長頸壺である。210は肩部の屈曲はゆるく、沈線が1条めぐり。211は肩部が「く」字状に屈曲し、鋭い稜を作り出す。

214は須恵器坏蓋である。内面の返りは口縁部とさほど変わらない高さに留まる。飛鳥Ⅱ～Ⅲ型式に並行する資料と考えられる。212と213は須恵器瓶類もしくは壺類の口縁部である。215は須恵器提瓶である。体部は円盤状の粘土を貼り付けることで閉塞を行っている。指状把手が1対取り付く。TK43～209型式に並行する資料と考えられる。

216～220は須恵器坏蓋である。216～218は体部に稜が認められないのに対し、219と220は明確な稜をもつ。前者はTK10～43型式、後者がTK23・47型式に並行する資料と考えられる。221～227は須恵器坏である。いずれも体部は低く、受部の発達が見受けられる。221と227はTK209型式～飛鳥Ⅰ型式、それ以外はTK43～209型式に並行する資料と考えられる。

228～231は須恵器高坏である。228は脚柱部が狭く、透孔の有無は不明である坏部内面に降灰がみられる。229と231は脚裾部がのび、端部は四角くおさめる。230は脚端部が内湾する。方形透孔を穿ったと考えられるが、数や方向は不明である。TK47型式に並行する資料と考えられる。

## 7. 第3遺構面

黒褐色砂まじり粘土層下面で検出した遺構面である。黒褐色砂まじり粘土層からは古墳時代～平安時代の遺物が出土した。掘立柱建物・溝・柱穴などを検出した。

SB01 南北2間×東西3間(3.6×3.8m)の総柱建物である。柱間は桁行1.1～1.4m、梁行1.7～1.9mを測る。柱穴は直径60～90cmの円形で、深さは残存状況が良好な柱穴で55cmを測り、主軸はN-25°-Wである。柱痕径が30～40cmほどと太く、柱間も狭いことから、倉庫のような重量物に耐える頑丈な構造の建物が想定される。柱痕には焼土・炭が多く入

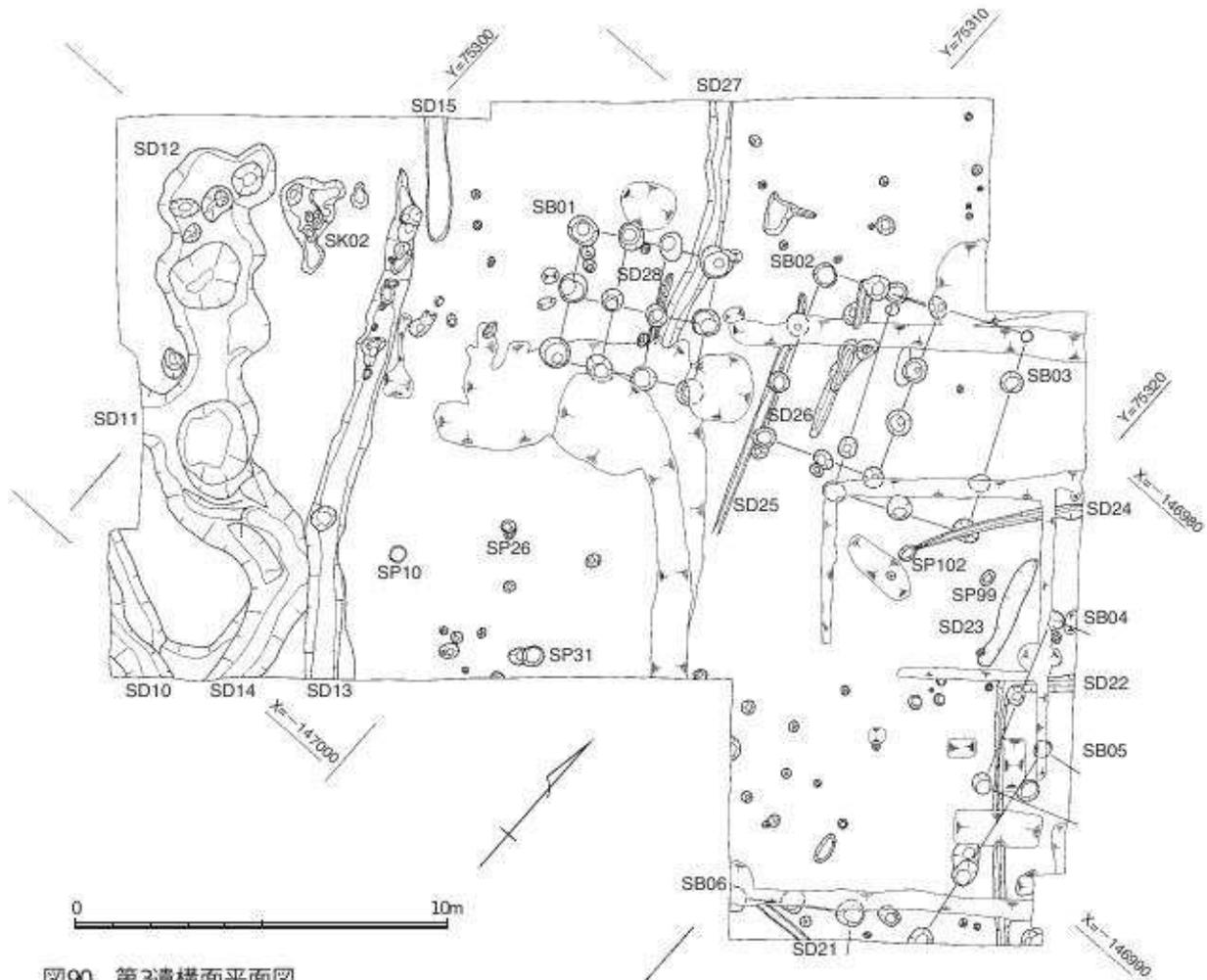


図90 第3遺構面平面図

り、火災にあったものと推定される。

232と233は須恵器大甕である。232は口縁部外側が肥厚する。外面に縦方向の平行タタキのちカキ目を施し、内面に同心円文を残す。233は頸部が外傾してのびたのち、口縁部で上方に屈曲し、端部を丸くおさめる。外面に縦方向の平行タタキのちカキ目を施し、内面に同心円文を残す。

234は平瓦である。器質は土師質で、凸面は六角形を単位とする蜂の巣文様のタタキを施す。欠損箇所が多く凹面の様相は不明である。

235と236は須恵器坏である。体部高が低く復元でき、たちあがりは短い。TK209型式に並行する資料と考えられる。

237は土師器甕、238は須恵器甕であるが、いずれも小破片のため口径の復元は困難である。239は土師器甕である。体部は底部から外傾しながらまっすぐにのび、把手は扁平状を呈す。

SB02 南北3間×東西2間(5.0×3.4m)の掘立柱建物である。柱間は桁行1.5~1.8m、梁行1.5~1.8mを測る。柱穴は直径55~70cmの円形で、深さは残存状況が良好な柱穴で40cmを測り、主軸はN-20°-Wである。SB02-P3にのみ柱根が残存していた。

SB03 南北4間×東西2間(5.7×3.7m)の掘立柱建物である。東辺のP3に当たる部分のごく浅い凹みがあったのみで、また西辺のP9・10に当たる部分は柱穴を検出すること

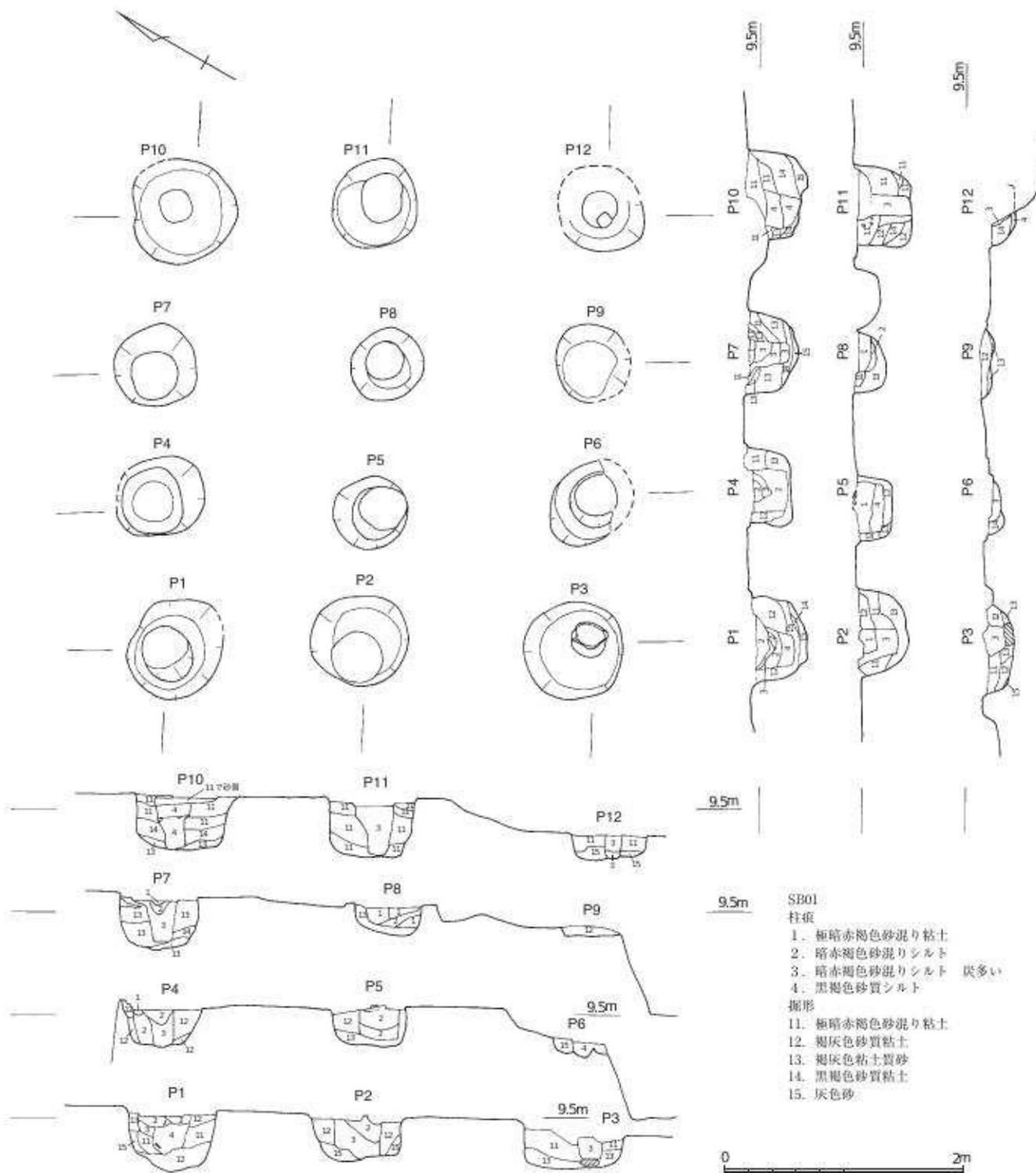


図91 SB01平・断面図

はできなかった。北辺も中間に位置する柱穴は攪乱のため残存しない。柱間は桁行1.2～1.3m、梁行1.8mを測る。柱穴は50～65cmの平面形円形で、深さは残存状況が良好な柱穴で30cmを測る。主軸はN-22°-Wである。北西隅のP11がSB02-P10に切られるため、SB02より古い。

SB04～06 SB04～SB06は柱列が確認されたただけだが、掘立柱建物の一边である可能性が高いと判断した。そうであればSB04はその西辺で、柱間2間(4.8m)以上、SB05はその

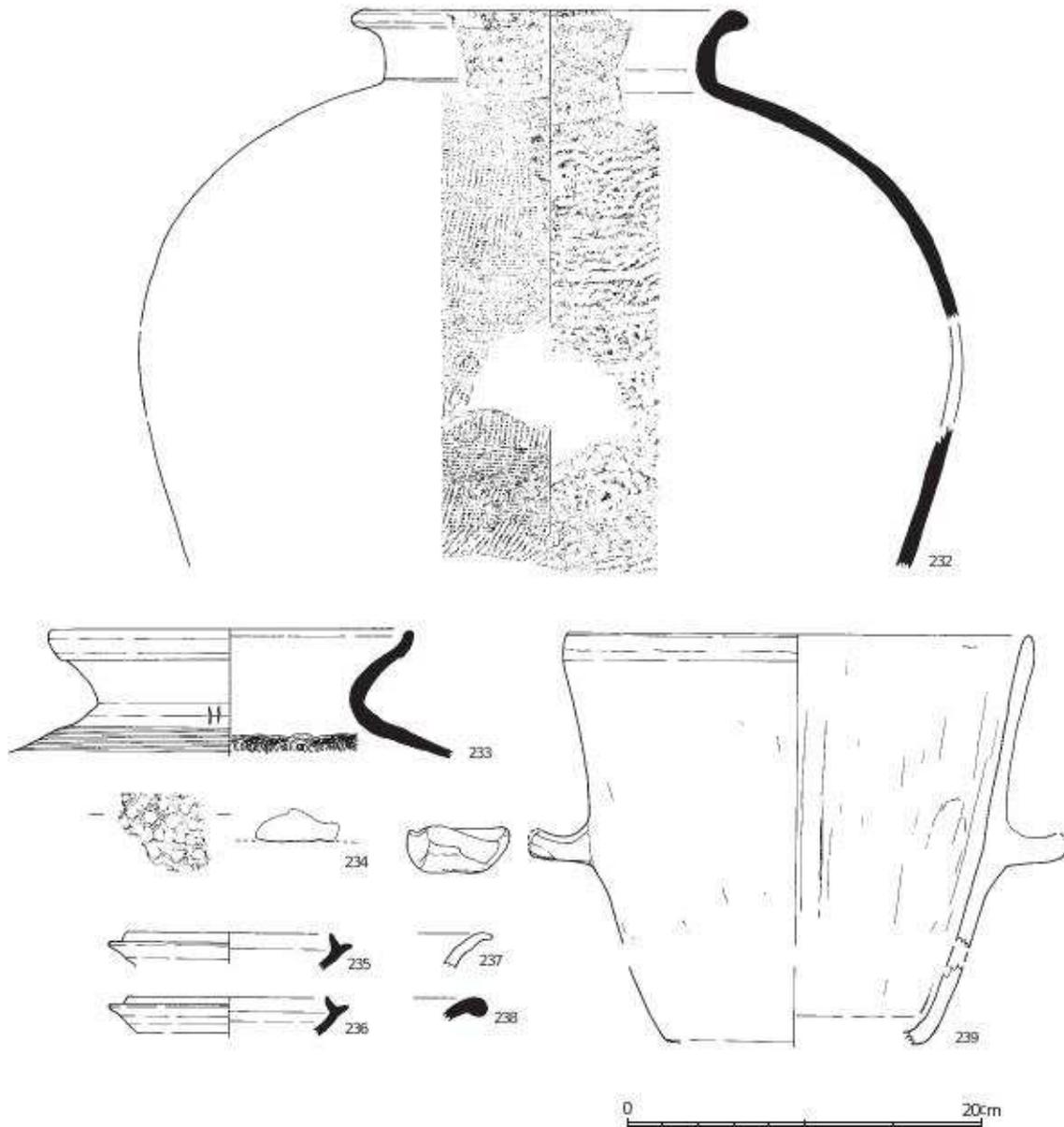


図92 SB01出土遺物実測図

西辺で、柱間3間(6.2m)以上、SB06はその北辺で、柱間2間(3.4m)以上の掘立柱建物となる。いずれの建物も飛鳥時代のものと考えられる。

SB05を構成するSP53・54からは土師器が出土した。247は土師器高坏である。坏部と脚部を接合したのち、上部から粘土板を充填したと考えられる。脚部内面に絞り痕がみられる。244は土師器埴である。全体的に被熱の痕跡が確認できる。12世紀の資料と考えられる。245は須恵器坏蓋である。口縁部付近で器厚が厚くなり、端部は丸くおさめる。飛鳥I～II型式に並行する資料と考えられる。246は須恵器坏である。受部が発達し、たちあがりは短い。TK209型式に並行する資料と考えられる。

SB06を構成するSP57・58からは250・251・254が出土した。250は土師器甕である。頸部が外反してのび、口縁部内面にヨコナデによる凹みがみられる。251は須恵器坏である。受部ののびは短い。254はたちあがりの伸びが短く、受部よりもわずかに上方に出る

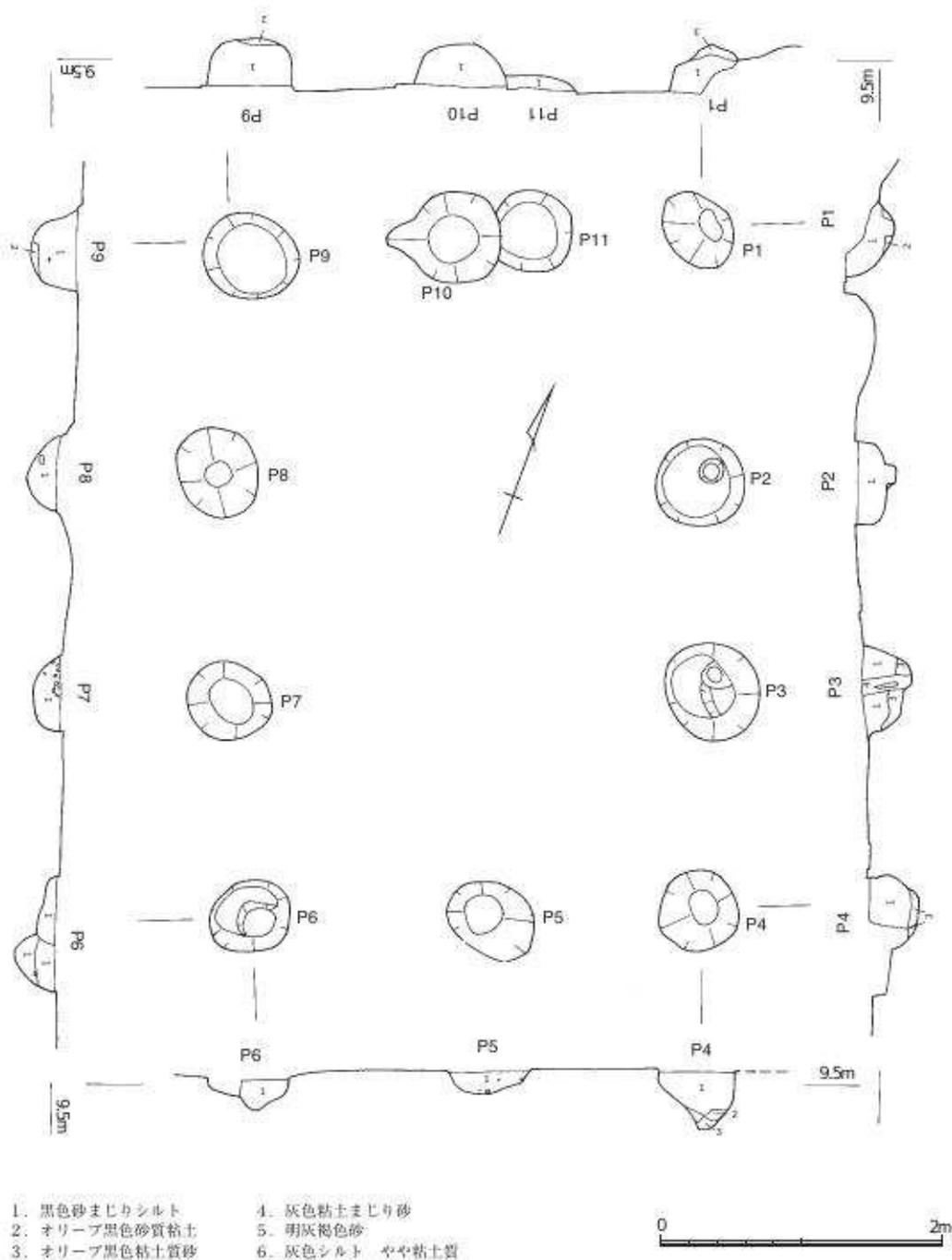


図93 SB02平・断面図

程度である。飛鳥Ⅱ型式に並行する資料と考えられる。

柱穴 建物等のまとまりとしては把握できなかったが、掘立柱建物のほかにも多数の柱穴が確認されている。律令期のほか、平安時代後期に下る資料を含むものがある。

SP10 SD13の東側で検出した直径45cmのピットである。255は須恵器壺である。頸部は外反して立ちあがり、口縁部外側が肥厚する。256は須恵器坏である。体部は内傾しながら立ちあがり、口縁部で直立する。TK23・47型式に並行する資料と考えられる。

SP26 長径約50cm、深さ20cmの楕円形のピットである。253は須恵器坏蓋である。体部は

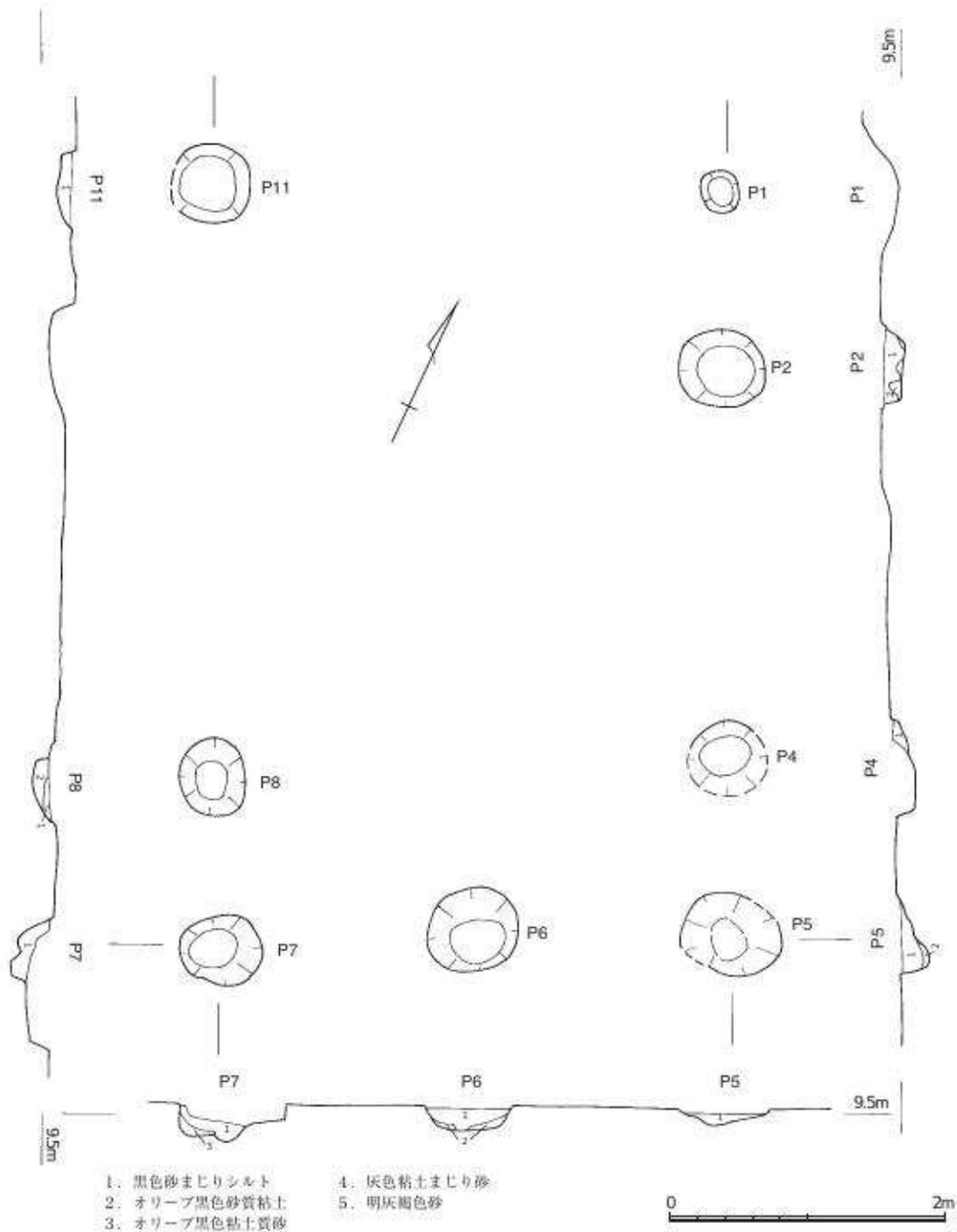


図94 SB03平・断面図

内湾して口縁部は丸くおさめる。6世紀代の資料と考えられる。

SP31 中央南端で検出した直径55cmのピットである。248と249は須恵器坏蓋である。両者とも口縁端部は丸くおさめる。6世紀代の資料と考えられる。252は須恵器壺の口縁部である。小破片のため口径の復元は困難である。端部付近は肥厚する。

SP99 SB03の南東側で検出した46×32cmの隅円方形のピットである。241～243は土師器塚である。体部外面にナデを施すことで稜を作る。体部は内湾してのびたのち、241と242はそのまま丸くおさめ、243は端部が外側へ屈曲する。9世紀後葉～10世紀前半の資料と考えられる。

SP102 SP99の西側で検出した50×42cmの楕円形のピットである。240は須恵器塚である。

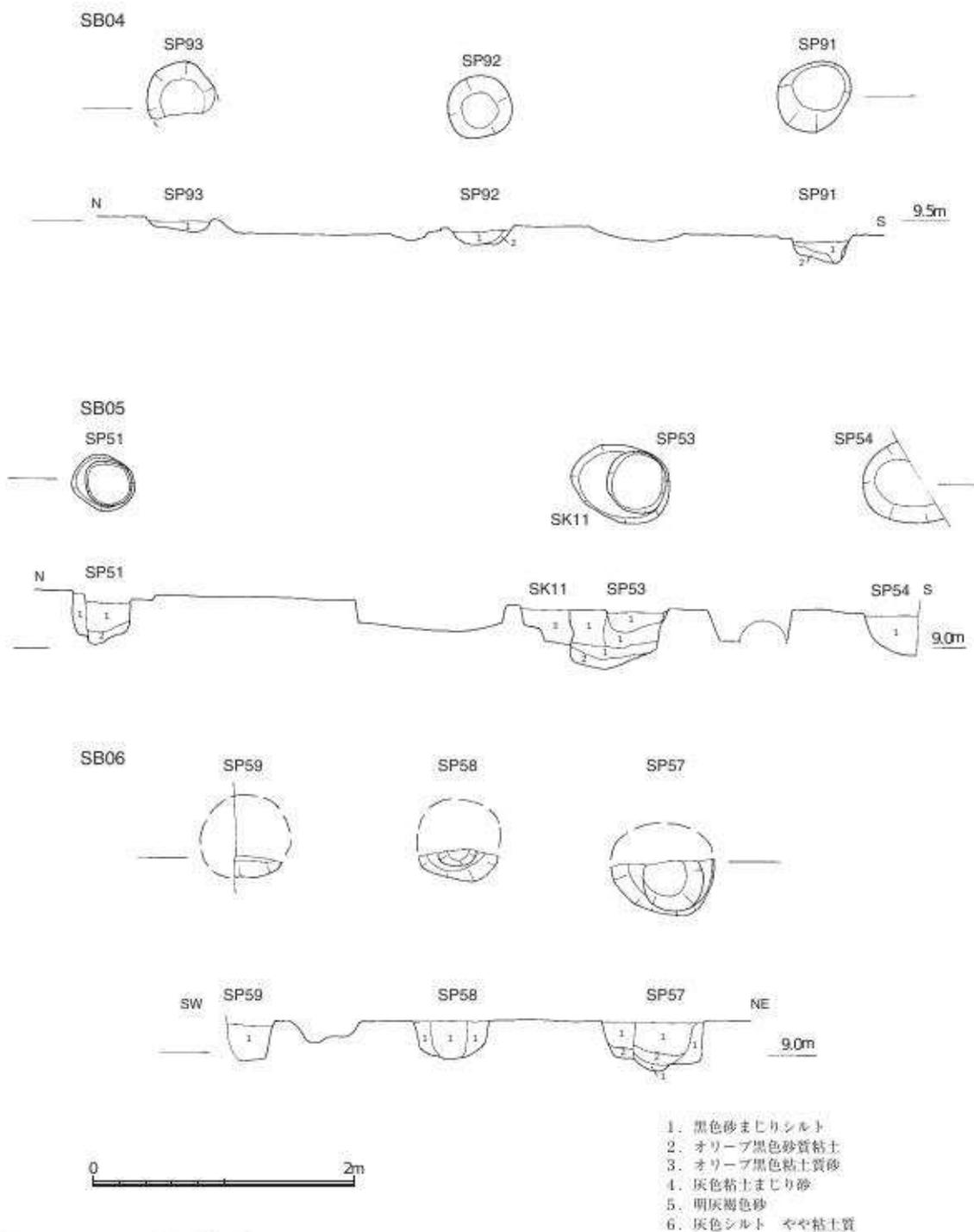


図95 SB04～06平・断面図

体部はやや内湾してたちあがり、底部内面の見込み部の凹みは弱い。12世紀中葉～後半の資料と考えられる。

SK02 北西部で検出した長さ2.6m、最大幅1.8m、深さ20cmほどの不整形土坑である。底面は凹凸が著しい。253は土師器の把手である。形状は牛角形を呈す。

SK15 調査区北側で検出した。70×120cmほどの不整形の土坑（土坑と溝が交差するような形）である。深さは約10cmと浅い。

258は須恵器甕である。体部は底部がやや扁平な球状を呈し、肩部に沈線がめぐる。注

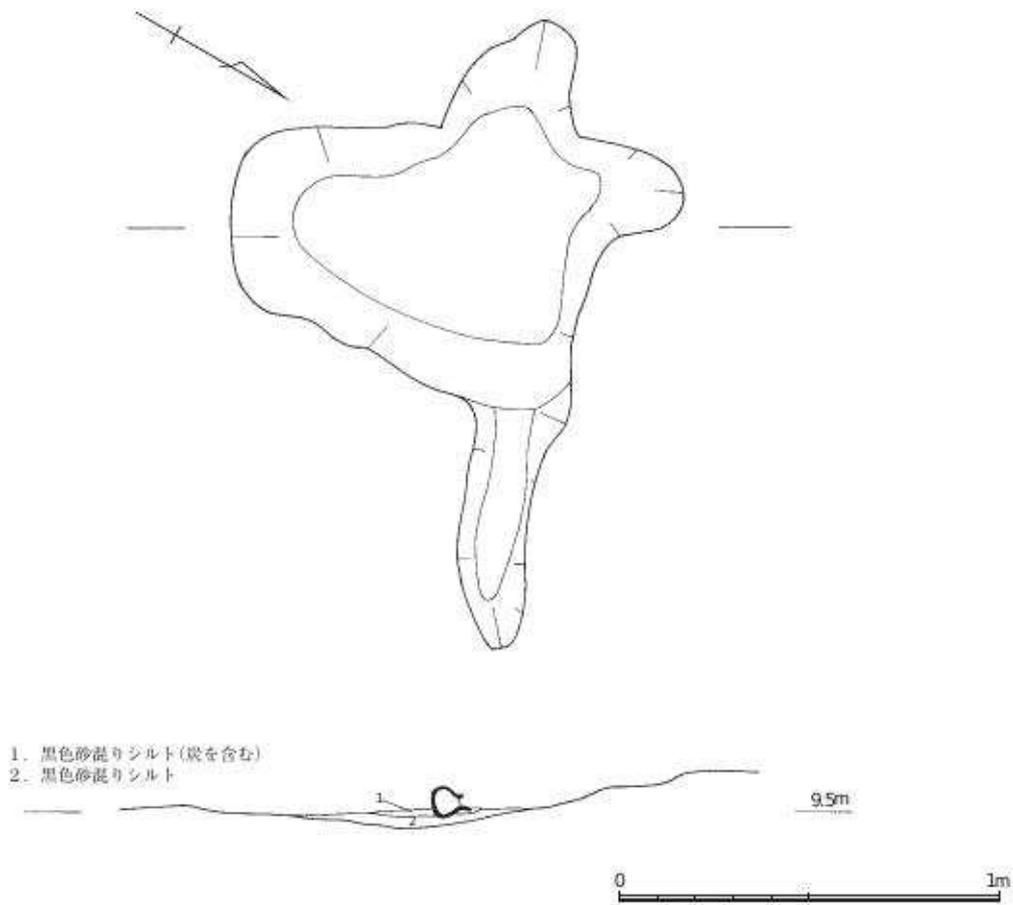


図96 SK15平・断面図

口部は上向きに穿孔される。飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式の並行する資料と考えられる。259は須恵器壺である。肩部に沈線が2条めぐり、その間に6条の波状文を施す。

SD10・11・12・14 幅約2mの溝3条が合流し、南東に流下する溝である。最南部で遺構検出面からの深さ約50cmを測る。溝底面の2箇所に直径2mほどの土坑状に深くなる部分がある。

SD10からは須恵器坏270が出土した。たちあがりは内傾しながらまっすぐにのび、口縁部は丸くおさめる。TK23・47型式に並行する資料と考えられる。

SD11からは土師器高坏265が出土した。裾部で強く広がり、脚端部は丸くおさめる。内面はヘラケズリによる調整を行う。

SD12からは266～268が出土した。266は土師器高坏である。体部が強く開き、口縁端部で外側へ屈曲する。5世紀後半の資料と考えられる。267と268は須恵器坏蓋である。体部は丸く、口縁部内面にゆるい段をつくる。飛鳥Ⅱ型式に並行する資料と考えられる。

SD14からは須恵器坏269が出土した。体部は低く、受部からのたちあがり短い。飛鳥Ⅰ～Ⅱ型式に並行する資料と考えられる。他に古墳時代後期の遺物が少量出土している。

SD13 調査区西側で検出した。北西～南東方向の幅約1mの溝である。深さは5～10cmで、断面は浅い皿形である。SD14よりも新しい。奈良時代の遺物が出土している。

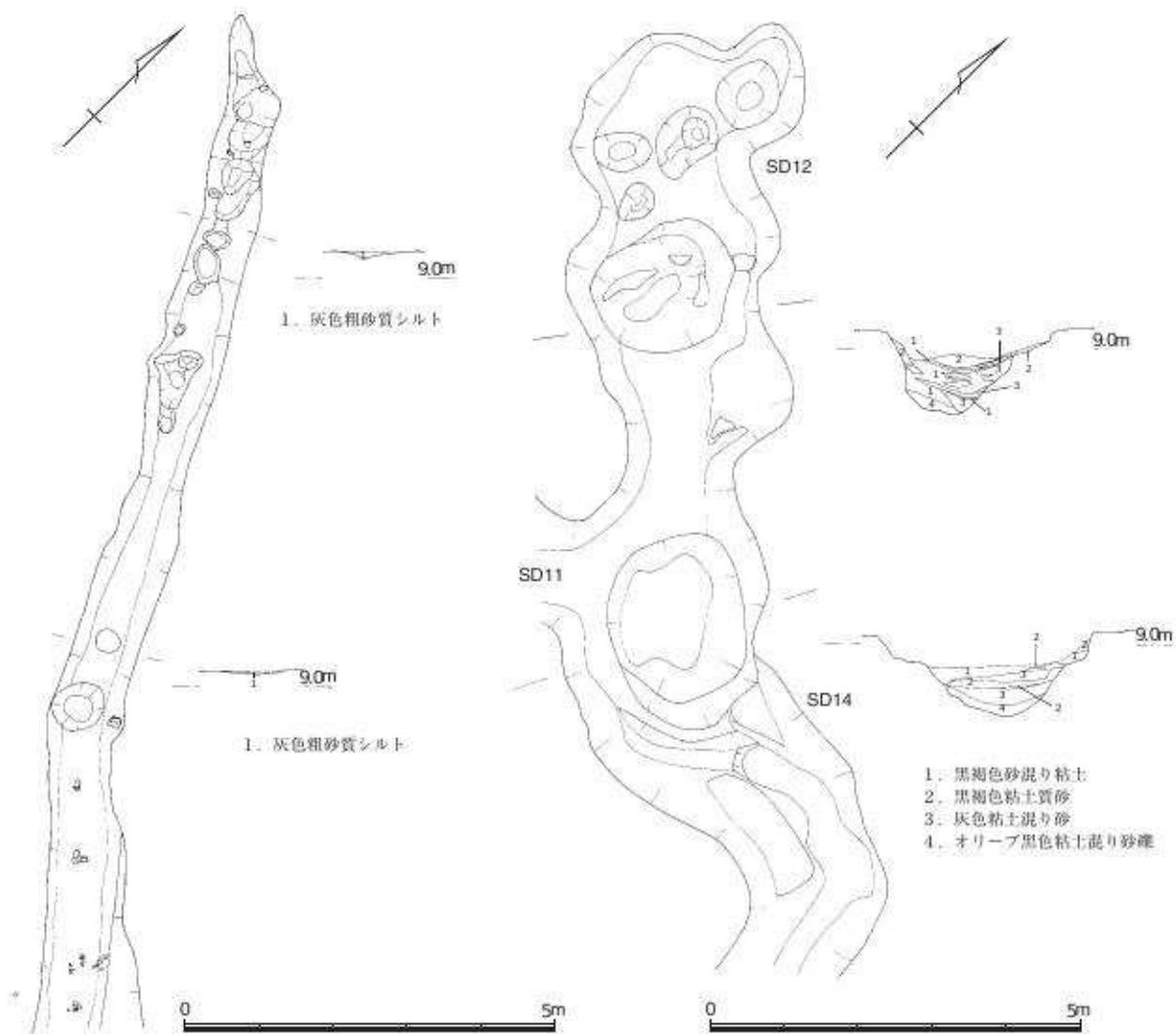


図97 SD13平・断面図

図98 SD11・12・14平・断面図

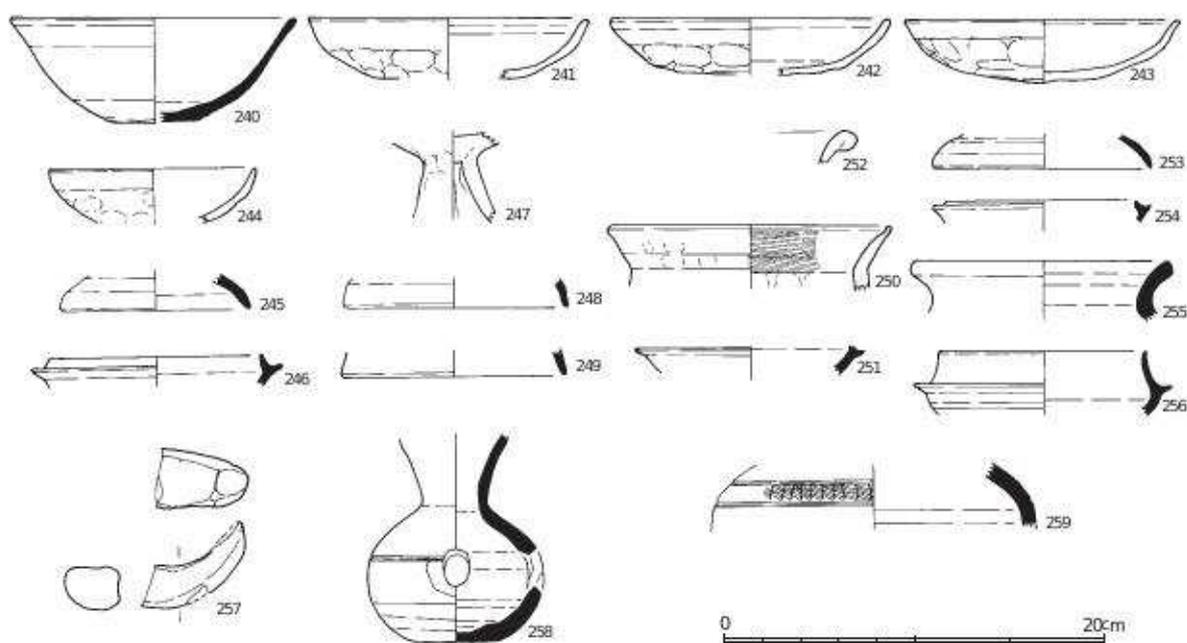


図99 第3面遺構出土遺物実測図①

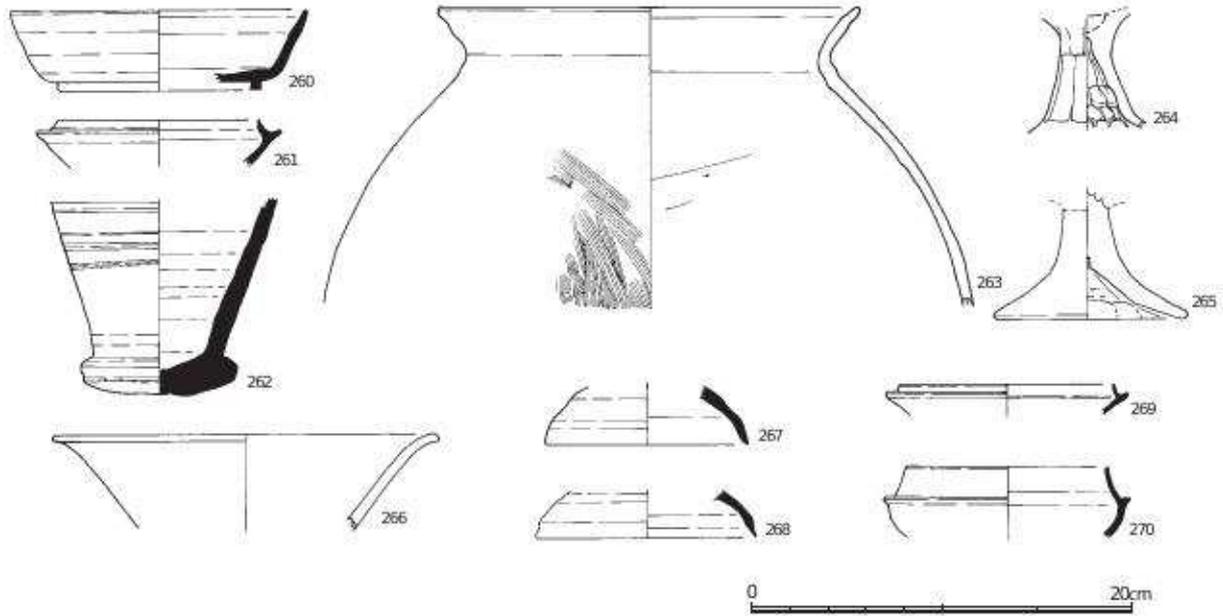


図100 第3面遺構出土遺物実測図②

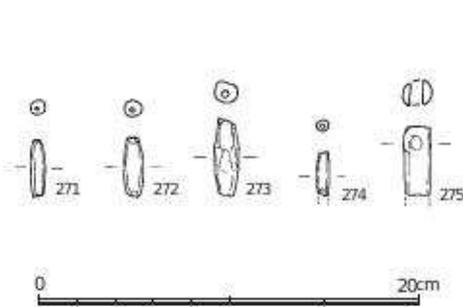


図101 第4遺構面出土土錘実測図

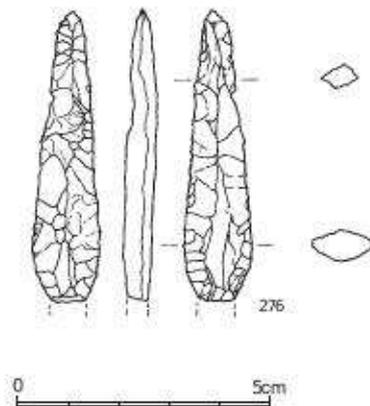


図102 第4遺構面出土石器実測図

260と261は須恵器坏である。260は体部が直線的にひらく。8世紀後半の資料と考えられる。261のたちあがりには内傾が強く短くのびる。TK209型式に並行する資料と考えられる。262は須恵器すり鉢である。調整は明瞭でつくりはシャープである。

#### 8. 第4遺構面

黒褐色礫まじり粘土層下面で検出した遺構面である。黒褐色礫まじり粘土層からは弥生土器あるいは縄文土器と推定される土器小片、またサヌカイト片等が出土しており、縄文時代～弥生時代の遺構面になる可能性が高い。遺構は溝のほか倒木痕などを検出した。人間の活動の痕跡はごくわずかで、溝も自然の水みちである可能性が高い。

271～274は管状土錘であり、275は棒状土錘である。管状土錘は小型(271・272・274)と大型(273)とに区分できる。275は孔を1つ穿つが欠損のため本来の数は不明である。

276はサヌカイト製の石鏃である。残存長5.8cm、残存幅1.3cm、最大厚0.65cm、重さは4.5gを測る。

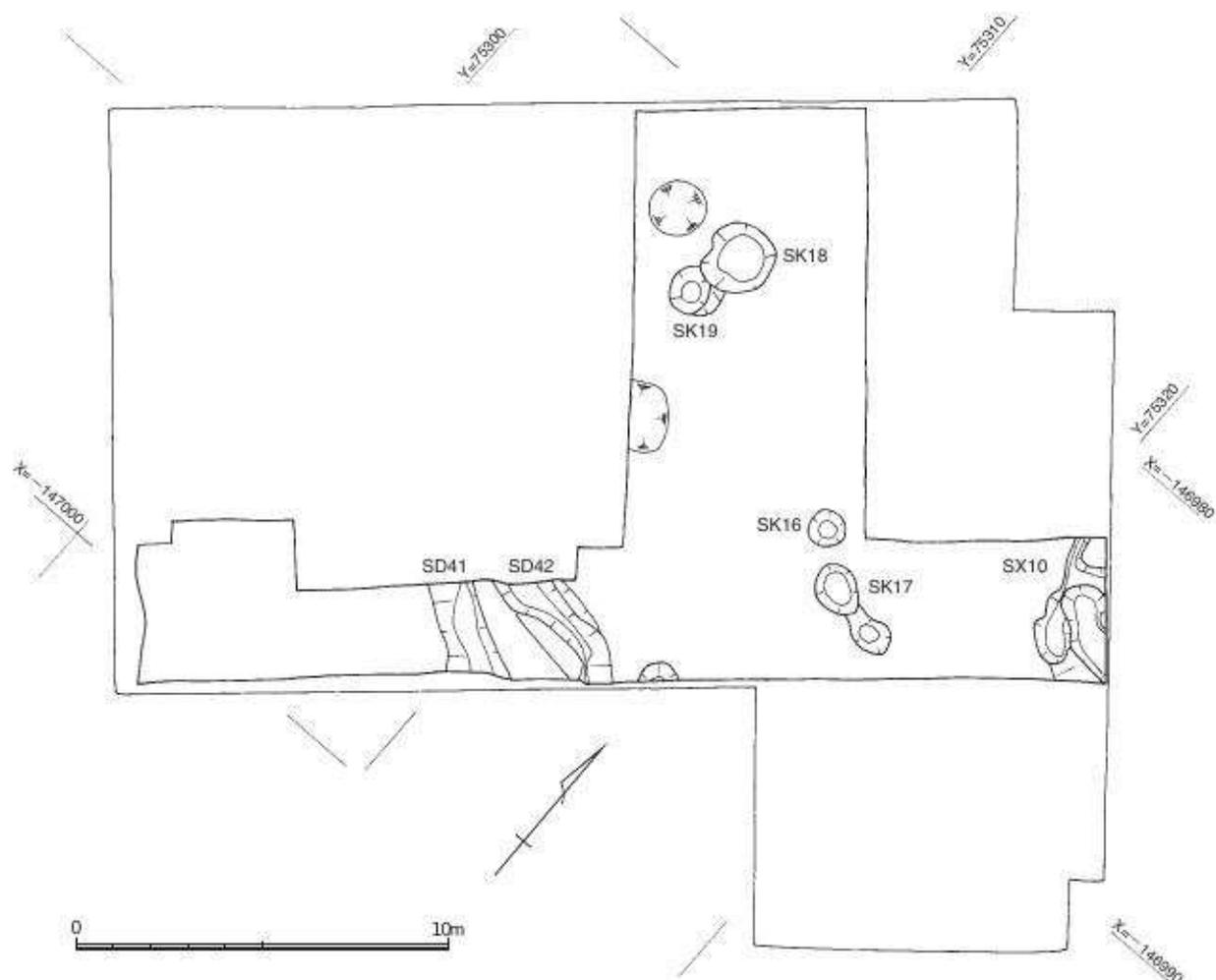


図103 第4遺構面平面図

## 9. 出土瓦

**瓦当** 277～279は軒丸瓦であり、器質はいずれも須恵質である。277はSX04から出土した。野条式のもので8世紀後半の資料と考えられる。278と279は旧耕土から出土した。278は剣状花文を施す。280はSD04から出土した野条式の軒平瓦であり、器質は須恵質である。被熱の痕跡が確認できる。

**表土・盛土出土瓦** 281は平瓦である。器質は土師質で、凸面に格子タタキを施すが、凹面は表面剥離のため調整は不明瞭である。

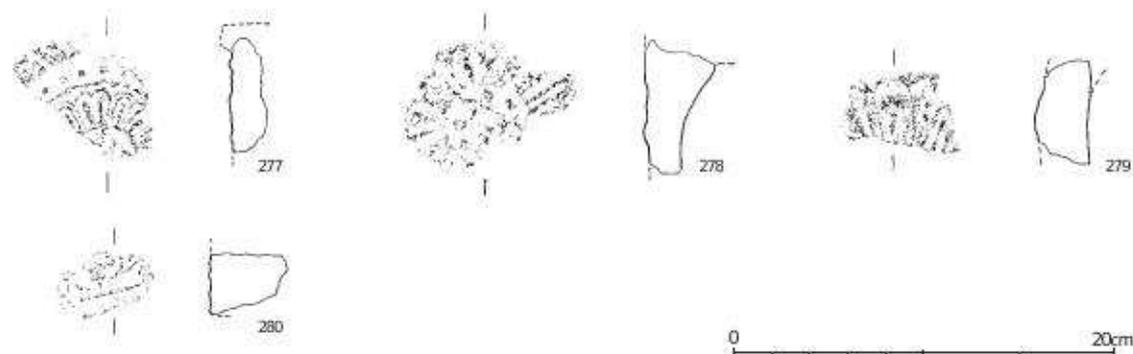


図104 出土瓦当実測図

旧耕土出土瓦 282は丸瓦である。283～294は平瓦である。器質は284～287が土師質、282・283・288～294が須恵質である。282は凹面に布目痕を残すが、凸面は表面剥離のため調整は不明瞭である。283は凸面・凹面ともに表面剥離のため調整は不明瞭である。284～287は凸面に六角形を単位とする蜂の巣文様のタタキ、凹面はケズリを施す。288～290は凸面に格子状タタキを施すが、凹面は表面剥離のため調整は不明瞭である。291～293は凸面に縄目タタキを施すが、凹面は表面剥離のため調整は不明瞭である。いずれも被熱の痕跡が確認でき、コゲが付着する。294は凸面に平行タタキを施し、凹面に布目痕をわずかに残す。

灰色砂質シルト出土瓦 295は平瓦である。器質は須恵質で、凸面・凹面・端面いずれもヘラケズリを施す。

SX01出土瓦 296と297は丸瓦である。298～301は平瓦である。器質は296・298～300が土師質であり、297と301が須恵質である。296は凸面の調整は不明瞭であるが、凹面に布目痕と模骨痕を残す。297は凸面・凹面ともにヘラケズリを施す。298～300は凸面に六角形を単位とする蜂の巣文様のタタキを施す。欠損箇所が多く凹面の様相は不明瞭である。301は凸面に長方形文様のタタキを施す。欠損箇所が多く凹面の様相は不明瞭である。

SD04出土瓦 302は平瓦である。器質は須恵質で、凸面・凹面・端面いずれも調整は不明瞭である。

灰オリーブ色砂まじりシルト出土瓦 303は平瓦である。器質は須恵質で、凸面に縄目タタキを施し、凹面に布目痕を残す。また凸面に被熱の痕跡が確認できる。出土した他の平瓦に比して厚手であるため、大型品である可能性がある。

灰オリーブ色砂まじりシルト～黒褐色砂まじり粘土出土瓦 304～308は平瓦である。器質は304～306が土師質で、307と308が須恵質である。304は凸面の調整は不明瞭であるが、凹面に布目痕と模骨痕を残す。305は凸面に縄目タタキを施し、凹面に布目痕をわずかに残す。306は凸面に縄目タタキを施し、凹面に布目痕と模骨痕を残す。307は凸面に粗い縄目タタキを施し、凹面に布目痕を残す。凸面に被熱の痕跡が確認できる。308は凸面に粗い縄目タタキを施し、凹面に布目痕と模骨痕を残す。

黒褐色砂まじり粘土出土瓦 309～313は平瓦である。器質は309～312が土師質で、313が須恵質である。309と313は凸面に縄目タタキを施し、凹面に布目痕を残す。310は凸面に縄目タタキを、凹面にヘラケズリを施す。311は凸面に縄目タタキを施し、凹面に布目痕と模骨痕を残す。312は凸面に縄目タタキ、凹面にナデを残す。端部はヘラケズリによって丁寧に整える。

SX02出土瓦 314は平瓦である。器質は須恵質で、凸面・凹面・端面いずれもヘラケズリを施す。

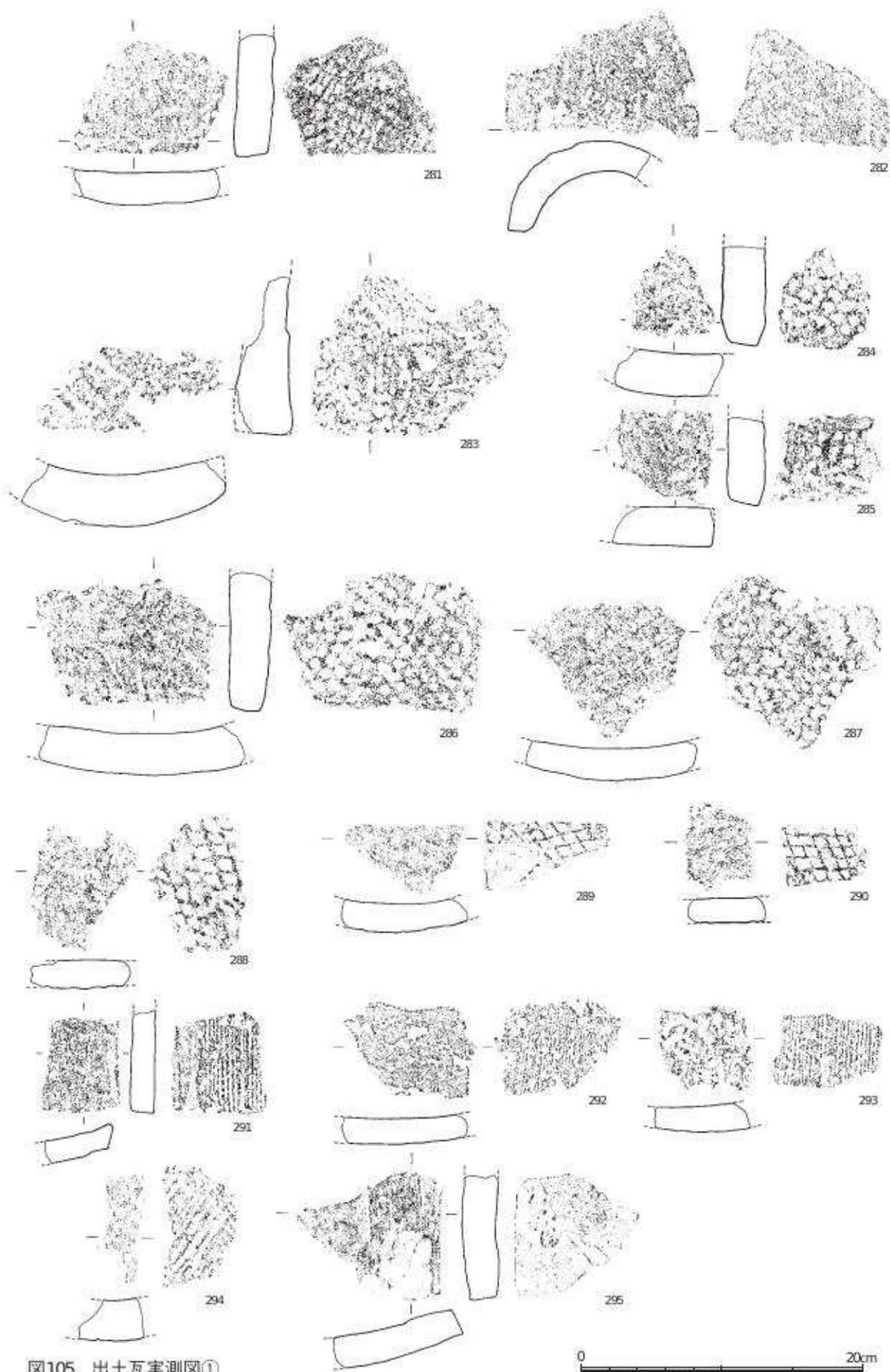


図105 出土瓦実測図①

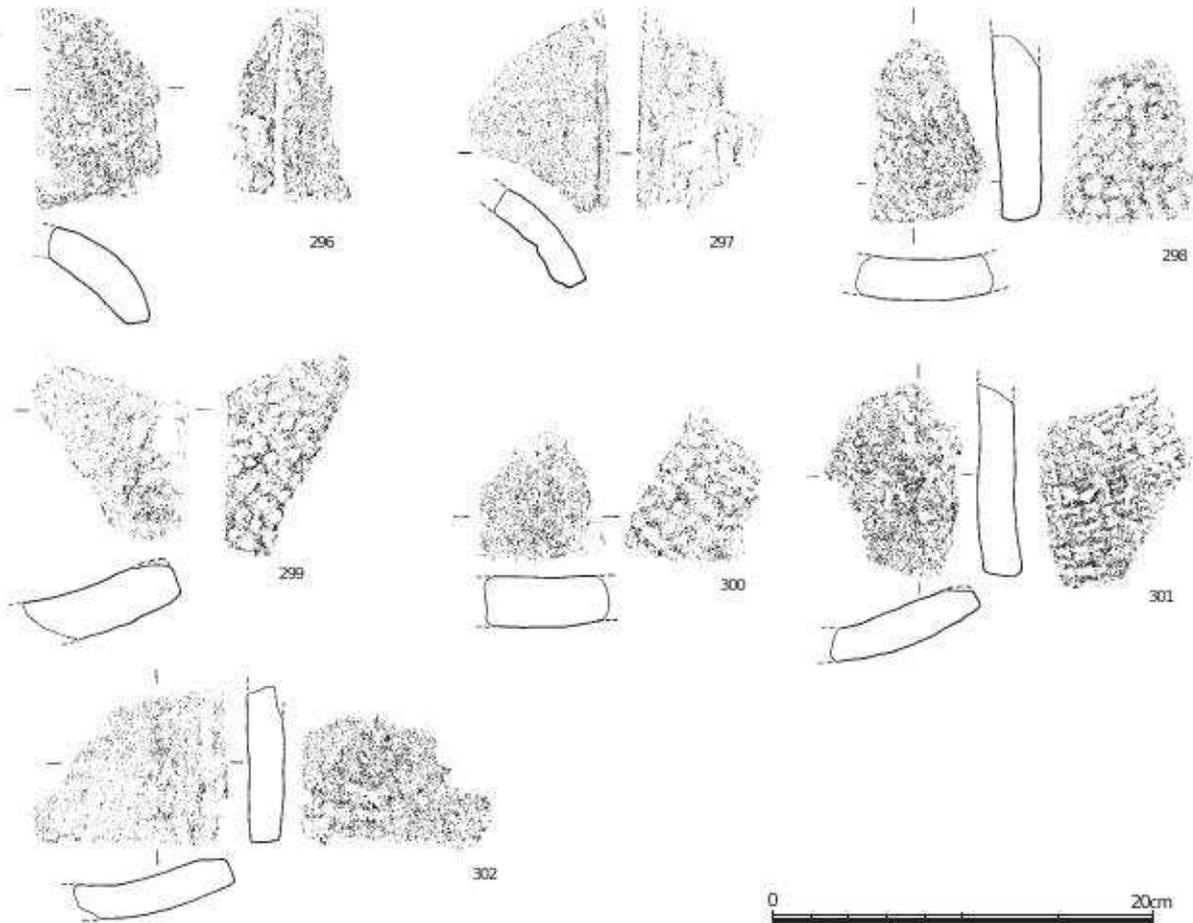


図106 出土瓦実測図②

## 10. まとめ

第3遺構面に対応する表土層である黒褐色砂まじり粘土からも奈良時代の瓦が出土しているが、この面で確認された建物は掘立柱建物であり、第51次調査地点には瓦葺き建物は存在しない。一方、第1遺構面あるいは第2遺構面のSD04および周辺から多量の瓦が出土した。これらは土石流によって北方から流されてきたものであり、北方に瓦葺きの建物をもつ施設、寺院あるいは郡衙が存在するものと推定される。

郡衙には近接して付属寺院が存在することが多いことから考えれば、倉庫であるSB01をはじめとして、今回確認された建物群は、そのいずれかにかかわる建物と推定できるかもしれない。

今回出土した瓦当には、摂津国内に同範の製品がみられるものと、播磨国内に同範の製品がみられるものがある。野条式瓦は播磨国府系瓦のひとつで、この瓦当の範型は播磨国府で、保管・管理されていたものと考えられている。摂津・播磨と国域を超えるかたちで行われた瓦のやりとりが、どういう経緯で行われるのか興味深い。

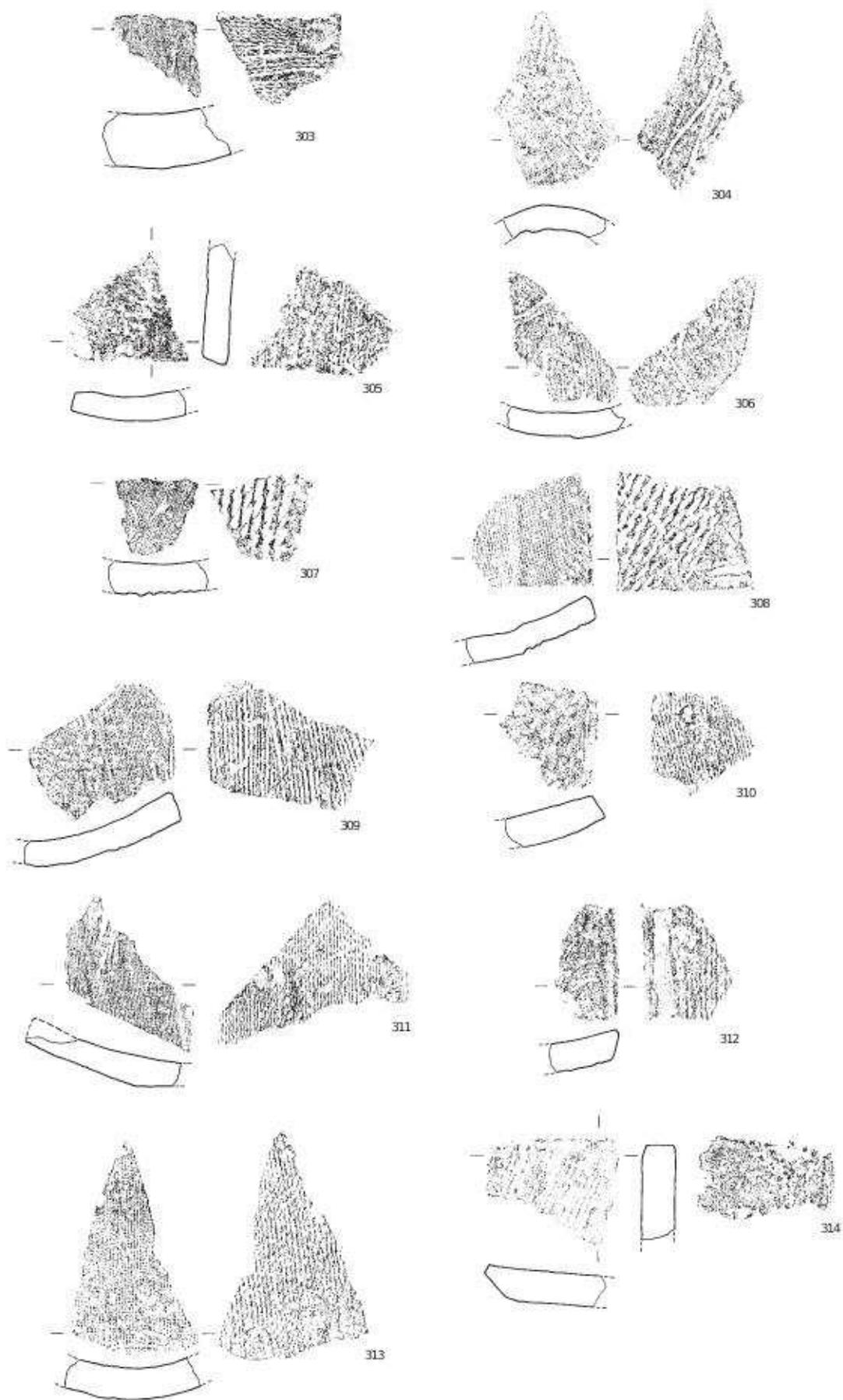


図107 出土瓦実測図③

### 第13節 第58次調査

#### 1. 調査の概要

調査地は五番町2丁目地区で、標高約11mの遺跡範囲の西端近くに位置する。当調査地の南西約50mに第47次・第56次調査地、東約50mに第60次調査地がある。

#### 2. 基本層序

基本層序は、盛土、黄色砂、暗灰色礫まじり泥砂、旧耕土、黄灰色泥砂、灰色泥砂、淡灰色泥砂、黒褐色礫まじり泥砂（遺物包含層）、灰色泥砂（上面が遺構面）、灰褐色礫まじり泥砂から黄褐色泥砂となる。遺構面の標高は約

10.3mである。調査区南端には、黄色の洪水砂の堆積がみられる。近世以降これらの洪水砂などを取り込んで、南に下がる段状の造成がなされたのであろう。

層序としては、黄灰色泥砂～淡灰色泥砂は中世から近世にかけての堆積と考えられる。しかし、出土遺物はほとんどなく、遺構も検出されなかった。淡灰色泥砂からは、飛鳥時代～平安時代の遺物が出土した。

黒褐色礫まじり泥砂からは、弥生時代末～奈良時代頃の遺物が出土した。これを除去すると遺構面となる。

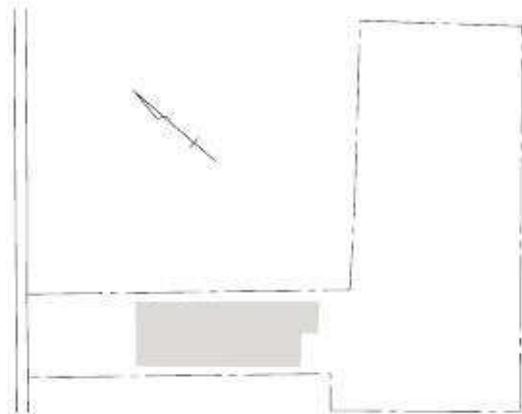


図108 第58次調査範囲図

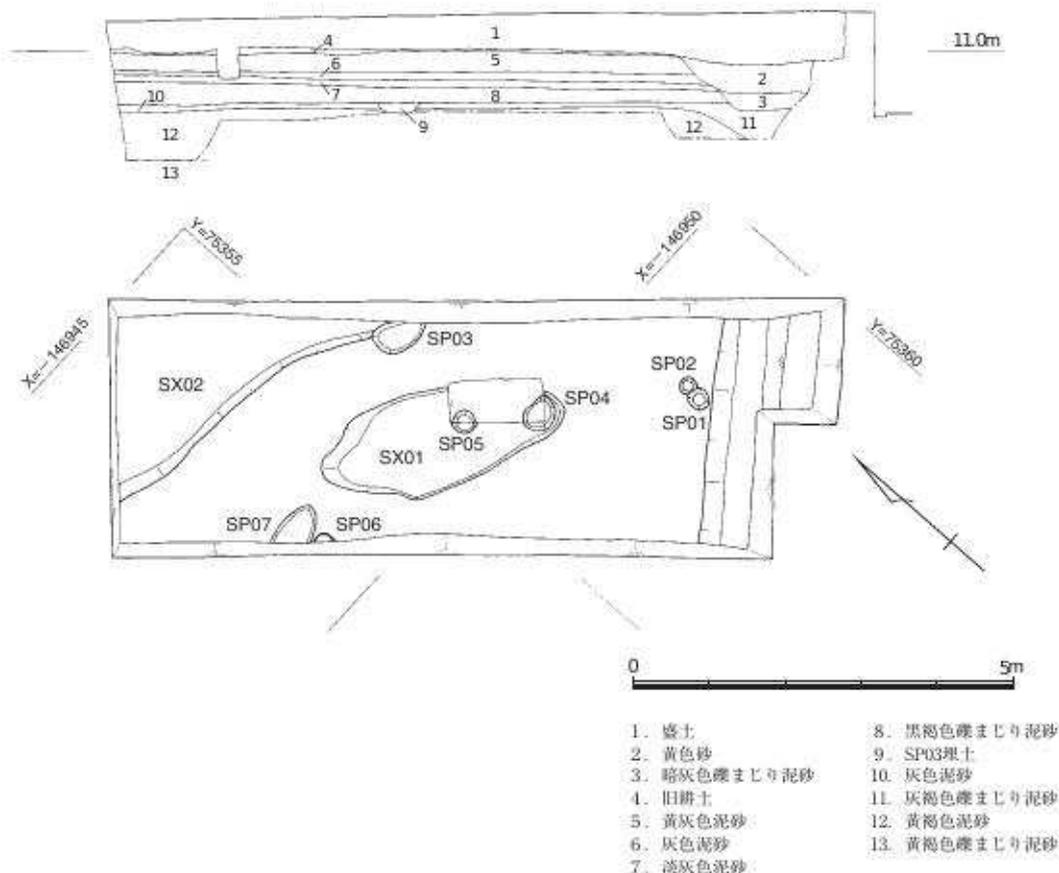


図109 東壁断面図・遺構面平面図

遺構面下層の確認調査により、南端では、黒褐色礫まじり泥砂（遺物包含層）が南へ下がって広がっていくことが確認できた。また当調査区の下層では遺構、遺物は検出されなかった。

### 3. 遺物包含層出土遺物

315は二彩多口壺の肩部に取り付けられた口の一部である。胴部と肩部外面は面取りによって整形され、境界は明瞭な稜を持つ。内外面とも、濃緑色と淡緑色の釉が施されている。奈良時代の資料であるが、口縁部を欠き、形状を確認できないことなどから、時期についての詳細は不明である。323・324は須恵器坏蓋である。323は飛鳥Ⅰ型式、324は飛鳥Ⅴ型式に並行する資料と考えられる。青磁碗（320）と土師器皿（316～318）等、9世紀後半以降の資料も混在するため、当層は、平安時代中期以降に堆積したものである。

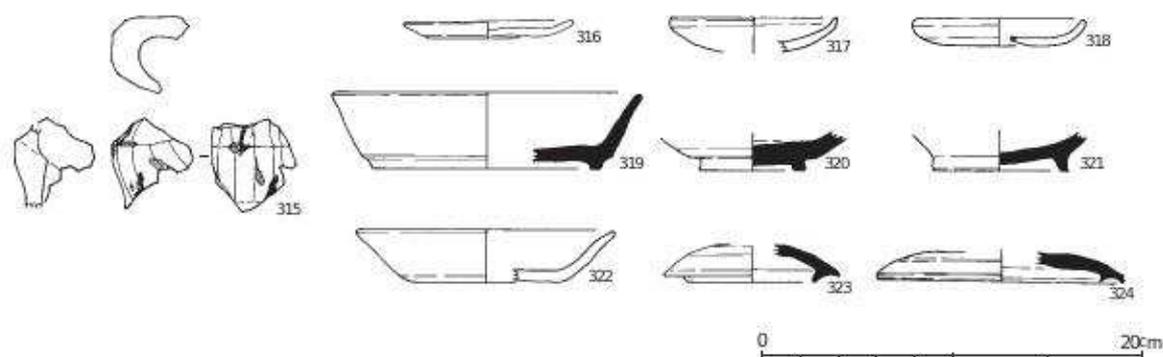


図110 黒褐色礫まじり泥砂出土遺物実測図①

黒褐色泥砂は遺物包含層で、弥生時代末～奈良時代の遺物が出土した。325と326は丸瓦で、327は平瓦である。器質はいずれも土師質であり、凹面に布目痕ならびに模骨痕を残すものの、凸面の調整は不明瞭である。325は焼成後に短く切られたようであり、屋根に瓦を葺く際に、瓦同士の隙間などを埋める部材に使用されたと考えられる。328は須恵器坏蓋で、口縁端部は断面三角形である。飛鳥Ⅴ型式に並行する資料と考えられる。330は甕の底部で、外面に粗いタタキを施す。弥生時代末～古墳時代初頭の資料と考えられる。

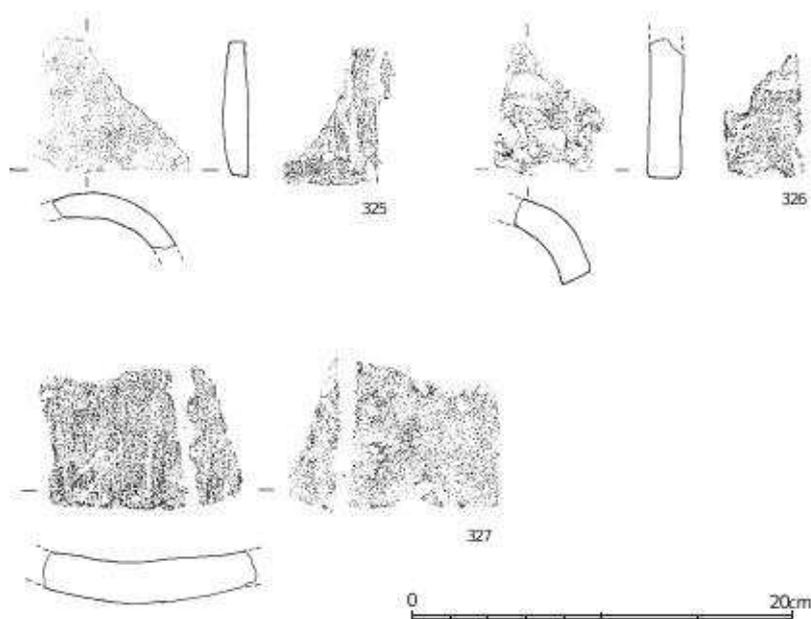


図111 黒褐色礫まじり泥砂出土遺物実測図②

#### 4. 遺構面

遺構面は、調査区北西隅がやや高く南方向へ下がる。

SX01 中央部で検出した長径3.2m、短径1.4m、深さ10cmの落ち込み状遺構である。SX01の中央と東端には直径30cm、深さ40cmと、直径40cm、深さ30cmのSP05とSP04が検出された。両方ともSX01を切っている。

SX02 北隅で検出した、北に向かって下がる深さ15cmの落ち込み状遺構である。少量の土師器、須恵器が出土した。また、SX02の底面では直径15cm、深さ10cmのSP08が検出された。

その他SX02を切る直径70cm、深さ20cmのSP03、直径20cm、深さ5cmのSP01・SP02の浅いピットや同様に浅いSP06・SP07が検出された。ピットの埋土は黒褐色泥砂である。

#### 5. まとめ

今回の調査では、奈良時代の遺構面と少量ではあるが瓦片が検出された。しかし、調査面積が狭く、遺跡の性格を示すような遺構や遺物は検出されなかった。

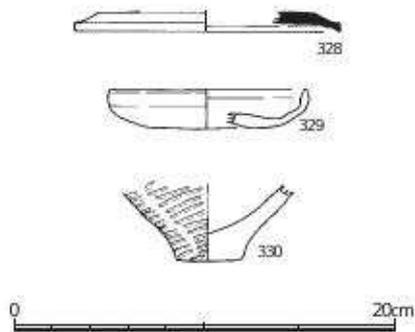


図112 黒褐色礫まじり泥砂出土遺物実測図③



図113 調査地全景（北西から）

## 第14節 第60次調査

### 1. 調査の概要

調査地は五番町2丁目地区の標高約11.3mの緩斜面地に位置する。西約50mには第58次調査地、南東約60mには第10次調査地がある。

### 2. 基本層序

現地表面から30～50cmは盛土および攪乱土である。その下層には層厚15～30cmの旧耕土があり、その下層に層厚20cmの淡灰色砂質土、その下層に層厚20cmの灰褐色砂質シルトの遺物包含層となっている。その下層が遺構面を形成する黒褐色シルト層である。この層は層厚10～20cmであり、ごく少量の遺物が含まれている。その下層には暗茶褐色シルト層が南と西方向に厚く堆積しており、さらにその下層には灰茶褐色シルトまじり砂礫層が存在する。遺構検出面の標高はT.P.10.2m前後である。

### 3. 検出遺構

検出した遺構は、耕作に伴う溝6条である。溝は、調査区のほぼ中央を北西-南東方向に真っ直ぐ流れるSD102と、そのSD102に交わる北東-南西方向のSD101・103～106である。

SD101 1区のほぼ中央を北東-南西方向にSD102を切るように検出した。SD101の底面は、平坦ではなく大きな凹凸があり、途中で溝が途切れてみえる個所もある。幅は広い



図114 第60次調査範囲図

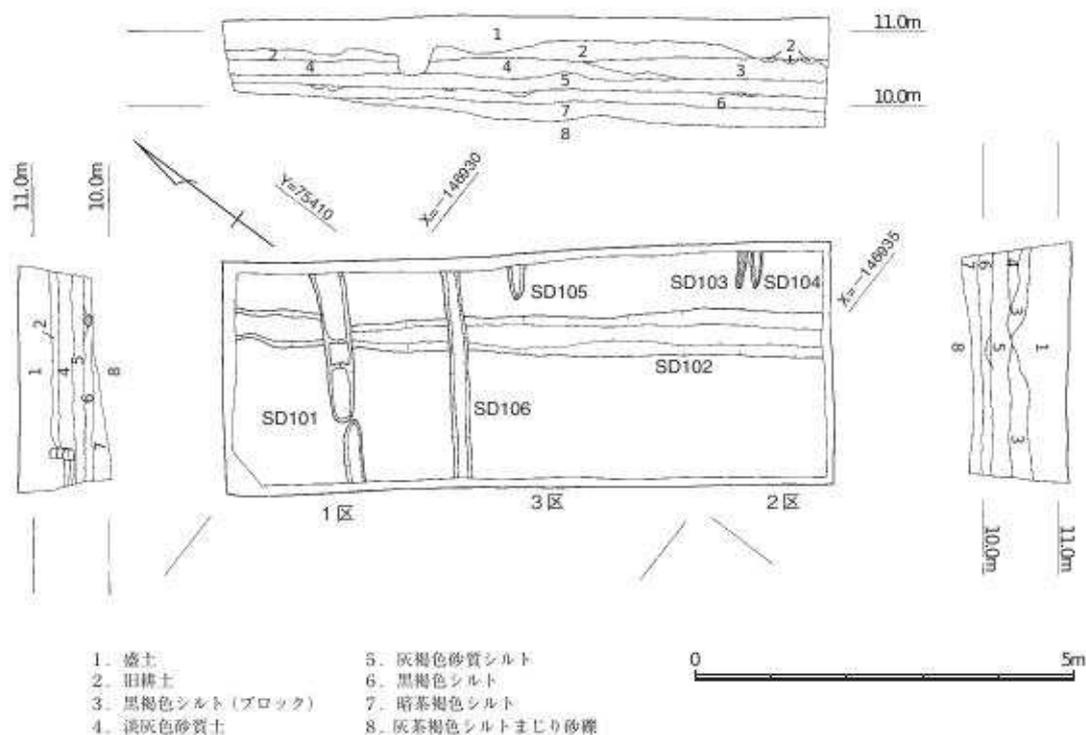


図115 北西・北東・南西壁断面図・遺構面平面図

ところで0.2~0.4m、深さは遺構面から2~10cmを測る。

SD102 1~3区を北西-南東方向に貫いて検出した。SD101とSD106に切られる溝である。溝の幅は30~60cm、深さは遺構面から3~7cmを測る。

SD103・104 2区の東辺にわずかに残されていた北東-南西方向の溝である。SD103・104共に幅は14cm、深さは4cmを測る。

SD105 3区の東辺にわずかに残されていた北東-南西方向の溝である。幅は20cm、深さは6cmを測る。

SD106 1区の南端で検出した北東-南西方向のSD102を切る溝である。幅は20cm、深さは3cmを測る。

#### 4. 遺物

灰褐色砂質シルトからは須恵器坏331が出土した。体部は直線状にのび、ロクロ目をよく残す。平安時代の資料と考えられる。

黒褐色シルトからは須恵器壺332が出土した。頸部は直立してのびる。口縁端部上端に内傾した平坦面を作り出し、体部外面に右下がりの平行タタキを施し、内面に同心円文を残す。平安時代以前の資料と考えられる。

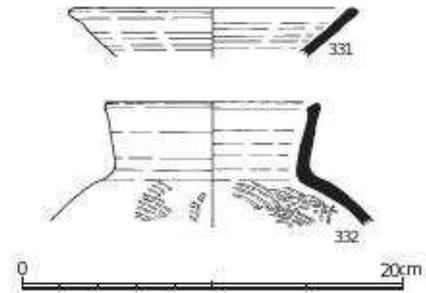


図116 出土遺物実測図

#### 5. まとめ

今回の調査区は、狭小な範囲であるため検出できた遺構も耕作溝のみであった。黒褐色シルト層が耕土であり、灰褐色砂質シルトが耕土層を覆う洪水砂と考えられる。今回の調査での出土遺物の大半がこの灰褐色砂質シルトから出土したものであり、当該地の北方に存在が想定される集落域からの流れ込みの遺物と考えられる。

出土遺物には古墳時代~中世までの遺物が含まれている。このことから、耕作溝を検出した遺構面は中世以前の遺構面と考えられる。また、黒褐色シルトからごく少量の遺物が出土しているが、時期の特定ができるような遺物は出土していない。



図117 北半全景(南東から)



図118 南半全景(東から)

## 第15節 第61次調査

### 1. 調査の概要

調査地は松本通8丁目地区で、標高約15.7mの第1次調査地と第37次調査地の間に位置する。落ち込みと中世の遺物が確認された。

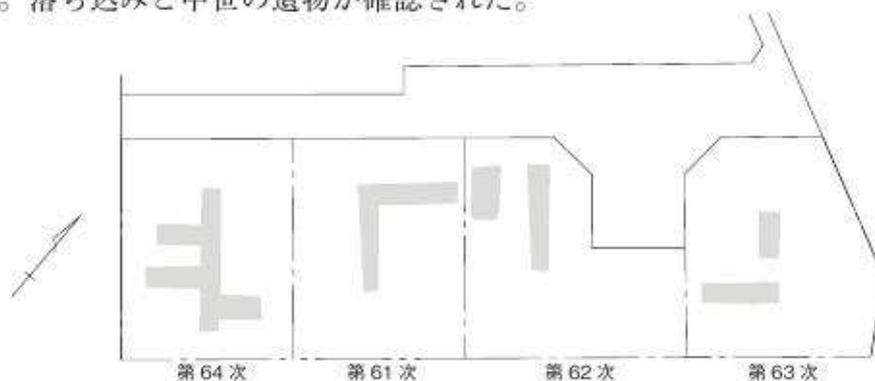


図119 第61次～第64次調査範囲図

### 2. Iトレンチ

東西方向のIトレンチでは、盛土以下、灰色あるいは灰黄色の粘性砂質土の複数の耕土層が堆積し、T.P.15.0m付近に暗褐色粘質土が堆積する。上面に灰色粘質土の浅い落ち込みがあるが、トレンチ全体に広がるものではなく、南東側へ下がる地形に伴いやや厚く堆積する。暗褐色粘質土の下層が淡(黄)灰色シルト層の地山面で、ピット3基を検出した。直径約20cm、深さは約10cmで、埋土は粘質を帯びた灰色小礫まじり細砂である。

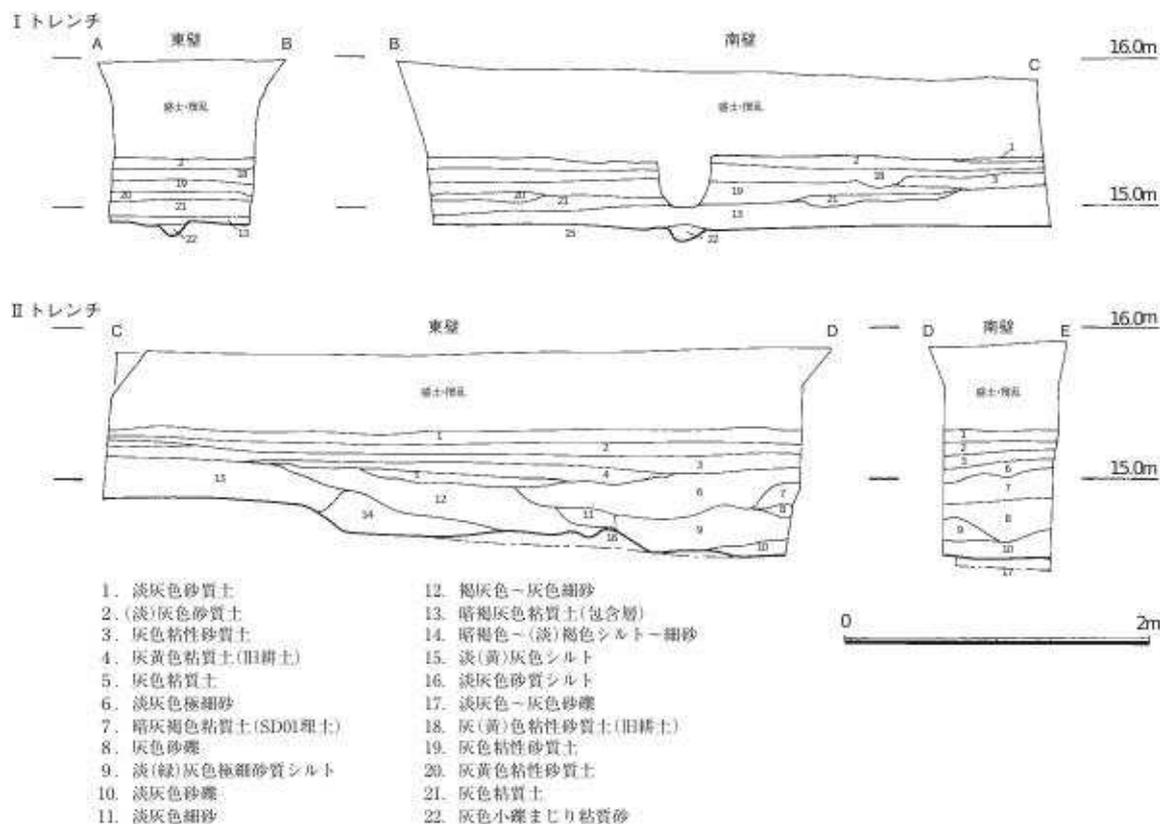


図120 第61次調査Iトレンチ東・南、IIトレンチ東・南壁断面図

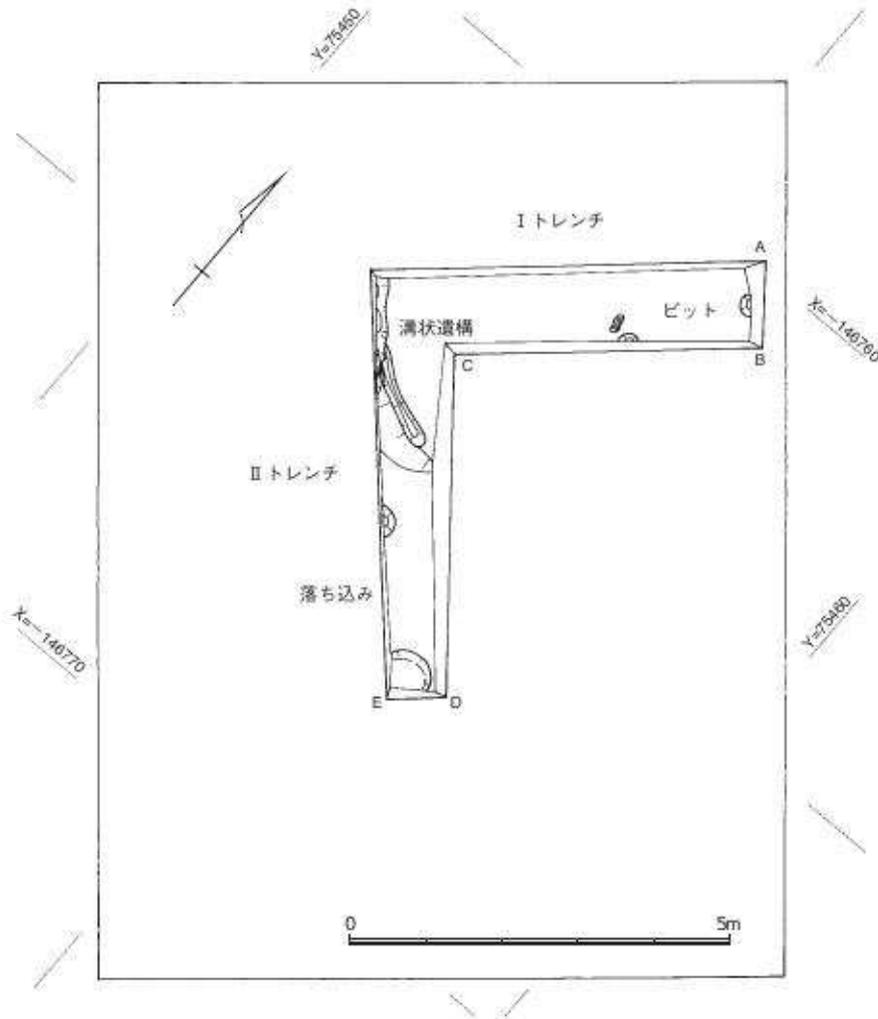


図121 第61次調査平面図

### 3. II トレンチ

I トレンチの西側に続く南北方向のII トレンチでは、北側1.5m付近以南で南西方向へ落ち込む礫まじりの砂やシルト層の堆積を検出した。肩部で幅20cm、深さ10cmの溝状遺構を1条検出した。埋土は暗灰色粘質土である。溝状遺構の西側の壁際でさらに西側に落ち込む状況を確認したが、遺物などは出土しておらず、全体の様相は明らかでない。西側隣地の調査では、敷地の北側を中心に礫の堆積が確認されており、II トレンチの南半を含む、幅5～6mほどの流路が北西から南東方向に貫流していた可能性がある。トレンチ南端に堆積する灰色砂礫から弥生土器の可能性のある破片が出土した。



図122 II トレンチ全景(北西から)

### 4. まとめ

北側は地盤的にやや安定するものの、流路などの影響があったとみられ、遺構の遺存状況はあまり良いものではなかった。洪水層、ならびに耕土層からは小片ではあるが中世の須恵器、土師器が出土しており、周辺に同時期の遺構が広がっていたと推測される。

## 第16節 第62次調査

## 1. 調査の概要

第61次調査地の東側に隣接する。標高約15.8mである。

## 2. 基本層序

東のⅡトレンチでは盛土層以下に暗灰色粘質土、灰褐色砂質土、灰黄色砂質土、暗灰色粘質土、黄灰色砂質土、灰色砂質シルトが堆積し、中世から現代までのいずれも耕土層や床土などの堆積が続くが、灰黄色砂質土からシルト層の地山面では遺構は確認できなかった。地山面直上の灰褐色粘質シルト層から中世の土師器と考えられる土器片がわずかに出土した。

## 3. 遺構

西側のⅠトレンチで溝1条と土坑1基を検出した。

溝は南北方向のもので幅30cm、深さは10cmである。埋土は灰色砂質シルトで、遺物の出土はなかった。

土坑は調査区の南側に続くが、直径1.0mほどの円形と考えられ、深さは約15cmが遺存していた。埋土は暗灰褐色粘質土で、遺物の出土はなかった。遺構の直上に堆積する灰褐色粘質土からの出土遺物は中世の須恵器片、土師器片であることから、中世以前の遺構と考えられる。

## 4. まとめ

調査地の北西側で比較的安定した地盤を確認し、溝や土坑を検出したが、その他の部分では遺構、遺物は確認できなかった。

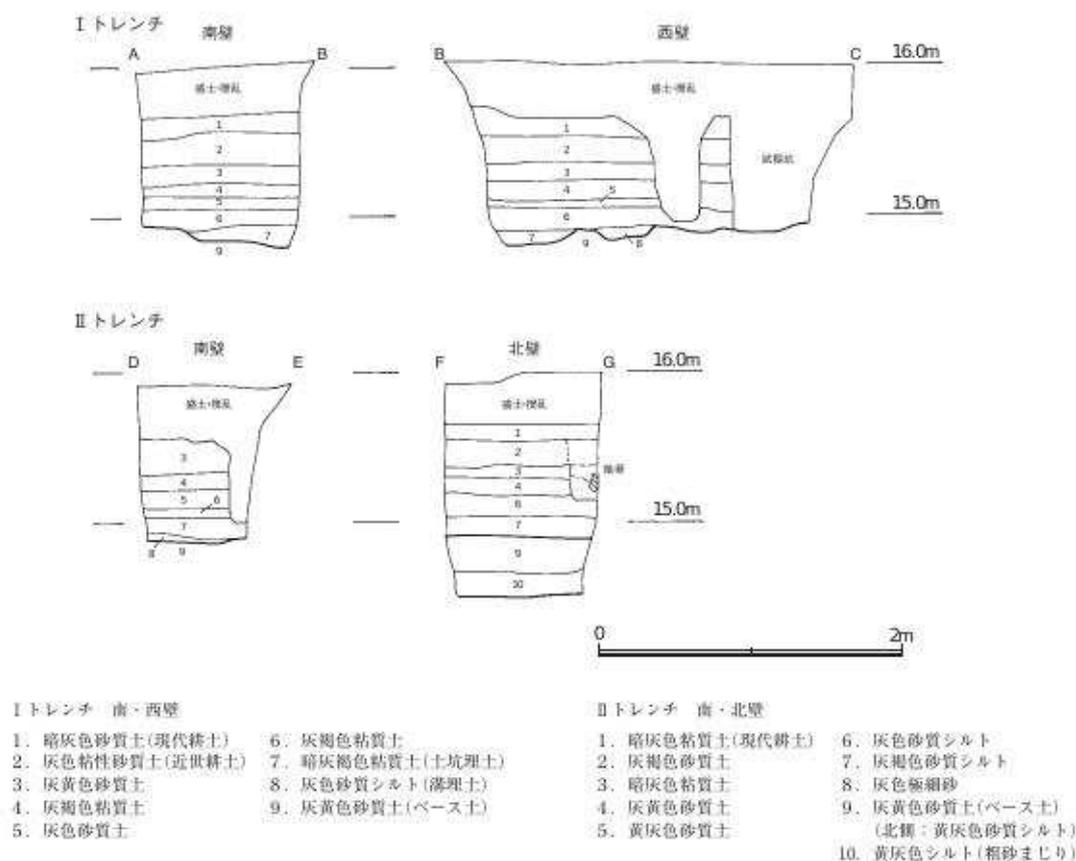


図123 第62次調査Ⅰトレンチ南・西、Ⅱトレンチ南・北壁断面図

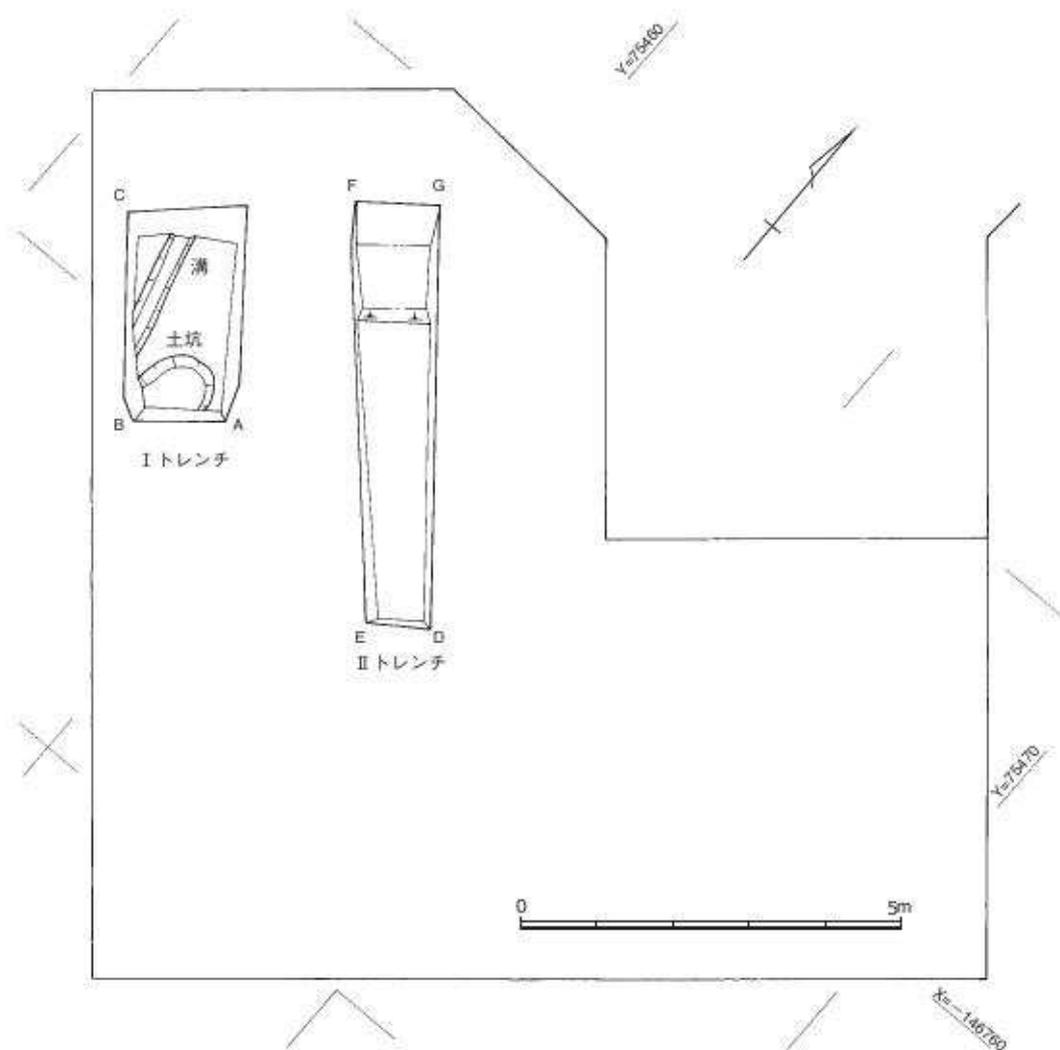


図124 第62次調査平面図



図125 I トレンチ溝 (北から)



図126 I トレンチ全景 (南東から)

## 第17節 第63次調査

## 1. 調査の概要

第62次調査地の東側に隣接する。

## 2. 調査の概要

調査範囲内中央に2本のトレンチを設定して調査を実施した。

南のIトレンチでは、灰色砂質土から極細砂層の地山面が東向きに緩やかに下がる地形を確認し、直上の灰色砂質シルト層や上方の黄灰色砂質シルト層からは14～15世紀のものと考えられる土師器片、丹波焼片などが出土した。

北のIIトレンチでは顕著な遺構の検出はなかったが、北東方向へ下がる礫（灰褐色砂礫層：礫大3～5cm）の堆積を確認した。落ち込み埋没後に堆積した灰褐色極細砂や地山面直上の土壌化層（淡灰色シルト質極細砂）より中世の土師器片などが出土した。

## 3. まとめ

南東隣接地での第37次調査地では14世紀後半～15世紀前半期の遺構と考えられたNR01及びNR02の落ち込みが検出されており、今回のトレンチはいずれも落ち込みの西側肩部付近に相当するものと考えられる。

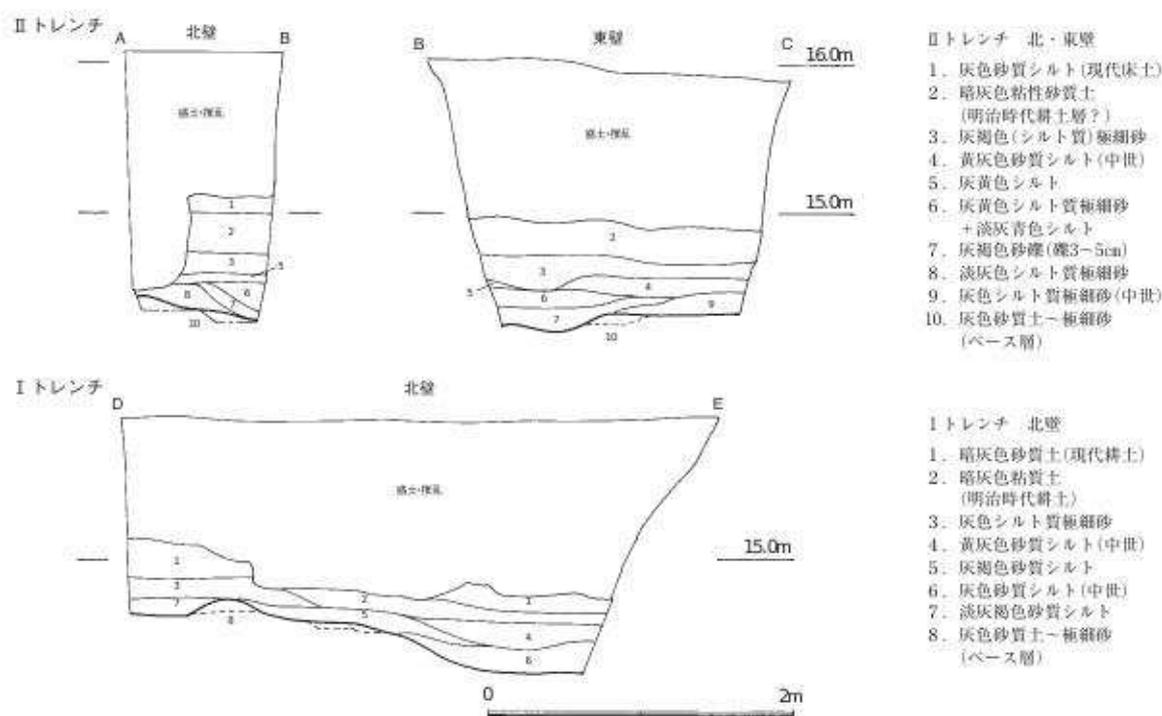


図127 第63次調査IIトレンチ北・東、Iトレンチ北壁断面図

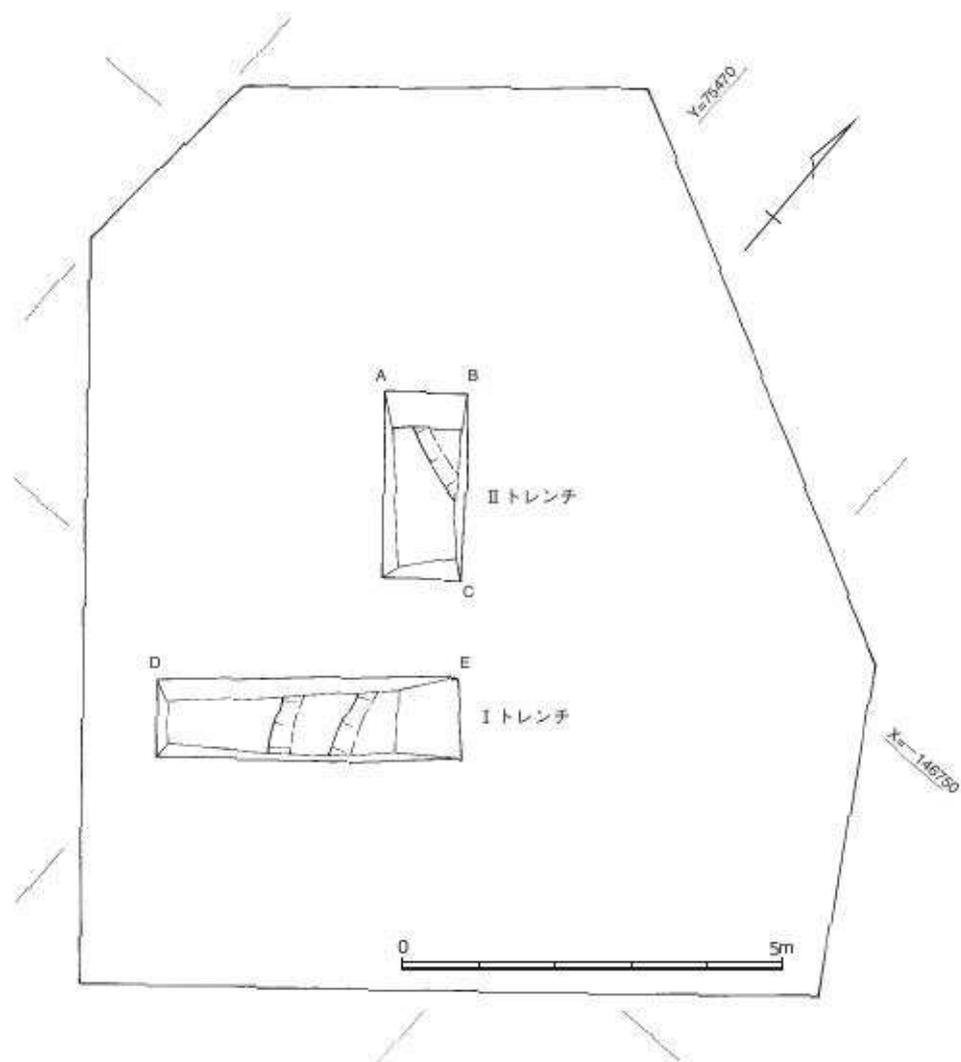


図128 第63次調査平面図



図129 I トレンチ全景 (南東から)



図130 II トレンチ全景 (南西から)

## 第18節 第64次調査

### 1. 調査の概要

第61次調査地の西側に隣接する。標高約15.6mである。

### 2. 基本層序

盛土以下、3層の旧耕土層が堆積し、その下に暗褐色粘質土が堆積する。上面が中世にはベース面となったようだが、明確には遺構検出ができなかった。南東側に緩やかに傾斜する地形で、南端に堆積する暗灰色粘質土層からは中世の土器片が周囲よりややまとまって出土した。暗褐色粘質土の下層に土壌化した灰褐色シルト層が堆積し、その下の黄灰色砂質土の地山面で遺構を検出した。北側には灰色砂礫層が堆積しており、時期不明の洪水による堆積が露呈する状況である。

### 3. 遺構

Iトレンチの中央でピット2基、南東部のIVトレンチで土坑状の落ち込み1基、西側の2つのトレンチで柱穴などピット11基を検出した。このうちSP01・SP03・SP06・SP09などは建物を構成する可能性のある柱穴と考えられるが、詳細は不明である。

SP03 直径32cm、深さ20cmで、直径約20cm、深さ15cmの柱痕が遺存していた。柱材は残っていないが、土層断面の観察から直径10cmほどの柱であったと推測される。柱穴の検出面で長さ20cmほどの扁平な石が出土した。掘形から土師器片が出土しており、中世の遺構と考えられる。

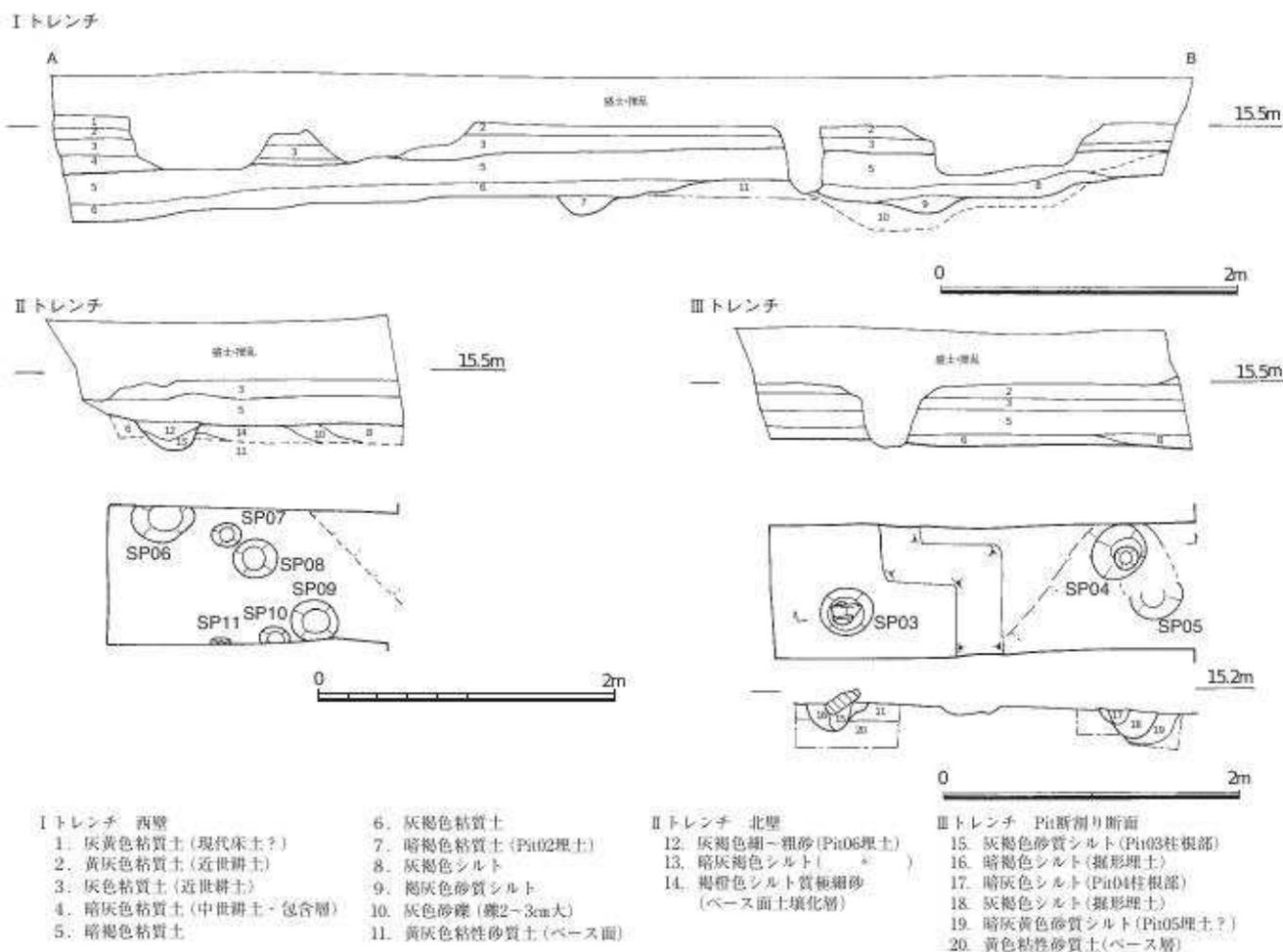


図131 第64次調査Iトレンチ断面図、II・IIIトレンチ平・断面図

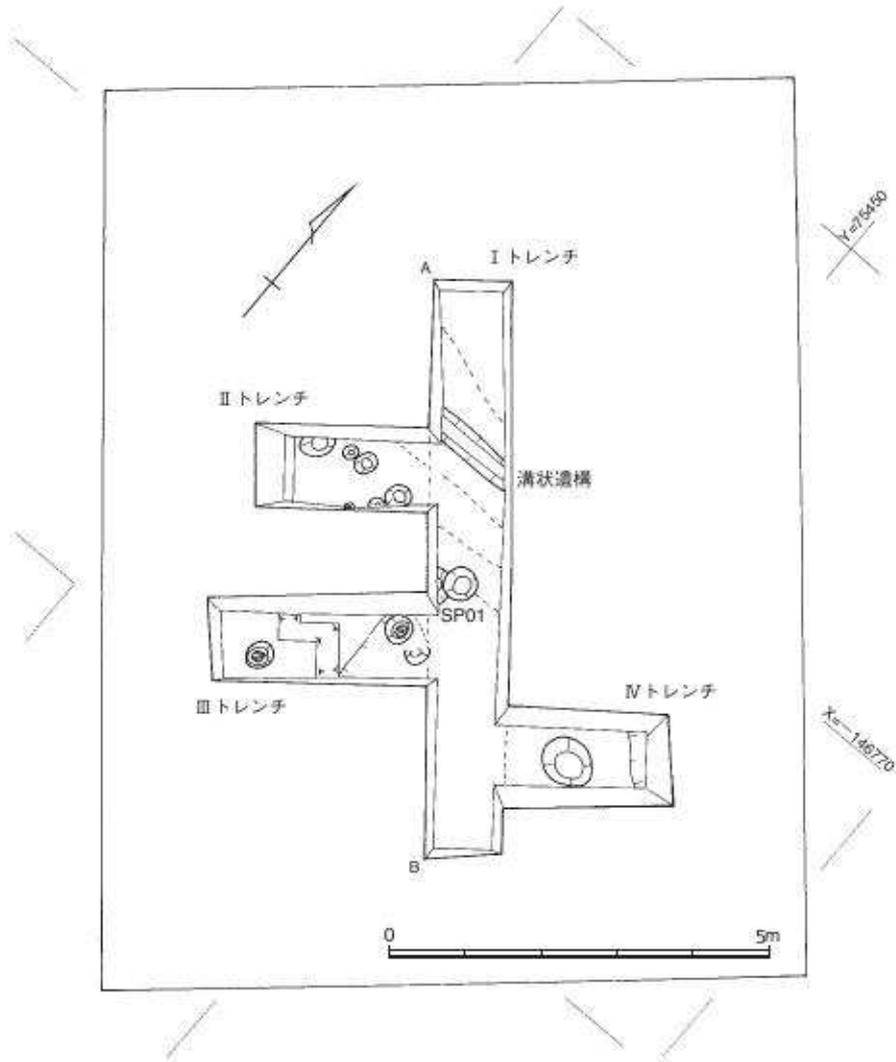


図132 第64次調査平面図

SP04 短径32cm、長径38cmの楕円形で、深さは25cmを測る。

SP06 直径45cm、深さ20cmを測る。

SP09 直径30cm、深さ10cmを測る。

溝状遺構 I トレンチ北半で検出した東西方向に流れる溝で、幅約40cm、深さ12cmを測る。西壁断面では下層に幅1.8m、深さ25cmの落ち込みが存在しており、この流路状の落ち込み(埋土は灰色砂礫)の最終堆積である可能性がある。



図133 III トレンチ全景(北東から)

#### 4. まとめ

西側のトレンチを中心に柱穴などの遺構を検出した。第1次・第2次・第61～63次の調査成果をあわせると、調査地西側に遺構や遺物の出土する範囲が広がり、今回の調査地以东、また房王寺線以西はそれぞれ緩やかに下がる地形となるようで、徐々に遺構が希薄になる状況が追認できた。

表3 遺物法量表①

口径・直径の( )は推定値、器高の( )は残存高を示す。

| 遺物番号 | 器種       | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 直径 (cm) |
|------|----------|---------|---------|---------|
| 1    | 弥生土器壺    | (13.4)  | (14.1)  | —       |
| 2    | 弥生土器壺    | (15.6)  | (4.9)   | —       |
| 3    | 弥生土器壺    | (16.2)  | (3.7)   | —       |
| 4    | 弥生土器壺    | (11.2)  | (4.5)   | —       |
| 5    | 弥生土器壺    | (16.9)  | (3.9)   | —       |
| 6    | 弥生土器壺    | (29.6)  | (5.0)   | —       |
| 7    | 弥生土器壺    | (17.4)  | (3.6)   | —       |
| 8    | 弥生土器壺    | (14.2)  | (3.3)   | —       |
| 9    | 弥生土器壺    | —       | (4.5)   | 5.2     |
| 10   | 弥生土器壺    | —       | (4.1)   | (4.5)   |
| 11   | 弥生土器壺    | —       | (2.7)   | 4.8     |
| 12   | 弥生土器高坏   | —       | (8.2)   | —       |
| 13   | 弥生土器高坏   | —       | (3.5)   | (14.9)  |
| 14   | 縄文土器深鉢   | —       | (2.8)   | —       |
| 15   | 須恵器坏     | —       | (2.1)   | (8.2)   |
| 16   | 土師器壺     | (8.2)   | (12.2)  | —       |
| 17   | 土師器罎     | (24.8)  | (4.2)   | —       |
| 18   | 須恵器坏蓋    | —       | 2.8     | (18.6)  |
| 19   | 須恵器坏蓋    | —       | (2.8)   | —       |
| 20   | 須恵器坏     | (8.7)   | (4.7)   | —       |
| 21   | 須恵器坏蓋    | —       | (1.9)   | (15.2)  |
| 22   | 須恵器坏     | —       | (1.9)   | (10.2)  |
| 23   | 須恵器坏     | (11.0)  | (2.9)   | —       |
| 24   | 須恵器蓋     | —       | (5.3)   | —       |
| 25   | 土師器鉢?    | (17.2)  | (3.1)   | —       |
| 26   | 須恵器高坏    | —       | (4.9)   | (9.0)   |
| 27   | 須恵器包頸壺   | (10.2)  | (3.8)   | —       |
| 28   | 須恵器坏蓋    | —       | (2.4)   | —       |
| 29   | 須恵器壺     | (7.0)   | (6.0)   | —       |
| 30   | 土師器台付鉢   | —       | (3.3)   | (11.8)  |
| 31   | 須恵器壺     | —       | —       | (8.4)   |
| 32   | 須恵器坏     | —       | (1.2)   | (9.4)   |
| 33   | 土師器碗     | (12.4)  | 3.5     | (5.2)   |
| 34   | 須恵器坏     | —       | (2.4)   | (10.5)  |
| 35   | 土人形      | —       | (3.5)   | —       |
| 36   | 土師器羽釜    | (27.8)  | (18.0)  | —       |
| 37   | 土師器羽釜    | (31.0)  | (8.9)   | —       |
| 38   | 土師器羽釜    | (29.8)  | (12.0)  | —       |
| 39   | 土師器羽釜    | (30.0)  | (12.2)  | —       |
| 40   | 土師器轉付罎   | (29.0)  | (11.4)  | —       |
| 41   | 須恵器坏蓋    | —       | (4.8)   | (12.6)  |
| 42   | 須恵器広口壺   | (20.6)  | (7.0)   | —       |
| 43   | 須恵器広口壺   | (15.6)  | 23.2    | —       |
| 44   | 須恵器壺     | 18.7    | (30.4)  | —       |
| 45   | 土師器鉢     | 10.4    | 6.8     | —       |
| 46   | 土師器瓶     | —       | (6.0)   | (3.6)   |
| 47   | 土師器小型丸底壺 | (8.8)   | 11.0    | —       |
| 48   | 土師器高坏    | —       | —       | (10.4)  |
| 49   | 土師器壺     | (14.8)  | (7.5)   | —       |
| 50   | 土師器壺     | 14.6    | (22.8)  | —       |
| 51   | 土師器壺     | (15.6)  | (15.1)  | —       |
| 52   | 土師器壺     | 17.6    | (14.0)  | —       |
| 53   | 土師器壺     | (15.0)  | 25.3    | —       |
| 54   | 土師器壺     | 11.5    | (5.4)   | —       |
| 55   | 土師器壺     | (14.7)  | (20.3)  | —       |
| 56   | 土師器広口壺   | (14.4)  | (21.1)  | —       |
| 57   | 白磁碗      | (14.4)  | (2.6)   | —       |
| 58   | 白磁皿      | —       | (1.1)   | (5.0)   |
| 59   | 須恵器碗     | —       | (2.0)   | (6.0)   |
| 60   | 須恵器鉢     | (29.2)  | (4.8)   | —       |
| 61   | 土師器羽釜    | (27.5)  | (6.7)   | —       |
| 62   | 土師器羽釜    | (31.4)  | (6.9)   | —       |
| 63   | 須恵器坏     | (10.1)  | (3.5)   | —       |
| 64   | 土師器壺     | (14.2)  | (2.4)   | —       |
| 65   | 土師器壺     | (9.9)   | (7.3)   | —       |
| 66   | 土師器坏     | (10.0)  | (2.8)   | —       |
| 67   | 土師器羽釜    | (17.4)  | (6.8)   | —       |
| 69   | 須恵器坏     | (11.0)  | 2.9     | 7.1     |
| 70   | 須恵器長頸瓶   | —       | (12.5)  | —       |
| 71   | 須恵器罎     | —       | (5.0)   | —       |
| 72   | 瓦器碗      | —       | (0.8)   | (5.8)   |
| 74   | 土師器高坏    | 13.1    | (5.1)   | —       |
| 75   | 土師器高坏    | 13.5    | 12.4    | 9.5     |

| 遺物番号 | 器種         | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 直径 (cm) |
|------|------------|---------|---------|---------|
| 76   | 土師器壺       | —       | (12.1)  | —       |
| 77   | 土師器丸底小鉢    | (12.9)  | (5.1)   | —       |
| 78   | 土師器皿       | (12.7)  | 2.2     | —       |
| 79   | 土師器坏       | (14.0)  | (3.4)   | —       |
| 80   | 弥生土器鉢      | (11.9)  | 5.3     | —       |
| 81   | 弥生土器鉢      | 18.7    | 11.5    | 4.0     |
| 82   | 土師器高坏      | 13.8    | (5.9)   | —       |
| 83   | 土師器高坏      | —       | (5.3)   | (8.8)   |
| 84   | 弥生土器器台     | —       | (7.8)   | —       |
| 85   | 土師器壺       | 10.2    | 13.2    | —       |
| 86   | 土師器壺       | (16.7)  | (4.8)   | —       |
| 87   | 土師器壺       | (16.0)  | (5.3)   | —       |
| 88   | 土師器壺       | (11.4)  | 16.4    | —       |
| 89   | 土師器壺       | 18.0    | 29.7    | —       |
| 90   | 土師器壺       | 17.3    | 28.4    | —       |
| 91   | 須恵器坏蓋      | —       | 4.9     | 12.8    |
| 92   | 須恵器坏蓋      | —       | (4.8)   | (13.8)  |
| 93   | 須恵器坏蓋      | —       | (3.8)   | (13.2)  |
| 94   | 須恵器坏蓋      | —       | (3.85)  | (12.0)  |
| 95   | 須恵器坏蓋      | —       | (3.9)   | —       |
| 96   | 須恵器坏       | —       | (2.1)   | (9.0)   |
| 97   | 須恵器坏       | (11.0)  | (5.2)   | —       |
| 98   | 須恵器無蓋高坏    | —       | (3.7)   | —       |
| 99   | 須恵器有蓋高坏    | —       | (4.65)  | (9.8)   |
| 102  | 土師器碗       | (10.2)  | (5.7)   | —       |
| 103  | 弥生土器壺      | —       | (3.4)   | 5.0     |
| 104  | 土師器壺       | (20.0)  | (6.0)   | —       |
| 105  | 須恵器坏蓋      | —       | 4.2     | (10.4)  |
| 106  | 須恵器罎       | (9.2)   | (2.8)   | —       |
| 107  | 須恵器坏       | —       | (2.3)   | 5.8     |
| 110  | 移動式竈       | —       | (7.7)   | —       |
| 111  | 移動式竈       | —       | (9.6)   | —       |
| 112  | 土師器高坏      | —       | (4.2)   | —       |
| 113  | 土師器高坏      | —       | (6.3)   | —       |
| 114  | 土師器高坏      | —       | (8.35)  | (9.7)   |
| 115  | 須恵器コップ形小型碗 | (7.1)   | 6.8     | (4.5)   |
| 116  | 土師器皿       | (11.5)  | 2.6     | (5.8)   |
| 117  | 土師器皿       | (11.4)  | 2.2     | (6.9)   |
| 118  | 壺          | —       | (4.3)   | 4.2     |
| 119  | 壺          | —       | (8.5)   | 4.8     |
| 120  | 壺          | —       | (4.7)   | (5.0)   |
| 121  | 弥生土器壺      | (14.8)  | (5.3)   | —       |
| 122  | 須恵器碗       | —       | (3.4)   | (6.0)   |
| 123  | 製塩土器       | —       | (3.0)   | —       |
| 124  | 韓式系土器      | —       | —       | —       |
| 125  | 韓式系土器      | —       | (2.6)   | —       |
| 126  | 韓式系土器      | —       | (5.0)   | —       |
| 127  | 韓式系土器      | —       | (2.8)   | —       |
| 128  | 韓式系土器      | —       | (3.0)   | —       |
| 129  | 韓式系土器      | —       | (3.4)   | —       |
| 130  | 韓式系土器      | —       | (4.6)   | —       |
| 131  | 韓式系土器      | —       | (5.6)   | —       |
| 132  | 韓式系土器      | —       | (3.5)   | —       |
| 133  | 弥生土器鉢      | (12.9)  | 9.0     | 3.5     |
| 134  | 弥生土器鉢      | —       | (8.5)   | 3.9     |
| 135  | 弥生土器壺      | (15.8)  | (5.6)   | —       |
| 136  | 弥生土器壺      | (16.9)  | (11.0)  | —       |
| 137  | 弥生土器壺      | —       | (10.4)  | 4.6     |
| 138  | 弥生土器高坏     | —       | (4.4)   | —       |
| 139  | 弥生土器壺      | —       | (5.3)   | 4.0     |
| 140  | 弥生土器壺      | (14.2)  | (14.7)  | —       |
| 141  | 弥生土器壺      | —       | (3.1)   | 2.4     |
| 142  | 弥生土器壺      | (13.7)  | (7.0)   | —       |
| 143  | 弥生土器高坏     | —       | (9.8)   | —       |
| 144  | 弥生土器壺      | (16.5)  | (15.5)  | —       |
| 145  | 弥生土器壺      | —       | (1.5)   | (7.4)   |
| 146  | 弥生土器壺      | (13.6)  | (4.5)   | —       |
| 147  | 弥生土器高坏     | (22.6)  | (5.3)   | —       |
| 148  | 弥生土器高坏     | —       | (7.0)   | —       |
| 149  | 縄文土器深鉢     | —       | (2.9)   | —       |
| 150  | 縄文土器深鉢     | —       | (3.6)   | —       |
| 151  | 縄文土器深鉢     | —       | (3.2)   | —       |
| 152  | 須恵器碗       | (15.5)  | 5.4     | (4.4)   |

表4 遺物法量表②

口径・底径の( )は推定値、器高の( )は残存高を示す。

| 遺物番号 | 器種      | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 底径 (cm) |
|------|---------|---------|---------|---------|
| 153  | 須恵器坏蓋   | —       | (1.6)   | —       |
| 154  | 須恵器坏    | (8.7)   | 3.2     | (4.0)   |
| 155  | 須恵器坏蓋   | —       | (3.4)   | (11.5)  |
| 156  | 須恵器坏蓋   | —       | (2.7)   | —       |
| 157  | 須恵器坏    | —       | (2.1)   | (7.0)   |
| 158  | 須恵器無蓋高坏 | —       | (6.9)   | —       |
| 163  | 土師器埴    | —       | (2.0)   | (8.0)   |
| 164  | 須恵器壺    | —       | (2.2)   | (8.0)   |
| 165  | 壺       | —       | (5.8)   | 5.5     |
| 166  | 弥生土器    | —       | (5.4)   | 5.3     |
| 167  | 弥生土器? 甗 | —       | (6.8)   | 3.0     |
| 168  | 高坏      | —       | (7.0)   | —       |
| 169  | 高坏      | —       | (7.1)   | —       |
| 170  | 高坏      | —       | (5.8)   | —       |
| 171  | 高坏      | —       | (12.6)  | (14.9)  |
| 172  | 弥生土器壺   | 13.8    | (6.0)   | —       |
| 173  | 縄文土器深鉢  | —       | (5.5)   | —       |
| 174  | 丹波焼壺    | —       | (8.6)   | (11.4)  |
| 175  | 須恵器坏蓋   | —       | (2.15)  | (10.8)  |
| 176  | 土師器樹付銅  | —       | (7.3)   | —       |
| 177  | 須恵器壺    | (13.6)  | (4.2)   | —       |
| 178  | 須恵器坏    | (8.8)   | (1.7)   | —       |
| 179  | 須恵器高坏   | —       | (4.0)   | —       |
| 180  | 須恵器高坏   | —       | (4.8)   | —       |
| 181  | 須恵器壺    | —       | (2.9)   | (15.0)  |
| 182  | 丹波焼深鉢   | —       | —       | —       |
| 183  | 須恵器壺    | (15.0)  | (4.4)   | —       |
| 184  | 土師器把手   | —       | —       | —       |
| 185  | 須恵器坏蓋   | —       | (1.1)   | (14.8)  |
| 186  | 須恵器坏蓋   | —       | (1.95)  | (10.6)  |
| 187  | 須恵器坏    | (8.6)   | (2.8)   | —       |
| 188  | 須恵器坏    | (9.0)   | (1.4)   | —       |
| 189  | 須恵器壺    | —       | (3.2)   | —       |
| 190  | 須恵器埴    | 14.4    | 4.3     | 6.3     |
| 191  | 黒色土器埴   | —       | (3.1)   | 6.9     |
| 192  | 須恵器坏蓋   | —       | (1.6)   | —       |
| 193  | 須恵器坏蓋   | —       | (1.2)   | (15.8)  |
| 194  | 須恵器坏蓋   | —       | (0.9)   | (12.4)  |
| 195  | 須恵器坏蓋   | —       | (1.2)   | (9.2)   |
| 196  | 須恵器坏    | —       | (3.3)   | (11.6)  |
| 197  | 須恵器坏    | —       | (1.7)   | (14.6)  |
| 198  | 須恵器坏    | —       | (1.8)   | (10.0)  |
| 199  | 須恵器埴    | —       | (1.3)   | (6.0)   |
| 200  | 須恵器坏    | (10.4)  | (3.2)   | —       |
| 201  | 須恵器坏    | —       | (1.6)   | (3.6)   |
| 202  | 須恵器坏    | —       | (1.7)   | (8.0)   |
| 203  | 黒色土器坏   | (10.8)  | (2.8)   | —       |
| 204  | 須恵器皿    | (25.8)  | (1.5)   | —       |
| 205  | 須恵器鉢    | (19.6)  | (2.8)   | —       |
| 206  | 須恵器壺    | (21.4)  | (12.0)  | —       |
| 207  | 須恵器壺    | (21.2)  | (7.1)   | —       |
| 208  | 須恵器壺    | (18.0)  | (9.0)   | —       |
| 209  | 須恵器壺    | —       | —       | —       |
| 210  | 須恵器長頸壺  | —       | (5.0)   | —       |
| 211  | 須恵器長頸壺  | —       | (5.6)   | —       |
| 212  | 須恵器Bor壺 | (7.2)   | (4.7)   | —       |
| 213  | 須恵器Bor壺 | —       | (3.9)   | —       |
| 214  | 須恵器坏蓋   | —       | (2.0)   | (9.8)   |
| 215  | 須恵器提瓶   | —       | (14.7)  | —       |
| 216  | 須恵器坏蓋   | —       | (2.0)   | (14.2)  |
| 217  | 須恵器坏蓋   | —       | (2.2)   | (11.4)  |
| 218  | 須恵器坏蓋   | —       | (2.7)   | (10.4)  |
| 219  | 須恵器坏蓋   | —       | (3.3)   | (11.0)  |
| 220  | 須恵器坏蓋   | —       | (2.8)   | —       |
| 221  | 須恵器坏    | (11.2)  | (2.2)   | —       |
| 222  | 須恵器坏    | (11.0)  | (2.1)   | —       |
| 223  | 須恵器坏    | (10.6)  | (2.9)   | —       |
| 224  | 須恵器坏    | (9.4)   | (2.5)   | —       |
| 225  | 須恵器坏    | (9.4)   | (2.9)   | —       |
| 226  | 須恵器坏    | (10.8)  | (2.2)   | —       |
| 227  | 須恵器坏    | (11.0)  | (1.8)   | —       |
| 228  | 須恵器高坏   | —       | (3.2)   | —       |
| 229  | 須恵器高坏   | —       | (1.2)   | (7.8)   |

| 遺物番号 | 器種    | 口径 (cm) | 器高 (cm) | 底径 (cm) |
|------|-------|---------|---------|---------|
| 230  | 須恵器高坏 | —       | (2.3)   | (9.4)   |
| 231  | 須恵器高坏 | —       | (0.9)   | (8.8)   |
| 232  | 須恵器壺  | 20.6    | —       | —       |
| 233  | 須恵器壺  | (18.4)  | (12.1)  | —       |
| 235  | 須恵器坏  | (11.4)  | (2.1)   | —       |
| 236  | 須恵器坏  | (11.0)  | (2.3)   | —       |
| 237  | 土師器壺  | —       | (2.0)   | —       |
| 238  | 須恵器壺  | —       | (1.4)   | —       |
| 239  | 土師器壺  | (25.8)  | —       | (13.8)  |
| 240  | 須恵器埴  | 14.8    | 5.6     | 5.0     |
| 241  | 土師器埴  | (14.6)  | 3.3     | (7.0)   |
| 242  | 土師器埴  | (14.6)  | 3.0     | (7.0)   |
| 243  | 土師器埴  | (14.4)  | 3.3     | —       |
| 244  | 土師器埴  | (10.8)  | (3.0)   | —       |
| 245  | 須恵器坏蓋 | —       | (1.9)   | (9.8)   |
| 246  | 須恵器坏  | (11.0)  | (1.8)   | —       |
| 247  | 土師器高坏 | —       | —       | —       |
| 248  | 須恵器坏蓋 | —       | (1.5)   | (11.6)  |
| 249  | 須恵器坏蓋 | —       | (1.4)   | (11.7)  |
| 250  | 土師器壺  | (14.6)  | (3.5)   | —       |
| 251  | 須恵器坏  | —       | (1.6)   | —       |
| 252  | 須恵器壺  | —       | (1.8)   | —       |
| 253  | 須恵器坏蓋 | —       | (1.9)   | (11.6)  |
| 254  | 須恵器坏  | (9.6)   | (1.2)   | —       |
| 255  | 須恵器壺  | (13.4)  | (3.2)   | —       |
| 256  | 須恵器坏  | (11.0)  | (3.4)   | —       |
| 257  | 土師器把手 | —       | —       | —       |
| 258  | 須恵器壺  | —       | (11.3)  | —       |
| 259  | 須恵器壺  | —       | (3.5)   | —       |
| 260  | 須恵器坏  | (15.4)  | (4.3)   | (10.7)  |
| 261  | 須恵器坏  | (10.4)  | (2.6)   | —       |
| 262  | 須恵器鉢  | —       | (10.5)  | —       |
| 263  | 土師器壺  | (22.0)  | (15.9)  | —       |
| 264  | 土師器高坏 | —       | (6.3)   | —       |
| 265  | 土師器高坏 | —       | (6.7)   | (10.2)  |
| 266  | 土師器高坏 | (19.6)  | (5.1)   | —       |
| 267  | 須恵器坏蓋 | —       | (3.2)   | (10.6)  |
| 268  | 須恵器坏蓋 | —       | (2.6)   | (11.6)  |
| 269  | 須恵器坏  | (11.3)  | (1.7)   | —       |
| 270  | 須恵器坏  | (10.6)  | (3.8)   | —       |
| 315  | 二彩多口壺 | —       | (4.8)   | —       |
| 316  | 土師器皿  | 8.7     | 0.9     | —       |
| 317  | 土師器皿  | (8.5)   | (1.8)   | —       |
| 318  | 土師器皿  | 8.8     | 1.4     | —       |
| 319  | 須恵器坏  | (16.0)  | 4.0     | (12.0)  |
| 320  | 青磁碗   | —       | (2.1)   | (5.6)   |
| 321  | 土師器埴  | —       | (2.1)   | (7.1)   |
| 322  | 土師器皿  | (13.4)  | 2.8     | —       |
| 323  | 須恵器坏蓋 | —       | (2.0)   | (6.6)   |
| 324  | 須恵器坏蓋 | —       | (1.5)   | (12.8)  |
| 328  | 須恵器坏蓋 | —       | (1.0)   | (13.9)  |
| 329  | 須恵器皿  | (10.2)  | 2.1     | —       |
| 330  | 弥生土器壺 | —       | (3.9)   | 3.4     |
| 331  | 須恵器坏  | (14.5)  | (2.6)   | —       |
| 332  | 須恵器壺  | (11.0)  | (6.55)  | —       |

表5 遺物法量表③

長さの( )は残存長、幅の( )は残存幅を示す。

| 遺物番号 | 器種  | 長さ (cm) | 幅 (cm) | 重さ (g) |
|------|-----|---------|--------|--------|
| 68   | 土鉢  | (5.6)   | 2.0    | 18.6   |
| 159  | 土鉢  | (5.25)  | 2.05   | 20.7   |
| 160  | 土鉢  | (4.85)  | 1.9    | 14.9   |
| 161  | 土鉢  | (3.15)  | 1.3    | 6.4    |
| 162  | 土鉢  | (3.05)  | 1.5    | 5.9    |
| 271  | 土鉢  | (3.0)   | 0.75   | 2.0    |
| 272  | 土鉢  | (3.1)   | 0.9    | 2.2    |
| 273  | 土鉢  | (4.0)   | 1.3    | 5.2    |
| 274  | 土鉢  | (2.4)   | 0.6    | 0.8    |
| 275  | 土鉢  | (3.6)   | 1.55   | 7.0    |
| 101  | 備前口 | (7.6)   | (6.65) | —      |

## 第3章 木製品

### 第37次調査出土木製品 (図134)

第37次調査では、NR01より木製品が出土している。埋土中層からは完形の木樋が1点、出土している(338)。平面形は長方形で、全長132.0cm、幅17.6cm～20.0cm、高さ8.8cmを測る。芯持ち材を半裁し、内部を削り抜いてある。外面も調整されており、横断面形は半裁された八角形を呈する。内部は底面と斜面を平坦に削り出し、横断面が台形を呈する。一方の小口は端部より8cm程度を彫り残し、厚みを持たせて段を形成させている。内外の表面を観察すると、長手方向に手斧で斫った痕跡が残されている。溝埋土中に流れ込んだ状態で原位置を保たずに出土したため、遺構との関連や用途については詳らかでない。樹種同定の結果、ヒノキ製であることが分かった。

またこの木樋には大小5枚の蓋板が付属しており(333～337)、樋の上部に目釘留めで閉塞された状態で出土した。幅は17.7cm～18.2cm、厚さ1.0～1.3cmであり、樋に合わせて作られているが、長さについては333:4.2cm～、334:6.6cm、335:5.8cm、336:12.3cm、337:77.1cmを測る。333は割れているため本来の長さが不明である。また334と335は目釘穴の位置より、元々同一個体と考えられ、復元される長さは12.4cmと、336とほぼ同じ長さとなる。樹種同定の結果、5点全てがコウヤマキを使用していることが判明した。

またNR01の東岸斜面には木杭が17本、等間隔に打ち込まれていた。これらの内訳は、丸杭13点、割杭4点である。内6点を図示した(339～344)。丸杭(339～342)は樹皮の有無はあるものの、表面調整はされていないもので、先端加工のみを施している。直径は2.5cm～8.7cm(平均4.25cm)を測る。割杭(343・344)は放射方向で割られた材で、横断面の長辺が4.7cm～7.8cm(平均6.23cm)を測る。

これら杭について精密な樹種同定は実施していないが、丸杭は13点中、針葉樹が11点(84.6%)、広葉樹が2点(15.4%)で、割杭は4点中、針葉樹が3点(75.0%)、広葉樹が1点(25.0%)であった。いずれも針葉樹が多く用いられており、当時の遺跡周辺地域での用材と植生を考える一助となろう。

[木材の樹種同定について](木材組織の解剖所見は、島地・伊東1982による)

木樋(338)および蓋(333～337)に使用された木材の樹種同定については、中村が実施した。同定にあたっては遺物より直接、木口・柃目・板目の3方向断面の薄片サンプルを採取し、顕微鏡下において透過光での観察を行なった。同定結果は先述の通りである。以下に同定された樹種と解剖学的特徴を述べ、同定根拠とする。

#### 1. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb.et Zucc

繊維断面で観察される早材から晩材への移行は急で、年輪界は明瞭に観察できる。垂直樹脂道は存在しない。放射組織に水平樹脂道、放射仮道管は存在せず、分野壁孔は窓状を呈する。

#### 2. ヒノキ *Chamaecyparis obtuse* Endl.

繊維断面で観察される早材から晩材への移行はゆるやかで晩材が幅狭く、年輪界は明瞭に観察できる。垂直樹脂道は存在せず、放射組織は放射柔細胞のみで水平樹脂道、放射仮道管は存在しない。分野壁孔は孔口が細いスリット状で、壁孔縁は楕円～円形を呈する。

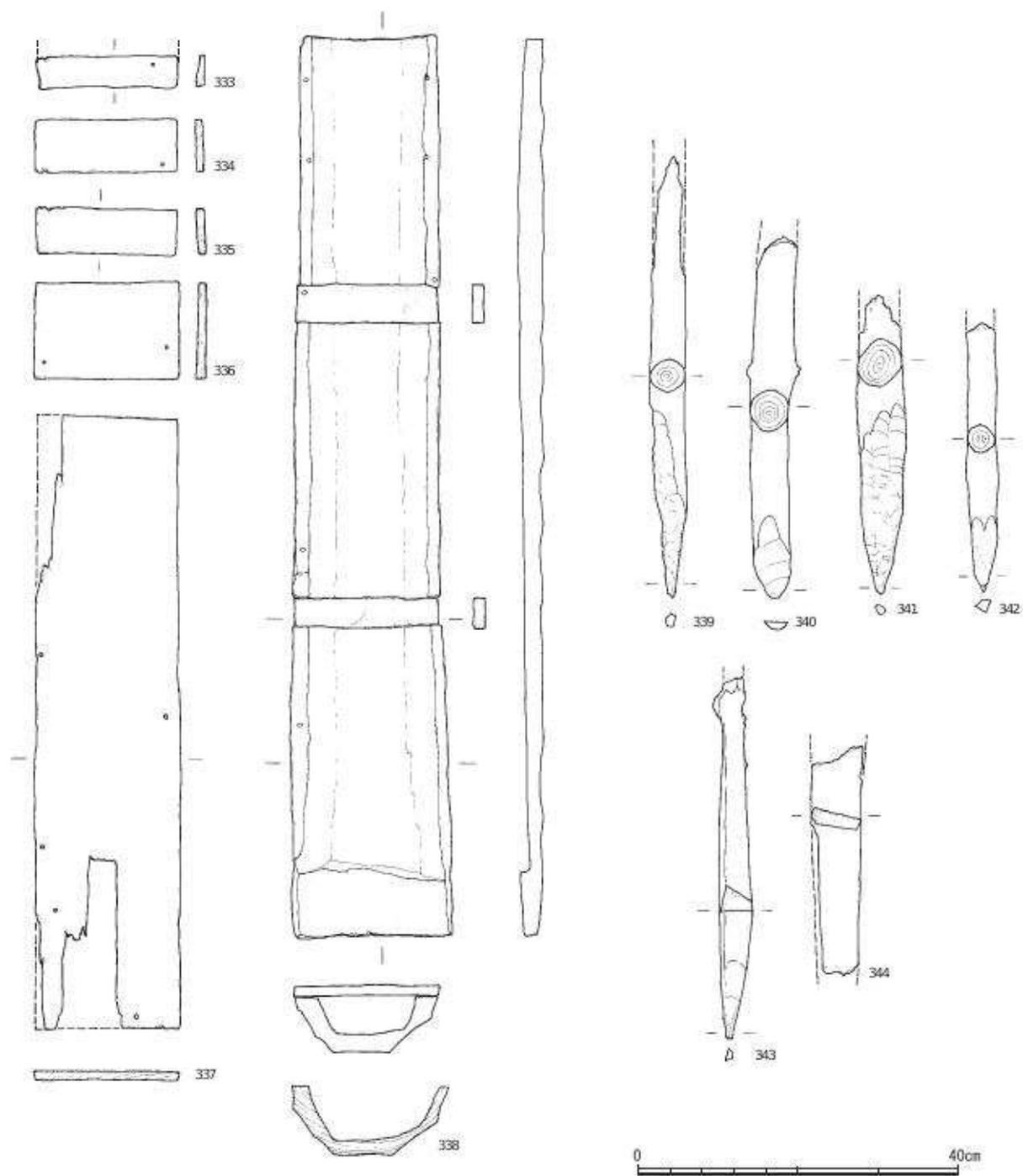


図134 第37次調査出土木製品実測図

## 第4章 まとめ

今回の報告は、上沢遺跡の山手幹線より北側で上沢通8丁目地区以外に位置する国庫補助事業に伴う調査をまとめたものである。そのため遺跡範囲が広範囲な割に、散在的・部分的な調査報告であり、遺跡全体を概観するには資料不足である。上沢遺跡の現段階での総括については今後の報告に譲りたいが、今回報告の知見を記してまとめにかえたい。

### 1. 遺構

縄文時代の痕跡はごくわずかで、遺物が第3次・第39次・第56次調査で土器が出土しているにすぎない。遺構は確認されていない。

弥生時代後期から庄内期にかけては、北側の松本通8丁目地区でのみ確認されている。上沢通8丁目地区では遺物がまとまって出土しており、西側の地域では希薄であることがわかる。

また、古墳時代前期の遺構・遺物も北側に片寄って検出されており、山手幹線近辺での状況は不明である。第25次調査で竪穴建物が確認されている。

古墳時代後期の状況は、遺構・遺物とも広がりを見せるようになる。七番町・五番町2丁目で遺構が確認され、遺物は松本通～五番町2丁目まで広がる。掘立柱建物も第23次・第26次調査で検出されている。

奈良時代には、南西側の五番町2丁目地区に集中する傾向が見られる。遺構も第26次調査と第56次調査で掘立柱建物、第40次調査で溝が確認されている。山手幹線の調査でも奈良時代から平安時代の掘立柱建物が何棟か確認されており、官衙に付随する建物群の広がりが想定される地区である。

平安時代には第40次調査で掘立柱建物が検出されたほか、第12次・第39次調査で土坑・ピットなどが検出されており、遺構は北側に集中するものの、遺物は南側にも広がって確認されている。

中世はさらに遺跡全体で、遺構・遺物が確認されるようになる。

以上は、各時代の居住域の変遷をまとめた『上沢遺跡Ⅲ』2004の中で述べられた状況を追認する結果となっている。

### 2. 遺物

今回報告した調査で出土した遺物は、縄文時代から中世に至る資料であるが、大半の遺物は自然流路、遺物包含層からの出土であり、一括資料として捉えられる資料は少ない。ここでは、当遺跡の性格を特徴づける古墳時代中期および奈良時代～平安時代の資料について記す。

古墳時代中期に関する遺物のなかで注目されるものに、第12次調査で出土した須恵器坏蓋(24)と、第39次調査で出土した韓式系土器(124～132)がある。前者は、天井部の大半・口縁端部・稜が欠損するものの、天井部の文様構成から初期須恵器と判断される。生産地については、大阪府堺市周辺に展開する陶邑窯跡群が候補にあげられるが、一方で本資料は軟質で内部の焼成が良好ではないなど製作技術の未熟さがみられる。このことを勘案すれば、陶邑窯跡群以外での生産も想定でき、生産地の特定については今後の判断を待ちたい。いずれにしても、六甲山系南麓の神戸市域において、東灘区西岡本遺跡出土の須恵器と並んで、最古段階に属する資料ということができ、当地における須恵

器の受容過程を考えるうえで重要な資料といえる。

軟質の韓式系土器は、朝鮮半島由来の土器であり、日常生活に密接に関わるものとして渡来人の存在を示す手がかりとされる遺物である。上沢遺跡では、今回報告分の第39次調査のほか、第10次調査や第27次調査で出土が報告されている。とくに、第27次調査のSB201からは完形に復原できる韓式系土器が2個体以上出土しており、本遺跡内で韓式系土器が使用・廃棄されたことが明白といえる。第39次調査出土のものは遺構面上から出土したため、帰属年代は特定しがたい。しかし、同一の遺構面から出土した土器をみると、古墳時代の須恵器を全く伴っていない。第27次調査のSB201でも土師器のみと共伴して出土しており、これは上沢遺跡では須恵器の受容以前に渡来人が居住した可能性を示すものとして興味深い成果といえる。

このように、上沢遺跡では古墳時代中期前半に渡来人を含む外来系文物を取り入れたことが推測されるが、遺跡内および周囲にそれを主導したと考えられる人物の古墳ならびに居館などは発見されていない。本遺跡が果たした役割や周辺の遺跡との関係性の追及については、今後の課題といえる。

奈良時代～平安時代に関わるものとして、第37次調査で出土した須恵器のコップ形小型壺(115)と第56次調査で出土した瓦、第58次調査で出土した二彩多口瓶(315)がある。

コップ形小型壺の大半は、平城京や各地の国衙・郡衙といった官衙関係の遺跡から出土している。平城京右京五条一坊十五坪や唐招提寺境内経藏前からは、容量を記した墨書を伴う資料が存在していることから、計量器と考えられているものである。神戸市内では、明石郡衙に比定されている西区吉田南遺跡で出土している。第37次調査で出土したコップ形小型壺は、全体の半分以上が欠損した状態で出土したため、図上から復原し、容量の計測を行った。その結果、約145mlという算値を得た。これは、篠原俊二氏が行った計測の結果を参考とすると(篠原1991)、約1.7合という値に相当するものである。なお、本資料では低い突帯を2条削り出しているが、そのような特徴をもつコップ形小型壺の類例が極めて少ないことは留意される。

第56次調査で出土した瓦は、調査区外から流入した資料であるが、総重量61.5kgを測る。官衙や寺院に付属する瓦葺建物が近接して存在したことを示しており、大量に瓦片が出土した室内遺跡との関連が注目される。また、出土資料のなかには赤変したものも含まれており、これらは火災等により被熱したものと考えられる。

第58次調査で出土した二彩多口瓶は、神戸市内では初めての出土である。細片であり、詳細は不明であるが、一般的な傾向としてこの種の遺物が出土する遺跡は、官衙・寺院等に集中しており、上沢遺跡においても同様のものと推定される。

本遺跡の東半部でも、奈良時代から平安時代の遺構、遺物が多く検出されており、当時期の拠点的な遺跡であった事を示している。これまでも本遺跡の北方に所在したとされる伝房王寺との関連が指摘されてきたが、そのことを補強するような成果を得たといえよう。

## 参考文献

- 井上高明1994「コップ形須恵器の考察：奈良時代の計量器について」『考古学雑誌』第79巻第4号 日本考古学協会
- 岡田章一・長谷川真2003「兵庫津遺跡出土の土製煮沸具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 亀田修一1993「考古学から見た渡来人」『古文化談義』第30巻(中) 九州古文化研究会
- 黒田恭正編2005「南森町遺跡発掘調査報告書-第1・2次調査-」神戸市教育委員会
- 鏡額文佳編2018「神出窯跡群発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 小森俊寛2005「京から出土する土器の編年の研究-日本律令的土器様式の成立と展開、7-19世紀-」京都編集工房
- 藤原俊次1991「日本古代の栴」『平安京右京五条二坊九町・十六町』京都文化博物館
- 島地 謙・伊東隆夫1982「因説 木材組織」地球社
- 箕津一郎2004「陶製の栴・油杯」『古代の官衙遺跡 II 遺物・遺構編』独立行政法人奈良文化財研究所
- 田辺昭三1981「須恵器大成」角川書店
- 寺沢 薫1986「畿内古式土器の編年と二、三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所
- 長友明子編2007「弥生土器集成と編年-播磨編-」大手前大学史学研究所オープン・リサーチ研究 第5号 大手前大学史学研究所
- 橋崎彰一1973「陶磁大系 5. 三彩 緑釉 灰釉」平凡社
- 橋崎彰一編1977「日本陶磁全集 5. 三彩 緑釉」中央公論社
- 橋崎彰一監1998「日本の三彩と緑釉-天平に咲いた華-」愛知県陶磁美術館・五島美術館
- 奈良市教育委員会編1988「7.平城京右京五条一坊十五坪の調査 第127次」昭和62年度奈良市埋蔵文化財調査概要報告書
- 兵庫教育委員会埋蔵文化財調査事務所編1996「神戸市西区玉津田中遺跡-第6分冊(総括編)-」兵庫教育委員会
- 平尾政幸・上村憲章編1992「古代の土器1 都城の土器集成」古代の土器研究会
- 平尾政幸・上村憲章編1992「古代の土器2 都城の土器集成II」古代の土器研究会
- 平尾政幸・上村憲章編1992「古代の土器3 都城の土器集成III」古代の土器研究会
- 正岡陸夫1992「畿前地域」正岡陸夫・松本岩雄編『山陽・山陰地域の様式編年』木耳社
- 森岡秀人・竹村忠洋2006「摂津地域」森岡秀人・西村歩編『古式土器の年代学(財)大阪府文化財センター』
- 森田克行1990「摂津地域」寺沢薫・森岡秀人編『弥生土器の様式と編年-近畿編II-』木耳社
- 山田邦一編1994「平安京出土土器の研究」古代学研究所研究報告 第4輯 (財)古代学協会
- 山中良平編2014「有年幸礼・山田遺跡発掘調査報告書」赤穂市教育委員会
- 歴史的環境に関わる調査報告書等
- 花隈城跡 山口英正2009「花隈城跡」『神戸市埋蔵文化財年報』平成18年度 神戸市教育委員会
- 宇治川南遺跡 丹治康明ほか1986「宇治川南遺跡」『神戸市埋蔵文化財年報』昭和58年度 神戸市教育委員会
- 紙園遺跡 富山直人2000「紙園遺跡 第5次発掘調査報告書」, 谷 正俊・池田 毅ほか2016「紙園遺跡 第17・18次発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 川上厚志・岡田健吾2016「紙園遺跡 第21次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 雪之御所遺跡 井尻 格2015「雪之御所遺跡 第2次調査」『神戸市埋蔵文化財年報』平成24年度 神戸市教育委員会, 関野 豊2015「雪之御所遺跡 第3次調査」『神戸市埋蔵文化財年報』平成24年度 神戸市教育委員会
- 楠・荒田町遺跡 川上厚志2008「楠・荒田町遺跡 第40・41次発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 富山直人・小林さやか2011「楠・荒田町遺跡 第42次・43次・46次発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 関野 豊・中村大介2014「楠・荒田町遺跡 第53次発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 黒田恭正編2014「楠・荒田町遺跡第54次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 兵庫津遺跡・兵庫城跡 川上厚志編2014「兵庫津遺跡発掘調査報告書 第57次」神戸市教育委員会, 齋木 巖・中谷 正・内藤俊哉2017「兵庫津遺跡 第62次発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 阿部敬生編2018「兵庫津遺跡 第69次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 大開遺跡 前田佳久編1993「大開遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社
- 塚本遺跡 新修神戸市史編集委員会1989「新修神戸市史 歴史編1 自然・考古」神戸市教育委員会
- 湊川遺跡 西岡巧次1989「湊川遺跡」『神戸市埋蔵文化財年報』昭和61年度 神戸市教育委員会
- 兵庫松本遺跡 中谷 正2005「兵庫松本遺跡 第2~4・12・17・19次 発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 夢野丸山古墳 梅原末治1925「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯
- 会下山遺跡 新修神戸市史編集委員会1989「新修神戸市史 歴史編1 自然・考古」神戸市教育委員会
- 会下山二本松遺跡 吉田太郎ほか1928「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯, 黒田恭正1987「会下山二本松古墳」『神戸市埋蔵文化財年報』昭和59年度 神戸市教育委員会
- 名倉遺跡 直良信夫 1943「神戸市名倉町出土の縄文土器片」『近畿古文化叢考』
- 林山窯跡 福沢正行・渡辺伸行1986「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』第3巻第2号 神戸古代史研究会
- 室内遺跡 水口富夫・平田博幸・高瀬一嘉1998「室内遺跡」『兵庫県埋蔵文化財年報』平成9年度 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 三番町遺跡 山仲 進編2006「神戸市長田区三番町遺跡 第1次調査」妙見山麓遺跡調査会, 口野博史・水嶋正稔「三番町遺跡 第2次調査」『神戸市埋蔵文化財年報』昭和63年度 神戸市教育委員会
- 五番町遺跡 石鳥三和2008「五番町遺跡 発掘調査報告書 第12次調査」神戸市教育委員会
- 長田神社境内遺跡 黒田恭正編1990「長田神社境内遺跡発掘調査概報」神戸市教育委員会, 阿部 功2008「長田神社境内遺跡 第17次発掘報告書」神戸市教育委員会
- 御蔵遺跡 山田清朝・高木芳史ほか2000「御蔵遺跡 第8・9・10次調査」神戸市教育委員会, 安田 滋ほか編2001「御蔵遺跡 第4・6・14・32次調査報告書」神戸市教育委員会, 安田 滋編2001「御蔵遺跡 第17・38次調査報告書」神戸市教育委員会, 富山直人・池田 毅・川上厚志・阿部 功編2003「御蔵遺跡 第5・7・13・18・22・24・28・29・31・33・36・39・41・43次発掘調査報告書」, 谷 正俊編2003「御蔵遺跡V 第26・37・45・51次調査」神戸市教育委員会
- 神楽遺跡 菅本宏明1981「神楽遺跡発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 念仏山古墳 喜谷美宜1989「市街地に消えた古墳-念仏山古墳-」『神戸市立博物館研究紀要』第6号 神戸市立博物館
- 若松町遺跡 山田清朝・高木芳史2000「若松町遺跡」神戸市教育委員会
- 大橋町遺跡 中谷 正2006「大橋町遺跡 第1次1~6 発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 阿部敬生・藤井太郎編2007「大橋町遺跡 第2次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 二葉町遺跡 川上厚志編2001「二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9次調査」神戸市教育委員会, 東喜代秀編2008「二葉町遺跡発掘調査報告書 第14~21次調査」神戸市教育委員会, 池田 毅2010「二葉町遺跡 第22次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 松野遺跡 口野博史2001「松野遺跡 発掘調査報告書 第3~7次調査」神戸市教育委員会, 藤井太郎編2005「戎町遺跡 第35・38・50・56次調査, 松野遺跡 第32次・33・38次調査 発掘調査報告書」神戸市教育委員会, 内藤俊哉2010「松野遺跡 第42-1・2次発掘調査報告書」神戸市教育委員会
- 戎町遺跡 山本雅和1989「戎町遺跡 第1次発掘調査概報」神戸市教育委員会



# 写真図版





1. 第58次調査 二彩多口壺



2. 第56次調査 瓦当



1. 第17次調査 出土土器集合写真



2. 第25次調査 出土土器集合写真



1. 第12次調査 第1遺構面全景 (南東から)



2. 第12次調査 第2遺構面全景 (南東から)



1. 第23次調査 第1遺構面全景(北西から)



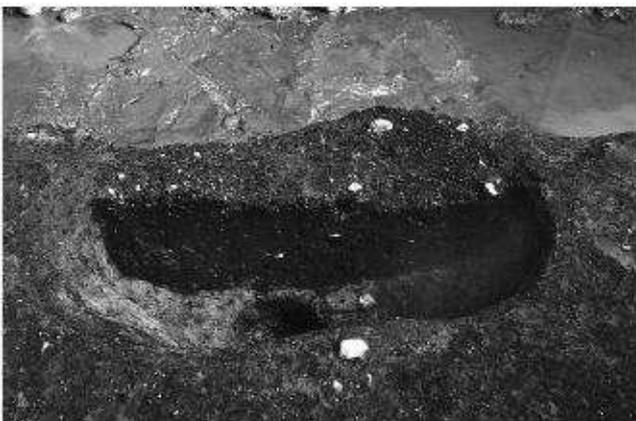
2. 第23次調査 第2遺構面全景(北西から)



3. 第23次調査 SP01断面(南西から)



4. 第23次調査 SP02断面(北西から)



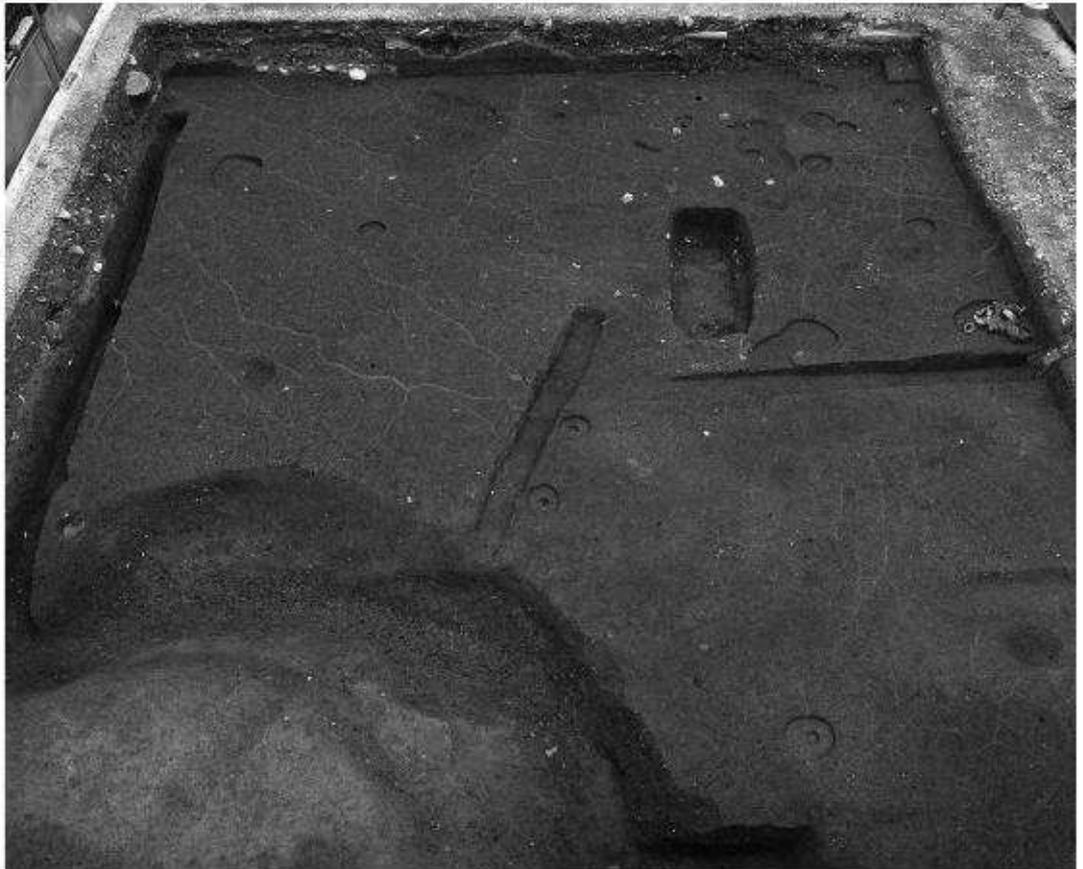
5. 第23次調査 SP05断面(北西から)



6. 第23次調査 SP06断面(東から)



1. 第25次調査 第1遺構面全景(北東から)



2. 第25次調査 第2遺構面全景(北東から)



1. 第25次調査 第3遺構面全景 (北東から)



2. 第25次調査 SB01・02 (東から)



3. 第25次調査 第3遺構面出土土器群 (南東から)



1. 第26次調査 全景 (北東から)



2. 第26次調査 SK01 (東から)



3. 第26次調査 SP01断面 (北西から)



4. 第26次調査 SP02断面 (北西から)



1. 第37次調査 第2遺構面全景 (南東から)



2. 第37次調査 第3遺構面全景 (南東から)



1. 第37次調査 II区全景(北西から)



2. 第37次調査 NR01断面(北から)



3. 第37次調査 北東壁断面(北西から)

1. 第39次調査 第1遺構面 (南東から)

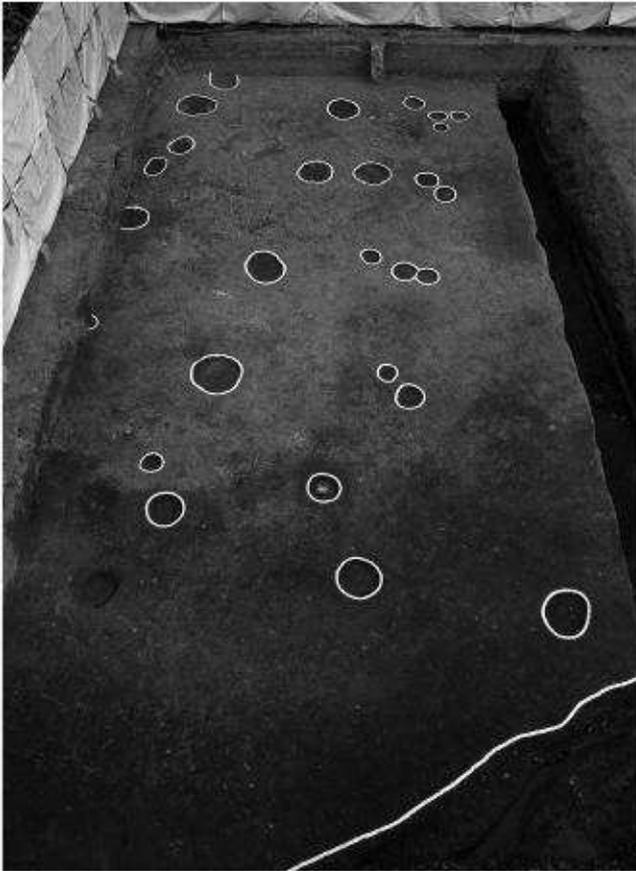


2. 第39次調査 第2遺構面 (南東から)



3. 第39次調査 第3遺構面 (南東から)





1. 第42次調査 SB01 (南西から)



2. 第42次調査 第4遺構面 (南西から)



3. 第42次調査 P3断面 (南東から)



4. 第42次調査 P5断面 (南東から)



5. 第42次調査 P6断面 (南東から)



6. 第42次調査 P8断面 (南東から)



1. 第56次調査 第1遺構面(南東から)



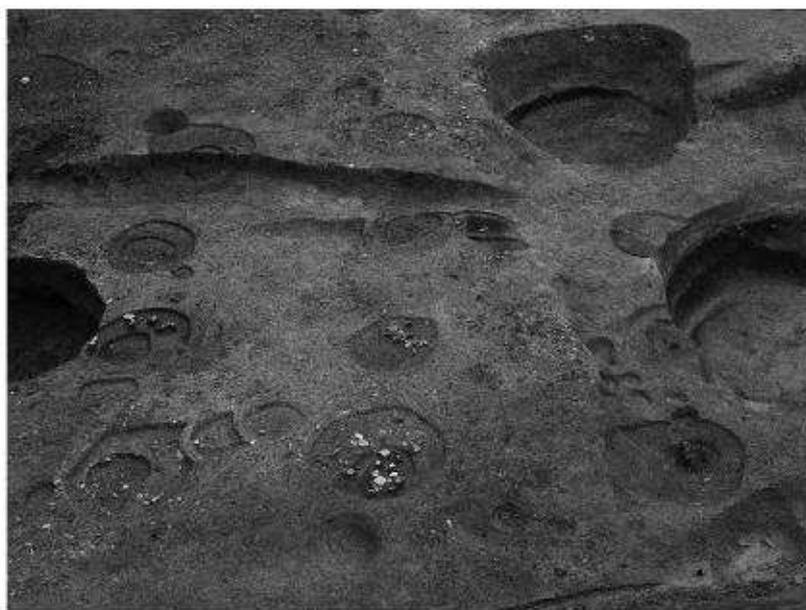
2. 第56次調査 SD14(西から)



1. 第56次調査 SD04断面 (北西から)



2. 第56次調査 第2遺構面 (南西から)



1. 第56次調査 SB01 (南西から)



2. 第56次調査 SB02・03 (南東から)



3. 第56次調査 南端柱穴 (南西から)



1. 第56次調査 SB01-P1断面 (南西から)



2. 第56次調査 SB01-P3断面 (南西から)



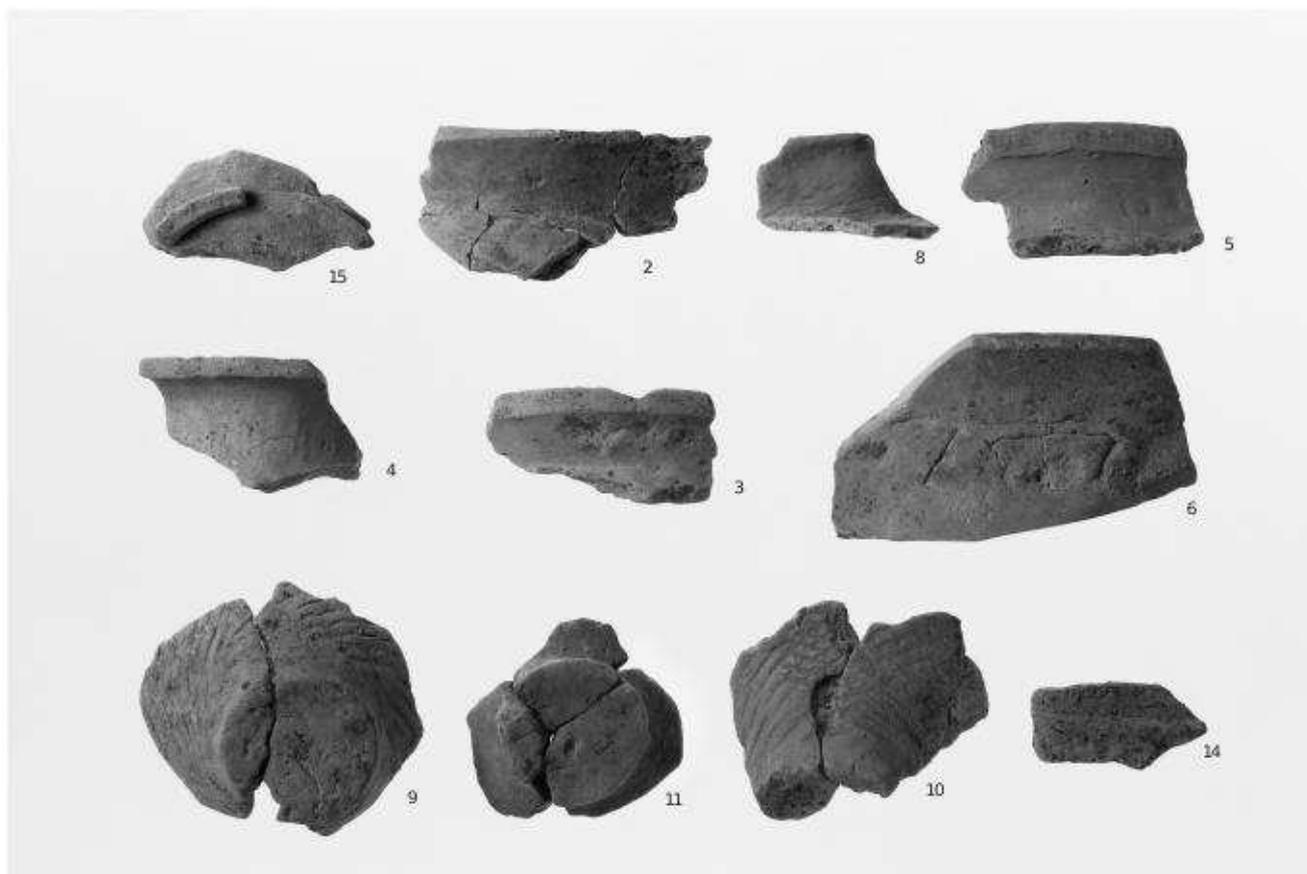
3. 第56次調査 SB01-P10断面 (南西から)



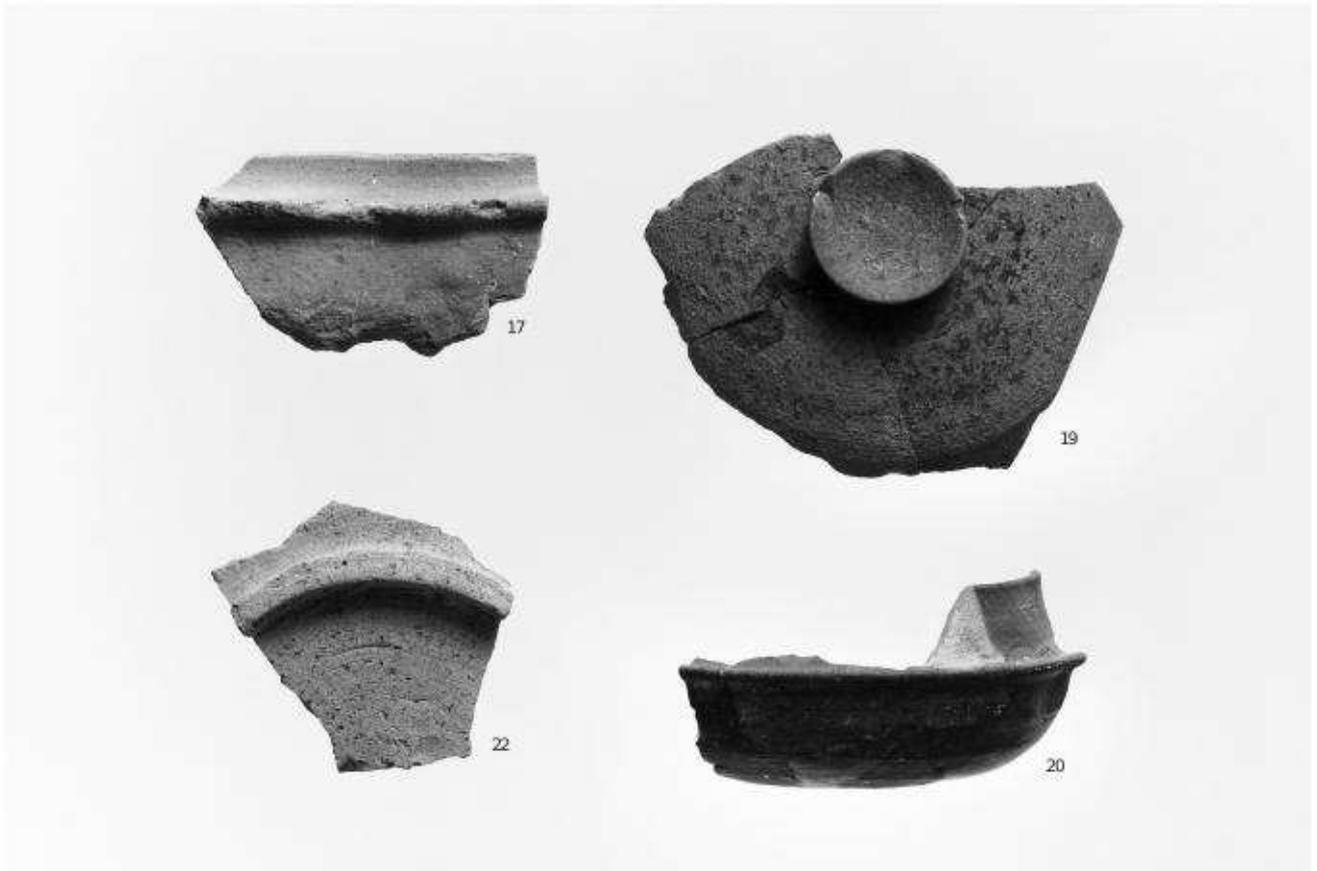
4. 第56次調査 SB02-P3断面 (北東から)



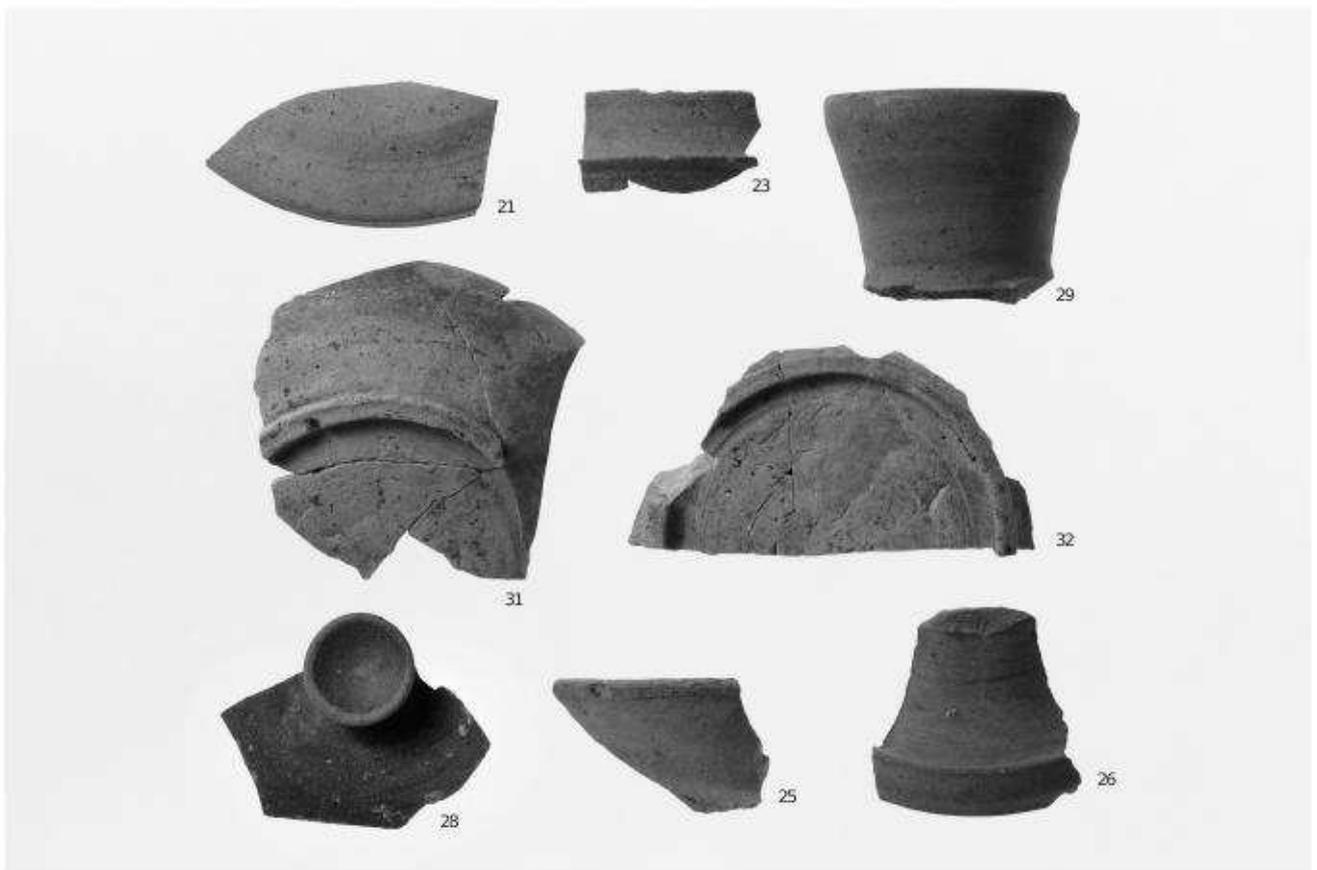
5. 第56次調査 第4遺構面 (南から)



第3次調査 淡灰褐色細砂出土土器



1. 第12次調査 第1遺構面出土土器



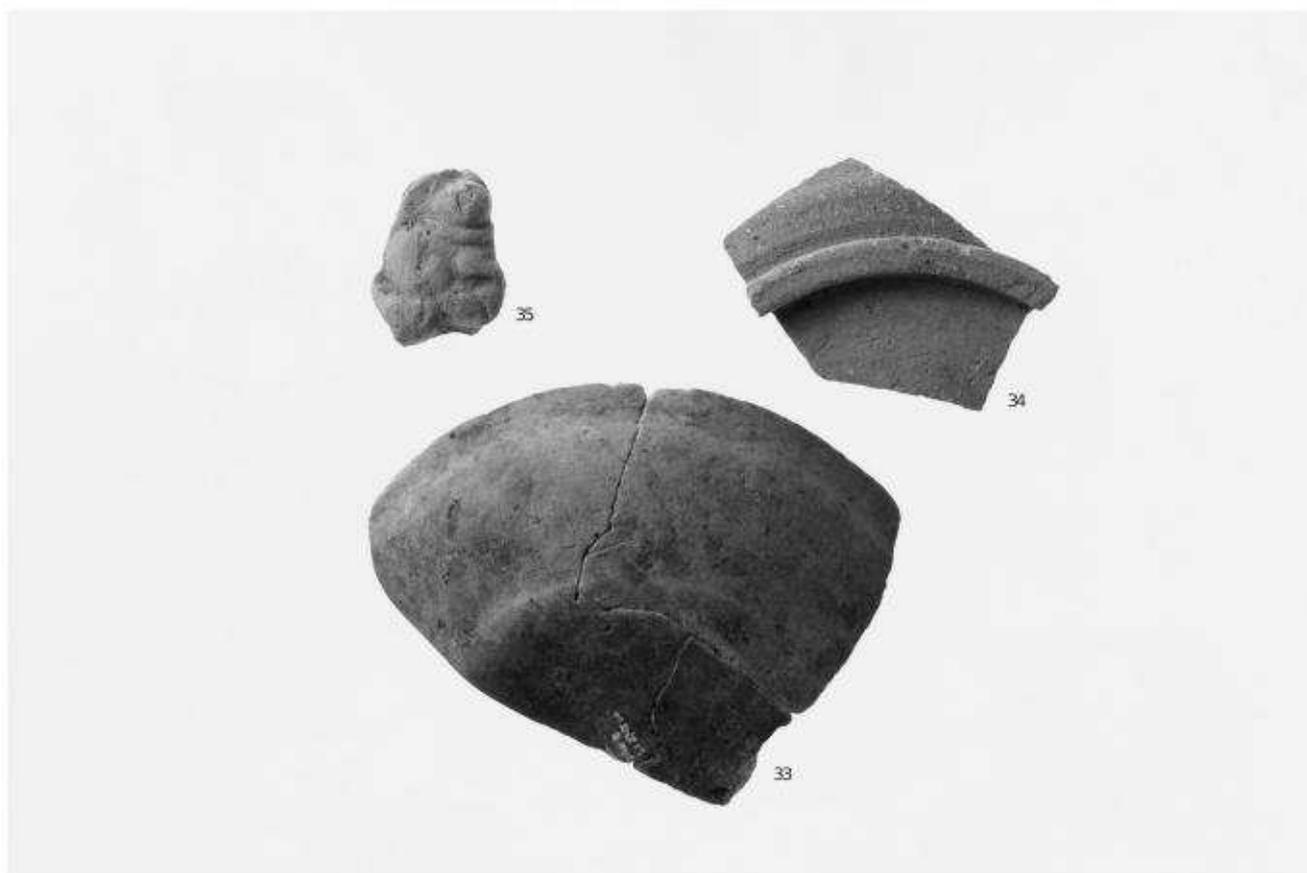
2. 第12次調査 遺構出土土器



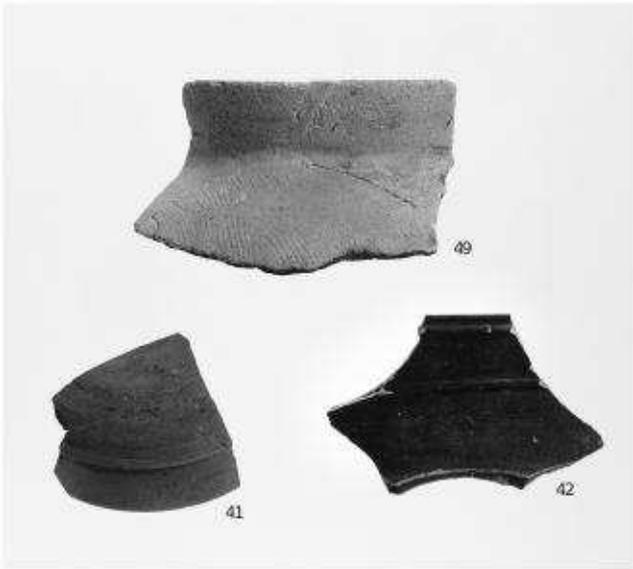
1. 第12次調査 SK01出土土器



2. 第12次調査 SK02出土土器



3. 第16次調査 出土遺物



第17次調査 流踏出土土器①

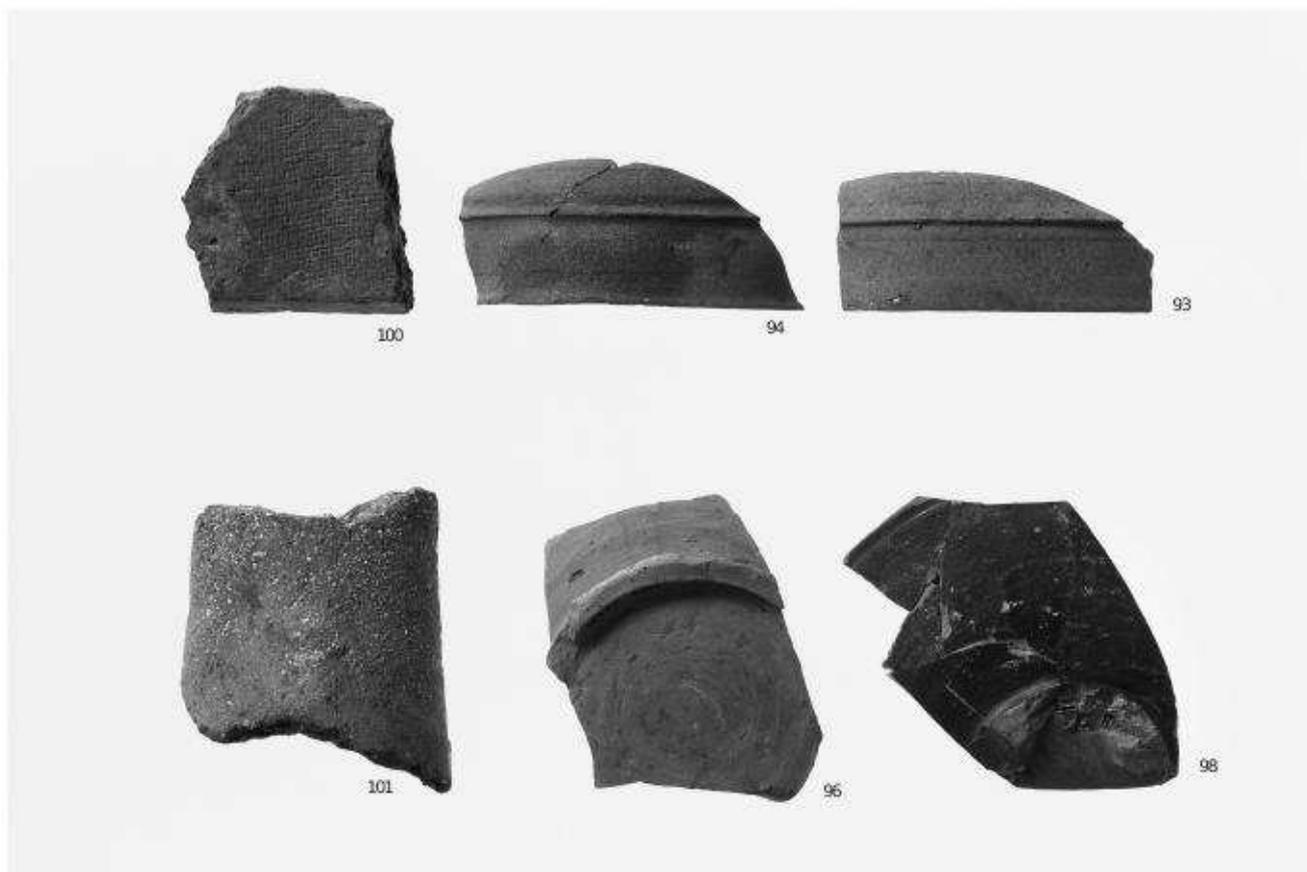




1. 第23次調査 出土土器



2. 第25次調査 表土～褐灰色砂質土出土遺物



第25次調査 黒褐色砂質土出土土器①



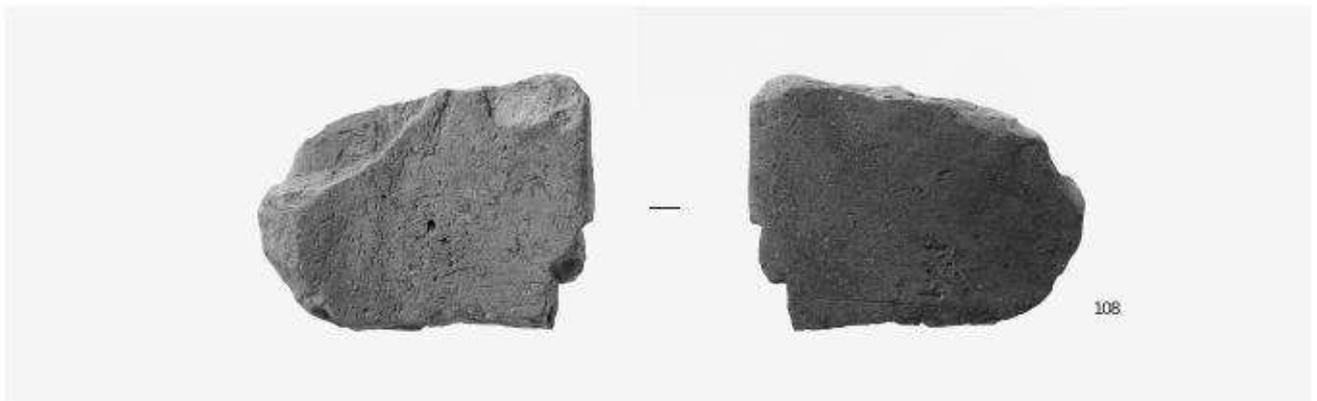
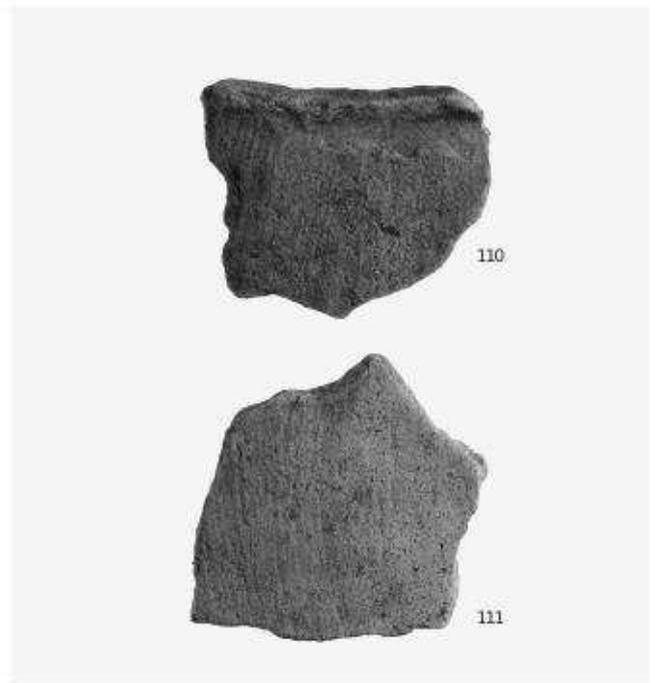
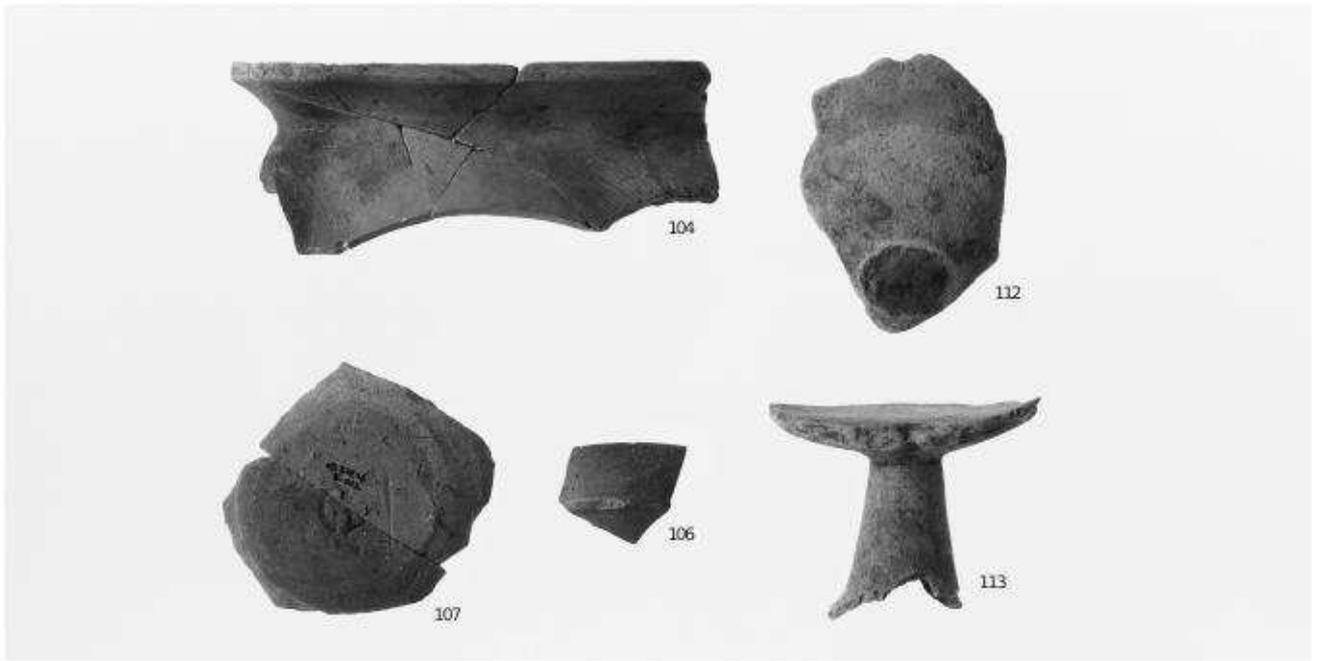
第25次調査 黒褐色砂質土出土土器②



1. 第25次調査 黒褐色砂質土出土土器③



2. 第25次調査 遺構出土土器





1. 第37次調査 第1遺構面出土土器



2. 第37次調査 NR01-1出土土器



3. 第37次調査 灰褐色～茶褐色砂質土出土土器



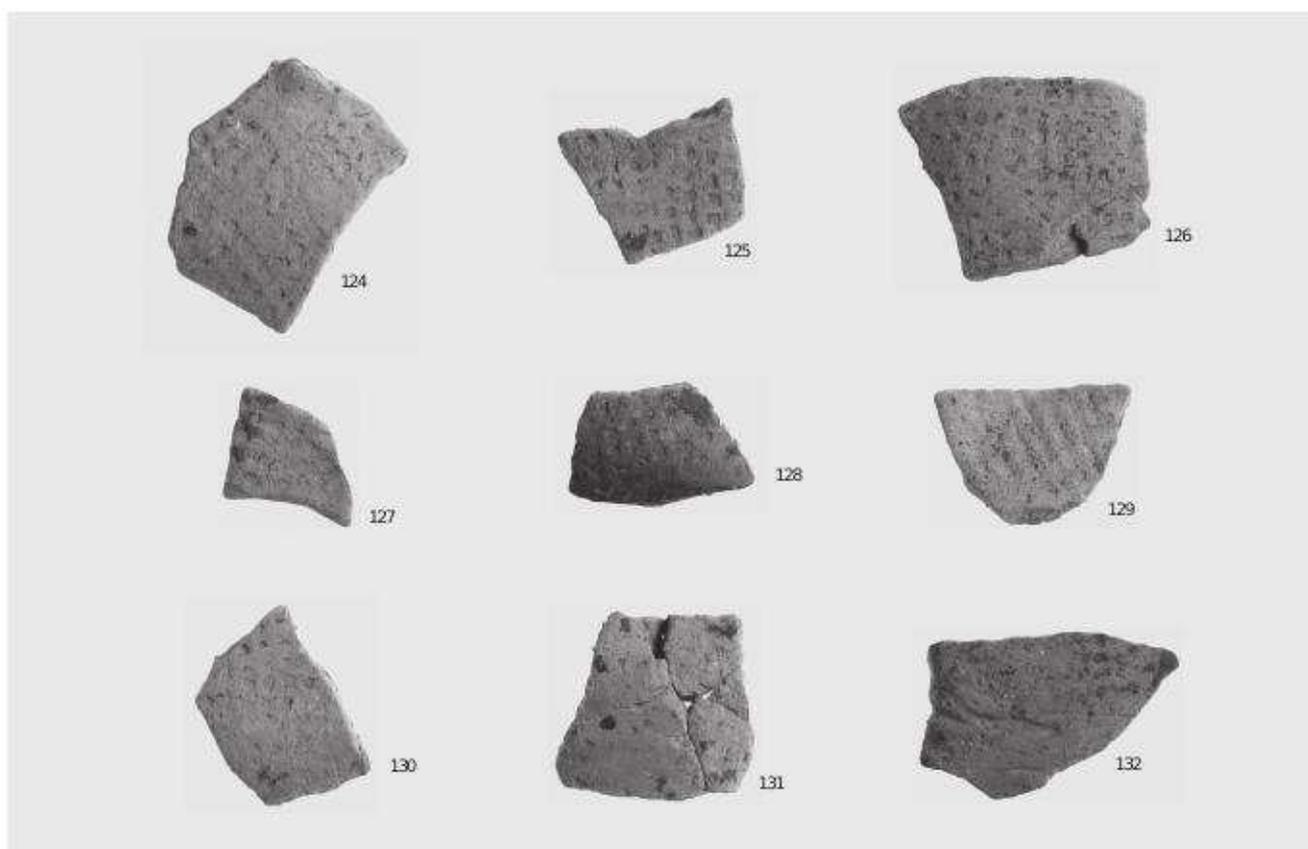
4. 第37次調査 出土木製品



1. 第39次調査 第2遺構面出土土器



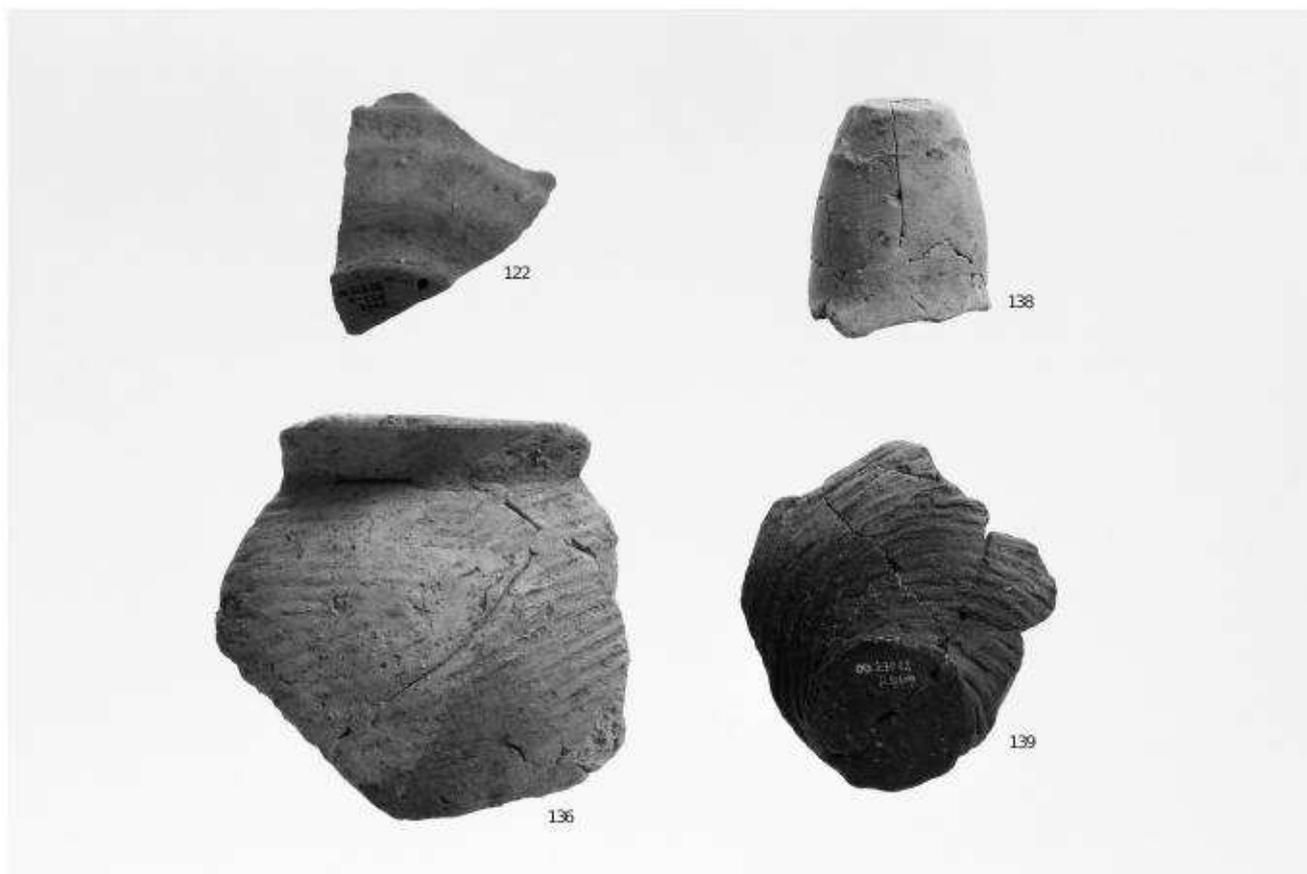
2. 第39次調査 第2包含層出土土器



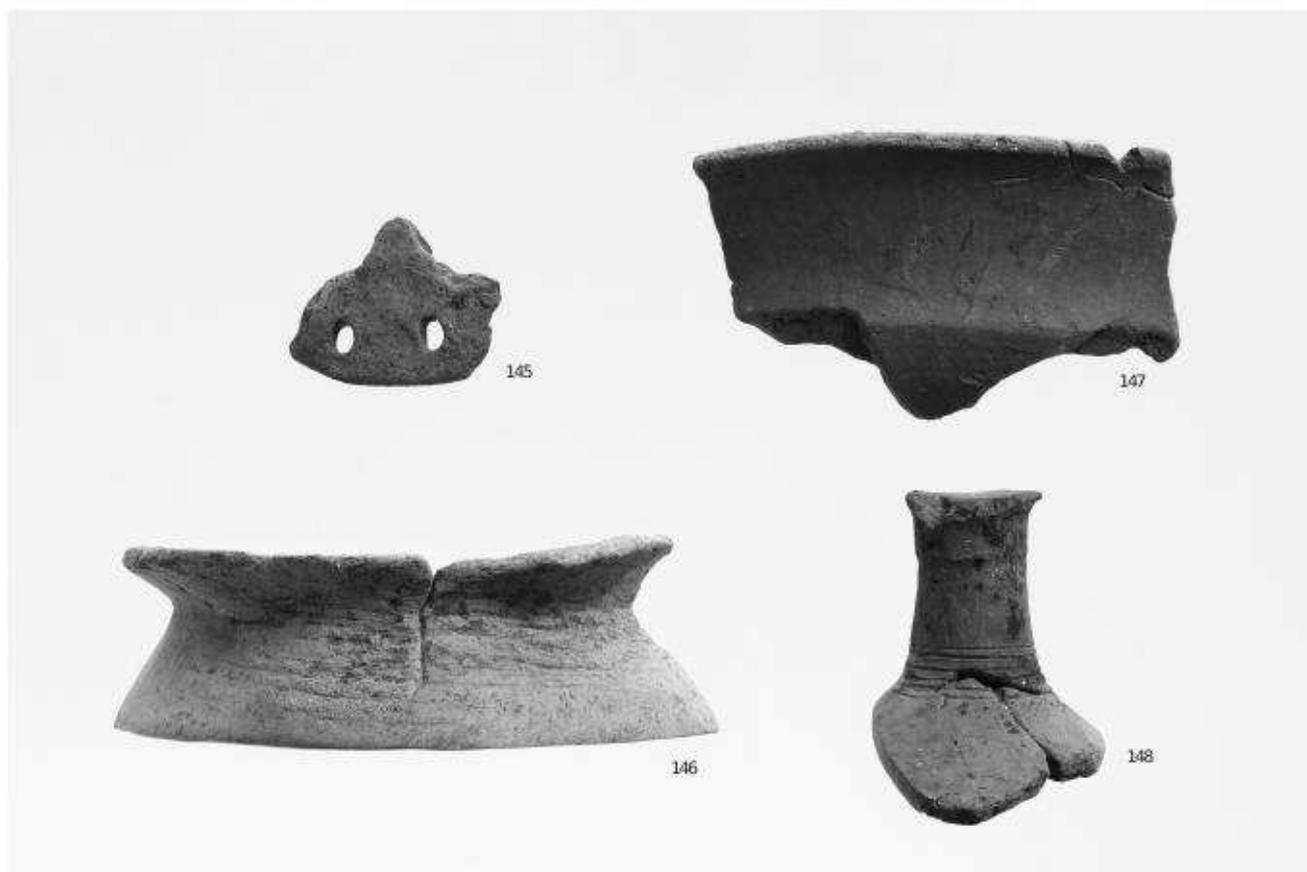
3. 第39次調査 出土韓式系土器



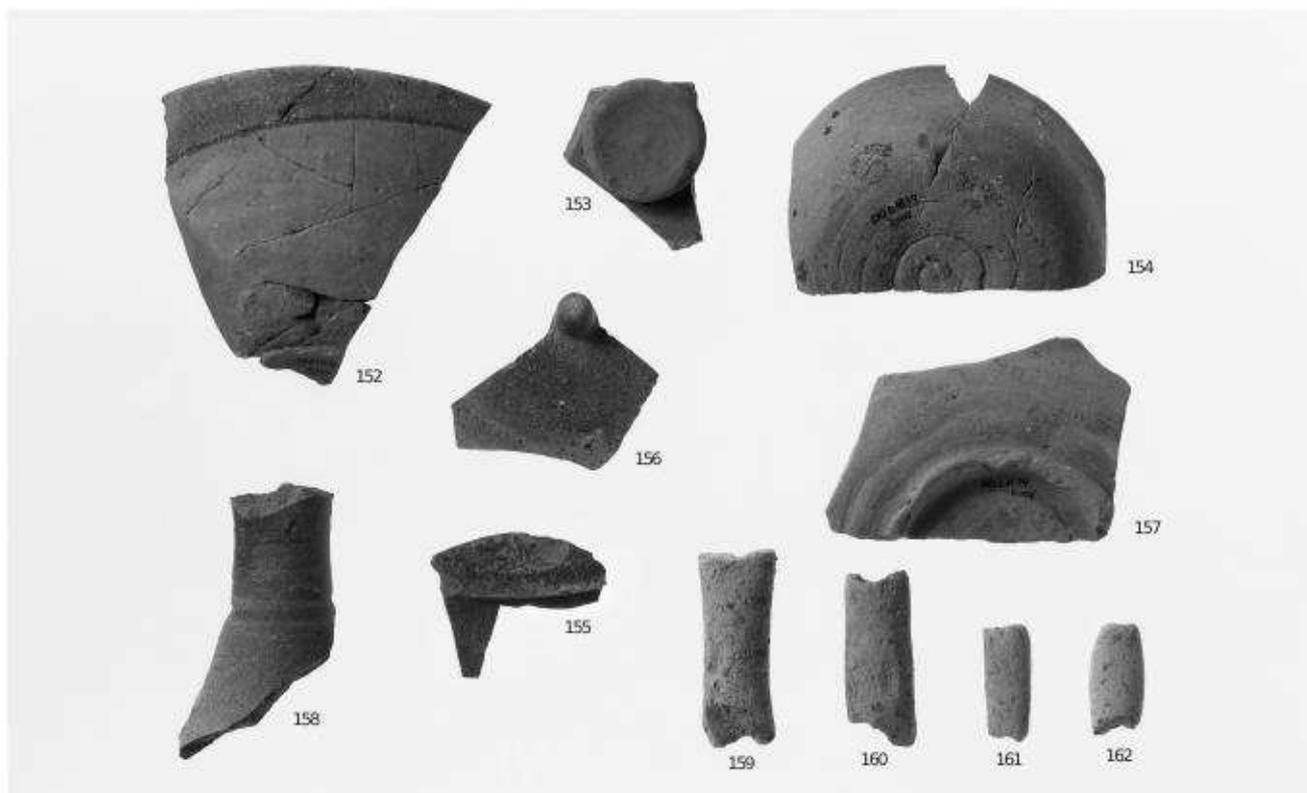
4. 第39次調査 出土縄文土器



1. 第39次調査 第1・2遺構面出土土器



2. 第39次調査 黒褐色砂質土～第3遺構面出土土器



1. 第40次調査 暗褐灰色砂質土出土遺物



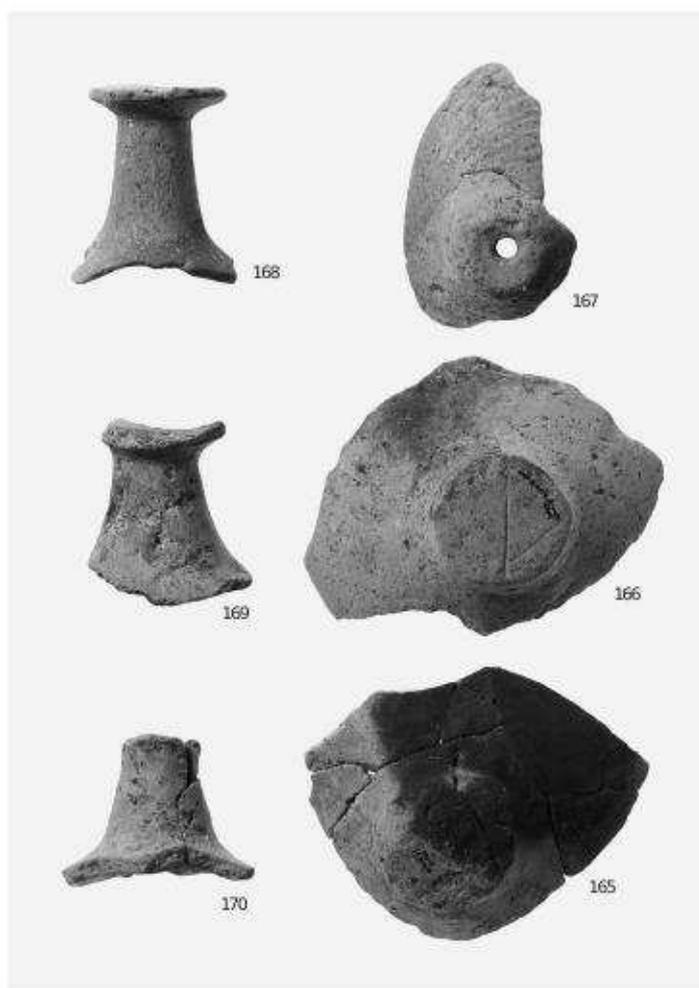
2. 第42次調査 黒色砂質粘土出土土器



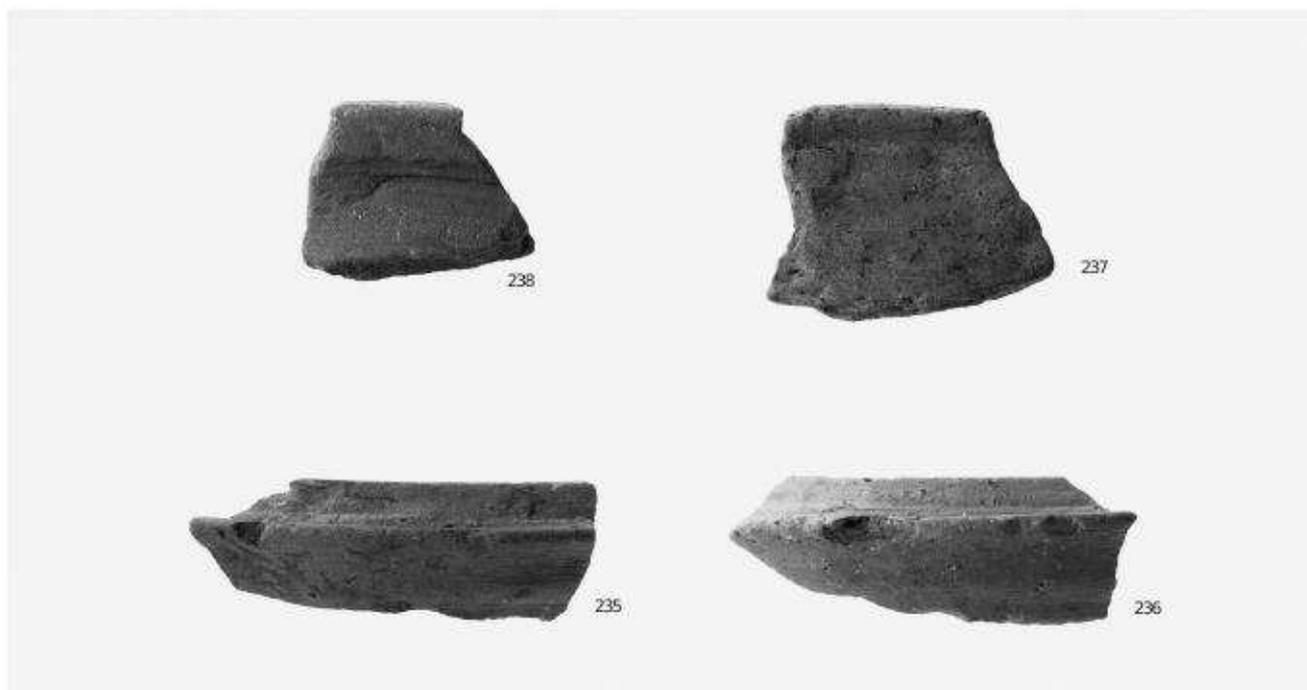
3. 第42次調査 NR01出土土器



4. 第42次調査 SX03出土縄文土器



5. 第42次調査 NR01出土土器



1. 第56次調査 SB01出土土器①



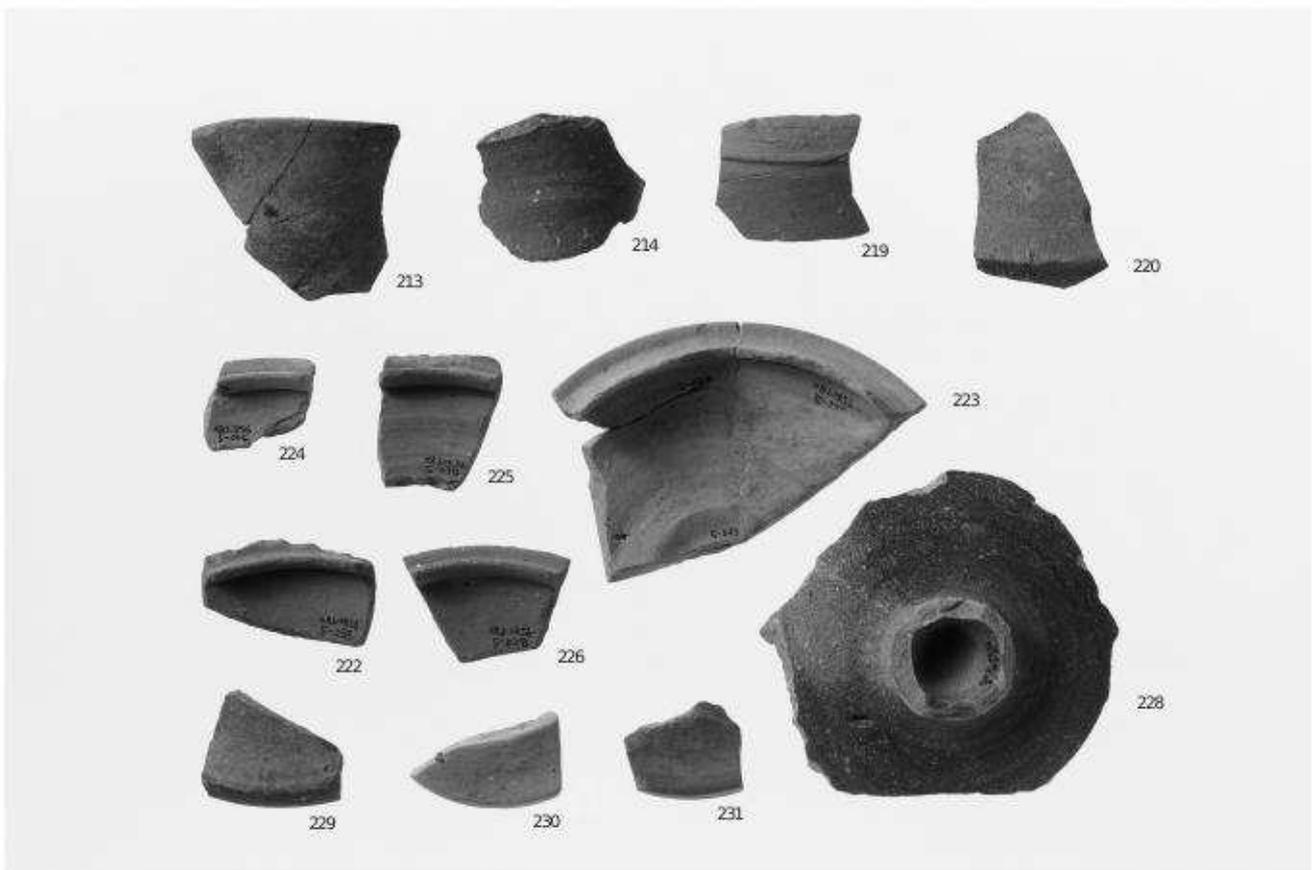
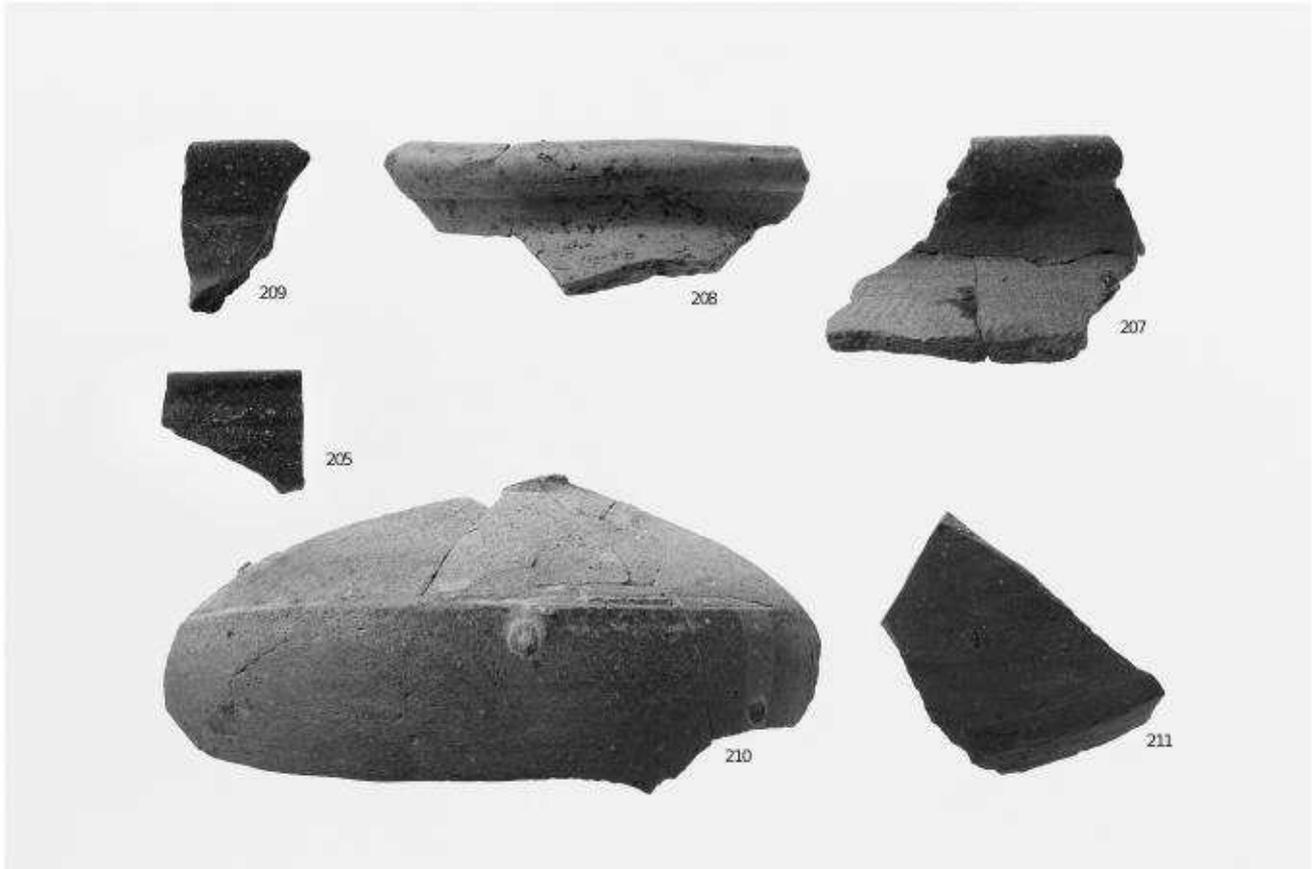
2. 第56次調査 SB01出土土器②



3. 第56次調査 黒褐色砂まじり粘土出土土器①



4. 第56次調査 黒褐色砂まじり粘土出土土器②



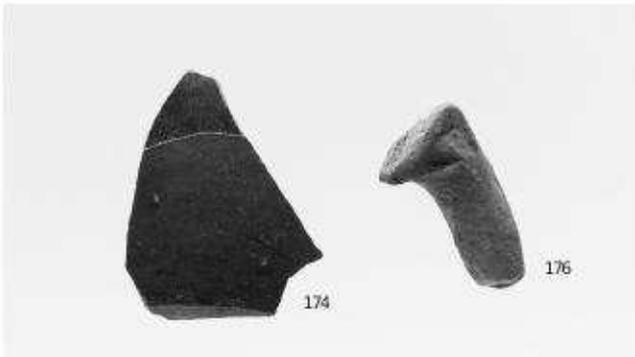
第56次調査 黒褐色砂まじり粘土出土土器③



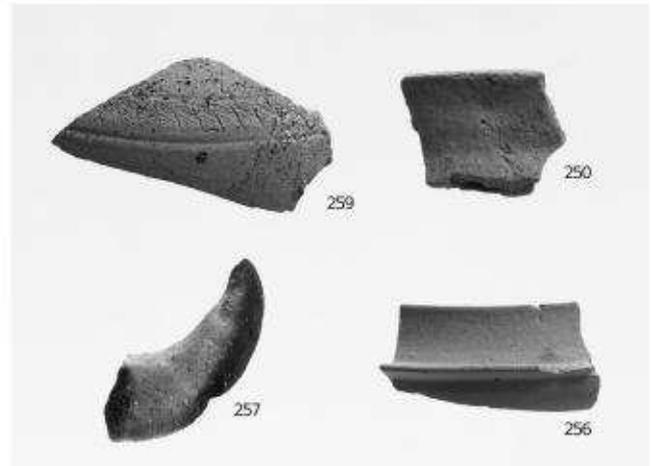
1. 第56次調査 灰色砂まじりシルト出土土器①



2. 第56次調査 灰色砂まじりシルト出土土器②



3. 第56次調査 SK01出土土器



4. 第56次調査 第3遺構面SK・SP出土土器



5. 第56次調査 SK15出土土器



7. 第56次調査 SP99出土土器



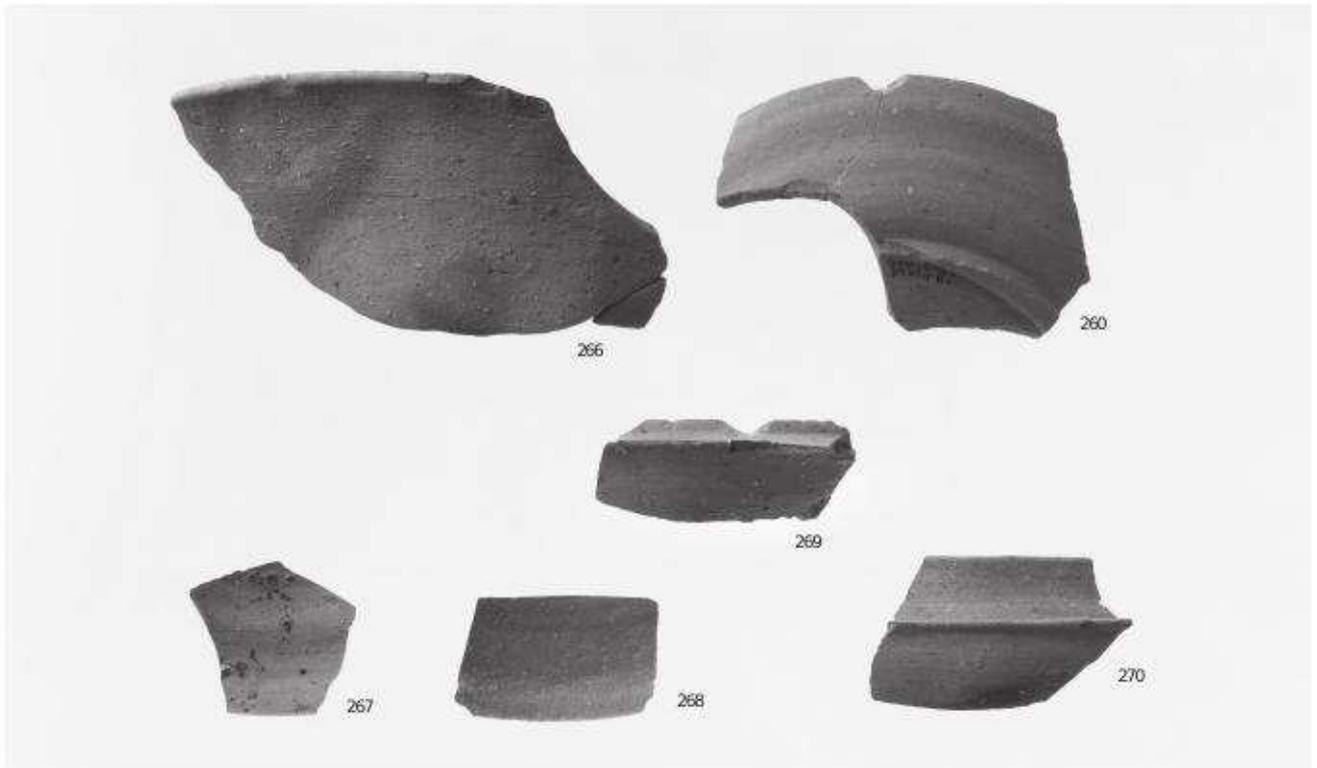
6. 第56次調査 SD11出土土器



8. 第56次調査 SP54出土土器



9. 第56次調査 SP102出土土器



1. 第56次調査 第3遺構面遺構出土土器



2. 第56次調査 SD22出土土器



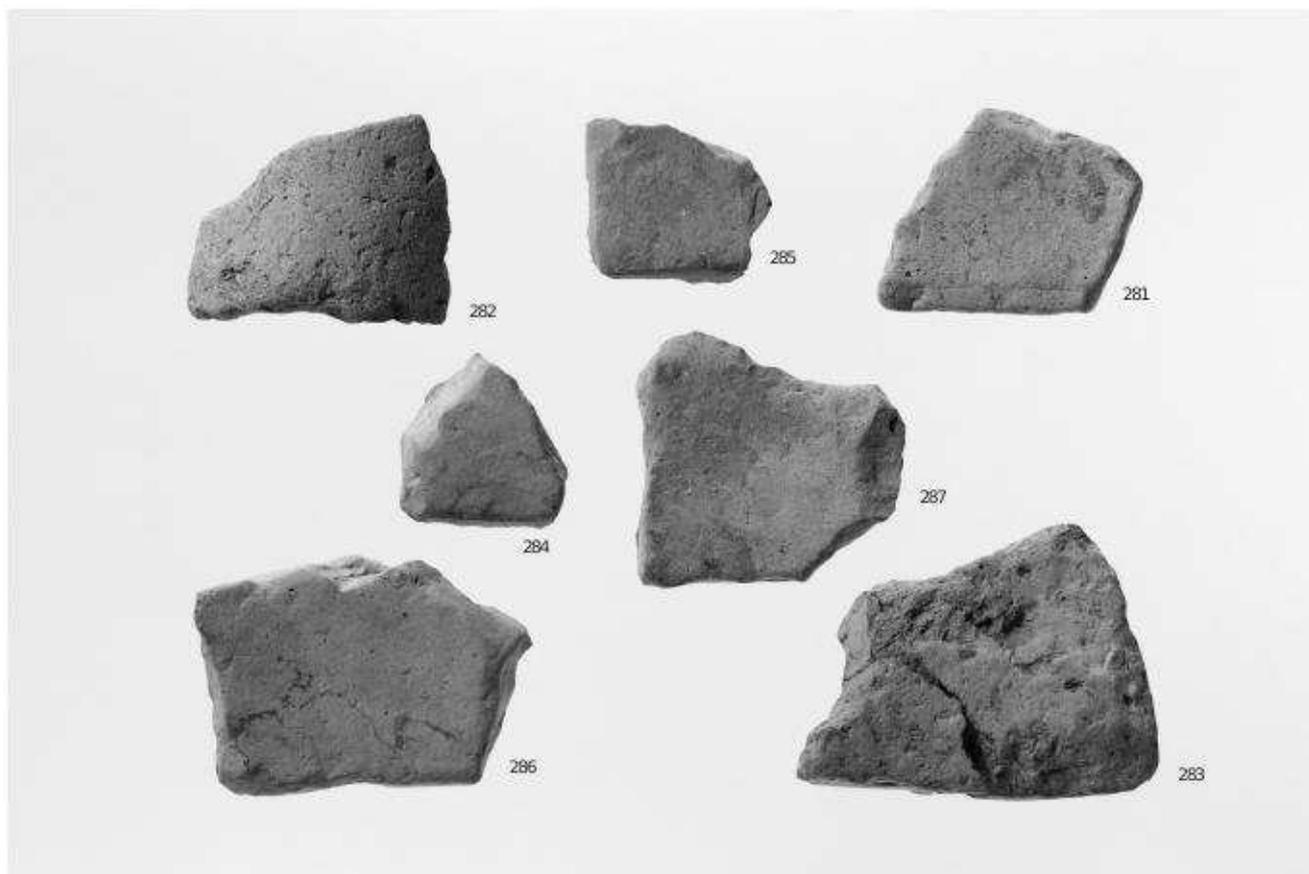
4. 第56次調査 出土土錘



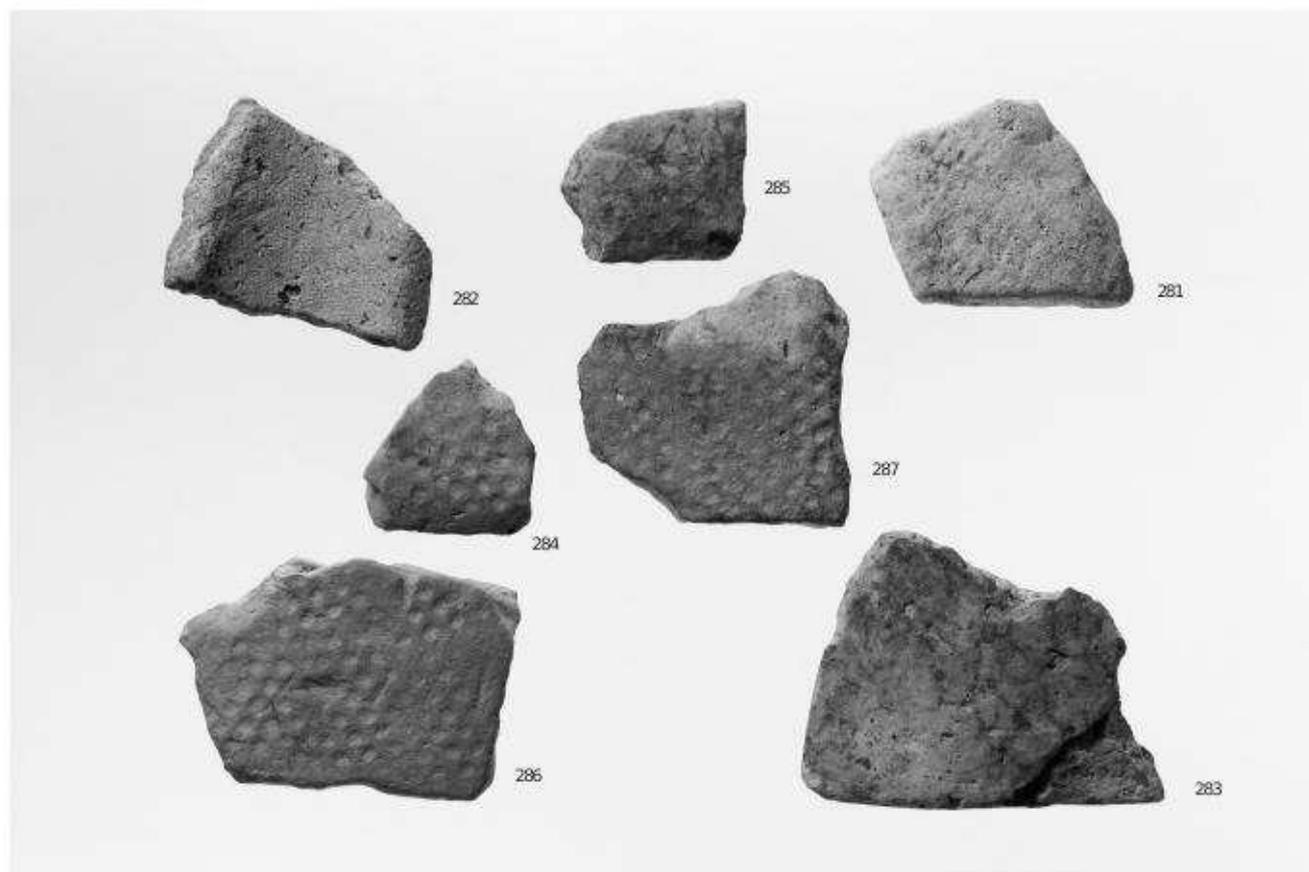
3. 第56次調査 SD13出土土器



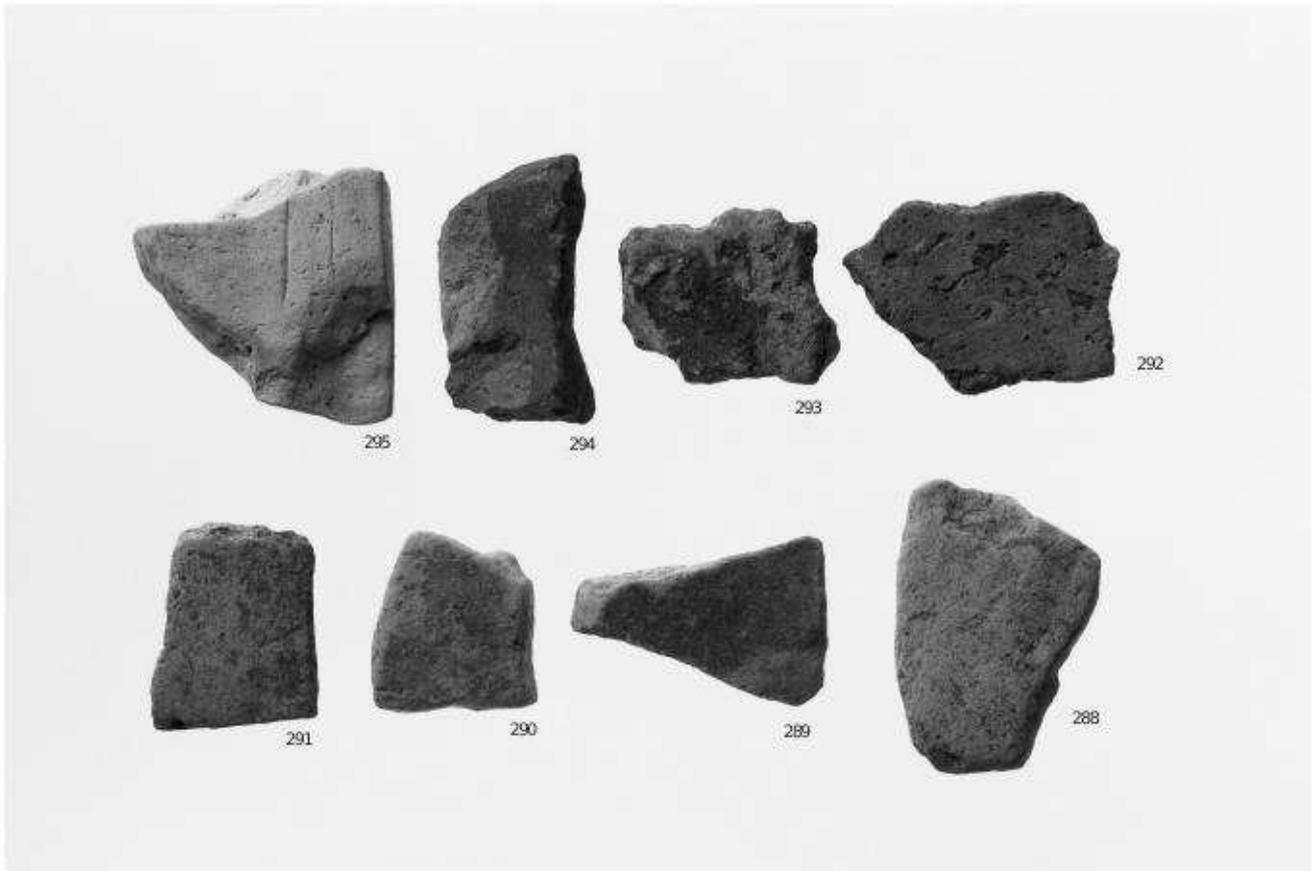
5. 第56次調査 出土サヌカイト製石鎌



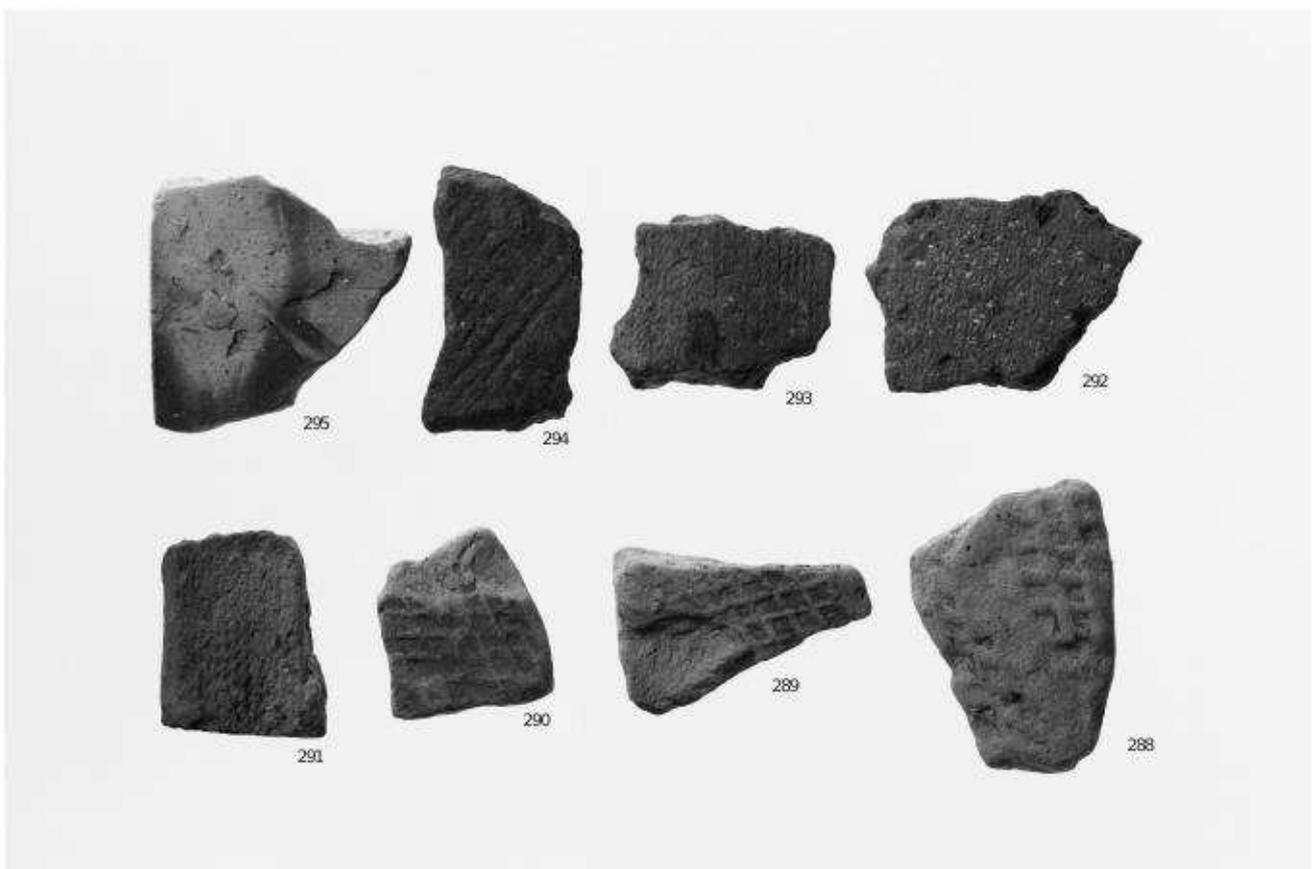
1. 第56次調査 出土瓦①(表)



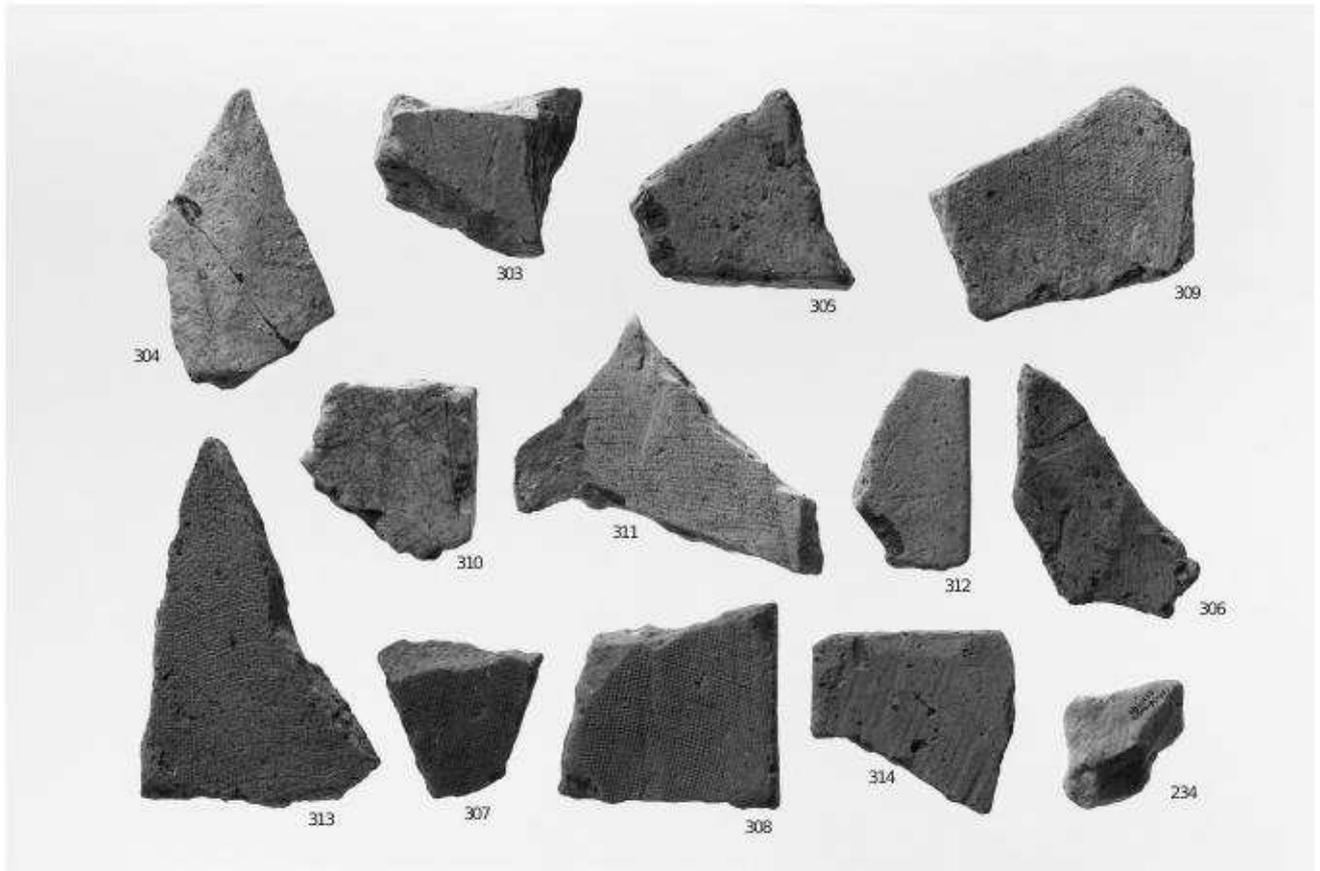
2. 第56次調査 出土瓦①(裏)



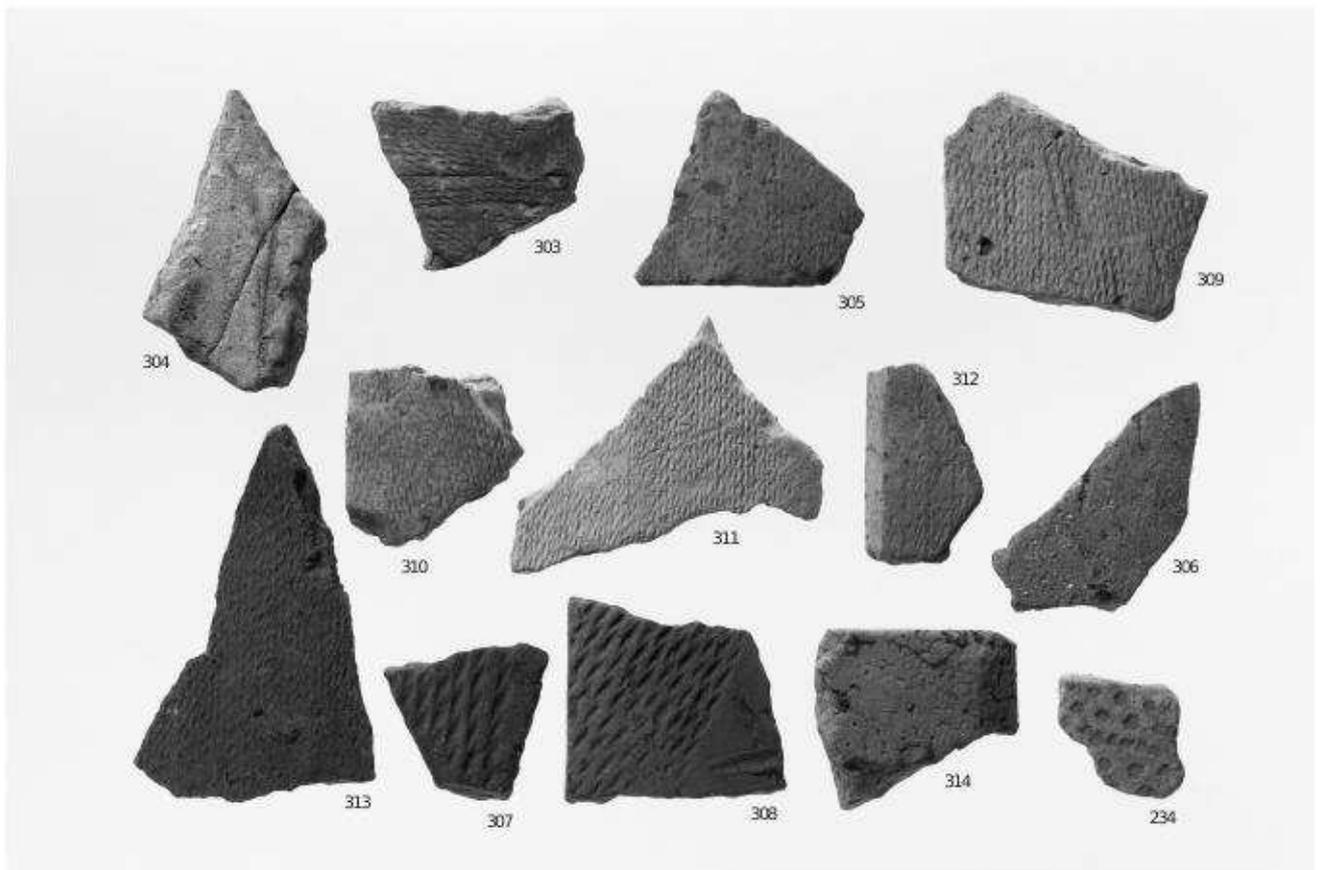
1. 第56次調査 出土瓦②(表)



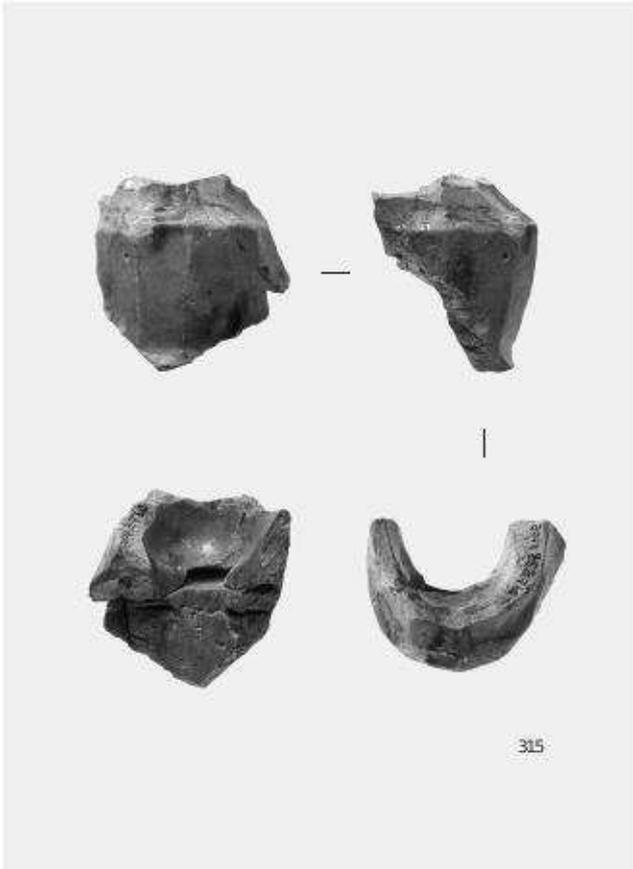
2. 第56次調査 出土瓦②(裏)

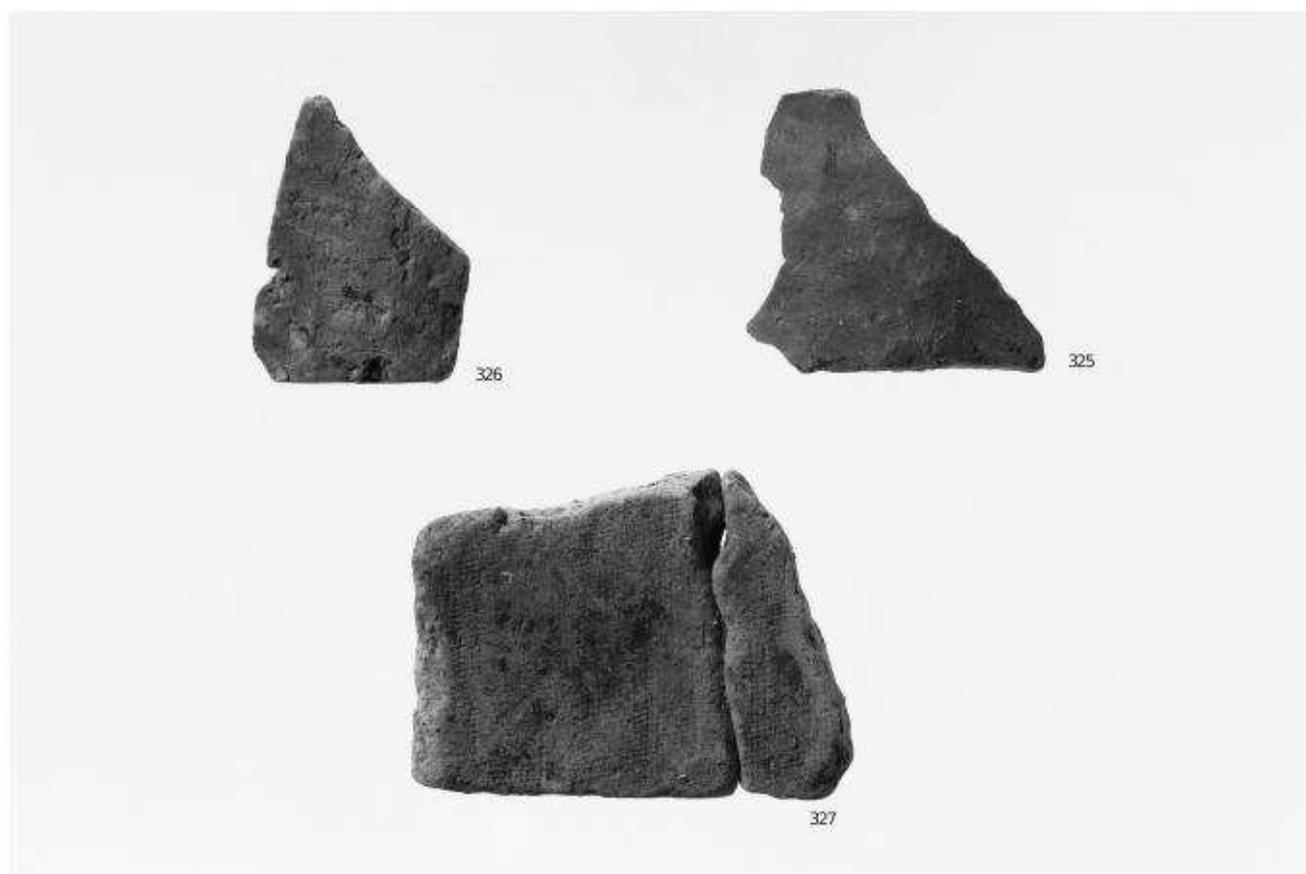


1. 第56次調査 出土瓦③(表)



2. 第56次調査 出土瓦③(裏)





1. 第58次調査 出土瓦(表)



2. 第58次調査 出土瓦(裏)

# 報告書抄録

| ふりがな              | かみさわいせき はくつちょうさほうこくしょ ご  |                     |                              |     |      |                   |           |        |
|-------------------|--|---------------------|------------------------------|-----|------|-------------------|-----------|--------|
| 書名                | 上沢遺跡発掘調査報告書V   |                     |                              |     |      |                   |           |        |
| 副書名               | 第3・12・16・17・23・25・26・37・39・40・42・56・58・60～64次調査  |                     |                              |     |      |                   |           |        |
| 編著者名              | 佐伯二郎 山口英正 小野寺洋介(編) 阿部敬生 家塚英詞 川上厚志 口野博史 斎木巖 須藤宏 関野豊 中村大介 平田朋子 藤井整 藤井太郎 松林宏典 横田明                 |                     |                              |     |      |                   |           |        |
| 編集機関              | 神戸市教育委員会   |                     |                              |     |      |                   |           |        |
| 所在地               | 神戸市中央区加納町6丁目5-1  |                     |                              |     |      |                   |           |        |
| 発行年月日             | 2019年3月31日   |                     |                              |     |      |                   |           |        |
| 所収遺跡名             | 所在地  | コード                 |                              | 北緯  | 東経   | 調査期間              | 調査面積<br>㎡ | 調査原因   |
|                   |  | 市町村                 | 遺跡番号                         |     |      |                   |           |        |
| 上沢遺跡              | 神戸市兵庫区松本通8丁目・長田区五番町1丁目～3丁目・六番町1丁目・七番町  | 28105               | 31                           | 34度 | 135度 | 19951121～19951206 | 76        | 個人住宅建設 |
|                   |  | 28106               |                              | 40分 | 9分   | 19970825～19970905 | 60        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              | 23秒 | 23秒  | 19971001～19971002 | 30        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 19971211～19971218 | 40        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 19980729～19980813 | 45        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 19980930～19981023 | 81        | 事務所建設  |
|                   |  |                     |                              |     |      | 19981026～19981105 | 60        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20000417～20000602 | 360       | 教会再建   |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20000427～20000601 | 117       | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20000523～20000530 | 20        | 事務所建設  |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20000905～20000929 | 75        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20080930～20090114 | 400       | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20091013～20091026 | 28        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20140507～20140520 | 24        | 個人住宅建設 |
|                   |  |                     |                              |     |      | 20170417～20170419 | 16        | 個人住宅建設 |
| 20170418～20170419 | 10   | 個人住宅建設              |                              |     |      |                   |           |        |
| 20170419～20170420 | 6.5  | 個人住宅建設              |                              |     |      |                   |           |        |
| 20170424～20170428 | 16   | 個人住宅建設              |                              |     |      |                   |           |        |
| 種別                | 主な時代   | 主な遺構                | 主な遺物                         |     |      | 特記事項              |           |        |
| 集落遺跡              | 弥生時代後期<br>古墳時代<br>奈良時代<br>中世   | 竪穴建物<br>掘立柱建物<br>土坑 | 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・韓式系土器・瓦・土錘 |     |      | 二彩                |           |        |
| 要約                | 平成11年度から平成29年度までの国庫補助金に伴う発掘調査である。主に弥生時代後期から中世の遺構・遺物を確認した。瓦当を含む瓦の出土は、北方に存在したとされる伝房王寺との関連がうかがえる。 |                     |                              |     |      |                   |           |        |

## 上沢遺跡発掘調査報告書V

2019. 3. 31

発行 神戸市教育委員会文化財課  
神戸市中央区加納町6丁目5番1号  
TEL 078-322-6480

印刷 デジタルグラフィック株式会社  
神戸市中央区弁天町1-1  
TEL 078-371-7000

